川島・立岡遺跡
（本文編）

昭和46年3月

太子町教育委員会

序　　文

古き時代より、よく開発され、交通の要所を占めてきた太子町に、時代の要望を担った新しい交通の大動脈である山陽新幹線建設工事の槌音が山野にこだまし、とこしえの眠りにあったあらゆるもののねむりがさまされ、時代の陽光の中に姿をあらわしつつあります。

このたびの埋蔵文化財発掘調査もその一つのあらわれでありましょう。そしてこの調査によって、今まで知られていなかった祖先の足跡が、生活が浮きぼりにされ、あらためて邑の歴史を見なおすことができる資料が発掘されたことは大きな意義があると言わねばなりません。

もとより埋蔵文化財は、国民的遺産として貴重な存在であることは言をまたぬところであり、国民一人一人が大切に愛護し、後世に伝えていかねばならぬものでありながら、その真意が十分に理解されず、殊に昨今のような土地開発ブームの中で破壊されていくことは遺憾なことであります。

このたびの調査が国鉄の理解と、調査関係者の努力、さらに地元の人々の協力により完了し、調査報告書の発刊となったわけであります。これらの方々に深く敬意と感謝の意を表するとともに、かつ、この報告書が今後町民の文化財に対する認識をあらため、文化財を愛し、守り続けていく気持を昂揚する一助にもなることを期待したいと念願しています。

昭和46年3月

太子町教育長　上　田　光　男

例　　言

1. 本書は山陽新幹線建設工事に伴なう事前調査の報告書である。

2. 本書の遺構図断面に記入した、L8.5Mなどの数字は標高を示す。

3. 土器の実測図の番号と、土器の写真の番号は一致する。但し通し番号によるものではない。各遺構別に1から番号を付し、土坑10の1、2と呼称する。

4. 本書の写真のうち、航空写真は小山泰三氏によるものである。他は櫃本が撮影したものである。遺物の写真で、縮少率を記入していないものは、約$\frac{1}{3}$に統一している。

5. 土器の拓本に付した番号は、実測図、写真の番号と一致しない。

6. 本書の編集は川島・立岡遺跡調査報告書刊行会が担当し、実務を櫃本が行なった。本文執筆は各文末に氏名を記して責任の所在を明らかにした。本書の地理学的な面については渡辺久雄、地質学的な面は前田保夫、植物学的な面は三木茂、化学分析は安田博幸の各先生に特別に玉稿をいただいた。

7. 茶の木地区の中世土坑墓出土青磁の墨書については、兵庫県刑事部科学検査所主任研究員喜多範里氏に調査いただいた。

8. 『図録編』の写真に使用する記号は、D＝土坑、S＝周溝墓、M＝溝、T＝竪穴住居址、K＝攪乱土を示す。

9. 現地調査および報告書の刊行の事務は、太子町教育委員会が担当し、村瀬圭一氏があたられた。

本　文　目　次

序　　文
例　　言

はじめに……1

第1章　川島・立岡遺跡の環境

第1節　古地理的環境……4
第2節　地理的環境……6
第3節　川島遺跡周辺の地質……15
第4節　歴史的環境……16
1.　先土器および縄文時代……16
2.　弥生時代……19
3.　古墳時代……21
4.　奈良・平安時代……24

第2章　川島遺跡の調査経過

1.　第1次調査……26
2.　第2次調査……27
3.　第3次調査……30
4.　第4次調査……33

第3章　川島遺跡の遺構

第1節　茶の木地区の遺構……34
第2節　南五反田A地区の遺構……43
第3節　南五反田B地区の遺構……47
第4節　落久保A地区の遺構……53
第5節　落久保B地区の遺構……62

第4章　川島遺跡出土遺物

第1節　茶の木地区出土の遺物……77
第2節　南五反田A地区出土の遺物……79
第3節　南五反田B地区出土の遺物……85
第4節　落久保A地区出土の遺物……96

第5節　落久保B地区出土の遺物…… 141
第6節　各地区出土の石器…… 156

第5章　川島遺跡のまとめ

第1節　20溝の土師器群…… 160
第2節　播磨中期弥生式土器の実態　―土坑出土土器を中心に―　…… 171
第3節　ま　と　め…… 180

第6章　立岡遺跡の調査経過

1.　第1次調査…… 182
2.　第2次調査…… 184
3.　第3次調査…… 187

第7章　立岡遺跡の遺構

1.　竪穴住居址…… 189
2.　掘立柱建物址…… 192
3.　土　　坑…… 193
4.　溝　遺　構…… 193
5.　その他の遺構…… 195

第8章　立岡遺跡出土の遺物

1.　竪穴住居址…… 196
2.　溝　遺　構…… 198
3.　土　　坑…… 200
4.　表面採集…… 202

第9章　立岡遺跡のまとめ　…… 205

第10章　特殊遺物の同定

第1節　川島遺跡および立岡遺跡から得た植物遺体…… 207
第2節　川島遺跡の花粉群集…… 210
第3節　川島遺跡出土土器付着の赤色顔料の微量化学分析…… 211

第11章　補　　論

第1節　檀特山遺跡確認調査報告…… 212
第2節　中播平野弥生時代遺跡地名表…… 215
第3節　中播平野弥生時代文献目録…… 217

挿　図　目　次

川　島　遺　跡　　頁

第1図　大津茂川口付近のボーリング地点と地質断面線および旧海岸線……4
第2図　大津茂川口の地質断面……5
第3図　川島遺跡付近小字図……6
第4図　立岡遺跡付近小字図……6
第5図　法隆寺領播磨国鵤御庄図……7
第6図　鵤庄の条坊と庄域図……8
第7図　川島付近条里遺構図……9
第8図　立岡付近条里遺構図……9
第9図　川島・立岡付近等高線図……10
第10図　大津茂川下流の地形と条里南限図……11
第11図　川島付近微地形図……12
第12図　立岡付近微地形図……13
第13図　林田川の旧河道図……14
第14図　川島遺跡の地下断面……15
第15図　丁・瓢塚古墳……22
第16図　下太田廃寺遠望……25
第17図　周溝墓Ⅱ東溝断面……27
第18図　周溝墓Ⅰ……27
第19図　周溝墓Ⅲ……28
第20図　茶の木地区西端部の状況……28
第21図　中世土坑墓の移築……28
第22図　21　溝……29
第23図　14溝上面の遺物……30
第24図　県道拡幅の坪掘り土層……31
第25図　15　溝……32
第26図　県道拡幅坪掘り位置図……32
第27図　周溝墓Ⅰ……34
第28図　周溝墓Ⅱ……36
第29図　周溝墓Ⅱ主体部……37
第30図　周溝墓Ⅱ棺材……37
第31図　周溝墓Ⅲ主体部……38
第32図　周溝墓Ⅳ……38
第33図　周溝墓Ⅲ……39
第34図　建物址Ⅰ……40
第35図　建物址Ⅰの掘り方と柱穴……40
第36図　建物址Ⅱ……41
第37図　中世土坑墓……42
第38図　7　溝断面……45
第39図　南五反田A地区溝断面……46
第40図　土坑　5……47
第41図　掘立柱穴群……49
第42図　建物址Ⅳ……50
第43図　16　溝……51
第44図　南五反田B地区溝断面……52
第45図　土坑　10……54

第46図　土　　坑　　11……55
第47図　土　　坑　　12……55
第48図　土　　坑　　14……56
第49図　土　　坑　　18……56
第50図　土坑18石斧出土状況……56
第51図　壺　　棺……57
第52図　土　　坑　　9……58
第53図　土　　坑　　11……58
第54図　土　　坑　　14……58
第55図　20溝土器出土状況……59
第56図　22　溝　断　面……60
第57図　23溝・24溝断面……60
第58図　20溝土器出土状況……61
第59図　竪穴住居址Ⅰ内堆積土……62
第60図　竪穴住居址Ⅰ……63
第61図　竪穴住居址Ⅱ、竪穴住居址Ⅲ……65
第62図　竪穴住居址Ⅳ～Ⅶ……66
第63図　土　　坑　　20……68
第64図　土坑21（左）および土坑30（右）……69
第65図　土坑20断面……69
第66図　土　　坑　　24……70
第67図　土　　坑　　25……71
第68図　土　　坑　　26……71
第69図　29溝土器出土状況……72
第70図　落久保B地区溝断面……73
第71図　川島弥生中期の土器分類……75
第72図　周溝墓土器……77
第73図　中世土坑墓青磁内面……78
第74図　中世土坑墓青磁……78
第75図　底部墨書……78
第76図　7溝・9溝・14溝須恵器……80
第77図　6溝・9溝・14溝土器……83
第78図　14　溝　土　器……84
第79図　土坑5土器……85
第80図　16　溝　土　器……86
第81図　17　溝　土　器……88
第82図　17溝上層須恵器……90
第83図　17溝下層土器……91
第84図　18溝・19溝土器……94
第85図　土坑7土器……97
第86図　土坑10土器　(1)……99
第87図　土坑10土器　(2)……101
第88図　土坑10土器　(3)……102
第89図　土坑10土器　(4)……103
第90図　土坑11・12・13・14土器……106
第91図　土坑15土器……108
第92図　壺棺土器……110
第93図　土　　坑　　8……110
第94図　20溝土器(1)……112
第95図　20溝土器(2)……113
第96図　20溝土器(3)……114

第97図　20溝土器(4) …… 115
第98図　20溝土器(5) …… 116
第99図　20溝土器(6) …… 117
第100図　20溝土器(7) …… 118
第101図　20溝土器(8) …… 119
第102図　20溝土器(9) …… 120
第103図　20溝土器(10) …… 121
第104図　20溝土器(11) …… 124
第105図　20溝土器(12) …… 125
第106図　20溝土器(13) …… 126
第107図　20溝土器(14) …… 127
第108図　21溝出土須恵器 …… 127
第109図　22溝土器(1) …… 130
第110図　22溝土器(2) …… 131
第111図　22溝土器(3) …… 132
第112図　22溝土器(4) …… 133
第113図　22溝土器(5) …… 134
第114図　22溝土器(6) …… 135
第115図　22溝出土製品 …… 137
第116図　25溝土器 …… 137
第117図　落久保A地区表採土器(1) …… 138
第118図　落久保A地区表採土器(2) …… 140
第119図　竪穴住居址 I …… 141
第120図　竪穴住居址Ⅳ土器 …… 142
第121図　土坑20土器 (1) …… 144
第122図　土坑20土器 (2) …… 145
第123図　土坑20土器 (3) …… 146
第124図　土坑 21 …… 147
第125図　土坑 22 …… 149
第126図　土坑23・24・25土器 …… 152
第127図　土坑 26 …… 154
第128図　29溝 …… 155
第129図　落久保B地区表採土器 …… 155
第130図　石器 (1) …… 156
第131図　石器 (2) …… 157
第132図　石器 (3) …… 158
第133図　石器 (4) …… 159
第134図　川島20溝出土土器集成表 …… 163
第135図　近畿・瀬戸内出土、川島20溝関連土器 (1) …… 165
第136図　近畿・瀬戸内出土、川島20溝関連土器 (2) …… 166
第137図　各地区出土土器拓本 …… 179

立岡遺跡

第138図　竪穴住居址 I …… 185
第139図　A15・16地区土器出土状況 …… 185
第140図　6溝の状況 …… 186
第141図　13溝内土器出土状況 …… 186
第142図　C9地区耕土出土 …… 186
第143図　No.1坪掘りピット出土 …… 186
第144図　22溝東西断面 …… 187

第145図　2溝東西断面 …… 188
第146図　竪穴住居址Ⅰベッド上出土土器 …… 189
第147図　住居址Ⅰ …… 190
第148図　竪穴住居址Ⅱ …… 191
第149図　ピット17 …… 193
第150図　1溝断面 …… 193
第151図　2溝断面 …… 193
第152図　3溝断面 …… 194
第153図　竪穴住居址Ⅰ土器 …… 196
第154図　住居址Ⅰ出土鉄器 …… 197
第155図　住居址Ⅱ土器 …… 197
第156図　1・2・3溝土器 …… 198
第157図　5溝土器 …… 199
第158図　7溝土器 …… 200
第159図　pit 17 土器 …… 200
第160図　立岡遺跡表採土器 …… 201
第161図　pit 27 土器 …… 202
第162図　A15、16地区出土土器 …… 204
第163図　立岡遺跡から炭となって出現したケヤキ及びカエデ(?)の幹 …… 209

檀特山遺跡

第164図　檀特山遺跡の位置 …… 213
第165図　第1・第2地点土層図 …… 213
第166図　第2地点出土土器 …… 214

川島・立岡遺跡

第167図　中播平野遺跡分布図
第168図　川島（上）・立岡遺跡（下）の立地
第169図　川島遺跡調査区分(上)および茶の木地区の遺構(下)
第170図　南五反田A地区(上)および同B地区(下)の遺構
第171図　落久保A地区(上)および同B地区(下)の遺構
第172図　立岡遺跡調査区分(上)および遺構図(下)

表　目　次

第1表　旧石器遺跡 …… 16
第2表　川島遺跡時期別遺構一覧 …… 181
第3表　立岡遺跡時期別遺構一覧 …… 206
第4表　花粉化石出現状況 …… 210

はじめに

昭和40年8月に山陽新幹線の建設が決定し、それにともなって、文化庁と日本国有鉄道との間に交わされた、「埋蔵文化財に関する覚書」によって、その対策が講じられることとなった。

すなわち昭和41年6月に、山陽新幹線予定路線が2㎞の幅をもって示され、その間の分布調査が実施された。川島遺跡および立岡遺跡は、この分布調査において報告され、以下略述する経過を辿ったのである。

昭和42年5月に、山陽新幹線路線が正式発表となった。川島・立岡遺跡は路線内となる。

昭和42年6月に、山陽新幹線路線内分布調査が実施され、川島遺跡の弥生包含層の存在が確認された。

昭和41年7月に、文書でもって、国鉄へ可能なかぎり遺跡をさけるよう申し入れる。

昭和41年9月・10月に、第2次予定路線内分布調査が行なわれ、前回にリストアップした170遺跡は145遺跡に減少した。しかし川島・立岡遺跡は、なお路線にかかることになった。

昭和42年6月、文書により、文化財保護委員会（当時）と協議、および今後の調査により、重要遺構発見のときは、保護措置を講ぜられたい旨の申し入れを行なう。

昭和42年7月に、山陽新幹線より47遺跡の立会調査および、発掘調査の依頼を申し出られた。

昭和42年8月に、兵庫県山陽新幹線・中国縦貫道文化財対策審議委員会が発足した。以後川島・立岡遺跡の調査終了に至る、およそ2年8月の間、20数回の審議会によって指導・助言をいただいた。ご芳名を記して厚く謝意を表する次第である。

委員長　野地　修左（神戸大学教授）
副委員長　武藤　誠（関西学院大学教授）
委　員　赤松　啓介（神戸市史編纂室）
〃　今里　幾次（神戸銀行栄町支店長）
〃　上田　哲也（東洋大学付属姫路高校教諭）
〃　是川　長（県立飾磨高校教諭）
〃　末永　雅雄（関西大学教授）
〃　高井悌三郎（甲陽学院高等学校教諭）
〃　田中　琢（奈良国立文化財研究所所員）
〃　多渕　敏樹（神戸大学助教授）
委　員　檀上　重光（神戸新聞学芸部長）
〃　坪井　清足（奈良国立文化財研究所平城宮址発掘調査部長 昭和43年5月1日以降）
〃　松岡　秀夫（赤穂市有年考古館長）
〃　松本　正信（市立姫路高校教諭）
〃　横山　浩一（奈良国立文化財研究所所員 昭和43年5月1日まで）
〃　渡辺　久雄（大阪市大教授 昭和43年5月1日以降）

（所属は委嘱当時　アイウエ順）

昭和43年3月に、川島遺跡予察調査が実施される。路線400mにわたって遺構があることが判明。

昭和43年5月に、審議委員会で川島遺跡の路線変更を要望する審議が行なわれた。

昭和43年5月に、山陽新幹線工事局太子工事区によって、檀特山トンネル工事が開始された。用水

路つけ替え工事によって一部掘削された（落久保A地区D61.62)。翌日ただちに県教委は工事中止を申し入れると同時に、川島遺跡地区の路線再検討を申し入れる。

同5月に川島遺跡の立会を行ない、その西限すなわち大津茂川を越えて、西には延びないことを確認する。

昭和43年6月に山陽新幹線より川島遺跡の路線変更は困難であるとの回答がある。ただちに審議会にはかったが、回答に具体性がないこと、遺跡の重要性を理由に、再度保存を申し入れることとなった。県教委はただちに何故変更できないのか、川島遺跡について覚書第2項を摘要するや否やについて回答する。また文化財保護委員会に出向し「事前協議」の内容について調査する。

昭和43年7月に、山陽新幹線の路線変更については、不可能である旨の回答がある。

昭和43年8月に、川島・立岡遺跡の坪掘りについて審議があり、立岡遺跡は新大阪起点96km380m～96km580m、川島遺跡は同94km000m～94km400mについて行なうこととなる。

昭和43年8月に、立岡遺跡の坪掘りが、東洋大学付属高校上田哲也氏によって行なわれた。

昭和43年8月に、立岡遺跡の坪掘り調査の結果について審議があり、全面調査を行なうこととなる。

昭和43年10月に、行なわれた第6回審議会で、立岡遺跡の全面調査について再度審議された。

昭和43年11月に、立岡遺跡の全面調査が開始された。

昭和44年1月に、立岡遺跡の調査成果について審議が行なわれ、保存の意見が出された。

昭和44年2月、川島遺跡・茶の木地区の調査開始。

昭和44年4月、第1回審議会（本年度）が行なわれ、川島地区西部の調査の必要性が審議された。

昭和44年8月、南五反田地区以西の調査が開始される。

昭和44年9月、第5回審議会において中間報告。

昭和44年10月に開催された第6回審議会において、茶の木地区の取扱いと試験杭の打込みについて審議され、前者は設計変更、後者は坪掘りを行なった後に行なう旨の審議結果が出された。

昭和44年11月、第7回審議会において、立岡遺跡の保存設計および迂回側道の位置、川島遺跡・茶の木地区橋脚の位置と、迂回側道について審議が行なわれたが結論は出ず。

昭和44年11月、第8回審議会は、第7回議題について再度審議を行なう。

昭和44年11月、立岡遺跡保存区間の測量に、是川・松本委員の立会をうける。

昭和44年12月第9回審議会で、川島遺跡の保存でき難い内意があった点について、再度保存する様に申し入れる審議がなされた。新幹線側は検討を約する。

昭和44年1月に、文書でもって工事変更を申し入れる。立岡遺跡は96km473m～96km495m、川島遺跡94km473m～96km495mについて。

昭和45年1月16日に、大阪新幹線工事局より計画変更了承の回答がある。

昭和45年3月、川島遺跡94Km327.5m～94km355.5mと94km248m～94km257m、94km216m～94km225m、側道部の保存を要請する。

昭和45年3月に、上記申し入れ了承の回答がある。

昭和45年3月、第14回審議会において、川島遺跡調査終了報告を行なう。

川島・立岡遺跡の経過は以上であるが、以下に兵庫県内通過の山陽新幹線にかかる、文化財の処理状況を示しておく。　（榧本誠一）

山陽新幹線関係遺跡および遺跡候補地処理状況一覧表

- 遺跡総数(61)
  （立会に要した距離）
  8,895m
  （新幹線県内総距離）
  116km200m
  - 保存(2)…山田古墳群、播磨国分寺址西南隅
  - 予察調査(35)
    （予察調査に要した距離）
    7,475m
    - 全面調査(12)
      （全面調査に要した距離）
      1,540m
      - 部分保存(7)…中ノ田、時友、市之郷、国分寺址西南外域、川島、立岡、常全
        （設計変更に要した距離）
        164.6m
      - 工事承認(5)…掘池、新方、狐塚、西庄、門前
        （承認した距離）
        1,375.4m
    - 工事承認(23)
      （承認した距離）
      5,935m
      神崎、小中島、下食満、中食満、上食満、天狗塚古墳、一本松古墳、常松、上大市東、上大市、今寺、東河原、田河東、吉田南、阿閉、八反田、御着、千代田、山田、大田部、老原、山津屋、門前
  - 工事承認(24)…
    （承認した距離）
    1,420m
    河辺南条、掛塚、西浦、山道、地蔵古墳、西の口、武庫東条、宣雲古墳、藪の内、鳥羽、西小谷、柳井西、二見、長坂寺、東二見、稲根神社、長田今福、西郷、塩田、高畑、黍田、入相、真殿

（遺跡が路線外、及び遺跡でなかったものを含む）

川島・立岡遺跡
発掘調査経費（昭和42年2月～昭和45年9月）
21,491,000円

発掘調査整理および報告書作成費
5,324,000円

第1章　川島・立岡遺跡の環境

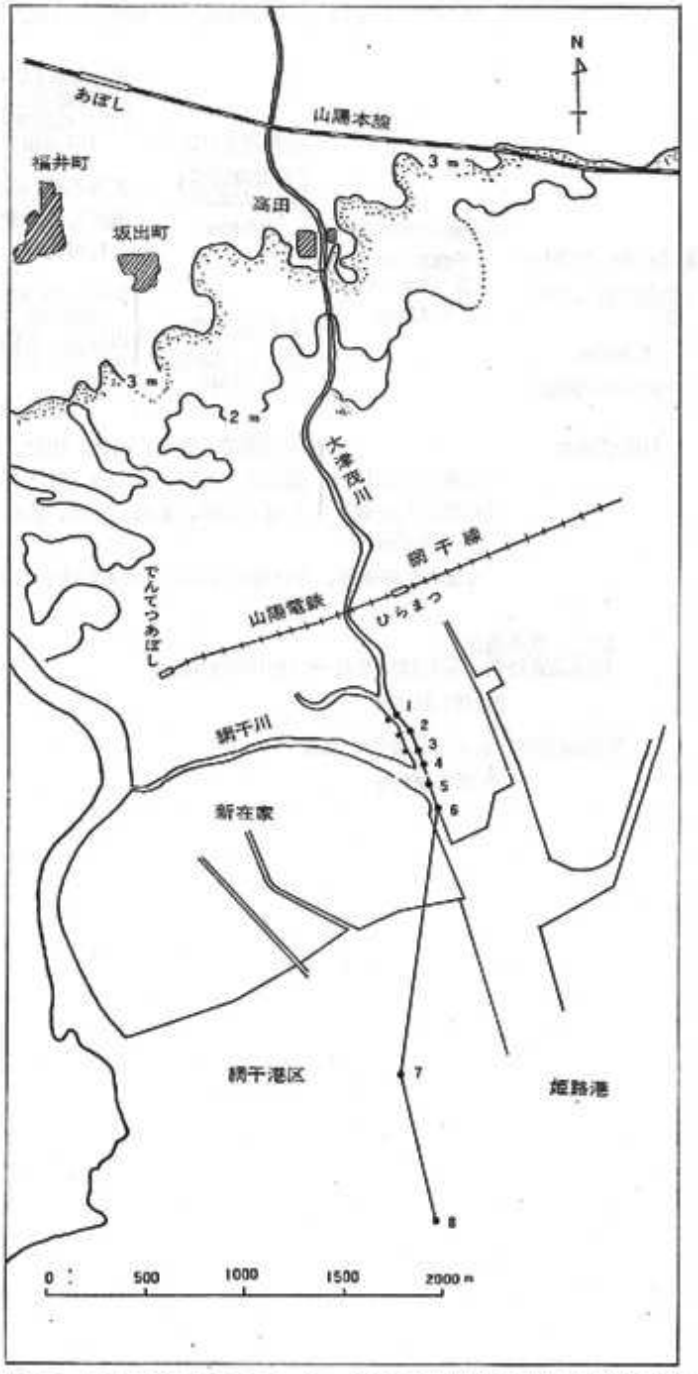
第1節　古地理的環境

縄文海進時の網干付近の海水準

現在の網干海岸は、川島遺跡から4～5km離れている。縄文時代の網干付近の海水面はどれくらいの高さであり、また、そのときの海岸線はどのあたりに位置したかという点に焦点をおいて検討してみた。それは当時の人々の交易の状態を知る上にひとつの基礎資料になると考えたためである。

海水面と海岸線の復元には、第1図に示した大津茂川の川口付近のボーリング資料によったこのような方法は、従来よりあまり試みられていないが、以下述べるような海水準変化の傾向を知る手がかりとしては有効であろう。

第2図の地質断面に示したように、この地域の海底表層部は3層の堆積物によって構成されている。表層から下位へ、砂礫を主とした現在の三角州堆積物3、縄文海進によって形成された海成粘土層（いわゆる沖積粘土）2、縄文海進前（ウルム氷期の海面降下期）の陸化期に古揖保川、古大津茂川などに



第1図　大津茂川口付近のボーリング地点と地質断面線および旧海岸線

よって堆積された砂礫層（洪積世末）1である。

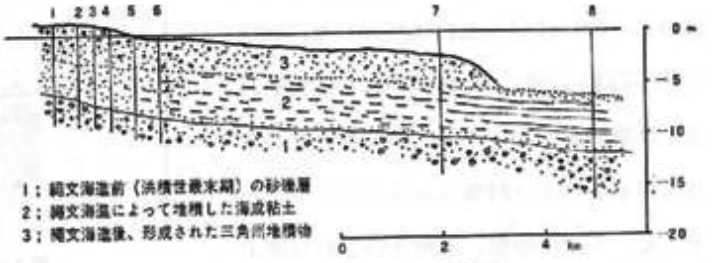
沖積粘土層については、大阪湾、大阪平野などで詳細に研究されており、第2図2の地層は、地層の層位関係や土質力学試験値からみて、大阪の梅田層に対比されるのは明かである。大阪の梅田層についての^{14}C年代の測定値は多いが、そのうち、基底部の測定では国鉄大阪駅東口地下での測定結果の9360年±190年前（市原実・木越邦彦、1960）が、沖積世の初期を示し、縄文海進の開始期とされている。最近では、西宮市役所地下でこの層準に近い地層中の木片の^{14}C測定が行なわれ、8,430年±145年前（藤田和夫・前田保夫、1971、N—947）の値が得られている。図2の2の地層の基底部の^{14}C年代もほぼ上記の時期に近いものと思われる。

大津茂川の川口付近で行なわれたボーリングによる地質調査の結果では、この縄文海進によって形成された海成粘土層は、大津茂川と網干川合流点付近にまで分布している（断面図2、3、4の地点）。このことは、当時の海岸線が現在よりも陸地内に入りこんでいたことを示すものである。第2図3の地層は縄文海進以後の小さい海退による海面低下にともなって、大津茂川や揖保川などから供給された砕屑物が順次海側へ発達した三角州前置層である。縄文海進の時点では、1～4の地点にはこのような粗粒砕屑物の堆積は行なわれていなかった。その当時の1～4の地点は、図2の地点8のような位置、つまり、川から供給される粗粒砕屑物のとどかない、シルト質～粘土質のような細粒の物質の堆積する位置にあったと推定される。

少し強引な作業仮説ではあるが、地点8における現海水面の高さと海底堆積物の表層との差（水深）が、縄文海進時の1～4地点付近におけるそれらの関係に対応する可能性がある。

地点8の水深7.92mを地点2および3の粘土層の上面に加えてみると、それぞれ、+2.87m、+3.24m（基準面上）となり、縄文海進時の海水面は、現在よりも約3m高かったことを示唆する。

この3mの高さの海面を網干地域の現海岸線にあてはめてみると、第1図に3m等高線で示したような海岸線を推定することができる。これによれば大津茂川左岸では、山陽本線にほぼ近い位置にまで海が到達していたと考えられる。



第2図　大津茂川口の地質断面

この縄文海進時の海岸線の復元は、地質学的なひとつの現象面から推論したまでであり、古砂州を対象とした海岸地形の立場からの探究や考古学的な綿密な資料の積みあげによる検討も必要であろう。この高水面時の時期については、現在の段階では縄文時代のどの時期にあたるのかについては、具体的かつ直接的な資料は持っていない。　（前田保夫）

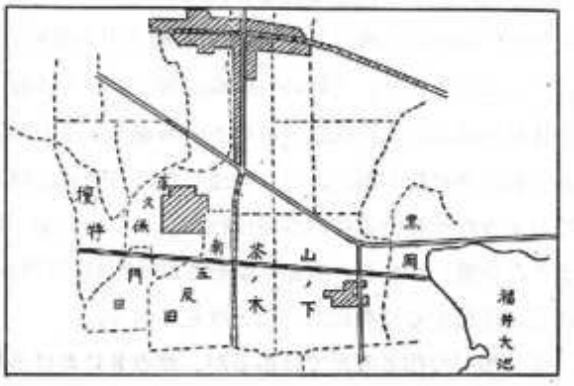
資　料

姫路土木出張所（昭37）：白浜、飾磨、網干地質調査工事報告書
姫路港管理事務所（昭46）：姫汐測第6号姫路港（網干地区）土質調査報告書
国土地理院（昭41）：京都・播磨地域土地条件調査報告書

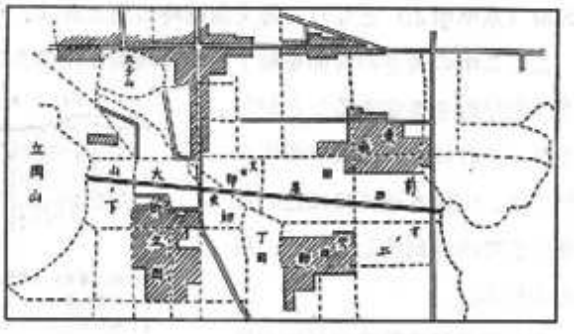
第2節　地理的環境

川島・立岡両遺跡とも現在は揖保郡太子町に所属しているが、合併前には川島は太田村、立岡は石海村に在り、山陽新幹線の路線と関係ある小字は、それぞれ第3図・第4図に示される通りである。いづれも山地ないし丘陵で挟まれた地域であるが、平野を南北に流れる揖保川・林田川・大津茂川の河系の相違から、それぞれ異なる地理的条件が与えられて今日に及んでいる。以下こうした点を中心に、両遺跡の持つ歴史的・地理的環境を次の順序で明らかにする。

1　文献上に見える歴史的環境
2　条里遺構
3　地理的環境
4　川島遺跡
5　立岡遺跡



第3図　川島遺跡付近小字図



第4図　立岡遺跡付近小字図

1.　文献上に見える歴史的環境

川島遺跡のある地区は旧太田村、立岡遺跡のある地区は旧石海村に所属した。和銅年間（713年以降）に作成されたといわれる「播磨国風土記」には、いづれも記載されているから古い村落であることは明らかである。『大田の里。大田といわれる理由は昔呉勝が韓国より渡来して、始めは紀伊国名草郡大田村に到った。その後、その一派が別れ移って摂津国三嶋賀美郡(上郡)大田村に到った。その後また移動して揖保郡大田村に来たのである。こんなわけで、もとの紀伊国の大田の名をここに付けているのである』

この記事を通して、太田村には8世紀迄に帰化人の居住していた事実を知り得る。

また石海村については『石海の里。土質は上の中である。この地を石海と名付けた理由は、孝徳天皇の時代に、この里の中に白便と呼ばれる野原があり、百枝もある稲が生長していた。そこで阿曇連

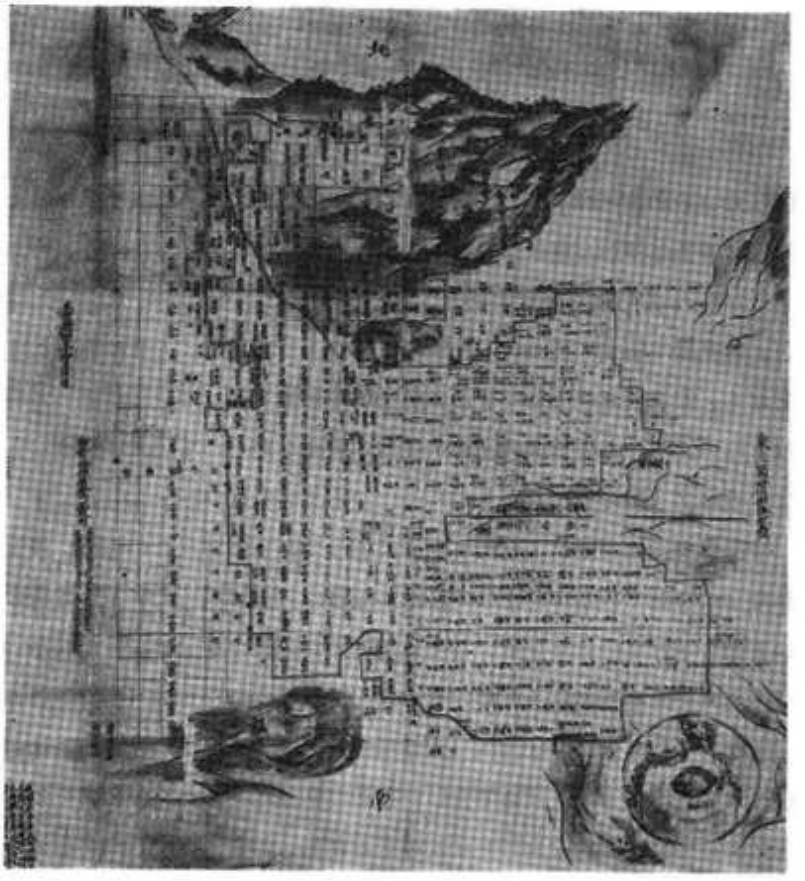
百便（ももたり）という者がこの稲を献上した。すると天皇は「この野原を開墾して水田を開くように」といわれ阿曇連太牟（あずみのむらじたむ）を現地に派遣し、また石海（いわみ）（石見の国）の国から人夫を徴集して開墾をさせた。こうしたいきさつで野原の名を百便と呼び、村の名を石海というのである』

石海村は当時から土質が良い所であったことがわかる。従って孝徳天皇の時代（7世紀前半）までに、既に阿曇氏（本貫は九州筑前、海洋氏族）によって支配されていたようである。そうであれば弥生・古墳期に連なる古い村落も、どこかに立地していたことであろう。百便というのは絶体数ではなく、千や百に仮托した生産力の高さを物語っている。しかし、生産力の高い耕地もあると共に、一方ではまだまだ多くの原野が残されていたにちがいない。当時のこの地方の人口がどれ程あったかは明らかでないが、新らたに原野を開墾するだけの余剰労働力はなかったのであろう。そこで勅命（強制による）で他国（石見国）の労働力がこの地に投下されて、はじめて多くの耕地化（水田化）が可能になったというわけである。

引用したのは大田里・石海里の2例に過ぎないが、播磨風土記の記事の中には、しばしば帰化人の定住と、山陰（特に出雲・石見・伯耆の国々）との人々の往来の話しが出てくる。したがって播磨地方の集落の考察には、この二つの事柄に注意すべきであろう。

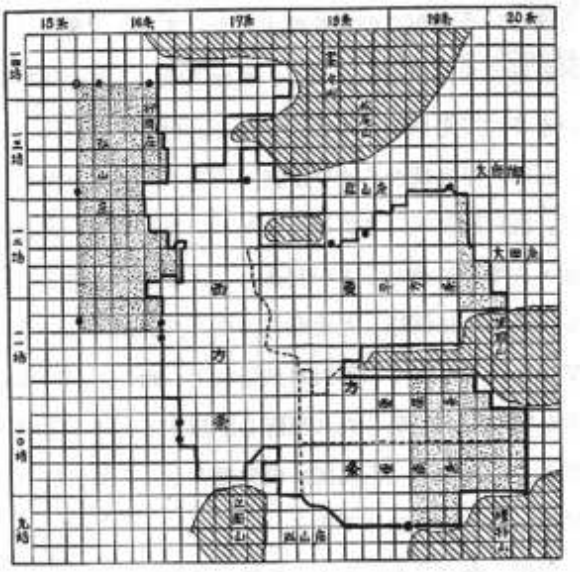
10世紀に作られたといわれる「倭名類聚鈔」（和名抄）の中の「国郡部」には揖保郡管下19郷（最初は里の字を用い、後に郷の字になる）の中に、大田郷と石見郷とが見える。風土記時代の村落が続いて存在していた証拠となる。

中世の庄園時代には、この二つの村落はどうなっていたのか。嘉暦4年(1329)に描かれた「法隆寺領播磨国鵤御庄図」（第5図）によると、川島を含む旧太田村は、大田庄となっている。立岡を含む旧石海村は



第5図　法隆寺領播磨国鵤御庄図

山陽新幹線のルート沿いに、東方は鵜庄の領域、西方は広山庄に所属していたことがわかる。この絵図によると当時の大田庄は、西に位置する広山庄とともに、しきりに鵜庄を侵食していたことが「大田庄五反押領」とか「弘山押領七反」などといった書きこみからうかがわれる。また、同じく書こみによって、この鵜庄が、条里制の上で大きく「東方条」・「西方条」とされながらも、西方条が「鵜」を中心とした一つの条を構成しているのに対して、東方条の方は、平方・東保・東南に区別されているところは注意されるべきであろう。即ちそれぞれの中心集落を基にして条里の呼称が付せられていたわけである。（第6図参照）



第6図　鵜庄の条坊と庄域図

2. 条 里 遺 構

川島・立岡地区を含む旧太田・石海村域は、広域にわたる揖保郡条里の中に含まれる。即ち川島地区は九坊の20条～21条、立岡地区は同じく七坊の17条～19条に属する。（揖保郡条里は西の郡界を基線にして条は西から東に向い、坊（里に当る）は海岸から内陸へ、即ち南から北に進んでいる）

しかし、これは条里制の開始されたころの正しい名称を示したのであって、中世庄園時代になると、各庄園で勝手に種々の私称をしていたようである。先きに引用した法隆寺領鵜庄園図もその例外でなく、領域内だけで通用する条名を1坪単位で使っている程であるから、中世では真の意味の条里制とはいえず、条里遺構の道路・畦畔・水路を利用していたに過ぎない。従ってこの絵図には条里制でいう坪名（番号を付したもの）は一つも見られない。

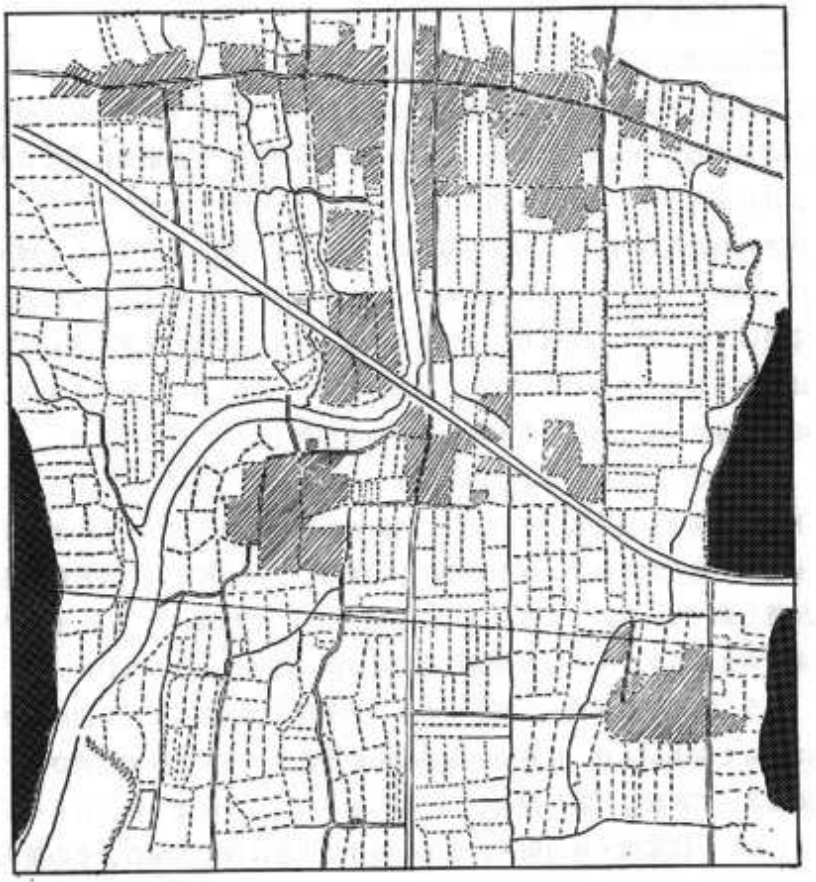
では条里遺構の道路・畦畔・水路はどうであるのか。この方は、最近の宅地化の急増で部分的にはかなり崩されているが、全般的にはかなりはっきり残っている。遺構の全体が一つの基準と計画に基いて統一されているだけに、ごく最近の変化の部分を除けば、最初から条里施行のなされなかった地域（当時の未利用地）及びその後の変化で破壊された地域（当時の河道）などが明確に把握できる。

すなわち川島地区では河川（太田川＝大津茂川）による影響が、はっきり条里遺構の上に見られるが、立岡地区の方は、極めて古い河道の痕跡は認められたが、条里制施行以前のものらしく、施行以後においては比較的安定した状況のもとにあったことが明らかである。

また地割形式の上から見ると、立岡地区では長地型がほとんどであるのに対し、川島地区では、長

地型はそれ程顕著でなく、むしろ半折型が卓越しているように思われる。この事は、開拓時期に相違があるのか、開拓者の類型に相違があるのか、いづれかであろうが、現在の時点では明らかでない。

（第7・8図参照）



第7図　川島付近条里遺構図

第8図　立岡付近条理遺構図

3. 地理的環境

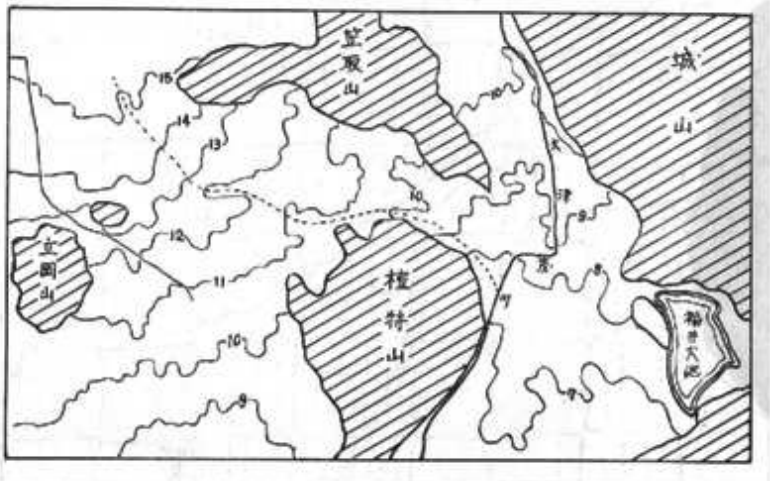
両遺跡地区を含む揖保川低地は、揖保川・林田川・大津茂川（太田川）が山麓を離れて播磨灘に注いだとき、運んできた土砂を堆積して逐次形成した氾濫平野である。氾濫平野形成開始の時期は冲積世の始まるころに当る。開始当時、現在の揖保川低地は播磨灘に連なる内湾一のつで、ところどころに島状をなして、立岡山・朝日山・擅特山などの沈降性山地が分布していた。海面下には洪積世に形成された段丘礫層が厚く海底を覆っていた。この洪積世に形成された礫層には、現在の各河川の旧流路と判断される切込みがあるので、いづれの河川も早く形成されていたことがわかる。それが洪積世最後の海進で埋没谷となり、冲積世に入るとともに内湾の下深くもぐってしまった。しかし新河川はほぼ旧河川の流路を採りながら、海進の結果生じた内湾にしきりと上流から土砂を運搬し、段丘礫層の上に堆積して、海退とともに今日の氾濫平野を形成したのである。

諸河川沿いに、南から北に向けてボーリング資料を検討してみると、海岸付近では平均10メートル下に段丘礫層が見られ、その上部に内湾性沈積物と考えられるものが、下から上に向かって粘土・粘土質砂・粘土混り砂・シルトの順に厚く重なり、最上部に河川堆積物の末端と考えられるものや土表が薄く乗っている。ところが海岸より約2キロ程内陸部に入ると、も早内湾性沈積物は認められず地表から2～3メートルの河川堆積物の下は段丘礫層に連なっている。

こうした地下の状況から判断すると、洪積世末の海進によって内湾化された揖保川低地も、冲積世に入って海退があり、比較的短期間の中に諸河川の運ぶ土砂で埋積され、その後、それらの河川の乱流によって顕著な氾濫平野がその上に形成されて今日に至ったといえる。

しかし、揖保川・林田川・大津茂川の3河川を比較した場合、その集水面積の大小、土砂運搬量の多少において顕著な相違が認められるから、氾濫平野の形成も揖保川下流が最も著しく、林田川これに次ぎ、大津茂川が最もおくれたであろうことが想像される。従って内湾は大津茂川下流に於て、おそくまで残っていたといえる。

河川下流の状態がこのようであったばかりでなく、より上流部でも、平野形成過程に於て明白な相違があった。すなわち水量と土砂運搬量の少い大津茂川流域では、同じく揖保川低地にあっても揖保川・林田川流域の平野面より相対的に低いという結果をみている。（第9図参照）幸いなことに揖保川・林田川の形成した平野との間に北から笠取山・擅特山・朝日山という一連の沈降性山地が横たわっていたため、勢力

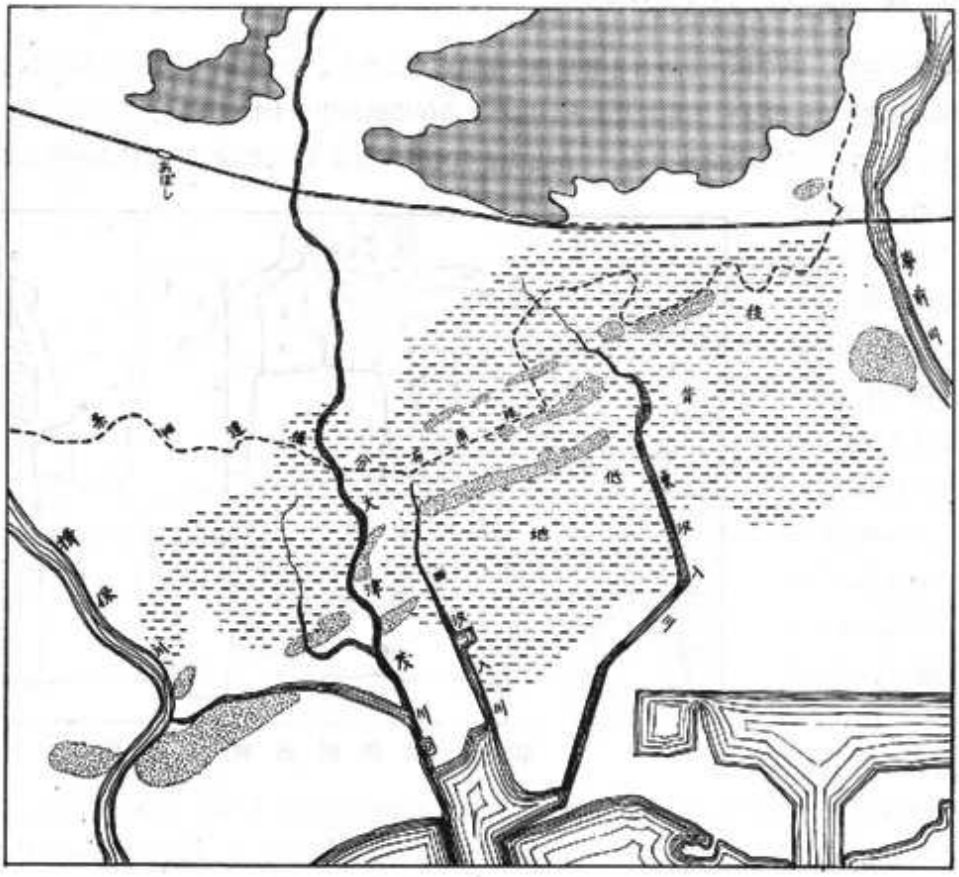


第9図　川島・立岡付近等高線図

の強い二つの河川による直接的影響は受けずにすんだようである。若しこれら一連の山々が無かったとすれば二つの河川が乱流し、その出口を前記残留内湾に求めたであろうことが想像できる。

こうした地形的環境にあるから、大津茂川流域に位置する川島地区は、土地低平であるが河川の乱流が少く、安定しており、立岡地区は土地は高燥であるが、河川による影響は川島地区に比較してやや受け易い地区であったといえる。しかし、立岡地区が河川によって顕著な影響を受けたと考えられるのは氾濫平野の形成期、すなわち沖積世の初期の段階であり、少くとも人類がこの付近に住みつくころ以降においては立岡山の存在が一つの障壁となって歴史時代には安定した状況下にあったことが地形判読、地割分布の上から認められる。

次に摂保川低地における海岸線の変遷について述べる。これについては、現在の海岸線より1～2キロ内陸部に残存する砂洲・砂堆と、その背後にある後背低地の存在に注意しなければならない。先きにも述べたように、現海岸線より2キロ程内陸に位置する一線を境として、より内陸部の地層は河川の運ぶ沖積層（砂・シルト）の下が直ちに洪積世の段丘礫層に接するのに対し、より海岸部の地層は、沖積層が二重構造で、上部が河川による内陸性堆積物、下部が海水による内湾性堆積物より成っている。とするとこの一線が、ある時代の氾濫平野の末端、すなわち海岸線と考えることができよ



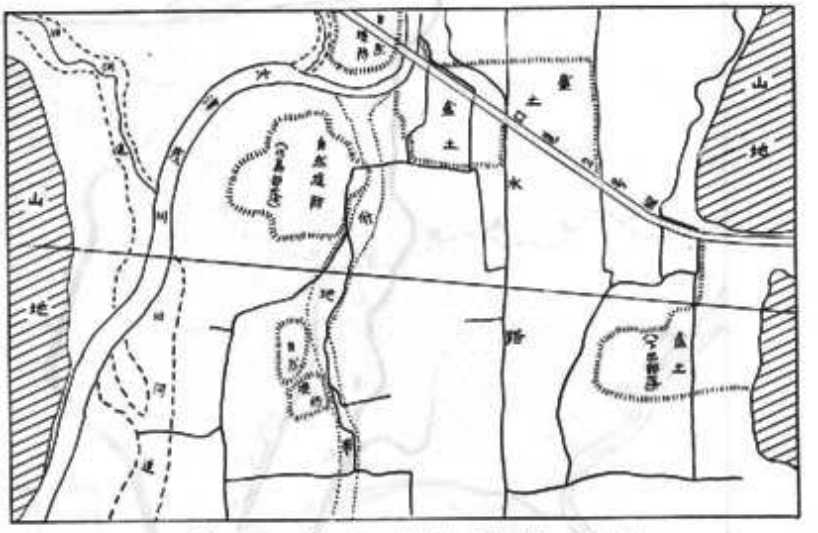
第10図　大津茂川下流の地形と条理南限図

う。もちろんこの一線も決して東西方向に一直線ではなく、やや弓型をなし、揖保川河口に向って張出した形になっているのは、揖保川の堆積力が大津茂川のそれをはるかに上廻っていたことによるといえる。

さてこの一線が海岸線であった時期の決定を直接的に明らかにすることは困難であるが、ほぼ西暦紀元前後と考えられる。またここには数列の砂洲・砂堆が存在するが、砂洲・砂堆は沿岸潮流によって形成されるから、数列の砂洲・砂堆は当時の海岸前方に横たわっていた筈である。ところが揖保川低地における条里遺構の分布を検討してみると、その分布の南限は後背低地を一部含めながら砂洲・砂堆列のすぐ直後にまで及んでいる。このことから、少くとも古墳・奈良期の海岸線は、大津茂川以東の地域では、砂洲・砂堆付近に在ったか、更にそれより新百メートル前方に在ったことがわかる。砂洲にさえ切られた内陸部の後背低地は、当時既に耕地化される程度に迄なっていたものであろう。しかし砂洲・砂堆外の後背低地は古い時代の内湾の名残りを止め東西の汐入川により海水が出入する低湿地（潟）をなし、その開発は近世にようやく開始されるのである。（第10図参照）

4. 川 島 遺 跡（第7・11図参照）

川島遺跡付近は、第7図に示される等高線で明らかなように、笠取山一擂特山を結ぶ線を境として、東西の比高が3～5メートルに及ぶといった、揖保川低地中でも特に低いところである。従って周辺の水系は、ここに集る傾向がある。しかし先きにも述べたように、笠取山・擂特山が極めて接近しているため、西から流れこもうとする河川を阻止するには役立ったことであろう。第11図の西方、現大津茂川の西方山地（擂特山）の北方を迂回している旧河道は、古い時代の西側の一つの河道の名残であろう。現在この旧河川の痕跡は、この部分のみに見られ、上流部は一切不明である。



第11図　川 島 付 近 微 地 形 図

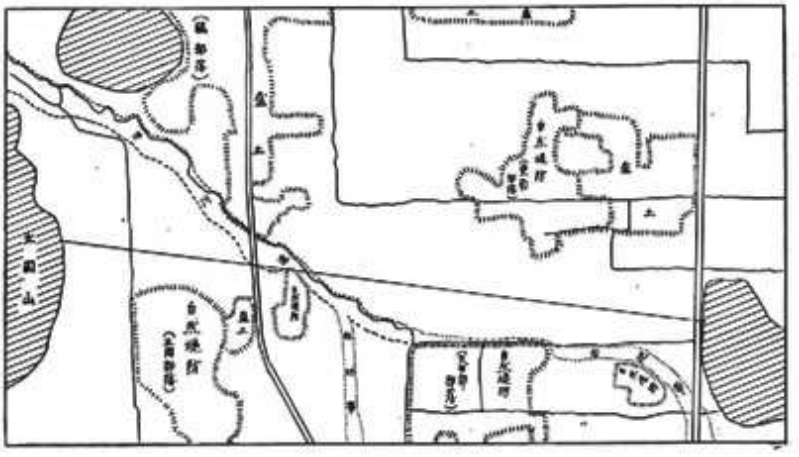
ただ第9図の等高線の屈曲から、現在の鳩部落の北部あたりで分派した林田川の一分流ではなかろうかということが推定される。（第9図では点線で推定線を入れている。）上流が明らかでないことから、この河川の影響は早くなくなってしまっていたことが考えられる。

次に川島地区で最も大きな役割を演じたのは大津茂川である。現在は川島部落の北部で、それまで南流していた流路が大きく西方に彎曲して後に南下しているが、古い時代には、部落の東方をそのまま南下していたであろうことが三つの事実から明らかである。その一は旧河道と考えられる部分が周囲に比してやや低平であること、その二は付近一帯の条里地割の規則性が、この部分のみ不規則であること（第７図）、その三はこの低地沿いに自然堤防が存在している事実である。この時代がいつであったか、俄かに決めることは難しい。しかし周辺に存在する条里遺構の状況から推すと、奈良時代には半ば既に本流が西遷しており、一部にその痕跡を残していたのではないかと考える。自然堤防上に立地する集落名「川島」は、新河川と旧河道に挟まれて島状に見える命名ではあるまいか。

この旧河道（第11図では低地帯として示す）より西側の部分は、条里遺構は認められず、また地割も不規則で、一見してここが比較的新しい開発であることを物語る。これに比較してより東側の部分は、山麓近くまで条里遺構が分布しているので、奈良時代までに既に耕地化されていたといえる。しかし盛土上に立地する下出部落は中世末か、近世の立地であろう。

5. 立 岡 遺 跡（第８・12図参照）

条里遺構（第８図）の検討では、顕著な不規則性が認められないが、空中写真分析によると、西北一東南の方向に旧河川の流路が見出される。（第12図）これはかつての林田川の乱流跡であろう。現在の立岡・矢田部・東南の部落が大きな自然堤防上に立地することから考え、この乱流はかなりの流量を持つ河川であったことが想像できる。（第13図参照）



第12図　立岡付近微地形図

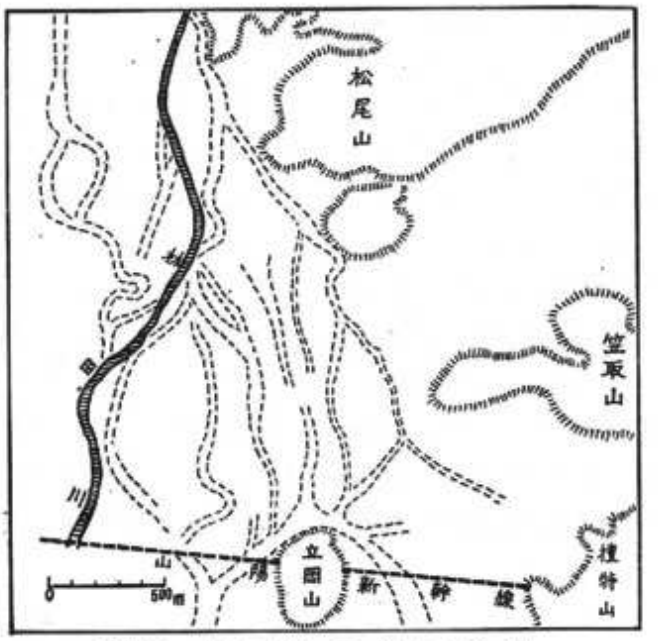
しかし、条里遺構の乱れが、各部落の周辺に見られないことから、旧河川の存在時期は縄文時代から弥生時代までの間であり、奈良時代には現状に近い状態にあったことが考えられる。ただ部落の立地する大自然堤防以外の小自然堤防は、その後（古墳―奈良時代）の小氾濫で形成されたもののようである。古墳時代から奈良時代にかけて付近一帯の開発が進められ、自然堤防上の集落立地が行なわれたと思われる。

新幹線の路線に当るところは、古代から中世にかけて、鵤部落を中心に成立していた法隆寺領鵤庄

域の南縁に相当する。したがって早くから耕地化されていたが、部分的にはなお旧河道であったこともあって低湿地域も残っていたらしい。庄園図(第5図)の1坪毎の名称の中に「草田」・「揚田」（低地の一方の土を掻きあげ、他方に盛土する）が見られる。

一般的にいえることは、旧河川による土地への影響が早くなくなっており、従って土砂の堆積量は少なく、安定した状態を長く維持して来たと考えられる。

（渡辺久雄）



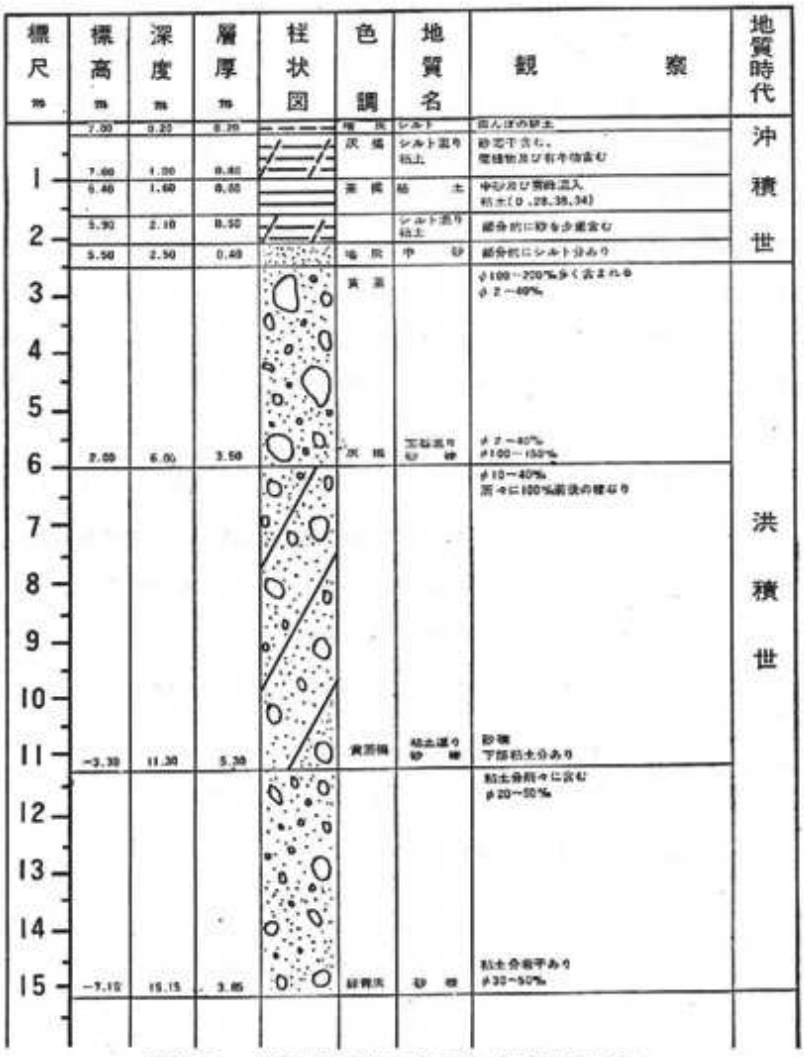
第13図　林田川の旧河道図

第3節　川島遺跡周辺の地質

川島遺跡を囲む山地のうち、北方の城山（250.1*m*）は花こう岩によって構成されているが、西方の鹿特山（165.9*m*）と東南方の京見山（216.1*m*）は、流紋岩類で構成されている。

遺跡の地下の地質構成は、第14図に示したように地表から2.10*m*までは沖積粘土で、約0.4mの砂を挟み、以下15.15*m*までの10*m*あまりは洪積世の砂礫層からなりたっている。これらの砂礫層は、たぶん大津茂川の氾濫のさいに上流より供給されたものであろう。

山陽新幹線工事局のボーリング調査報告のうち注目されるのは、福井大池の地下構造である。ここでは深度10数*m*まで標準貫入試験のN値20前後の比較的軟弱な粘土混りの砂層によって構成されている。おそらく深度20mぐらいに基盤の流紋岩類が伏在すると思われるが、この程度の広さの池の地下に軟弱層が10*m*をこえる厚さで堆積しているのは珍しく、福井大池の存在した歴史はかなり古いと考えねばならない。山陽新幹線の工事中、表土の下に黒ボクに似た黒い腐植物の層を観察したが、このような泥炭状の堆積物は、播磨地方の平野部には報告されたことがない。一般的に考えて、この黒色腐植物層を気温低下期に湖沼底に形成される泥炭とみなすと、その時期はウルム氷期最末期（約2万～1万年前）に求められる。しかし、この推定には、具体的な資料の検討を行なっていないので単なる推定の域をでない。



第14図　川島遺跡の地下断面（国鉄資料による）

ただ、今回の調査によって発掘された諸資料をつくりだしたところの古代の人々が、この地点を主な生活舞台としたとき、福井大池は沼沢地として存在していたことは明らかである。　（前田）

第4節　歴史的環境

1.　先土器および縄文時代

加古川から千種川にかけては播磨平野部が形成され、そこには市川、夢前川、揖保川などの河川が播磨灘にそそぎ込んでいる。この地域内でこれまで発見されている旧石器時代の遺跡は現在のところ12遺跡であり、その立地状態をみると平均して標高50m前後に立地しているが、別表でみられる志方町の3遺跡、加西市の1遺跡をみてもわかるように、いずれも池ないしは池畔にみられ、冬の渇水期などに石器を採集している。平野部に入ってみられる遺跡の多くは独立した丘陵部にあり、標高は40m～80mと前述した標高とあまり変化がみられない。また播磨灘にある家島群島の太島において昭和34年度に神戸新聞社主催の総合調査を行ったところ、東部丘陵上からは井島Ⅰ型ナイフ形石器が発見され、また西部丘陵からは尖頭器が1点発見されている。[1] この太島の標高も40m前後で、以上のことから旧石器文化の分布状況は、標高40m前後の丘陵上に立地し、太島の状況から判断してみると、旧地勢は同標高ラインで形成されていたものと考えられる。しかも発見された石器はいずれも宮田山

河川名	行政区名	遺跡名（石器型式名）
加古川流域	加古川市	山の上（宮田山型、井島型）、神野城山（同じ）、新植池（宮田山型）
	志方町	西山新池（井島Ⅰ型）、畑谷池（宮田山型）、上の池（国府型、井島Ⅰ、Ⅱ型）
	加西市	逆池（宮田山型）
市川流域～夢前川流域	姫路市	大垣（宮田山型）、長池（宮田山型）、手柄山（井島Ⅱ）
揖保川流域	竜野市	皿池（宮田山型）
	御津町	碇石（宮田山型、有舌尖頭器）

第1表　旧石器遺跡

型、井島型と瀬戸内技法を使用したものが多くみられるが国府型もみられるところから、旧石器時代の文化圏は大きく瀬戸内海～畿内にかけての一連のものと考えられる。

縄文時代に入ると、まず市川の上流神崎郡神崎町福本遺跡[2]には、早期の押型文土器がみられるが、当地域における分布の状況は現在のところ確認されてない、しかし、同じ性格をもつものとしては、但馬地方に多くの分布をもつことを付け加えておきたい。[4] 前期に入ると千種川流域の赤穂市馬路地遺跡[5]にみられ、同遺跡はなお中期まで継続していることが確認されている。中期に入ると前記遺跡のほか外は揖保川流域の新宮町新宮宮内遺跡[6]にみられる。後期は遺跡の数が増えて、市川、夢前川流域では姫路市橋詰遺跡[7]、千代田遺跡[8]、沼高田遺跡、石ケ坪遺跡があり、千種川流域では赤穂市鷲壺谷遺跡[9]などがあげられる。晩期になると弥生時代と複合する遺跡が多く、加古川流域では加古川市岸遺跡[10]、

市川、夢前川流域では姫路市橋詰遺跡、辻井遺跡[11]、小山遺跡[12]、構遺跡、堂田遺跡、揖保川流域では太子町立岡遺跡、千種川流域では赤穂市猪壷谷遺跡などがみられる。以上播磨地方においてみられる縄文時代の遺跡をあげてきたが、ここでみられる遺跡の分布は、あまりにも点だけであり、線の結びつきを確認できるほど数があがっておらず、性格も明確ではない。加えてここにあげてないもので縄文時代遺跡として遺跡台帳にあげられているものがある。志方町山中、横大路、峠の池、広尾東、松ノ木谷池、西牧第1遺跡、牛谷池、山添、池の内、山中新池、畑、成井山池、竜野市奥池、桜谷、姫路市大谷口、入家、町田池、海老池、旧母池、西脇池、揖保川町城山などであるが、このうちで縄文土器と見られる土器片が採集されている遺跡は、志方町西牧第1遺跡と姫路市大谷口遺跡の2カ所だけで、残りはいずれも石鏃か、有舌尖頭器の発見例だけで、その数も1点ないしは数点とサヌカイト片がみられるにすぎない。ここで分布の状況をみる例として志方町をあげてみると、西牧第1遺跡は低位段丘上に立地しており、弥生時代土器片も同時に発見されていることから考えると、縄文時代でも比較的新らしい時期の遺跡と考えられる。他の遺跡をみてみると、いずれも中位段丘ないしは高位段丘に立地しており、縄文時代の遺跡の立地条件としては申し分ないが、土器の散布がいまのところ発見されておらず、遺跡としての取扱いに多少の疑問が残る。というのも縄文時代においては採集経済が主体となっており、その性格から採集用具(この場合は狩猟用)の四散は、その時期の一つの生活形態をうみだすものであり、このような場合はむしろ生活圏内の地域であるという確認だけにとどめ、周辺地域の観察をより密に行う必要がある。

播磨地方における河川の発達は顕著であり、縄文時代文化の発達をうながすだけの地理的条件を兼ねそなえているのであるが、前述した諸遺跡の分布状態をみてみると、遺跡間の平面的関連性および、時期的な関連性が全くうかがい知ることができない。これはまだ完全な分布状況を把握していないこともあるが、当地方においての縄文時代文化の特徴を述べるとするならば、早期、前期、中期にみられる遺跡の数が少ないということは、当時期の生活形態から考えると、むしろ山間部を中心として展開していたからであり、播磨平野部におりえずしても生活を維持できたものと考えられ、但馬地方においての遺跡の分布状況から、縄文時代の生活の場は当地方を中心とした中国山脈に求められよう。後期～晩期になると、遺跡の多くは低地におりてきており、明らかに生活形態の変化をみることができ、特に晩期になると、弥生時代と複合するものが多く、稲作農耕の初期的出現をも考えられる状況にある。

(阿久津　久)

註記 (1) 『日本の考古学』Ⅰ、頁298～300
鎌木義昌『無土器文化、縄文文化』家島群島 (昭38)
(2) 県立竜野実高考古学部『原始、古代の揖保川流域』
(3) 『日本の考古学』Ⅱ
増田重信「播磨福本遺跡の押型文土器」『兵庫史学』13号
増田重信「播磨福本遺跡と出土遺物について」『古代学研究』18
神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』Ⅰ
(4) 藤井祐介、阿久津久『神鍋遺跡』日高町教育委員会。

前田豊邦『八木川流域の縄文式遺跡調査報告書』関宮町埋蔵文化財調査報告1、関宮教育委員会。
現在当地域で報告されているのは上記の2遺跡だけであるが、日高町で神鍋、山の宮遺跡がいずれも押型文を出土しており、関の宮では別宮遺跡、杉ケ沢第1地点～第16地点、御崎3地点、関の宮2地点、吉井3地点、出合、オジコロ、外野3地点、八千高野6地点、梨ケ原5地点、粕畑3地点などで早期～後期がみられ、特に杉ケ沢、別宮、関の宮、などでは押型文土器が多数発見されている。

(5) 松岡秀夫「赤穂市の縄文遺跡」『古代学研究』44。

(6) 『新宮町史』第1巻
『新宮宮内遺跡発掘調査報告』新宮町教育委員会。

(7) 浅田芳朗、今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査報告』1960

(8) 浅田芳朗「千代田貝塚」『飾磨郡誌』2
小西孝四郎「姫路貝塚の発見」『人類学雑誌』31—8　1930
直良信夫「姫路千代田町貝塚」『播磨文化資料』1961
杉原荘介、小林三郎「兵庫県千代田遺跡」『日本農耕文化の生成』
増田重信『姫路市の先史遺跡』

(9) 前掲

(10) 喜谷美宣『岸遺跡発掘調査報告書』加古川教育委員会。

(11) 浅田芳朗「播磨辻井遺跡の調査に就いて」『考古学』11—3　S15
同　　「辻井石器時代遺跡調査日誌」『兵庫史談』S15
同　　「辻井人骨発掘秘話」『播磨郷土文化』2　S23

(12) 今里幾次「播磨小山遺跡Ⅷ地点の弥生土器」『古代学研究』32　1962
東洋大学付属姫路高等学校考古学教室『姫路小山遺跡発掘調査報告』1964
神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』I

2. 弥 生 時 代

播磨の国、それは温暖な気候と肥沃な土地にめぐまれ、人々が住み始めて幾星霜の年月が流れている。中国山地を分水嶺とした、千種川、揖保川、夢前川、市川、加古川は幾たびかその流れを変えながら、決してつきることなく播磨平野をうるおし続けてきた。

しかし、弥生時代人が好んで住み、生活したのはこれらの河川から派生する支流、例えば大津茂川、船場川、天川等の小河川である。

ここで述べようとする弥生遺跡は、市川西岸から揖保川流域までを中心として取りあげてみたい。便宜上、これらの河川にはさまれた平野（東西約10～17km、南北は狭い部分で約2km、広い部分で約15km）を中播平野と仮称してこの平野内に存在する遺跡の実態についてふれてみよう。

前　　期

中播平野の弥生時代前期の遺跡を東から順次西へ追っていくと、市川下流に、姫路市市之郷遺跡、その支流の船場川の流域に、姫路市八代・千代田・橋詰・黒表・小山・構の諸遺跡が広がり、船場川の西方を流れる水尾川沿いに姫路市堂田遺跡が存在している。また、堂田遺跡の北約2kmに姫路市辻井遺跡が位置している。夢前川の支流、大津茂川流域には、姫路市柳ケ瀬・坂出遺跡、揖保川流域には、竜野市門前遺跡、揖保郡揖保川町神戸北山、山津屋遺跡の計15遺跡が知られている。

なお、これらの諸遺跡の他に、中播平野には、北は市川上流に神崎郡福本遺跡、南には瀬戸内海に浮かぶ家島諸島の2遺跡、西には千種川上流の佐用郡千種町千種遺跡等が確認されているが、その中心的な分布は、瀬戸内海沿岸の平野部である。

前期を代表する遺跡というよりも、播磨を代表し、しかも、縄文時代から弥生時代以降の土器を出土する。辻井・小山の両遺跡は、今里幾次氏によって発見、紹介されているところである。

辻井遺跡は、標高約20mの自然堤防上に立地し、後述する銅鐸の鋳型を出土したことで有名な名古山遺跡のすぐ北に隣接しており、昭和15年、今里氏が調査した際、縄文時代中期の完全な人骨が発見された。

小山遺跡は、船場川流域標高約8mの自然堤防上に形成された集落址である。今里氏は、昭和15年以来、調査を繰り返され、播磨の弥生式土器の実態を明らかにされたのは、周知の事実である。

中播平野に分布している遺跡にほぼ共通した点をあげてみると、(1)船場川、大津茂川といった小河川の自然堤防上に立地し、標高が2m以上20m未満のところに形成されている。(2)一時的な断絶はあるが、縄文時代以降弥生時代およびそれ以降の土器を出土する。いわゆる複合遺跡の形態を帯びている。(3)遺跡は、揖保川、夢前川流域は少なく、市川の支流、船場川、水尾川流域に集中的に分布しており、市川の東岸附近には、現在までのところ発見されていない。

中　　期

弥生時代中期になると、遺跡数は飛躍的に増大し、その立地も、前期の小河川の自然堤防上にほぼ限られていたのに対し、微高地はもとより、台地上、段丘上、山地の山麓から山頂にいたるまで広がり、その分布範囲も拡散される。

すなわち、竜野市中臣山・北竜野遺跡、姫路市山所・名古山・付城山遺跡、揖保郡太子町桃畑：小丸山・中山遺跡等は低地以外の山麓・山腹・尾根などに営なまれた遺跡である。

なお、名古山遺跡は、昭和35年に発掘調査がなされた。その際、3軒の住居址とともに、銅鐸の鋳型（縦約5cm、横約7cm、厚約2.5cm）が発見された。

前期以来利用されている低地は、引き続き生活の場として営なまれているもののほかに、この時期になって、新たに知られる遺跡も存在する。例えば、姫路市富士才・深田・極田・長越遺跡、竜野市片烏池遺跡等がある。また、姫路市飾西東山遺跡、揖保郡太子町榎特山遺跡等高地性的性格を帯びた遺跡が知られるようになるのは、中期後半の時期からである。以上、列挙した諸遺跡は、低地に存在する遺跡以外立地場所から考えて、決して大きな広がりをみせず、むしろ、小規模な範囲ではないかと思われる。

後　　期

中播平野における、弥生時代後期の遺跡、それは、前期・中期来引き続いて存在する遺跡と後期から始まる遺跡とがあり、量的にはもっとも数多く存在しており、揖保川のような大河川の流域にも営なまれるようになる。一例をあげれば前述した遺跡の他に竜野市片吹遺跡、姫路市溝口、飾西遺跡、揖保郡太子町鵤遺跡等が知られている。

以上、羅列的に遺跡の概略を記してきたが、これら集落址と思われるもののほかに、揖保郡揖保川町養久山遺跡の墳墓群、竜野市片山遺跡の箱式石棺、川島遺跡の周溝墓など弥生時代の墓制と考えられるものが約20カ所知られていることを附記しておきたい。　　（松下　勝）

3. 古 墳 時 代

川島・立岡遺跡周辺における古墳時代の遺跡は、その大部分が古墳である。集落址などの実態が窺えるものは皆無に近い。遺跡分布図に示した弥生の遺跡には、土師器、須恵器を出土する古墳時代の集落址をも含んでおり、古墳の分布の状況とよく合致していると考えられる。

ここでは揖保川および夢前川流域の古墳について述べるが、詳細については明らかでない点が多い。古墳の分布は大摑にいって、揖保川流域の西岸と大津茂川東岸の北辺、および東辺を劃する丘陵縁辺に大別することができる。弥生時代から古墳時代における海岸線は、第1章第2節に述べられているが、京見山付近は海岸線が迫り、隘路的な状況を示していたと考えられる。以下前期・中期・後期の三区分によって、前方後円墳を中心に遺跡の概略を述べることとする。

1、前 期 の 古 墳

古墳時代の初期の資料については、最もその研究が急がれている。兵庫県南部における、揖保川流域および市川・加古川流域などは、弥生時代後半から古墳時代初期の蒸制の資料を提出して注目されている地域である。しかしその編年の基礎尺度について、充分な整理が行なわれていないためにやや混乱しているといえる。川島遺跡20溝山土の土師器によってある程度の編年的位置づけが行なわれるであろう。

揖保川中流右岸にある古島古墳[(1)]は、古くから前期古墳の代表的な例として著名である。標高250*m*程度の尾根上にあり、全長36*m*の前方後円墳である。内部構造は竪穴式石室で、5.3*m*×1.2*m*の規模をもっている。銅鏡は内行花文鏡1面、三角縁四神四獣鏡3面、三角縁盤竜鏡1面および、刀、ガラス玉が出土している。竜野市舎利田古墳[(2)]は全長40*m*の前方後円墳で竪穴式石室を内蔵し、墳丘に壺棺などがあるという。養久山古墳群[(3)]は34基の古墳を数えるが、そのうち養久山1号墳および12号墳が前方後円墳および前方後方墳である。養久山1号墳[(4)]は全長35*m*で、竪穴石室・土坑などの埋葬主体をもち、列石を囲繞している。さらに養久山古墳群と同じ丘陵上には、竜子の三ツ塚4号墳・5号墳[(5)]があり、5号墳は全長45*m*の前方後円墳で、竪穴石室を内蔵し、三神三獣獣帯鏡2面、鉄剣、鉄鏃、鉄斧及び土器を出している。権現山古墳群[(6)]は121基の古墳が数えられるが、前方後円墳1基、前方後方墳2基、方墳1基を含んでいる。大多数は横穴式石室を内蔵する小型の円墳である。これらのうちで前方後方墳の全長64*m*の50号墳、および全長43.2*m*の51号墳が、前期古墳の可能性がある。松田山古墳[(7)]は円墳で竪穴式石室を内蔵し、鏡・剣・筒形銅器・玉・紡錘車などが出土している。これが前期古墳としてよく知られているものである。さらに詳細が不明であるが、弥生末から古墳初期の埋葬形態を示すものではないかといわれるものも、揖保群太子町原坂、姫路市勝原区山戸など2、3にとどまらないが、不明な点が多く省略する。

2、中 期 の 古 墳

中期として知られる古墳は、揖保川河口東岸に位置し、瀬戸内海に面した菰山に、全長110*m*の前

方前円墳奥塚古墳[8]があり、葺石・埴輪が認められるが、現在は前方部を消滅している。内部主体は後円部に竪穴式石室があるが、遺物などについては不明な点が多い。さらに墓山に相対して綾部山丘陵上に32基の古墳が[6]あり、2基の前方後円墳と、1基の前方後方墳および4基の方墳がある。円墳のうち径40mの古墳があり、円筒埴輪が採集されている。その他は大部分横穴式石室を主体部とする後期の古墳である。前述の古墳のうち、26号墳は全長約30m程度で、粘土槨を内蔵するものである。前方後方墳および方墳は、いずれも中期の古墳と考えられている。

川島遺跡南方約1kmにある、丁・瓢塚[10]も中期古墳と考えて良いであろう。全長101mの前方後円墳で、平野部に立地する。現状では周濠などの存在が窺えないが、あるいはその残存部かと思われるものもある。葺石・埴輪がある。内部主体は竪穴式石室があるが、南東部に偏している。

3、後期の古墳

後期の古墳群はかなり見られるが、前方後円墳として知られるのは、竜野市・西宮山古墳[11]で全長35mあり、横穴式石室を内蔵していたが消滅した。遺物は鏡、冠帽、帯金具、玉類、馬具、垂飾耳飾り、武器類が出土している。御津町小丸山古墳[12]も同様の遺物類を出土している。前方部・後円部に横穴式石室が内蔵されている。また姫路市勝原区・山戸4号墳も二つの竪穴式石室をもち、土師器が出土している。

前方後円墳を含まないが、前述瓢塚後背丘陵上に丁古墳群[13]、14基からなる京見山古墳群、20基からなる金剛山古墳群、川島遺跡を眼下にする檀特山および朝日山古墳群、32基よりなる山田古墳群や、5基からなる黒丘山古墳群がある。さらに10基からなる舎利田古墳群、23基の内山群集墳が見られる。また立岡遺跡を見おろす立岡山に2基の古墳がある。

揖保川西岸では新宮町・宮内古墳群が14～16基、同町市野保古墳群では38基、馬立古墳群34基、25

第15図　丁・瓢塚古墳（東より）

基の竜野市小神、20基の中垣内古墳群などが形成されている。最大の古墳群は櫛現山古墳群で、現在120基程度の古墳が知られ、大部分は横穴式石室を内蔵することが判明している。

（檀本）

註

（1）梅原末治「兵庫県下に於ける古式古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第二輯　大正14年。
（2）是川長他「考古学上からみた三木地方の古代」『三木市史』　昭和45年。
（3）是川長、松本正信、加藤史郎『養久山』　昭和42年。
（4）昭和42年5月17日付神戸新聞。
（5）梅原末治「龍子の三ツ塚古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第9輯、昭和8年。他
（6）兵庫県教育委員会『埋蔵文化財分布地図及び地名表』第1集、昭和43年。
（7）上田哲也他『姫路丁古墳群』昭和41年。他
（8）神戸新聞社会部編『祖先のあしあと』Ⅲ、昭和35年
（9）松本正信「綾部山古墳群保存運動始末記」第15巻第4号『考古学研究』昭和44年。
（10）(8)に同じ
（11）(8)に同じ
（12）兵庫県教育委員会『遺跡分布地図及び地名表』第5集、昭和45年
（13）(7)に同じ

その他の古墳で文献を掲げてないものは『遺跡分布地図及び地名表』の第1集～5集による。

4. 歴 史 時 代

西播磨平野は、市川、夢前川、林田川、揖保川、千種川の五つの大河川によって、つちかわれた最も肥沃な沖積平野である。この肥沃なる西播磨の沖積平野を基盤にして、縄文時代から生活が営なまれてきたことはいうまでもない。今日明らかになってきた歴史時代の遺構として、官衙関係の宮殿跡、官衙跡、宗教関係―寺院跡、墳墓、経塚および埋経、石造構物と梵、具、生産関係―窯跡、製鉄遺跡、製塩遺跡、生活関係―柵跡、城跡および館跡、住居跡と埋没家屋および井戸等の遺跡がある。ここ、夢前川と揖保川に挟まれた西播磨平野を、現在までの分布調査からみると、宗教関係、生産関係、生活関係の遺跡をあげることができる。

寺院跡　(1)下太田廃寺―姫路市勝原区下太田字ツクワ―下太田集落東方の水田中に塔基壇が現存している。それは南北約8m、東西約7.5m、高さ約70cmの規模で、心礎を中心に4個の礎石がみられる。心礎の石材は凝灰岩を用いており、長径1.5m、短径1.45m、現高約74cmを測り、中央に直径28cm、深さ16cmの円形孔が掘りこまれ、円形孔の中心から北へ約44cmの位置に幅約3cm、深さ1.5cmの円弧状の痕跡がある。これは環状溝のあったことを物語っているものであるが、罹災しているため、現在ではその形跡を認めることができない。心礎を基準にして、礎石を計測すると、方三間の塔であったことがうかがわれるのである。またこの塔基壇の周辺に礎石群があるが、後世の開墾によって元の位置が定かでないが、塔基壇を中心にして、他の礎石の現存している状態から考え合わせてみると、伽藍配置は塔を南に、金堂を北、講堂を背後に配置した法起寺形式にあったと想像されるのである。

遺物―　瓦、鴟尾　以上のように、下太田廃寺は伽藍配置および遺物からみて、白鳳時代から奈良時代にあたる。[1] さてこの下太田廃寺の建立と密接な結びつきが考えられるのは、南方に瓢塚（前方後円墳）を中心に160余基の古墳群がある。それは中期から後期にかけて継続的に一群を形成している。[2] 播磨風土記によると、太田里、勝部岡寺といった帰化人系の氏族によって開発された記載が認められるように、当地は早くから開けた地域で、仏教思想の普及を受容することによった結果、仏教寺院が当地域に建立されたのである。

(2)西脇廃寺―姫路市西脇字村ノ前、西脇部落の中心部に現在塔心礎が残存している。心礎は凝灰岩て造られたもので、長径1.25m、短径1.15mの大きさであって、中央に直径18cm、深さ11cmの円形孔を穿っている。遺物―　瓦　表面採集されている瓦は、全て奈良時のものである。鴟尾破片が採集されており、鰭を刻し、また2個の蓮花文の文様が造り出されている。この蓮花文の大きさは、直径9.9cm、11葉の単弁で、中房には蓮子が14個ある。塔心礎、瓦片、鴟尾などから西脇廃寺の建立は、奈良時代をさかのぼるとは考えられない。当地域はもと、揖保郡太市郷に属した地であったところから考えると、奈良時代の建立にあたることは容易に察せられるであろう。

(3)中井廃寺―竜野市竜野町字中井大字東垣内―中井集落内に塔心礎、礎石、鬼面文円瓦当が出土している。以上のことから当中井廃寺の創建は平安時代にあたるものである。

この中井廃寺一帯は古くから「オヤケ」と呼ばれていたことが播磨風土記に記載があり、帰化系氏

族の川原氏の居住地となっていたことから、中井集落周辺に分布する片山群集墳、内山群集墳、舎利殿群集墳などの古墳群は、川原氏一族に関係するものと考えられる。また中井廃寺の創建について、この川原氏と密接な結びつきを、ぬきにして考えることは不可能である。

窯跡　窯業遺跡として、姫路市林田町に八幡町釜東窯跡群、飾東町の志吹池窯跡、西脇町の観音寺窯跡[3]太市町桜峠の四基からなる窯跡群、青山町出屋敷の窯跡群、石倉町寺坂窯跡、同峰相口窯跡群、また太市町出屋敷の大池窯跡群、新田町の新田窯跡群、打越町のカメ焼谷窯跡、同打越窯跡[4]、林田町八幡町窯跡といった窯跡が姫路市内に存在しているのであるが、これらの窯跡はすべて7世紀前半期から9世紀初頭にかけての遺跡である。ただ竜野市の中井瓦窯跡があるが、この瓦窯跡は中井廃寺に隣接した峰相山麓の南斜面に構築された、ロストル式平窯である。瓦は中井廃寺と直接関係のあることが近年の調査で明確にされた[5]。以上のように中井瓦窯跡をのぞいた姫路市内にある窯跡はすべて、7世紀後半を中心としたものである。

集落跡　揖保川と夢前川に挟まれた平野には、古墳群または廃寺跡の周辺地域に集落遺跡がある。しかし遺構として調査例のない現在では、集落機構の実態または、これに関連する遺跡との関係を把えることができない。以上歴史時代について考察すれば、現在までの資料では、社会機構全体について把握することが不可能であるが、ただ丁古墳群と下太田廃寺、および周辺の集落遺跡、または中井廃寺と中井瓦窯跡の関係についての、研究をあげることができる。川島・立岡遺跡で確認した建物址群の時期は、出土遺物からみて平安時代に限定される点と、舘庄として栄えたことと合致する。なお今後この資料をもとにして、社会機構の把握について追究していくことが待たれるのである。　（大村敬通）

第16図　下太田廃寺遠望

註

(1) 兵庫県教育委員会『兵庫県史跡名勝天然記念物報告第13』鎌谷木三次『播磨上代寺院址の研究』昭和18年
(2) 上田哲也『丁古墳群』昭和41年
(3) 観音寺窯跡と西脇廃寺の出土遺物が、結びつくか否か今後の問題である。
(4) 今里幾次考古4、打越窯跡から鳥尾片と須恵器片が出土している。
(5) 井内潔『竜野市・中井瓦窯跡発掘調査報告』井内古文化研究室報三、昭和44年

第2章　川島遺跡の調査の経過

1.　第1次調査―予備調査―（昭和43年3月）

川島遺跡は、大津茂川堤防築造工事の際、河床より弥生式土器・田下駄が出土し、遺跡の存在は確認されていた。しかし、その規模と範囲はまったく不明であった。

このたび、山陽新幹線が同地区を通ることが決定したため、路線内の調査をすることとなった。昭和42年9月調査に先だって東洋附属高校生徒によって、太子町全域（山田・川島・矢田部・立岡等）の遺跡分布調査が行なわれ、その概要が明瞭化した。同43年2月初旬先の調査を基に、包含層の確認された天満山から大津茂川にかけて、再度のボーリング調査を綿密に行なった。以上2度にわたる調査結果を基に、2月下旬ツボ掘りの場所を設定した。ツボ掘り調査は、43年3月の初旬から約10日間にわたって行なわれた。調査員は、石野（県）上田・河原（東洋教諭）中溝（関大）高原・山田（近大）河井（東洋大）森岡（京産大）釜谷（東洋）のメンバーによって行なわれた。

調査の範囲は、500mでトレンチは幅2m、長さ4mである。この間をほぼ2分する県道が南北に走っており、これを境に、大津茂川までを西地区、天満山までを東地区とし、トレンチは各々5ケ所設定した。

西　地　区

第1トレンチ……大津茂川に接した自然堤防の高台で、畑である。表土より細片の弥生式土器を採集できたが、深さ1.5mに及んでも土器は発見できなかった。しかし、50cm程の割石が数点出土、自然の流石とは考えにくく、墳墓の可能性もある。

第2トレンチ……浅い所から若干の後期（二重口縁）弥生式土器片出土

第3トレンチ……地質を調べるために掘り下げる。2mに達したとき礫層にあたる。

第4トレンチ……幅70cm深さ50cmのU字溝を検出、底より多数の木片・土器片が出土。溝は人工掘鑿によるものとも考えられ、土器は中期。

第5トレンチ……耕作土・黄色土を除くと包含層が現われたので作業を中断。

東　地　区

第1トレンチ……ピット出土

第2トレンチ……ピット・木杭を発見（保存状態がよく原形を留めていた。）

第3トレンチ……土器片出土

第4トレンチ……若干の弥生式土器と須恵器が出土。ピット状のものもみられた。

第5トレンチ……土層をみるため1.5m程掘り下げる。黄色土直下より粘土層になっていた。　（中溝康則）

2. 第2次調査 —茶の木地区および落久保A地区南側部—

（昭和44年2月17日～昭和44年5月31日）

昭和44年2月17日（月）

本日より摂保郡太子町川島遺跡の第2次発掘調査を開始する。発掘調査地点の検討と器材の運搬に終日を費す。第1次（予察）調査において、種々の遺構が約400mにわたって検出されており、調査も長期におよぶであろう。

2月18日（水）～24日（月）

茶の木地区（県道東）から調査をすることとし、耕土を取除く作業に入る。周囲が水田であるためと、連日の雨によって困難をきわめる。

送電線鉄塔建設のため京見山・川島・立岡を立会する。

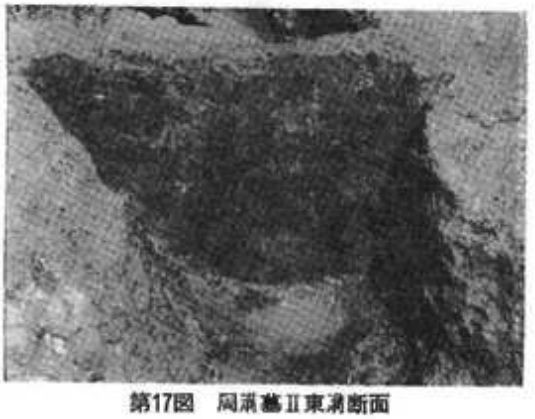
2月25日（火）～28日（金）

D32、E32地区の精査に入る。多数の柱穴状のピットが検出される。土層確認のために坪掘りピット（東地区第1トレンチ）を再度掘る。

3月1日（土）～7日（金）

本地区の基盤は黄色土である。浅く幅の狭い溝状遺構が縦横に走っている。落込土は褐色土と灰青色土の二通りがある。前者は須恵器を含まず、後者は須恵器（奈良・平安時代）を含んでいる。

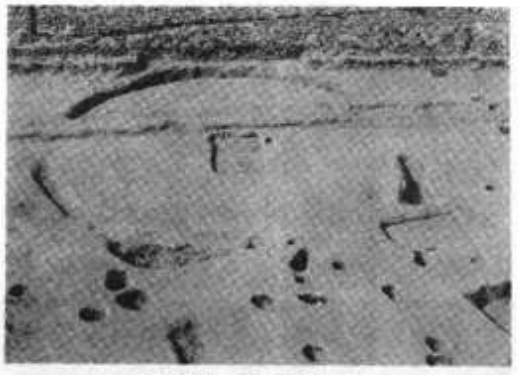
3月8日（土）～12日（水）



第17図 周溝墓Ⅱ東溝断面

D・E・Fラインの29～33地点を掘る。

本地区では周溝墓と思われる遺構を検出する。周溝墓Ⅰは円形状のプランをもっている。4本の溝によって区画され、中央部には主体部と思われる遺構が見られる。周溝内土層は褐色土で一層である。



第18図 周溝墓Ⅰ

3月13日（木）～15日（土）

方形周溝墓の検出を進める。溝内落込土は褐色土で一層である。各遺構の実測を始める。

3月17日（月）～22日（土）

C・D・E・F各27地区の排土作業を開始する。またC30地区の建物址Ⅰの検出を行なう。

3月24日（月）～29日（土）

周溝墓Ⅲの検出を行なう。掘り方を検出する。北側の周溝は検出されたが、他の周溝は検出できない。西側は攪乱を受けて不明であるが、他は恐らく存在しなかったと思われる。各遺構写真撮影。

3月31日（月）

茶の木地区航空写真撮影。落久保A地区用水路南側の発掘を開始する。

第19図　周 溝 墓 Ⅲ

4月7日（月）～12日（土）

耕土排除作業は66ラインまで進む。一部60ラインの精査を開始する。

4月14日（月）～19日（土）

D・E・F各23～26の耕土を除く。本地区は浅く狭い溝状のものが認められるのみである。

第20図　茶の木地区西端部の状況

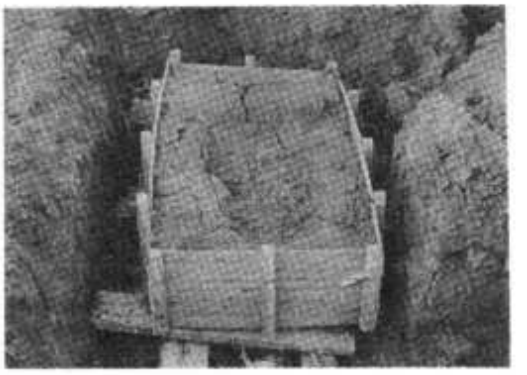
4月21日（月）～26日（土）

D・E・F各23～26の掘り下げ。不整形の薄黒色土の落込みが見られるが、人工的遺構とは考えられない。

4月28日（月）～5月3日（土）

茶の木地区29～32ラインまでの重要遺構に砂を入れ、埋戻し作業を始める。

5月6日（火）～10日（土）各24～26ラインの実測を追加。埋戻し作業に入る。周溝墓群を30mの橋脚で保存することとなったが、中世墓がその区域に含まれないため、E33の地区に移築する。



第21図　中世土壙墓の移築

5月12日（月）～16日（土）

21溝をほぼ掘り上げる。さらに22溝が検出され、一部は切られているが、弥生中期後半の土器を出す。E66で住居址状の遺構がみられるが、現状では不明である。（これは第3次調査で住居址でないことが確認された。）

5月19日（月）～24日（土）

E66・67の掘り下げ。顕著な遺構は認められない。

5月26日（月）～31日（土）

E67の掘り下げ。本調査は5月31日で終了することとして、27日より埋戻し作業に入る。用水路南側部分はビニールを敷き、再度掘ることとする。

（櫃本）

第22図　21　溝

発掘調査参加者名簿

調査担当

槙木誠一（兵庫県教育委員会文化課嘱託）

大村敬通（　〃　）

阿久津　久（　〃　）

調査参加者

石野博信（兵庫県教育委員会文化課技師）

武田清市（　〃　社会教育主事）

3. 第3次調査 ―南五反田A・B地区、落久保A・B地区―

（昭和44年8月11日～昭和45年3月31日）

昭和44年8月11日（月）

川島遺跡第3次調査を開始する。昨夜来の雨と周辺が水田であるため、予定地区は満水状態である。ポンプなどの手配を行なう。

8月12日（火）

ベルトコンベアで排土作業を開始する。グリッド杭を打つ。

8月13日（水）～14日（木）

排土作業

8月18日（月）～23日（土）

D・E・F40ラインまで排土作業を終わる。一部D36・37を掘り下げる。耕土下に1㎝内外の褐色土（鉄分を含む土）がみられ、その下が地山である黄色土である。部分的には薄黒色土の落込状のものがみられるが、ピットなどの明確な遺構ではない。

8月25日（月）～30日（土）

各42ラインの遺構面精査。顕著な遺構はない。E36から南北に抜ける溝が検出される。溝幅は東側が県道の下になるため不明である。浅く狭い灰青色の落込みがかなり見られる。

9月1日（月）～6日（土）

D・E・F各38まで掘り下げが進む。いずれも顕著な遺溝はない。薄黒色の不整形な落込みが見られるが、木の根などのように不規則なものである。

9月8日（月）～13日（土）

D39・40、F39まで掘り進む。

9月16日（火）～20日（土）

D43まで進む。顕著な遺構認められず。

9月23日（火）～27日（土）

D44、E44まで進む。小溝状の遺構を掘り上げる。27日よりD・E・F44以西の耕土を取る。

9月29日（月）～10月4日（土）

耕土排除およびD44、E44掘り下げ。4溝、6溝、7溝などが複雑に切り合っている。

10月6日（月）～10日（金）

D46、E47まで遺構面の精査に入る。9溝から11溝の確認をする。

10月13日（月）～18日（土）

南五反田A地区西部まで耕土を排し、遺構面を精査する。D46からF48にかけてピット列が検出される。

10月20日（月）～25日（土）

D45、E45・46・49の掘り下げ。9溝より小形丸底壺出土する。

10月27日（月）～11月1日（土）

12溝の検出を進める。

11月4日（火）～8日（土）

9溝を掘り進む。8溝は北部のみで南は検出できない。

11月10日（月）～15日（土）

第23図 14溝上面の遺物

D42、E42掘り上がる。7溝の出土須恵器の写真撮影および実測を行なう。

11月17日（月）～22日（土）

10溝および11溝の掘り下げ。E48・49の土坑状の落込みがあるが土器などを含んでいない。南五反田B地区の、耕土排除作業を始める。

11月24日（月）～28日（金）

13溝を検出する。14溝、12溝が重複しているため検出が手間どる。

12月1日（月）～6日（土）

D・E・F各43ラインの清掃、写真撮影。D49・50のピット検出。14溝掘り下げ。本地区における溝の重なりは、12溝が最も新らしく、13溝、14溝となる。

12月8日（月）～13日（土）

D52および、E・F51・52のピット検出。14溝掘り上がる。

12月22日（月）～27日（土）

E・F55ラインまでのピットを検出。いずれも柱穴状をなしているが、建物址としてはうまく配列しない。ピット内落込土層は3種認められる。

昭和45年1月5日（火）～10日（土）

南五反田A地区の畔を取り除き最終検討を行なう。18溝・19溝の検出。いずれも浅い。

1月12日（月）～17日（土）

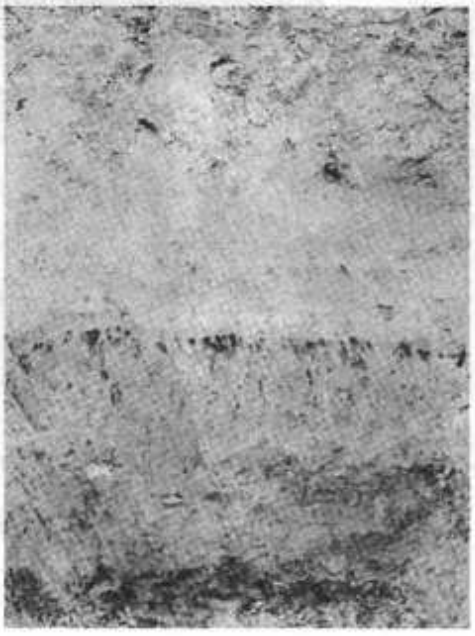
19溝の検出。39～48ラインまでの通し断面図の作成。

1月19日（月）～24日（土）

59ライン以西の排土作業。建物址Ⅳの検出。3×3間の建物である。

1月26日（月）～31日（土）

C61ライン以西の排土作業。太子大江島線拡幅のため、坪掘りを行なう。いずれも遺構らしきものは認められない。



第24図　県道拡幅の坪掘り土層

2月2日（月）～7日（土）

21溝から24溝を再度検出。本地区の溝は21溝が最も新らしく、22溝・23溝の順に古くなる。21溝を除いて、すべて弥生期及びそれ以前のものである。

2月9日（月）～14日（土）

20溝の検出。幅2.5m、深さ30cmの溝である。土師器がぎっしりと詰っている。南東部は用水路のために不明な点が多い。用水路南側では一部検出されるが続かない。

2月15日（月）21日（土）

土坑18の検出。土坑11・12・13の検出。20溝の検出。

2月22日（月）～28日（土）

各71ラインまでの検討。25溝・26溝・28溝の検出および竪穴住居址Ⅰの検出。カマドの確認。

3月2日（月）～7日（土）

74ラインまでの遺構検出。住居址Ⅱ・Ⅲの確認。

3月9日（日）～14日（土）

第25図　15　溝

南五反田B地区15溝から17溝の検出。住居址Ⅱ・Ⅲにトレンチを入れる。

3月16日（月）～21日（土）

77地区までの遺構検出。

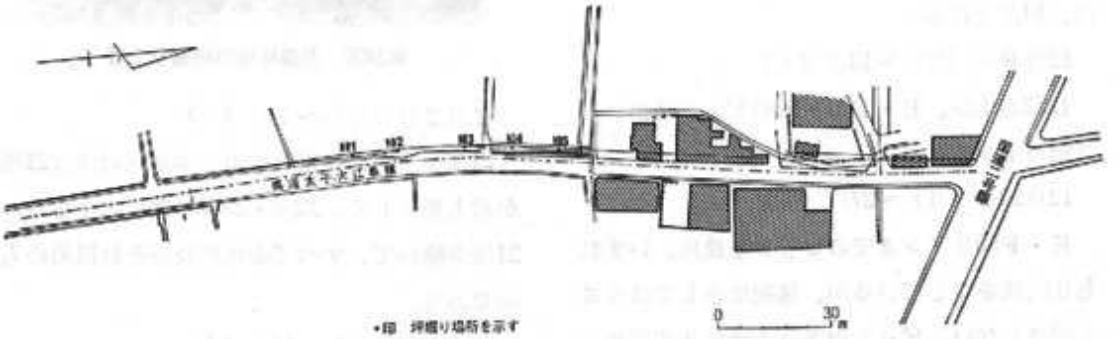
3月22日（日）～28日（土）

29溝および土坑の検出。

3月29日（日）～31日（火）

竪穴住居址Ⅳ～Ⅶの検討を行なう。先後関係の確認のみを行なう。すでに本地区の保存が決定したことと、調査の続行が日数的に不可能であることによって、住居址の調査を打切る。

（櫃本）



第26図　県道拡幅坪掘り位置図

発掘調査参加者名簿

調査担当者

櫃本誠一（兵庫県教育委員会文化課嘱託）
大村敬通（　〃　）
阿久津　久（　〃　）
浅岡俊夫（　〃　）

参加者

石野博信（　〃　技師）
山本三郎（関西大学文学部）
高橋美由紀（夙川学院短期大学）
石田愛子（　〃　）
高橋ケイ子（　〃　）
藤原八郎（関西学院大学）

4. 第4次調査 ―整理作業―

（昭和45年5月21日～昭和46年3月31日）

出土品の洗浄および実測・撮影や、図面の整図・墨入れなど一連の作業は、尼崎市教育委員会社会教育課および、施設課の御厚意によって、尼崎市立竹谷小学校の2教室を借用して行なった。記して深甚の謝意を表する次第である。また個人的には整理期間中、市教委社会教育課技師橋爪康至氏に、種々の指導・助言をいただいた。合わせて心よりお礼申し上げる次第である。

整理作業は昭和45年8月7日から、9月10日までの、立岡遺跡北側側道部分の調査を除いて、櫃本、山本、高橋の3名があたり、夙川学院短期大学卒業生および在学生、神戸大学教育学部学生、親和女子大学学生、竜谷大学学生、関西大学文学部学生諸氏の援助を受けて行なった。

整理はすべての土器を水洗いして、白ポスタカラーで遺物台帳による通し番号、出土地および遺構名を記入した。

土器の実測個体数は、土坑関係の遺構から出土したものは、実測可能なものについてはほとんど作図した。ただし底部、胴部については大きな個体および、特徴的なもののみを行なった。溝関係から出土した土器で、弥生期のものについては大部分行ない、須恵器などは典型的なものについて行なった。ただし土師器を出土した20溝については、甕Bおよび甕Cは約半数程度を実測したが、それ以外は大部分を作図した。

図の表現方法は実測者の間で、細部には若干の差異がある。実測は櫃本、山本の両名が行ない、一部を小川・岡田が援助した。トレースは土器を高橋が行ない、遺構は櫃本、高橋が行なった。一部を松下が援助した。ただし石器の実測とトレースは阿久津が担当した。

出土品は現在は兵庫県教育委員会が保管している。

（櫃本）

整理作業参加者

整理担当者

櫃本誠一	山本三郎	高橋美由紀

参加者

阿久津久	川西マチ子	飯田由紀江
松下勝	山本令子	宮崎薫
小川良太	下山正裕	竹内真理子
岡田博	高橋ケイ子	安東裕子
岸本隆己	密山明子	増田弓子
伊谷本子	酒井恵美子	小山かおり
青木信子	酒井吉子	

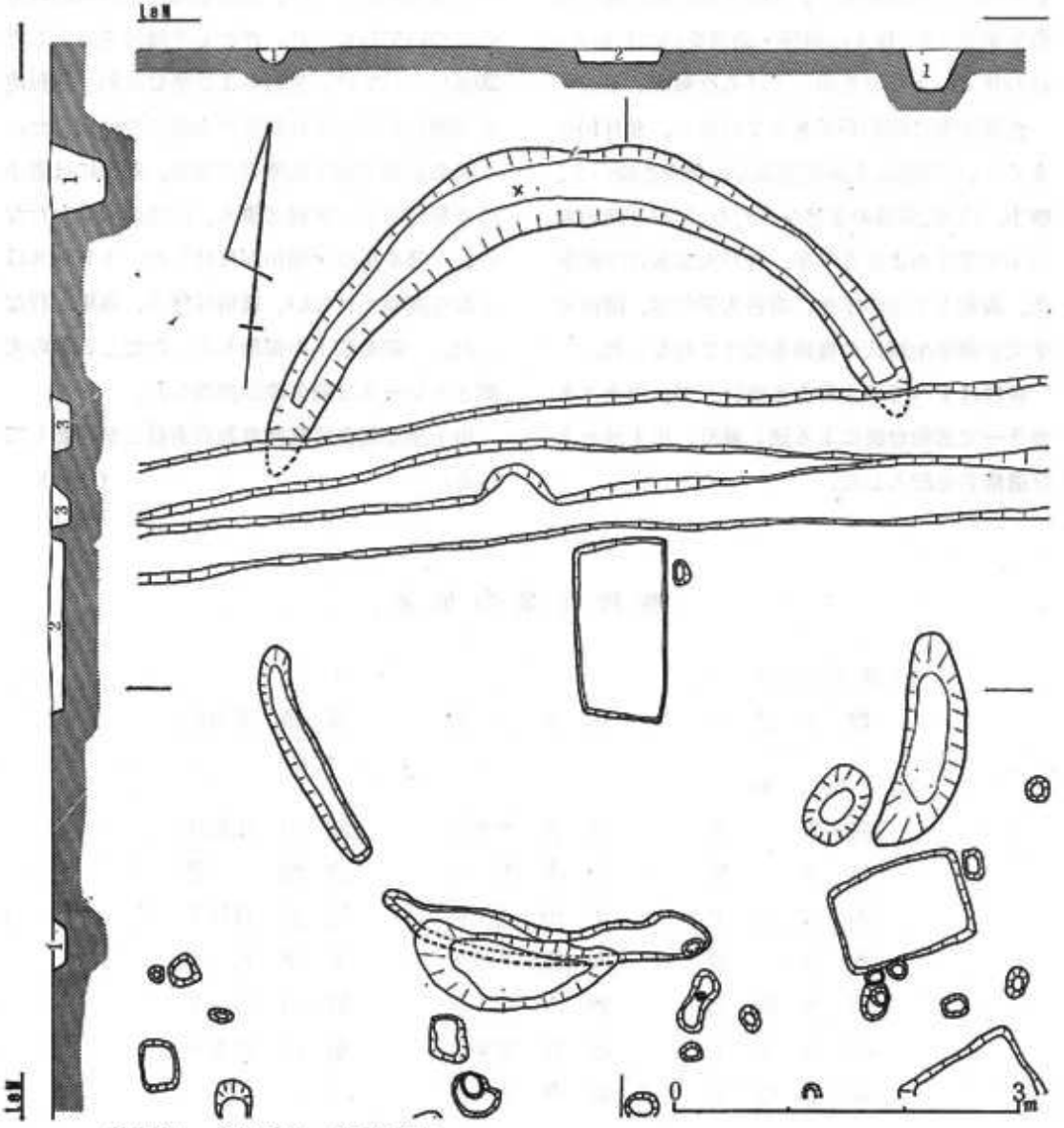
第3章　川島遺跡の遺構

第1節　茶の木地区の遺構

1. 周溝墓遺構

1. 周溝墓 I（図版4—上）

D32地点付近で検出されたもので、その特異な形状、および墓として人骨や木棺などの確定的な状況を検出していないことからして、円形周溝墓と呼ぶにふさわしいか否かについては、今後の検討にまつ



① 褐色土　② 灰色土　③ 灰青色土

第27図　周溝墓 I　（×印壺形土器出土地点）

ところも多いが、本報告では以下に述べる状況や、詳細は不明であるが、福岡県平原例や、2・3の類例などと比べて「円形周溝墓」と呼ぶこととする。また周溝と呼ぶことは、4カ所の不連続な溝によって囲まれていることから、むしろ「囲溝墓」と呼ぶべきであるが、最近の慣習的呼称に従うこととする。

周溝は北側の半円状の溝が最も長くかつ深い。溝幅は最大で70cmある。深さは53cmで両端は後世の浅い溝状の遺溝によって切られているが、ゆるやかに立上って消滅する。この溝中央部でⅣ様式と考えられる壺形土器が検出されている。土器は破枠していたが、溝底に密着しており、1個体のみであった。（第72図S_1）南西周溝は幅30cmと狭く、深さ18cmと浅い。出土物はない。南部周溝は半円状の土坑によって一部切られているが、幅34cm、深さ33cm程度である。東部周溝は幅54cm、深さ34cmである。以上の溝によって囲まれた規模を測ると、南北6.8m、東西6.1mある。

4本の断続した溝によって囲まれた、中央部やや南に偏して、長さ北で82cm、南で幅74cm、長さ1.6m、深さ10cmの土坑が検出された。主軸の方向はN7°Wにある。土坑底は平坦で、流入土は灰色土であったが、木棺などの痕跡については検出することができなかった。しかしほぼその位置から、周溝墓の埋葬主体としてよいと考えられる。

なお周溝によって区画された台上部では2個のピットがあったが、主体部土坑東の径16cmのピットは新しく、青灰色土が流入し、問題はないが、南東部にある径70cm×46cmのピットは土坑墓の可能性を否定できないが、確定することはできない。覆土は黒褐色土である。（標本）

2. 周 溝 墓 Ⅱ（図版5）

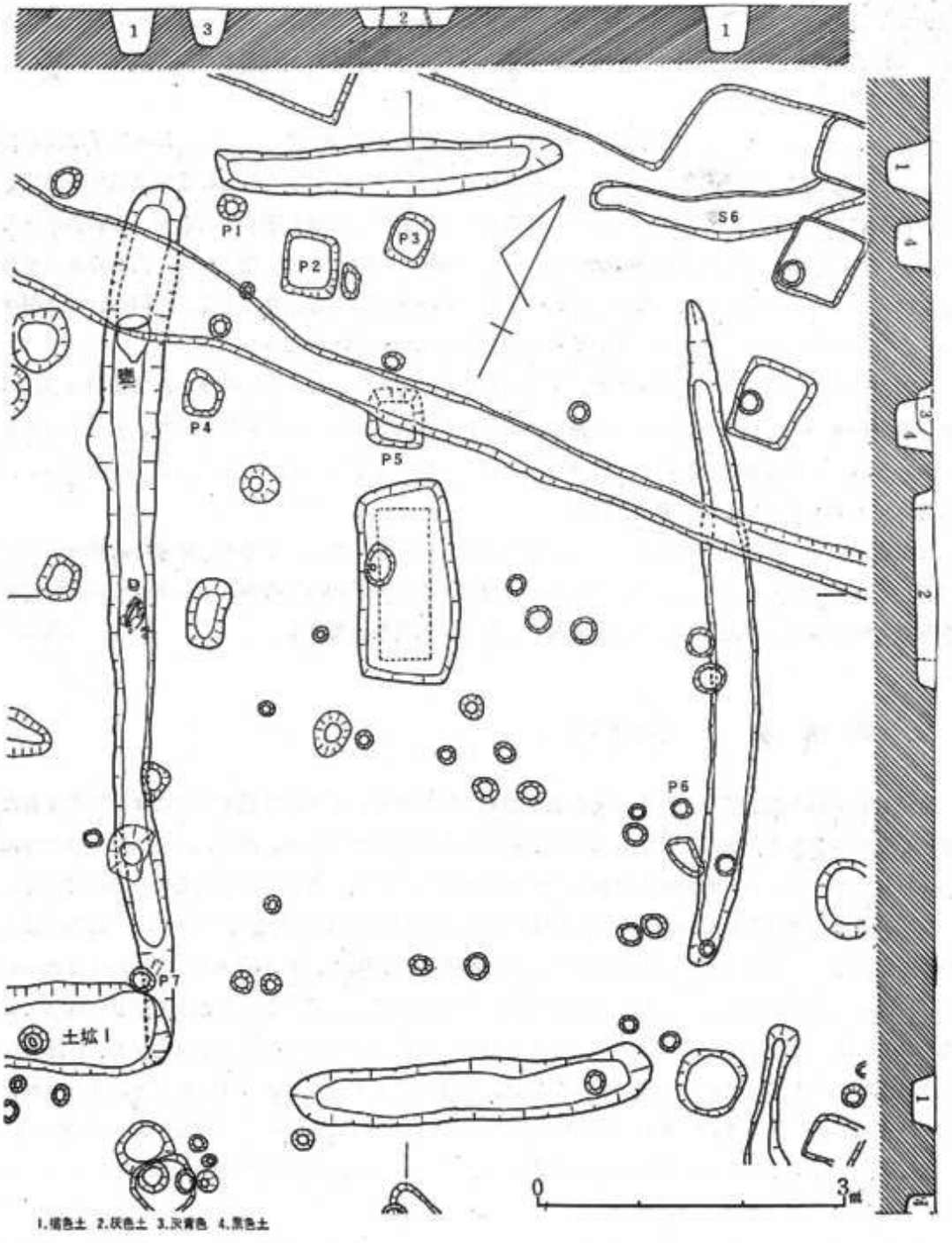
周溝墓ⅡはD30地区で検出され、周溝墓Ⅰの東に位置する。4本の断続する溝によって囲まれた長方形の周溝墓である。周溝は北辺および南辺が短かく直線的であるが、東辺、西辺は長くやや外にふくらむ傾向がある。いずれの溝も堆積土は一層の褐色土であり、黄色土の地山を切り込んでいる。

北辺の周溝は長さ3.4m、幅54cm、深さ42cmあり、溝の断面はU字状をなしている。溝内には土器等の遺物は認められなかった。西辺の周溝は長さ8.46m、幅61cm、深さ53cmある。溝底はほぼ平坦であり、南部は他の土坑によって切られているが、緩やかに立上っている。北部はやや強い傾斜で切り込まれている。周溝内より甕形土器が出土している。北部より検出されたものは完形で、口縁部がやや北に倒れた状態で、底部は溝底に接していた。底部は後述するが、径6.7cmの焼成後に穿孔されたⅣ様式の土器である。（第72図S_2）周溝中央部において、甕形土器が破枠した状況で出土している。

南辺の周溝は長さ3.46m、幅56cm、深さ26cmで、溝の両端は同様な傾斜で切り込まれている。出土遺物は検出されていない。

東辺の周溝は長さ4.6m、幅50cmでやや外湾する。深さは中央部で51cmあるが、北部は浅く端部は緩かに立上って消滅する。南端部はやや強い傾斜を示す。出土遺物は認められない。

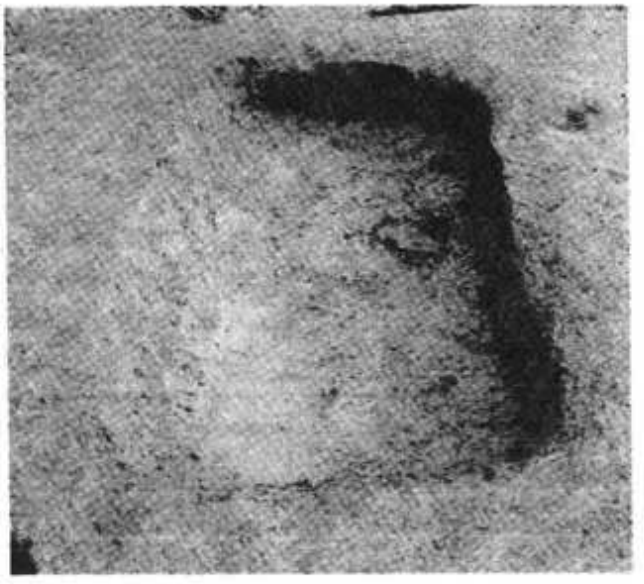
以上の4本の溝によって区画される規模は南北 9.6m、東西6.24mあり、南北に長く、その主軸はN26°Wである。



第28図　周溝墓 II

4本の溝に囲まれたほぼ中央部に長さ2m、幅99cmの長方形状の土坑が検出された。その主軸はN25°Wであり周溝主軸とほぼ一致する。深さは周溝墓Ⅰと同様に浅く23cm程度である。土坑底面はほぼ平坦である。

土坑内は詳細に検出しえなかったが幅底部で48cm、長さ1.48m程度の木棺の痕跡と思われる、約2cm程度の粘土層を認めた。側板と考えられる粘土層は内側に倒れた状況である。



第29図　周溝墓Ⅱ主体部

周溝に囲まれた台状部には、多数の柱穴およびピットが検出されている。灰青色土層を示すピットや泓状遺構については、全く周溝墓との関連はない。黒褐色土を示すP1～P6については、無関係とする根拠をもたないが、周溝墓に伴なうピットないしは土坑として扱うより、建物関係のものと考えられる。いずれも深さは30cm程度で、平面規模も60cmを越えるものはない。周溝の北辺と東辺の陸橋状の部分に、幅38cm、深さ20cmの溝がみられる。堆積土は周溝墓と同様の褐色土であり、建物址によって一部切断されているが、他の周墓墓の可能性がある。さらにD30地区に建物址Ⅰに切られた溝がみられるが、同様の堆積土である。（横木）

第30図　周溝墓Ⅱ棺材址

3. 周　溝　墓　Ⅲ　（図版6—上）

調査地区の最も南部で検出された周溝墓である。先述Ⅰ・Ⅱの周溝墓と同様に、黄色土地山層を掘り込んでいる。周溝は北辺のみ一本検出された。他の周溝については、おそらくは存在しなかったと考えられる。東部は浅く狭い後世の溝状遺構があるが、それによって周溝の存在が消失したとは考えられず、また南部は調査地区を拡張して検討したが、周溝墓Ⅱのような埋葬主体に対称的な位置に周溝があるとすれば、当初からなかったものと考えるのが妥当であろう。西側については5.1m×6.1m深さ50cm程度のやや深い後世の掘り方によって確認できない。

北辺で検出された周溝は、長さは両端でわずかに切断されているが、ほぼ8.2m程度と想定され、幅44cm、深さ12cmある。溝内堆積土は褐色土で一層である。

主体部は北辺の溝に平行して木棺墓と考えられる遺構を検出した。土坑は長さ1.86m、幅74cmあり、木口板および側板の位置をやや深く掘り、中央部をベッド状に造り出すように地山を掘り残している。木棺の規模は、東部で幅50cm、西部で46cmあり、わずかに東部が広い。棺長は1.6mで、深さは中央部で12cmある。土坑底には黄褐色土を敷き、棺と土坑の間に暗黄褐色粘質砂層土を置いている。東部木口板は、北側の部分で側板より若干はみ出した状況が認められた。棺主軸はN77°Eであるが、東側の棺幅が若干広いことから頭部の位置を想定できる可能性がある。

第31図　周溝墓Ⅲ　主体部

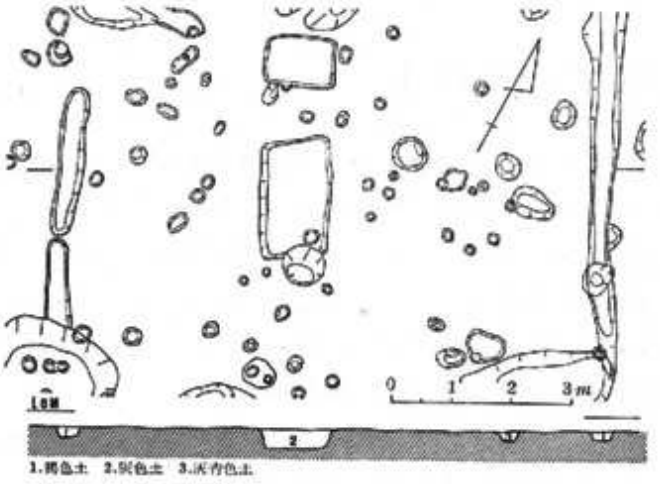
周辺のピットについては周溝墓と直接の関係はなく、いずれも後世の遺構と考えてよいものである。周溝墓の時期を確定する出土物はないが、おそらく他の周溝墓の時期と近い年代を想定できるであろう。

（櫃本）

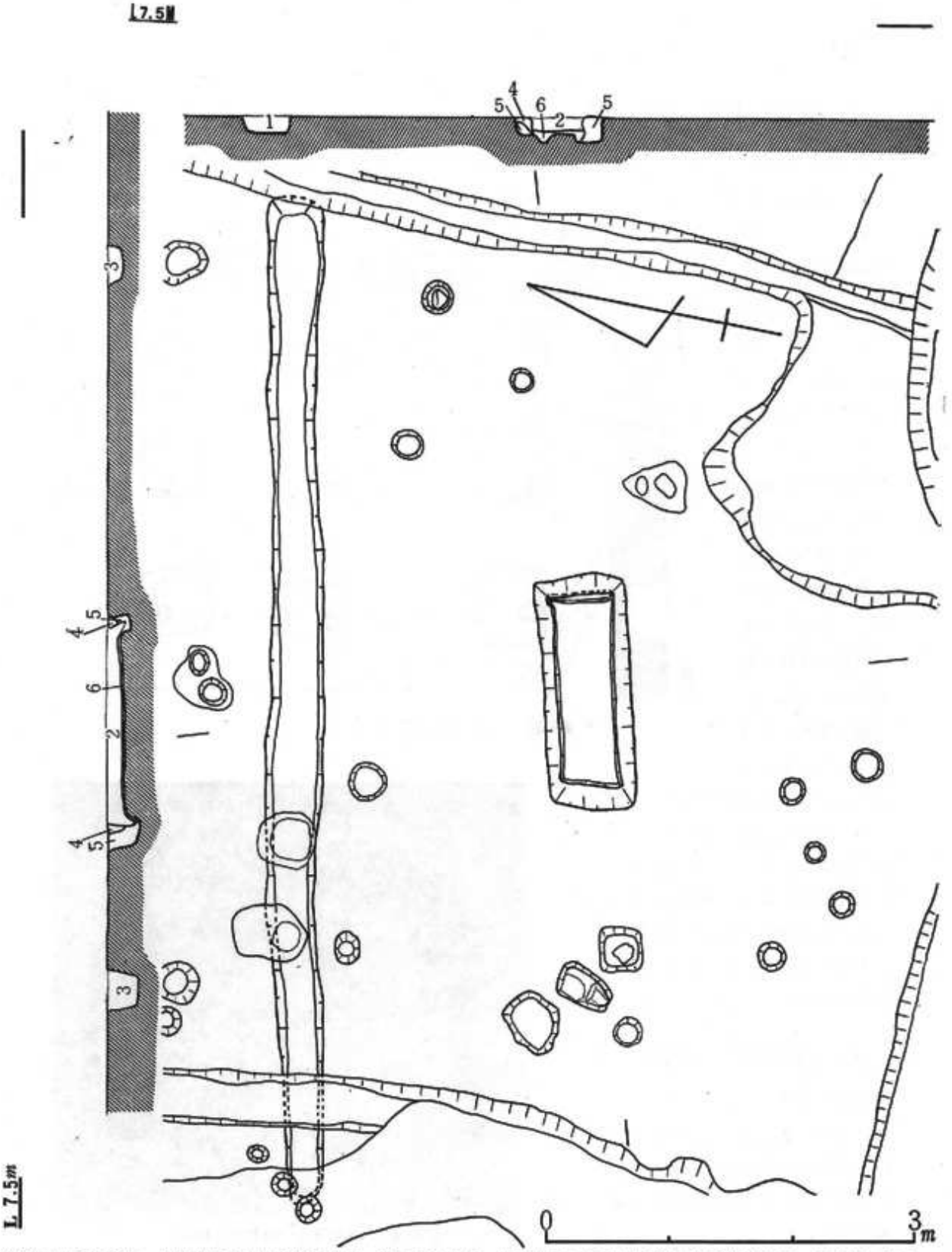
4. 周 溝 墓 Ⅳ（図版4—下）

円形周溝墓の南に接するような状況で検出された。周溝で確実なものとしては、E32地区に検出された西辺のもの一本である。長さ2.5m、幅40cm、深さ15cmで褐色土の堆積があった。周溝墓Ⅱの西辺の溝を共有するような事例があるが、本例については断定することはできない。周溝より北東へ3mの地点に、主体部と考えられる土坑が検出された。長さ1.94m、幅1.14mの長方形で、深さは27.5cmある。木棺の痕跡などは検出することができなかった。

（櫃本）



第32図　周 溝 墓 Ⅳ



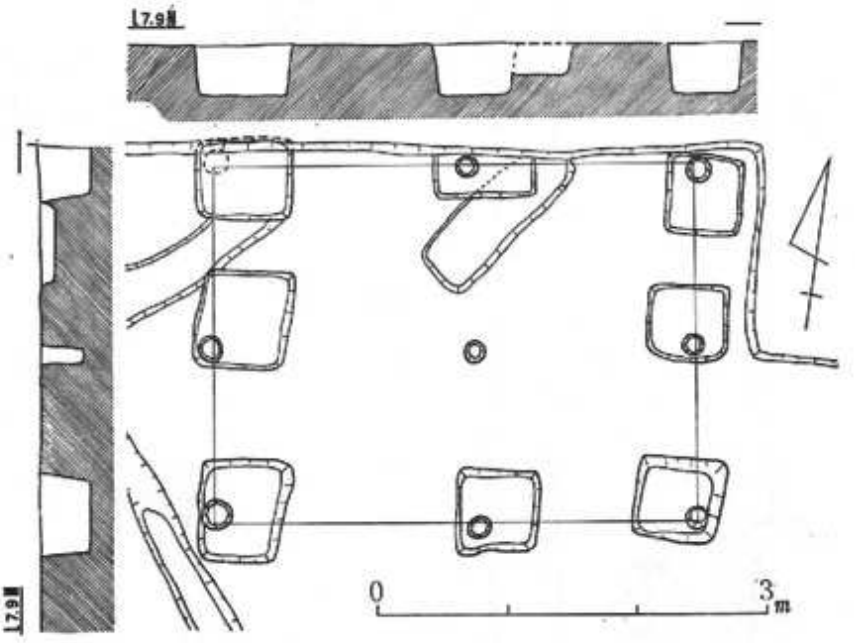
第33図　周溝墓Ⅲ　1.黒褐色土層　2.灰色土層　3.灰青色土層　4.灰黄褐色土層　5.暗黄灰褐色粘質砂層　6.黄褐色土層

2. 掘立柱建物址

1. 建物址Ⅰ（図版7—上）

C30地区で検出され、一部北側を拡張してその規模を確認した。建物は2間×2間の東西棟である。桁行約3.8m、梁行約2.8mある。各柱間寸法は桁行約1.9m、梁行約1.4mで若干不同である。

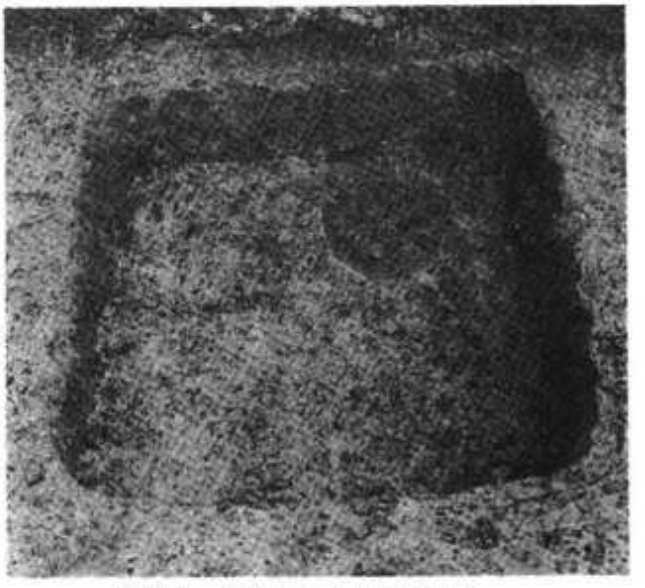
掘り方は一辺74cm～60cm程度の方形で、深さは約33cm、柱は径15cm程度である。掘り方は黄色土地山層を掘り込んでいる。中央の東柱は掘り方を見出し得なかった。掘り方内の土層は褐色土である。掘り方内および建物に伴なう遺物の出土はない。本地区における遺構はいずれも耕土直下の黄色土地山層から始まり、土層による時期決定は行なうことができない。しかし弥生期よりは新しく、耕土および溝状の堆積土から、相当数の糸切底須恵器の出土することより、平安時代と考えておきたい。



第34図　建物址Ⅰ

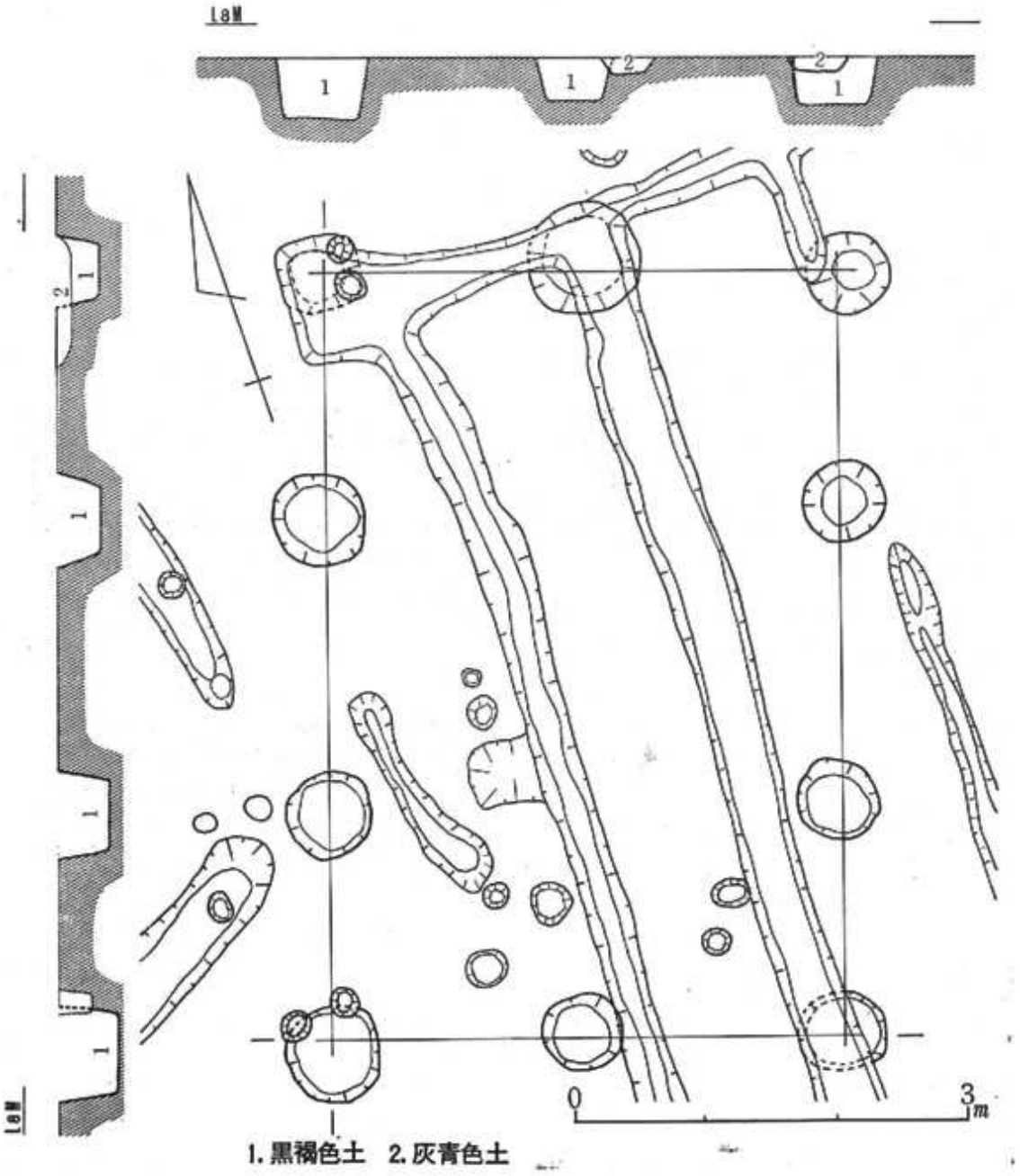
2. 建物址Ⅱ（図版7—下）

D29・30地区で検出された。建物は3間×2間の南北棟である。桁行約6m、梁行約4mある。各柱間寸法は桁行約2m、梁行約2mである。


第35図　建物址Ⅰ　掘り方と柱穴

柱穴は径72cmの円形で、若干不同がある。深さ30cm程度で、土層は黒褐色土である。本建物址も耕土直下より検出され、黄色土地山層を掘り込んでいる。建物主軸はN19°Eである。

建物の時期は、建物址Ⅰと同様に明確にしがたい。掘り方内には遺物は検出されず、灰青色土の落込をもつ、性格不明の溝状の遺構に切られており、それらの堆積土中より、糸切底をもつ須恵器が出土する点を勘案して、平安時代の建物と考えられる。（櫃本）



第36図　建物址Ⅱ

3. 中世土坑（図版6—下）

この中世墓のある地区は、周溝墓と同様の茶の木地区で検出された遺構である。

古墳時代の墓制を経て、大化改新によって薄葬令がひかれたのと同様に、仏教思想の普及による火葬の流行が、火葬墓の出現であった。

わが国における火葬の出現は、文武天皇（700年）3月、僧道照の火葬に始まることが「続日本紀」に記されている。

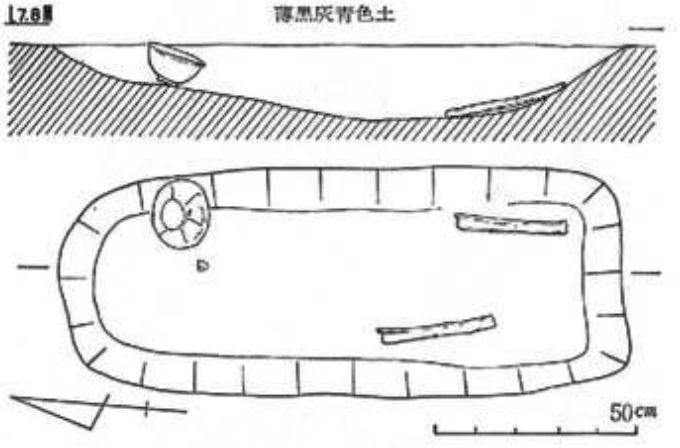
しかし、この文献に記されている以前に、すでに古墳時代に火葬墓というカマド塚が、取り入れられていたのである。

700年以降は、仏教思想の影響によって、火葬が全体的に普及したことが、今までの研究によって明白にされている。然るに、この川島遺跡の茶の木地区にある遺構は、平安末から鎌倉時代にかけてのものであるにもかかわらず、古墳時代に取り入れられていた土坑墓という形式のものである。

これは、古代末から中世における墓制として、今日まで他の地域で報告された事実がない特異な例である。

方位は、南北、長さ138cm、巾57cm、深さ18cmの規模である。それは、耕土直下の地山（黄色土）を、掘り込んでつくられているものである。

遺構の深さは、残存している限りでの最も深い所で、18cmをはかるにすぎない。この事を考えると多少削り取られている可能性もある。しかし、副葬品は、ほぼ遺構の底面に接して残っていることをみれば、元の姿は、大きく変化していないものと思われる。その遺構の底面に、人骨（大腿骨）2本が南の隅に残っている事実と、副葬品(青磁鉢)を考え合わせると、これは、明らかに頭を北にした土坑墓であると、断定できる。



第37図　中世土坑墓

（大村）

4. 溝状遺構

いずれも人工的な遺構として疑問がもたれるが、調査地区全域にわたって、南北および東西に走る、幅30cm、深さ20cm程度の溝状の遺構が検出された。本溝状遺構は浅く、水などの流れた形跡もなく、またしばしば途中で消滅するもので、鋤などの深く入ったために、偶然に残されたものと考えられる。堆積土からはかなりの量の、糸切底をもつ須恵器片などが出土している。堆積土は灰青色土で、一層のみである。

（横本）

第2節　南五反田A地区の遺構

1. 不明ピット状遺構（図版8—上）

D・E・F36～41の範囲内においてみられる柱穴状のものは、いずれも耕土・床土直下の上面で確認できたもので、いずれも暗褐色土を含んでいる。その状況をみてみると、東、西は分布状況がかなりまばらであるが、地点においてはそれが非常に密度を増し、群集しているといった表現であらわすことができる。これらのピット群はいずれも不定形のものばかりで、垂直に下がっているものはまずなく、いずれも不規則な方向にピットの先端は伸びている。

断面図でこれらの入り込み方を観察してみると、深さは10cm前後のものから20～30cmと不規則であり、形状においても同様なことがみられ、一定したピットというよりも凸凹のはげしいものであることが確認できた、しかもピットの先端は次第に細くなっていることが特徴である。

以上のことを考え合わせてみると、この地区に群集しているピット群は、いずれも木の根が消滅した後のものと判断すると、この附近は、ある時期に南北に伸びる林が存在していたことが考えられる。ピット中には遺物が明確に出土していないため、同ピット群の時期を判断することは不可能であるが、覆土の色調から、弥生時代～古墳時代にかけてあったものと判断することができるのであるが、そうなると、弥生時代には東に周溝墓群、西に集落とこの林の帯で分離帯を形成していたのではないかとの復元作業も可能であり、集落を構成する一つのパターンとして考えなければならないものであろう。

（阿久津）

2. 溝　（図版9～11）

1　溝

国道2号線から南下する県道大江島太子線下にあって、溝の全容を追求することは不可能であった。溝は北北西から南南東に向うもので、現状で幅4.5m程度ある。溝の西部のみ検出され、東部は県道下になって確認することができない。深さはほぼ70cmあり、肩部から緩やかな傾斜を示して溝底にいたる。溝内の堆積土は、最下層が黒色粘質土で、上部は黒褐色土である。遺物はほとんど含まれていない。わずかに、豆粒大の土師質の土器片が認められた。時期については決定できない。

4　溝

C・D44地区東部で検出した小溝である。ほぼ南北方向に走っている。幅70cm、深さ22cmで、調査区域南端部では、溝幅が広がり「たまり」のような状況である。溝の堆積土は灰青色土である。本溝出土遺物は須恵器の細片のみで、明確ではないが、その須恵器および堆積土からみて、平安時代以後のものであろう。

5　溝

ほぼ南北に向う溝で、北部は6溝によって切断されている。遺物は検出されていないが、時期は後述の6溝が弥生後期のものであることから、それ以前のものと考えられる。溝内の堆積土は灰褐色土色土である。溝幅54㎝、深さ30㎝の規模である。

6　溝

北東から南西に抜ける弥生後期の溝である。北東部幅1.4ｍで、深さ35㎝ある。南西部は一部を11溝によって切られているが、幅2.7ｍ、深さ52㎝で若干広がる。D44付近は7溝によって上部は削られているが、溝底部は残存している。堆積土は灰黒色粘質土である。

7　溝

南北に向う幅4.2ｍ、深さ45㎝の浅い溝である。溝内堆積土は黒色土で多量の土器を検出した。土器は特にE44地区に集中的にみとめられた。時期は古墳時代後期頃のものである。溝底中央部にはいかなる機能を果すものであるか不明であるが、90㎝×35㎝～33㎝×28㎝程度の楕円形状のピットが列状をなして検出された。ピット内には灰青色土が堆積していた。柱穴として確認できるような状態ではなかった。それはD45地区両肩部のピットなどとは相違するものである。

7溝は6溝および9溝を切っていることが確められている。

8　溝

C45地区で検出された小溝状のもので、幅90㎝、深さ55㎝ある。堆積土は灰黄色土である。方向は北西から南東に向う状況であるが、D45付近で9溝に切られているため、検出されたのはわずかである。しかし溝としての機能をもつものであれば、D44地区で再び検出されると考えられるが、精査の結果、確認することができなかった。したがって溝遺構としては疑問がもたれる。

9　溝

北々東から南々西に向う。幅4.2ｍ、深さ72㎝の古墳時代の溝である。溝内堆積土は黒灰色粘質土で、10溝および11溝を切断している。出土遺物は小形丸底壺などが出土している。

11　溝

北西から南東に向かって流れもので、幅2.4ｍ、深さ52㎝ある。堆積土は灰黄色土である。出土遺物は検出されていないが、その流れの方向によって、7本の溝と切り合っている。9・10溝および、12・13・14・15溝に切られ、9溝を切断している。

12　溝

北東から南西に向う幅72㎝、深さ10㎝の小溝である。溝内堆積土は黄灰色土である。出土遺物は須恵器の細片が出土している。時期は平安時代である。

13　溝

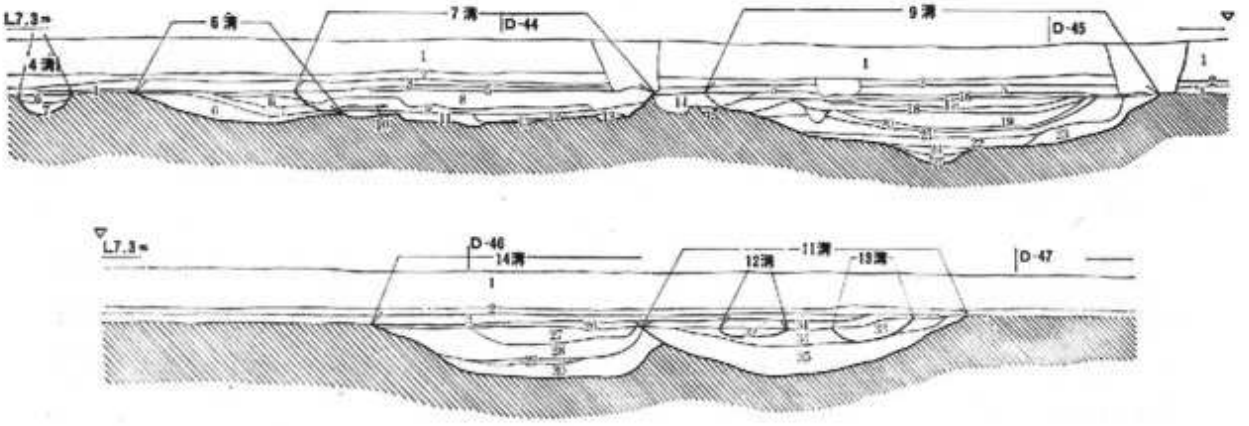
12溝と重複するような状況である。調査区域北部と南端部で確認され、D・Eラインでは東側肩部を12溝によって切られている。幅1.1m、深さ40㎝程度で溝内堆積土は黒色粘質土である。出土遺物は須恵器片である。時期は12溝よりも古く位置づけられることは明確であるが、それほど隔たる時期ではない。

14　溝

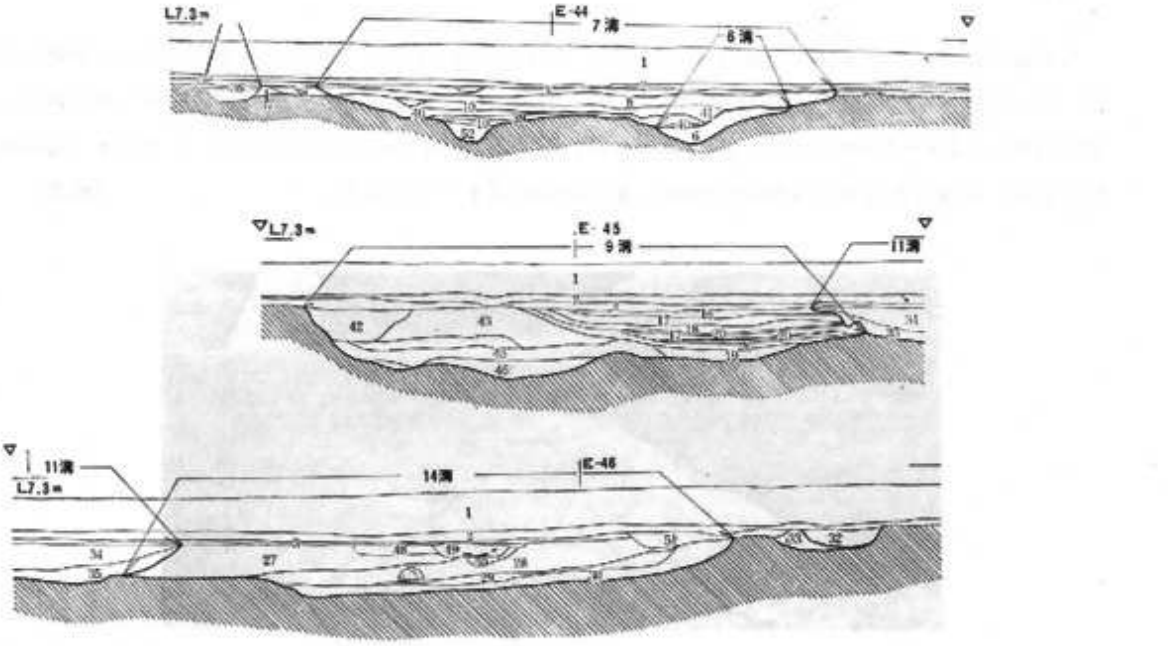
北東から南西に抜ける溝で、溝堆積土の最上部で、30㎝内外のピットが、ほぼ等間隔に、16mにわたって一直線上に検出され、須恵器片および滑石製勾玉などが検出されている。溝は最大幅5mで南北両端部は3.2m～3.4mである。深さ60㎝ある。堆積土は最下層に黒色土があり、須恵器・土師器が出土する。存続した時期は5世紀中頃から8世紀初頃頃まででであろう。　（櫃本）

第38図　7 溝 断 面

D列北面壁断面



E列北面壁断面



1.耕土、2.床土、3.灰色土層、4.黄褐色土層、5.黄灰色粘質土、6.灰黒色粘質土、淡黒色粘質土層、7.黒色粘質土層8.薄黒灰色粘質土土層、9.灰黄色砂質土層、10.褐色砂層、11.淡黒色砂層、12.薄黒色土層、13.褐色砂質土14.灰色土層、15.灰白色土層、16.薄灰黄色粘質土層(1)、17.薄灰黄色粘質土層(2)、18.灰黄色粘質土層、19.黒灰色粘質土層、20.黒色粘質土層、21.黒灰色砂質土層、22.茶褐色砂層、23.暗黒灰色粘質土層、24.灰褐色砂層、25.茶褐混灰黒色土層、26.薄黄褐色粘質層、27.薄黒色粘質土層、28.灰黒色粘質土層、29.薄黒色土層、30.薄黒灰色土層、31.淡灰褐色粘質土層、32.黄青灰色土層、33.黒色粘質土層、34.灰黄褐色粘質土層、35.淡黄褐色粘質土層、36.暗褐色土層、37.灰黒色土層、37.褐色混灰色土層、38.灰褐色土層、39.灰色砂層、40.灰褐色砂層、41.灰色砂質土層、42.灰黒色混青灰色土層、43.褐色混り黄色粘質土層、44.黄灰色粘質土層、45.灰青色砂層、46.灰色粘質土層、48.薄黒灰色土層、49.灰褐色土層、50.灰黒色土層、51.黄灰色土層、52.黒褐色砂質土層。

第39図　南五反田A地区溝断面

第3節　南五反田B地区の遺構

1. 土　坑　(図版13)

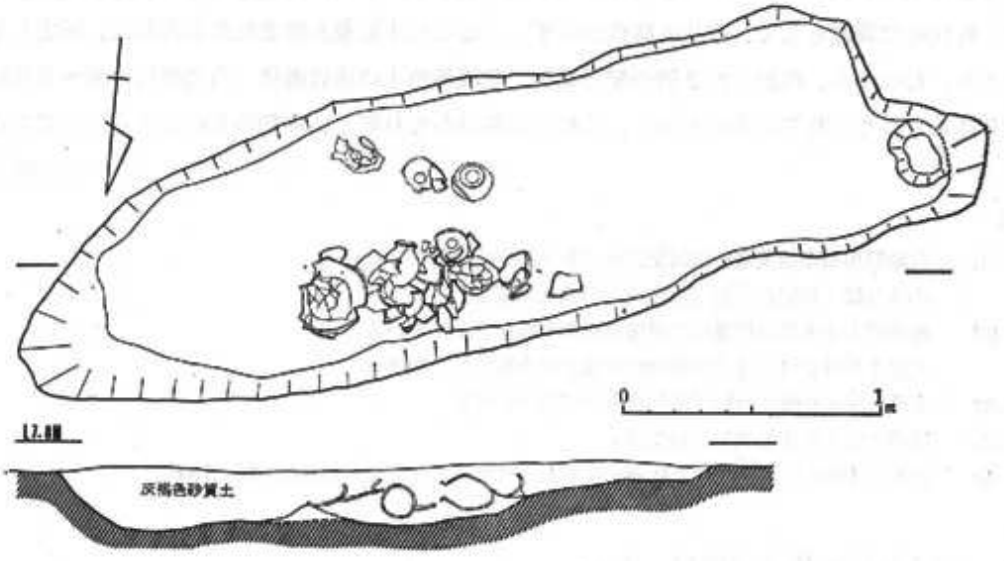
土　坑　5

この地区からは、9つの土坑を検出確認した。その中で、特に注意をひく土坑は、D51グリッド北端から検出した土坑5である。土坑5は、ほぼ東西の方向に掘られており、長さ3.85m、幅約1.05m、深さ20～25cmの規模をもち、東側から西側にかけて徐々に浅くなっている。舟底形を呈している。土坑内には灰褐色砂質土がつまっており、8個体分の弥生式土器が出土した。

それらの弥生式土器は、土坑内中央部より東寄りのところに二列に並んで埋置されていた。土坑内北側列には、5個体分の土器が集中しており、3個体は倒れた状態で、1個体は上半分が横にころげおちていたが立てられたままの状態であり、のこる1個体はこの土坑中最大の壺であるが、こなごなに壊されており、その大きな破片の上に壺が1つ寝かされたように重ねられていた。南側列では、土器は土坑に平行に並べられていないが、3個体の土器が整然と並べられていた。しかしそのうち1つは倒れた状態で埋置されている。

次に、この土坑の性格が問題になる。

まず第1に気付くことは、土器がその土坑内に捨てられた状態ではなく、何らかの意味をもって2列にていねいに置かれた状態であるという点である。たとえば、3個体の土器は立てられたままの状態を保っており、さらに大きな壺の破片と小さな壺とが重ねられて置かれているということ、また大



第40図　土　坑　5

部分の土器は、ひびこそ入っていたが完全な形を保っていたということは、人為的に埋置されたという以外に考えられない。

第2点目には、この土坑の壁面から肩にかけて、著しい崩壊を認めることができなかったという点である。

第1点目と第2点目とから考えられることは、この土坑が掘られて長い年月放置されることなく、その土坑の意図を達するや否や、直ぐに埋められたものであろう。

第3点目には、埋置されていた土器がすべて壺形土器であるということである。壺形土器は、一般に貯蔵用具として考えられている。煮沸用として考えられている甕形土器の共存が認められないことは、この土坑が生活の場と直接関係のなかったことを示していることと思う。

以上の3点からこの土坑の性格を判断すると、最近全国的に各地で発見例を増しつつある、弥生式時代の土坑墓の一形態とみることができよう。[5] 残念なことに、今回の調査では、同地区内から、同時代の土坑墓を他に確認することができなかった。弥生式時代の墓制は、集団墓の形態をとり、墓域と集落域との区別の画然化が云々されているが、本調査からは証明できなかった。

その他の土坑

他の8つの土坑について簡単に考察してみよう。それらの土坑は長方形を呈するもの、長円形的なもの、不定形なものといろいろである。その中には、長方形土坑の中央部に9個の石がかたまって配置されているものや、長方形の4角にきちんと1個ずつ配石し、その南側中央にはひときわ大きな石が枕石のように置かれているものもある。しかしながらそれらのすべての土坑中からは、埋置された遺物は認められなかった。

けれども土坑からは、遺物の出土がない場合も多いことと、前記した2例は、配石墓としての形態をとると考えられることから、それらの土坑のうちのいくつかを、土坑墓と把えて誤まりなかろう。

ただ時代的な問題として、弥生式時代からずっとここに土坑墓が営まれたか否かは、断定しかねるのである。なぜなら、前記した2例の配石墓が、暗灰褐色土の溝状遺構（古墳時代後期～奈良時代）を切り込んでつくられていることから、これらの墓はかなり新しい時期のものであるからである。

（浅岡俊夫）

註

(1) 兵庫県川西市加茂遺跡に同型式の壺形土器が出土している。
小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成本編2』

(2) 滋賀県大津市南滋賀遺跡に同様の壺形土器が出土している。
大津市教育委員会『大津市南滋賀遺跡調査概報』 1958年

(3) 小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成本編2』

(4) 関西大学『摂津加茂』昭和42年

(5) 藤田等「弥生時代の生活と社会―埋葬」『日本の考古学3』和島誠一編 1966年

2. 掘立柱穴遺構（図版14―上）

C51、D51付近において確認されたピットは、いずれも掘り方の埋土は、灰褐色土を呈しているのに対し、柱穴と思われる覆土は褐色土を呈しており、それはかなり明確に判別することができること

から、まず柱穴址と考えて間違いないと思う。

柱穴群は調査範囲内で32個で、掘り方が方形状のものと円形状のものに分けることができる。この状況からみて、組合せをしてゆくために、まず方形状のもので掘り方の一辺が1mのもの3個(A型)、一辺70cmのものが14個（B型）、円形状のもので直径70cmのものが3個（C型）、直径30cmのものが21個（D型）に分類し、各々で考えてゆくと、A型においては位置からみても2個が連結しそうであるが、もう一個の方向が少し異なっているためこの組み合わせは不可能である。B型においてみてみると、2個ずつの組み合わせが2組みられ、それを基準に他との組み合せをみるが、建物として、組むことができない、C型をみてみると、A型と同様な性格を呈している。D型をみてみると、不規則な位置でしか確認できない。以上各型式別での組み合わせは不可能であることがわかるが、各型式を意識せずに組み合わせをみてみると、A型1個と、B型6個、C型1個を組んで8角形状のものがみられるが、各柱穴間の長さが不規則で、多角堂のようなものにはなり得ないことがわかる。

各組み合わせをみて、不可能であることがわかっただけであるが、調査の範囲は路線内に限られていたため、未確認のピットを調査地外に求めれば、あるいは組み合わさる可能性はでてくると思う。しかし時期については奈良時代以降のものとだけしかわからないため、各型式別の時期の差等について、もう一つ不明な点があり、いずれ掘る機会があった時に再検討する必要があるであろう。（阿久津）

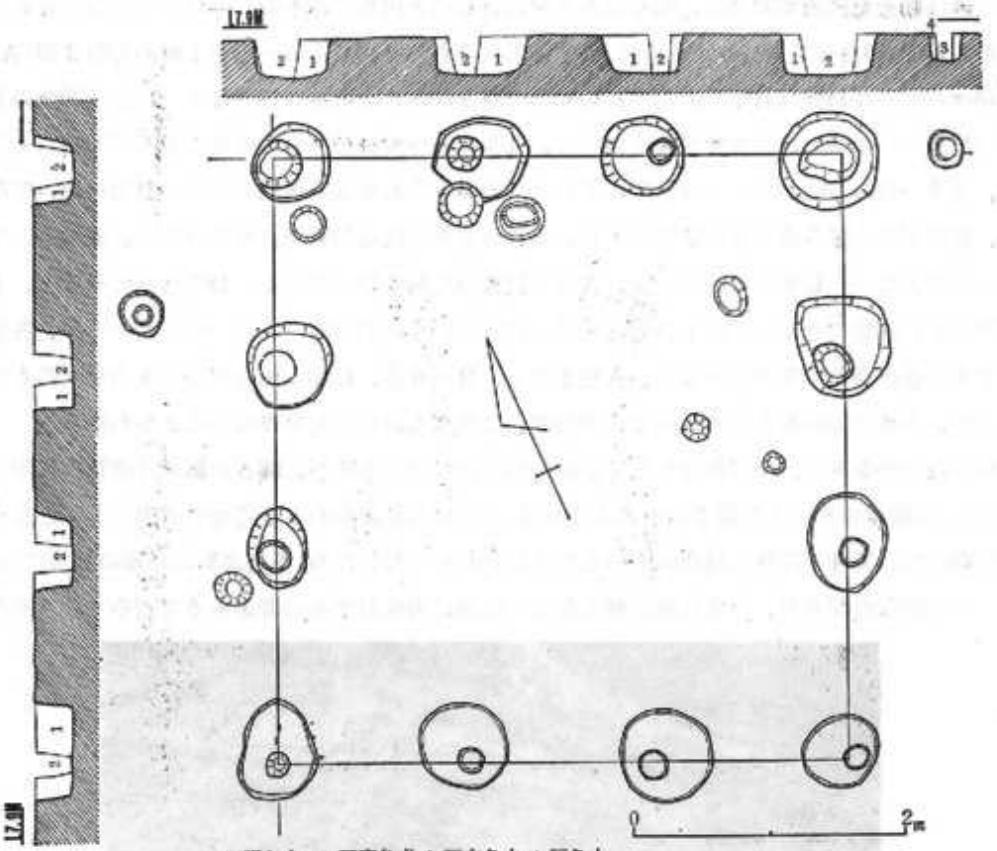
第41図　掘立柱穴群

建物址 Ⅳ（図版14—下）

E57地区で検出された。建物は3間×3間で、建物主軸はN18°Wである。桁行約4.5m、梁行約4.2m、ある。各柱間寸法は桁行約1.5m、梁行約1.2mで若干不同である。

掘り方は径約70cmの円形で、深さ約30cm程度である。掘り方は黄色土地山層を掘込んでいる。掘り方内土層は黒褐色土である。柱は灰青色土に置換してその径を確められた。径約20cm程度である。本建物とどのような関連があるか不明であるが、周辺に、灰色土の堆積土をもつ、径約29cm程度の掘り

方がみられる。建物の時期については、遺物等の出土がなかったため不明である。　　（櫃本）



1.黒褐色土　2.灰青色土　3.灰白色土　4.灰色土

第42図　建 物 址 Ⅳ

3. 溝 遺 構

15　溝

南五反田B地の最西端で検出された、黄色土地山層を掘り込んでいる溝である。15溝はほぼ南北に通り、幅1m、深さ60cmのU字形の溝である。堆積土は炭層を中間にして、上下層に別れるが、いづれも黒褐色土である。遺物の出土は調査範囲内ではない。15溝の上に柱穴が掘りこまれており、この柱穴群よりは古い時期にあたる。　　（山本）

16　溝

15溝と平行にほぼ南北に通る溝であり、幅2.5m、深さ1mのU字形の溝である。堆積土は黒褐色土が主で、溝底は小礫で形成されている。17溝の周は黄色土地山層である。遺物は川島弥生中期3（畿内3様式（古）併行）、弥生後期（畿内第5様式）、土師器等が出土している。　　（山本）

17　溝

南五反田B地区のはぼ中央に、床土を取り除くと、無遺物層の黄色土を切り込んでいる17溝を確認した。

17溝はC・Dラインでは西北西—東南東の走行をとり、Eライン近くにて、丁度調査範囲では中央部にあたるところで大きく弯曲して、それより南側はほぼ北西—南東の走行をとっている。溝幅は中央部で4.6mで、北側は4m前後、南にゆくにしたがって広がる傾向をもち、5m前後になる。深さは1m前後である。溝内堆積土は上層の灰色土、下層の褐色土とに大別することができる。上層からは森浩一氏編年のⅢ型式後半の須恵器が出土している。下層からは須恵器・土師器が出土し、須恵器はⅠ型式後半のものである。土師器はⅠ型式後半と、併行する土師器とそれ以前の古式土師器に属すると考えられるものがある。

17溝は古式土師器に使用が初まり、須恵器Ⅲ型式後半に放棄された溝である。　(山本)

第43図　16　溝

18　溝

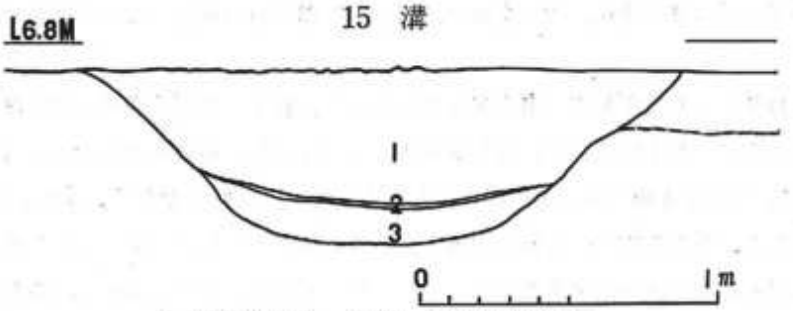
北東から南西に走行をとり、幅1.7m～3.5m、深さ20cmの非常に浅い溝である。溝内堆積土は灰色土であり、溝底には小礫から人頭大におよぶ石が散在する。西側の肩は18溝あたりから西にかけて地山の面が下がる低地があり、その部分に堆積した黒褐色土を肩にしている。遺物は須恵器、布目瓦が溝底から出土した。須恵器は森浩一氏編年のⅣ型式のものであり、18溝もこの時期のものである。

(山本)

19　溝

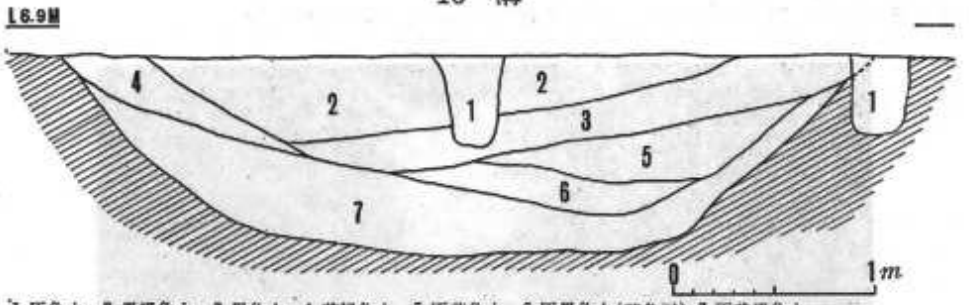
18溝とほぼ平行の走行をとり、幅2m、深さ40cmの浅い溝である、溝内堆積土は灰色土で、溝底は小礫である。遺物は須恵器のみで、その型式は森氏の須恵器編年のⅣ型式にあたり、18溝と同時期に位置する。　(山本)

15 溝



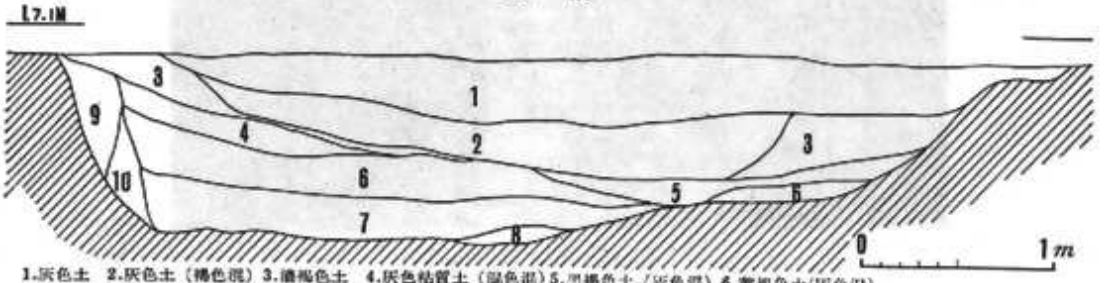
1.黒褐色土Ⅰ　2.炭　3.黒褐色土Ⅱ

16 溝



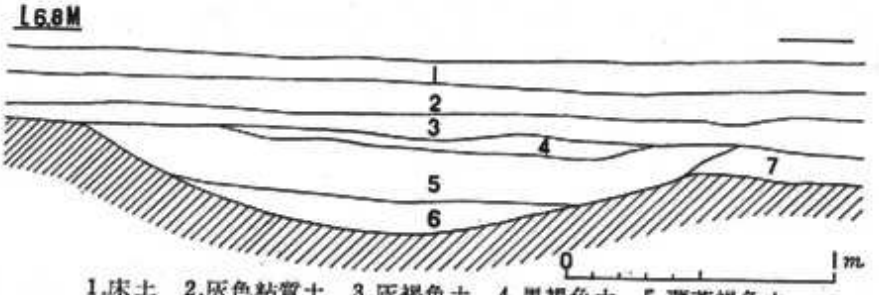
1.灰色土　2.黒褐色土　3.黒色土　4.黄褐色土　5.灰黄色土　6.灰黒色土(黄色混)　7.灰黄褐色土

17 溝



1.灰色土　2.灰色土（褐色混）3.濃褐色土　4.灰色粘質土（褐色混）5.黒褐色土（灰色混）6.黄褐色土(灰色混)
7.灰色砂質土　8.褐色砂質土　9.黄褐色土　10. 灰色土（褐色混）

18 溝



1.床土　2.灰色粘質土　3.灰褐色土　4.黒褐色土　5.薄茶褐色土
6.薄茶褐色砂質土　7.黒色土

第44図　南五反田B地区溝断面

第4節　落久保A地区の遺構

1. 土　　坑

土 坑 9 （図版21）

無遺物層である黄褐色土層を掘り込んでいる長径130㎝、短径75㎝、深さ20㎝前後の楕円形を呈している焼土坑である。坑全体は明確な段落はなく、なだらかに坑底まで掘りくぼめられている。

土坑内の堆積土は、焼土、炭をブロック状に多量に含む黒褐色土である。断面をみると土坑内堆積土の黒褐色土上面から白黄色粘土が、土坑の掘り方と平行に、南肩から土坑中央まで厚さ2㎝前後で入っている。しかし白黄色粘土は、坑全体に見られることなく、西側の一部にしか見られなかった。黒褐色土の下に、肩部から坑底まで、すなわち土坑の掘り方に接して1㎝前後の炭層があり、坑底中央には、炭層が黒褐色土をはさんで二重に堆積していた。土坑の南側肩付近で、炭層に接して獣骨が検出された。

焼土坑の時期は、小溝Dによって切られており、小溝Dよりも先に掘られている。小溝Dが、凹線文を多様に用いている時期、すなわち弥生時代中期後半であるから、これと同時期か、新しいことになるが、焼土坑より出土した土器は、時期が完全に把握できる土器はないが、土器底部から、小溝Dとほぼ同時期で、土坑10、土坑14とほぼ同時期の弥生時代中期後半の所産と考えてよいであろう。

焼土坑の炭層が、坑肩から坑底まで接していることから、この土坑の中で火をたいたことは明らかであること、また獣骨が炭層に接して検出していること等から考え合せると、焼土坑の性格は、一つの可能性として、動植物の調理のための火焚場を推測できる。他に住居址の炉址とも考えて、周囲を精査したが、住居址はなかったし、土坑の上記のような状態からは、土器焼き場とも考えられない。

（山本）

土 坑 10 （図版20）

土坑10は、床土を取り除くと、おびただしい親指大の焼土塊と土器破片を含有する黒褐色土が、土坑全体におおいかぶさっている状態で検出された。

黒褐色土層が焼土塊と土器破片を包含している状態は、焼土塊と土器片が相重なる中で、黒褐色土が含まれていると現わした方が適切な状態である。

土坑10は、67ラインをはさんで、C68グリットとC67グリットにまたがって検出された。周囲には土坑11、土坑12、土坑14、土坑9、土坑20等があり、土坑10を含めて一つの土坑群が形成されている。

土坑の肩は、無遺物層の黄褐色土である。

土坑の平面形態は、不整形な長楕円形を呈し、断面は上径が下径よりも大きくスリバチ状を呈し、坑底は舟底形に構築されている。その規模は、上径181㎝×98㎝、底径84㎝×78㎝で、深さ68㎝である。

土坑内は4層に別れる。第2層は、多量の土器と炭、灰、焼土塊を含む黒褐色土であり、第3層

は、灰、炭、焼土塊を含む灰黒色土である。その状態は、灰黒色土と灰、炭、焼土塊とが同じ割り合いで含まれており、層全体がまだらになっている。

第4層は、焼土塊、灰、炭、土器片をいっさい含まない灰黒色である。第5層も第4層と同じく焼土塊、炭、灰、土器片を含まない灰黄色土である。

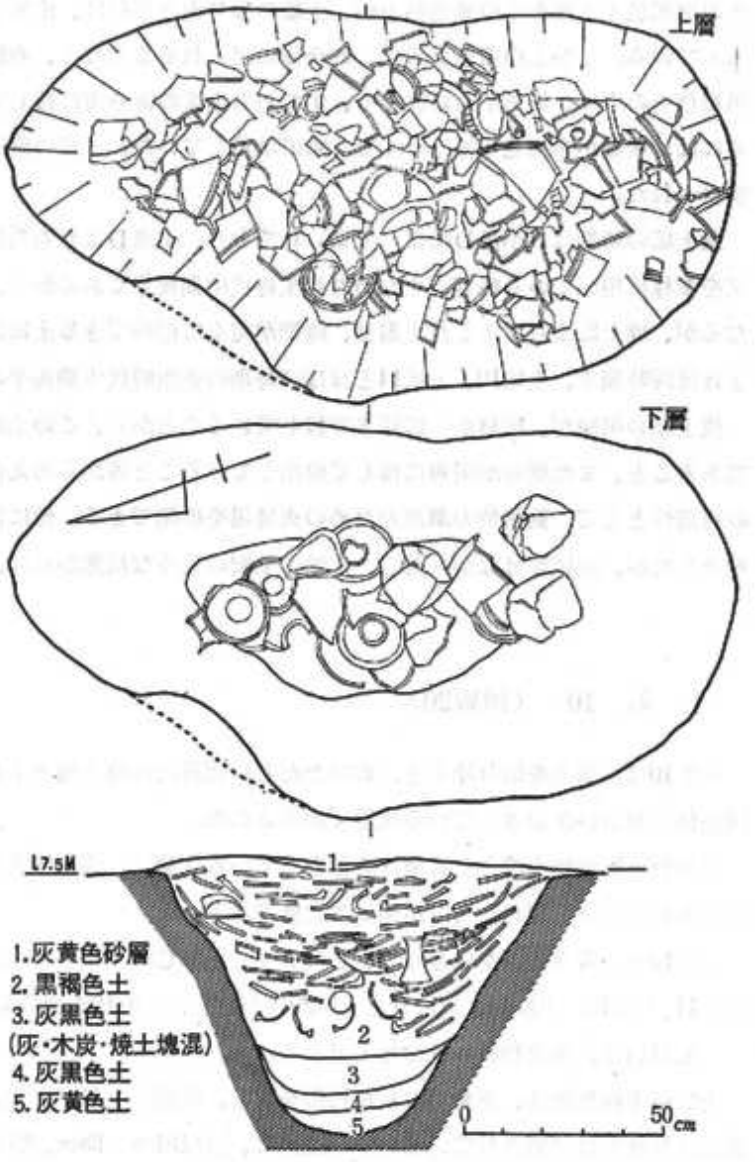
土器は、4・5層では、まったく検出できず、第3層に実測不可能な小破片が、第2層からの浸み込みと考えられる状態で出土しただけで、すべての土器は第2層からである。

第2層の土器の堆積状況は、人頭大の石を境にして、上部と下部に若干の相違がみとめられる。上部は比較的小破片が多く、土器と土器が接して、非常に複雑な状態で充満している。下部は、人頭大の石の下に、胴、底部を欠いた壺形土器が、直立しているものあり、180°転回しているものありという、比較的整然とした状態で検出されているが、その間には高杯形土器脚部が、横倒しになっていたり、甕形土器破片が内面を上に向けていたりしており、そこに人為的に置かれたという状態ではないと考えられる。

その他の遺物としては、獣骨が第2層から検出された。

出土土器は、完形に復元出来るものはない。また出土土器は、一時期の一括資料として扱うことのできるもので、土器の時期は弥生時代中期後半と考える。

口縁部による土器の器種の割り合いは、壺形土器60%、甕形土器33%、高杯形土器3%、鉢形土器4%である。



第45図　土 坑 10

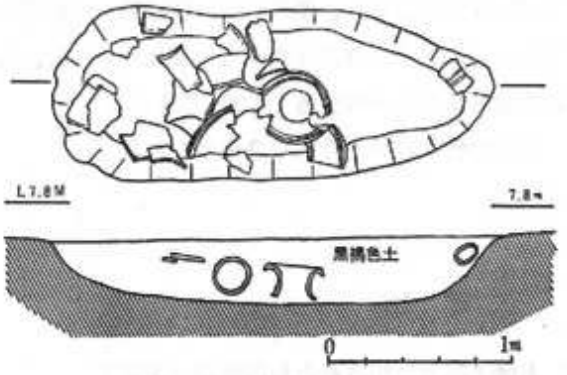
土坑10の性格を考えてみると、①2層目が、土坑全体におおいかぶさっていること、このことは自然の堆積状況では、このようになることはなく、人為的な様相を呈している。②第2層と第3層の境がほぼ水平であるのに比べて、第4・5層は、坑壁の部分が高く、中央部が低く、人為的な埋め戻しの後は考えられない自然な堆積状況である。③第2層と第3層は、焼土塊、灰等が充満しているのに比して、第4・5層は、それらを一際含まない。

以上の堆積状況を考え合せると、この土坑は、本来の機能を第4、5層が堆積した時点で放棄して、それ以後は、塵芥捨て場として利用されたものと考える。

坑底には、焼土、炭、土器はみられず、第4・5層に一際の遺物を含まないし、土坑本来の機能を考える資料は、この調査では検出できなかった。 (山本)

土 坑 11

長径1.2m、短径45cmの長楕円形の土坑である。土坑11の肩は黄褐色土の地山を掘りこんでいる。坑内堆積土は、石を若干含む黒褐色土である。土坑内からは多量の土器の破片が出土した。土器は完形に復元できるものはない。土器以外の遺物の出土はみなかった。土坑の時期は弥生時代中期後半である。 (山本)



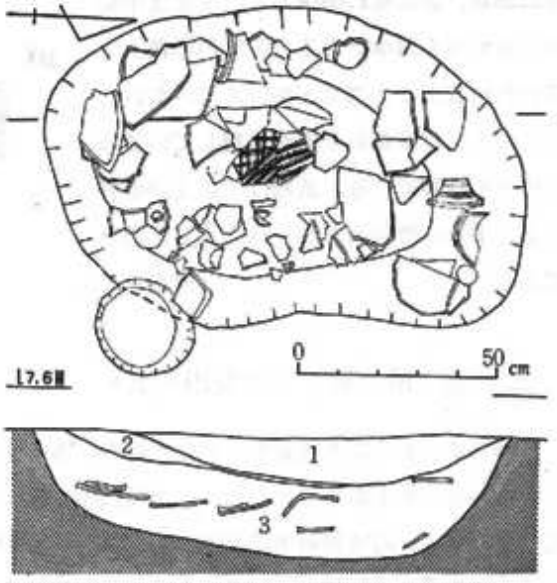
第46図 土 坑 11

土 坑 12 (図版19—下)

土坑10の南側1.1mに隣接して作られている土坑で、土坑の肩は無遺物層の黄褐色土である。土坑の形態は、長径1.3m、短径85cmの楕円形で、深さは30cmである。

土坑内堆積土は、炭、焼土を混入する黒色土であり、この堆積土内に多量の土器片が含まれていた。土坑上面から、赤褐色を呈する砂層が、黒色土内に、帯状に入っている。

出土遺物は、壺形土器、長頸壺形土器、台付鉢形土器、高杯形土器、甕形土器がみられた。土器はすべて破片で完形品はなく、完形に復元できるものもない。



1. 黒色土層Ⅰ(木炭・焼土塊混)　2. 赤褐色砂層
3. 黒色土層Ⅱ(木炭・焼土塊混)

第47図 土 坑 12

土坑の時期は弥生時代中期後半である。　　(山本)

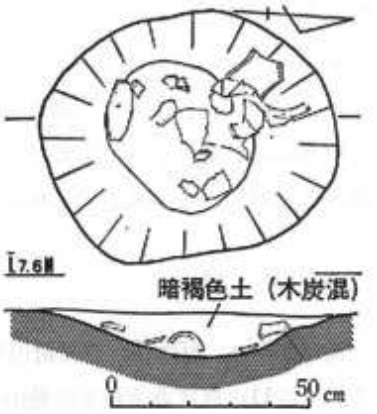
土　坑　14

土坑14は、土坑10より80cm西のC66グリット内の地点に検出された。土坑14は、土坑10、土坑12等と同じく、無遺物層の黄褐色土から掘りこまれている。

土坑14は、浅い皿状に掘り込まれ、その平面は長径75cm、短径60cmの楕円形を呈しており、深さ11cmである。土坑上面からは土器の細片が多く出土し、坑底に接して完形に近い高杯形土器と、甕形土器の口縁部、底部等が出土している。坑底面中央よりやや北よりの地点に炭、灰を含む暗褐色を呈する砂層が薄く堆積していた。

土坑の時期は弥生時代中期後半である。

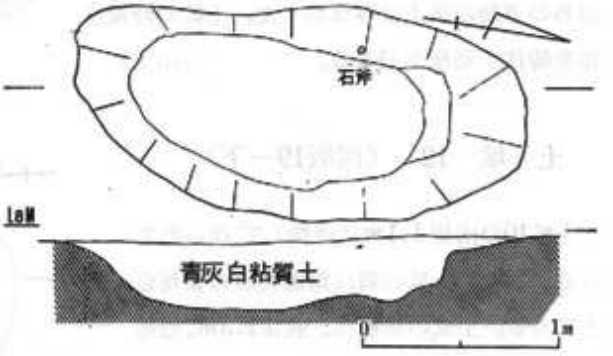
(山本)



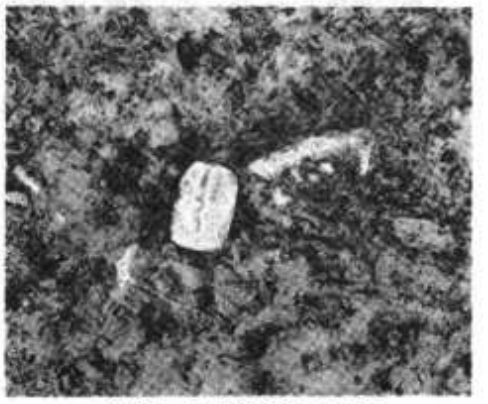
第48図　土　坑　14

土　坑　18

E66地区で検出された長円形状の土坑である。黄色土地山層を切り込んでいる。長さ2.28m、最大幅1.08cmある。土坑は中央部が最も深く34cmである。土坑内堆積土は青灰色粘質土で土器などを含んでいない。周辺の土坑が多量の土器が堆積しているのに比べて特異である。遺物は土坑北西の肩部から小形の磨製石斧が一点出土したのみである。　　(槇本)



第49図　土　坑　18



第50図　土坑18石斧出土状況

2. 壺　棺　墓　(図版19—上)

C66グリット内の北西隅から検出された。壺形土器をもちい高杯形土器を蓋にした、弥生時代中期後半の壺棺墓である。同時期の周溝墓群からは、西へ約210mの地点にあり、土坑10からは6m北西の地点にある。

墓坑は黄褐色土層(無遺物層)を切り込んでおり、その平面形態は、長径36cm、短径32cmの正円に近い楕円

形を呈し、長軸は東西に向いている。墓坑内の堆積土は黒褐色土である。

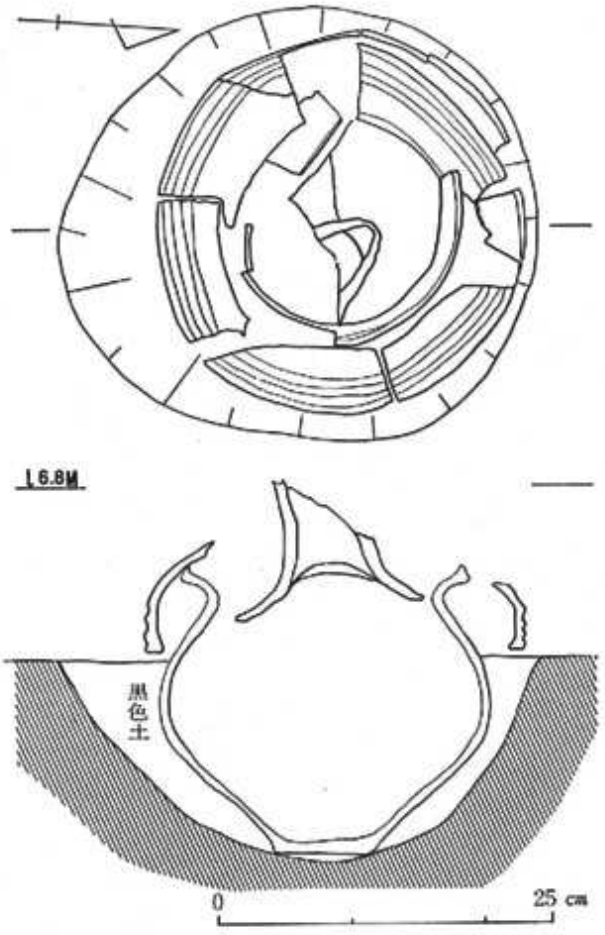
墓坑内には、底部を下にして、ほぼ垂直な状態で壺形土器が埋置され、その上に脚台部を欠いた高杯形土器で壺形土器の口縁部をおおっており、覆いあるいは呑口と呼ばれる蓋のかぶせかたである。

高杯形土器と壺形土器の合せ目には粘土による目張りはなかった。壺棺内からは人骨は検出できなかった。

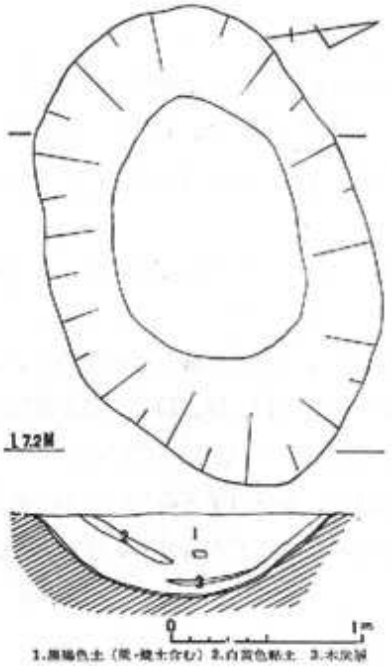
壺形土器の口径17.2cm、胴部最大径25.2cm、器高20.2cmである。高杯形土器の口径24.8cm、現存器高14.2cmである。

川島遺跡における弥生時代の墳墓は、遺跡の最東端で検出された生活址とは分離したところに、壺棺墓と同時期の四基の周溝墓群があるが、壺棺墓は同時期の生活址（土坑10、14、13等）と非常に隣接して存在しており、遺跡における周溝墓と壺棺墓の集落内における埋葬位置が異っている。

壺棺墓の被葬者は、その容積数値から考えても、また最近畿内地方、瀬戸内地方の生活址から隣接したところの壺棺、甕棺墓が、棺内に乳胎児の人骨が遺存していたことから考え合せて、壺棺墓の被葬者は乳胎児であると考えられる。（山本）

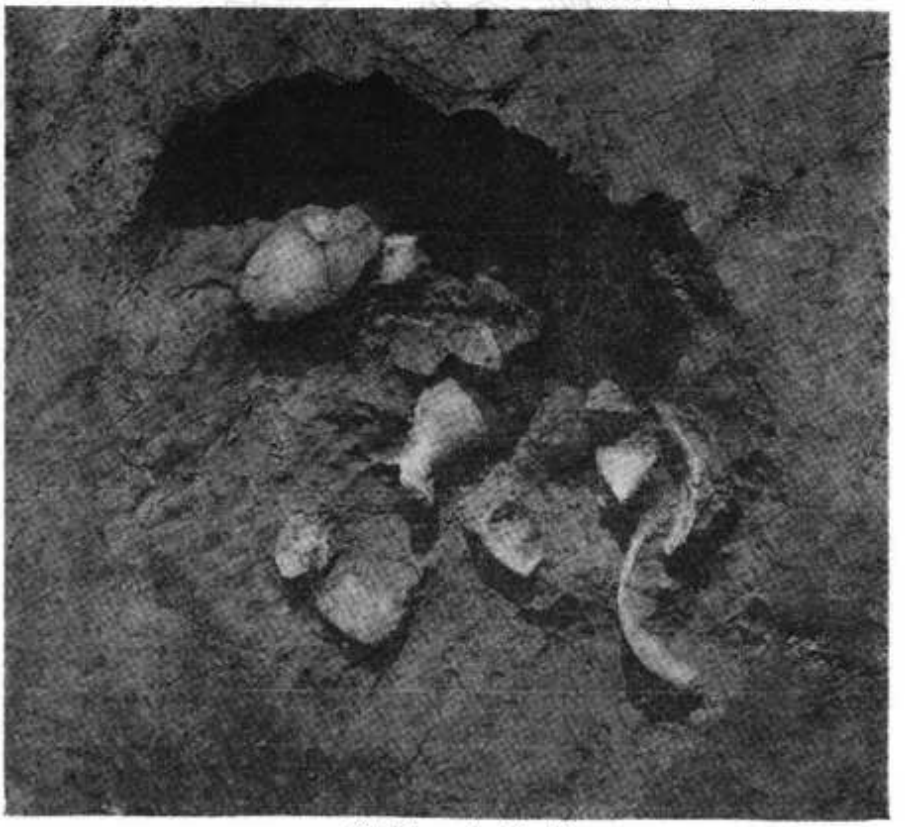


第51図　壺　棺



第52図　土　坑　9

第53図　土　坑　11



第54図　土　坑　14

3. 溝　遺　構

20　溝　（図版15～17）

落保久A地区の用水路北側において検出された。溝は北西から南東に向うが、南東部は用水路によって破壊され、用水路南側D61地区南端で一部が検出されたのみである。おそらくゆるやかに弧状をなしてC60地区に抜けるかと思われるが、用水路のためにその追跡は不可能であり、充分に検討はできていない。しかし、E60、61地区では21溝が北東から南西に流れ、20溝を切っている可能性もあるが、F60地区の断面にも20溝の存在が認められないため、自然に消滅するか、C60地区付近に迂回すると考えざるを得ないのである。

第55図　20溝土器出土状況

溝は幅2.5m、深さ30cmと浅く、黒色粘質土が堆積している。土層は層別れすることなく、後述する土師器が密集していた。土器の堆積は北西部に顕著で、南東部では少ない。（樋本）

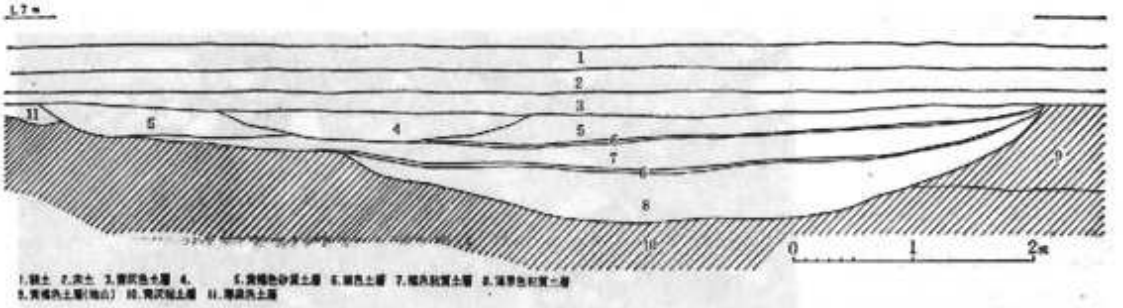
21　溝

用水路南側で検出された。北東から南西に抜ける古墳時代後期から平安時代初期にわたる溝である。北東部は用水路によって調査不可能であった。溝幅は北東部がやや大きく、4.0mあり、南西部で2.65mある。深さは25cmで、幅に比べて非常に浅い。溝内堆積土は最下層が薄黒灰色粘質土、上層が灰褐色砂質土である。（樋本）

22　溝　（図版18）

本溝は北東から南西に走る、幅10.4mの大きな溝で、21溝によってE60付近で一部肩部を切られている。その北東部の延長は、わずかにC48地区西端において肩部が検出された。溝肩部は黄色土を切っている。深さは80cmある。溝内堆積土は、最下層が薄黒灰色粘質土で、多量の弥生中期後半の土器を含んでいる。本溝の最下層は、植物遺体の資料として使用されたものであり、自然木や種子がわ

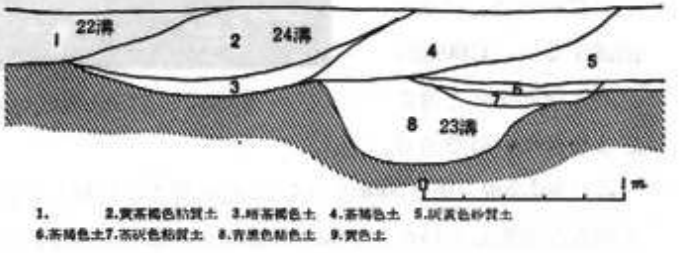
ずかではあるが検出された。なお本溝付近（60～65ライン）は、地理的環境の項でも述べられているが、低地帯となっていて、本調査区域内では唯一の黒褐色土の堆積がみられる。しかしそれらの黒褐色土層を切って、弥生中期の遺構がみられ、その黒褐色土中には土器の堆積は認められず、弥生中期以前に堆積したことは確実である。（櫃本）



第56図　22 溝 断 面

23　溝

両側の肩部がE61地区で、わずかに検出されたのみで、ほぼ南北方向に走る溝である。22溝によって切られているが、幅約1.4m、深さ約30cmある。出土遺物の検出もなく詳細を知ることができないが、22溝よりも古いことは明らかである。（櫃本）

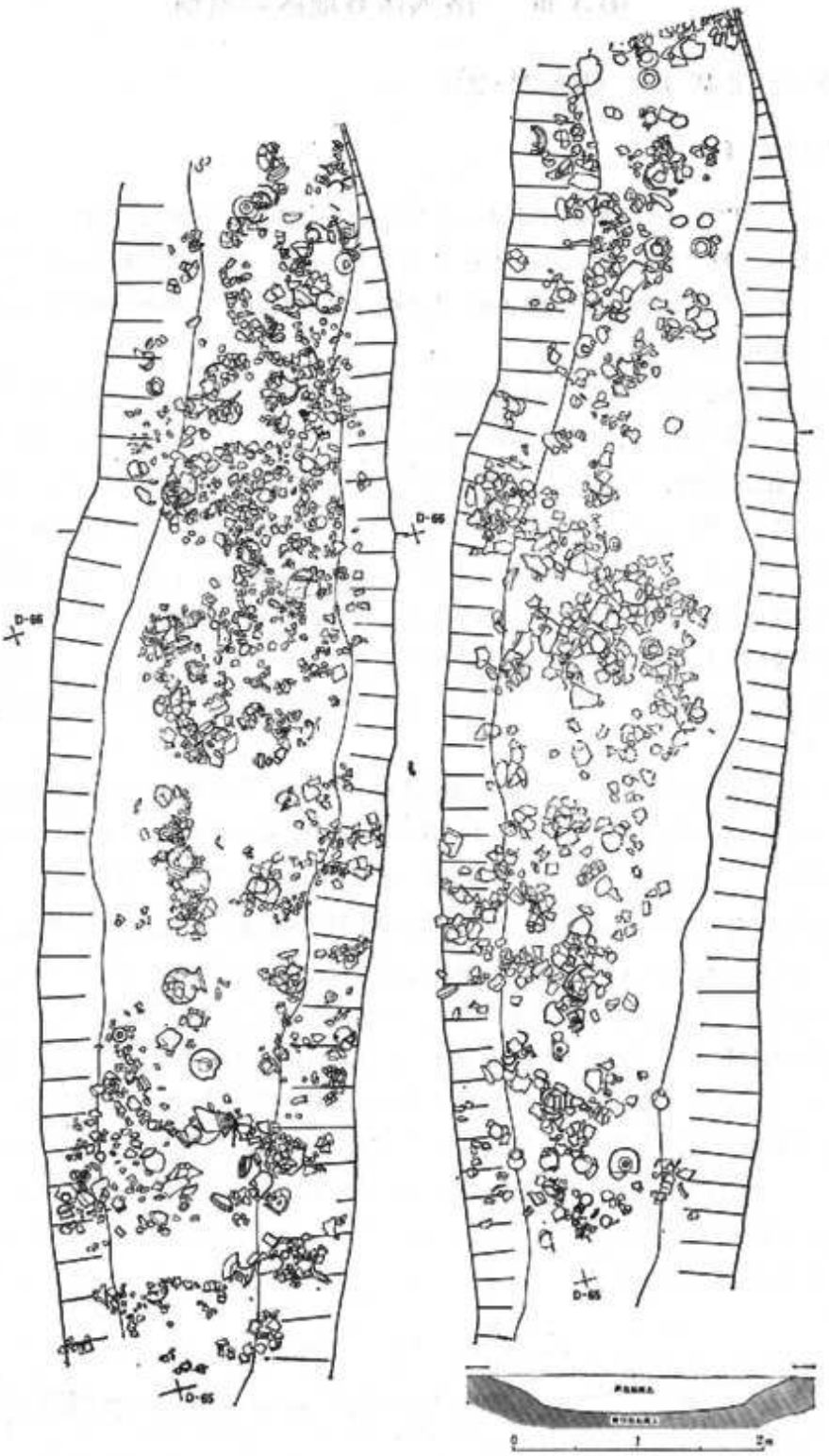


第57図　23溝・24溝断面（1は薄黒色粘質土）

24　溝

本溝も上記23溝と同様の走向をもち、22溝によって東側が切断されているため、溝肩部ではないが、およそ1.7mの幅をもっていることが確められた。

溝内の土層は、下層が暗茶褐色土で、上層は黄茶褐色粘質土である。時期は弥生中期後半以前であろうが、遺物は含まれていない。（櫃本）



第58図　20溝土器出土状況

第5節　落久保B地区の遺構

1. 竪穴住居址　（図版22・23）

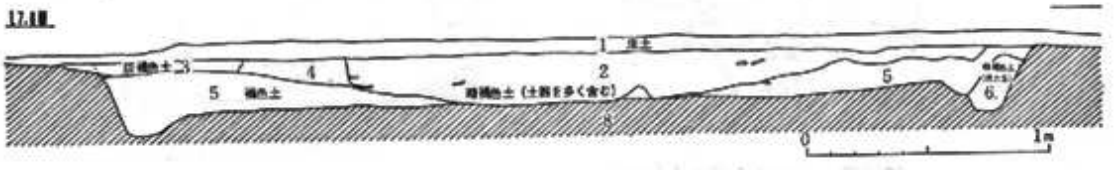
竪穴住居址 I

I号住居址（図版23）は3.20m×3.55mの方形を呈しており、高さ20cmの壁にそって深さ平均5cm、幅平均10cmの周溝が回っているが、西南で一部切れている。柱穴は直径10cm、深さ平均25cmのものが4個みられ、各々の間隔は東西幅1.6m、1.4m、南北幅1.5m、1.05mで南端柱穴のみが方形プランから少しずれているのがみられる。

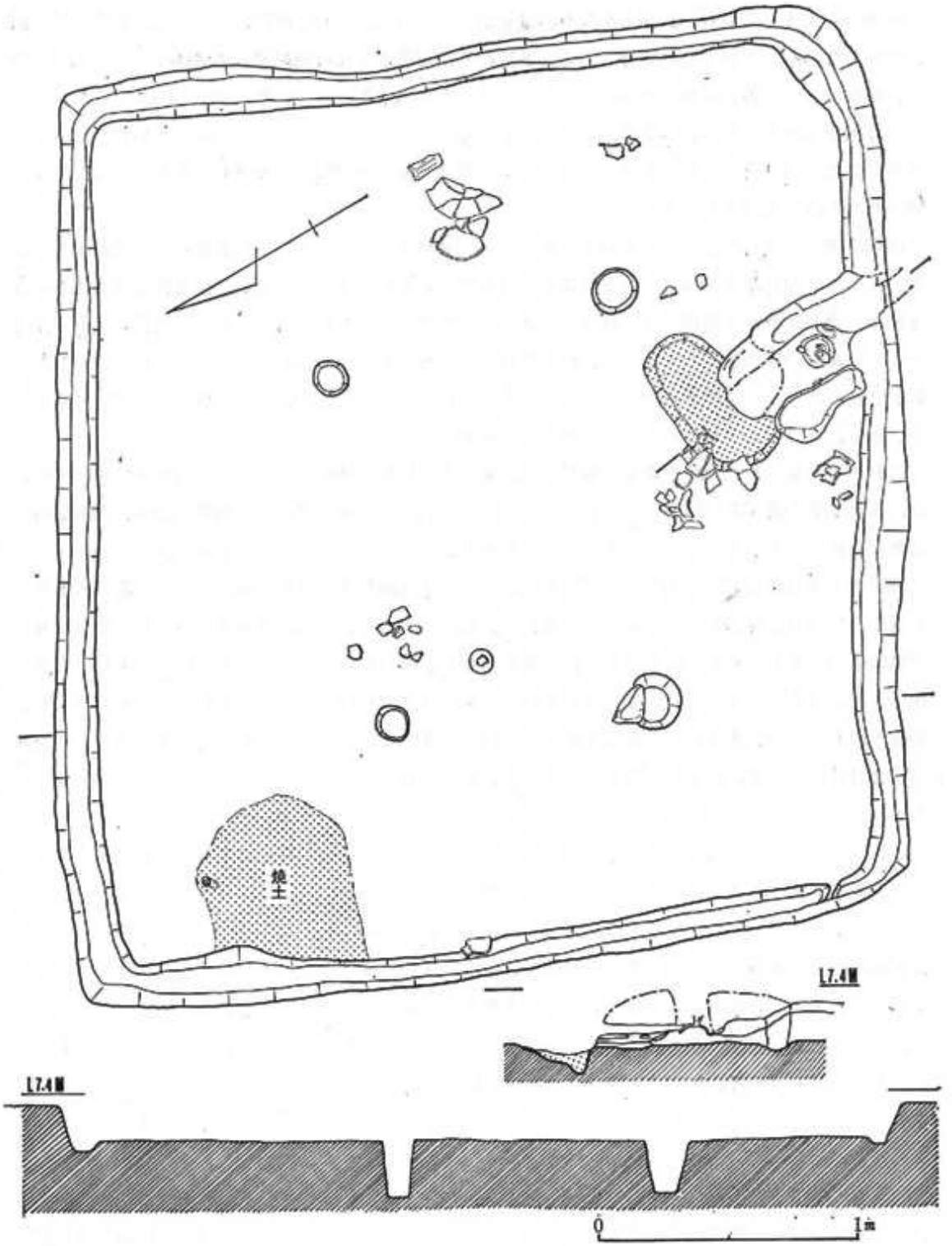
カマドは南壁の東寄りに正南の方向に築造されており、構成をみると天井部が欠損しているため、その形状はさだかではないが、両側壁が残っている状況からみると、側壁は補強用の芯を使用せずに粘土のみで構築しており、甕入れ穴は支脚として使用されている高杯の位置からみると1個のみを有していたであろう。煙道はカマドの方向に合わせて南に向かって壁を掘り進んでいるのがみられ、中には炭化物、焼土などが含まれているが、その出口は広範囲に調べたが、わからずじまいである。

カマドの前庭部はピットが掘り込まれており、灰、木炭、焼土、土器破片等が堆積しているのがみられ、カマドを何度も使用してゆく過程で、カマド内のものを掻き出したものであろう。またこのピットは、焚口を使用しやすくしたものとも考えられ、カマドを有する住居址の多くに同様なピットが検出されている。

土器の出土状態をみてみると、カマドの前庭部右寄りから壁にかけて最も多くみられ、北西柱穴寄りに少量の高杯、甕の破片が散乱し鉄滓が1点みられ、また、東側2本の柱穴の中間に高杯(第60図)と鞴口がみられる。この状況からみて土器の配置はカマドの右側を主体としたものと考えられる。この配置は東日本で発見されている鬼高期以降の住居址で特に鬼高II、III期に同例が多く、中には石などによって方形に区画してその中に甕、壺、甑、杯、高杯などをふせたりして置いてあるのやら、ピットを設けてその縁に土器を置いてあるものなど、カマドの左右を調理場的な配置にしている。ただここで問題なのは鞴口と鉄滓の出土である。鞴口は口先に鉄滓が附着しているのがみられ、明らかに鉄を熔かしているのであるが、住居址の状況からみて、それを使用すべき場所がない。ただ西北すみにみられる焼土にそれを求めるとするなら、鞴口を使用して火力を上げる場合、炎が高くあがるであろうから当位置では屋根とあまりにも接しているため、非常に危険であることが考えられる、これはカマドで使用した場合でも同様なことが言える。住居址から鞴口が出土している例は6世紀では八王子市中田遺跡D35号住居址で4個出土しているが、住居址プランからみて明らかに工房址と考えられ



第59図　竪穴住居址I内堆積土



第60図　竪穴住居址 I

る。7世紀で尼崎市若王寺遺跡では高床住居址などの中に溝などから鞴口完形品8個、復原可能を含め約40点も出土しており、鉄滓もかなりの量を出土している。これは直接には工房址、製造址には結びついてないが、その存在は明確である。8世紀では福岡市上和日遺跡では 作業址、 工房址、 るつぼ、住居址と一連の鉄器製造址が発見されており、鉄器製造集団の存在を示唆している。これら異なった3例をあげてみたが、当住居址でもっとも可能性のあるものとしてはいずれも資料の乏しさから明確ではないが、考えられるものとしては、単一的加工製造を目的とした遺物であり、特別な住居形態をもつものでないと判断する。

時期を考えてみると、出土している土器は全部で8個体であるが、いずれも細片化して出土している。このうち高杯が5個体、うち支脚に使用されているものが1個あるため、直接使用できるものは4個体、甕型土器が3個体がみられる。甕3は口縁部がゆるやかに内反しており、時期的にみて全体の中で一番古い様相を呈しているが、総じて5世紀中〜後半頃のものと考えられる。ただ出土した土器が2種であり、生活形態のセットとしては少々異質なものであるが、土器が細片化していることから、あるいは持ち出されている可能性もあると考えられる。

これまで発見されたカマドをもつ住居址は、東日本では和泉期が最も古いが、同時期はまだ炉を設け、カマドを設置する住居址は少ない。現在知られているのは埼玉県本庄市西富田遺跡、茨城県日立市曲松遺跡などであり、住居址は方形プランをもち、北壁中央に小さなカマドを設置している。

西日本で発見されているものでは広島県三次市日光寺遺跡第1号住居址で、カマドの芯に石を使用し構築しており、煙道も明確で出土品は甑、甕、壺、須恵器杯、土製紡錘車等がみられ、時期は6世紀頃のものである。和歌山県那賀郡吉田遺跡では49号、52号にカマドがみられ、いずれも粘土のみで構築され、支脚として河原石が使用されている。また南東端には貯蔵穴と思われるピットがみられ、東日本の6世紀中頃の住居址形態と類似する。時期は6世紀初である。兵庫県播磨郡播磨町大中遺跡では2号住居址で壁に接して河原石が検出され、焼土がみられることから、カマドの存在が考えられるが、何らかの理由で消滅したものであろう。

これらを総括してみると、東日本におけるカマドの出現は地域差を考慮に入れても5世紀末にはすでに出現し、8世紀まで続いている。しかしカマドの形態は時期によってかなり変化しており、もっともカマドが大きくなるのは真間期に入ってであるが、国分期になると再び小型化してゆく、これは住居址の構造の変化に伴なってカマドの配置、構造の変化がみられるのであろう。また国分期はカマドは小型化するが、煙道が長くなり、中には1mも外に続いているのもみられる。

西日本においては現在知られているものが少ないので比較はむずかしいが、カマドの出現は5世紀末で6世紀までは続き、その後は主に難波宮址第14次調査で竪穴内より出土した土師質竈にみられるように、造りつけのカマドから、移動のできるカマドへと変化してゆくのであるが、上和日遺跡の住居址は8世紀のものであることから、地域的には当時期まで造りつけカマドが続くのであろう。ただ土師質竈の性格は喜谷美宣氏が指摘しているように、カマド屋的な性格のものに移行したためのものと考えられ、ミニチアであるが古墳の副葬品としてみられることからも、共同体における生活形態の変化がうかがい知ることができる。

（阿久津）

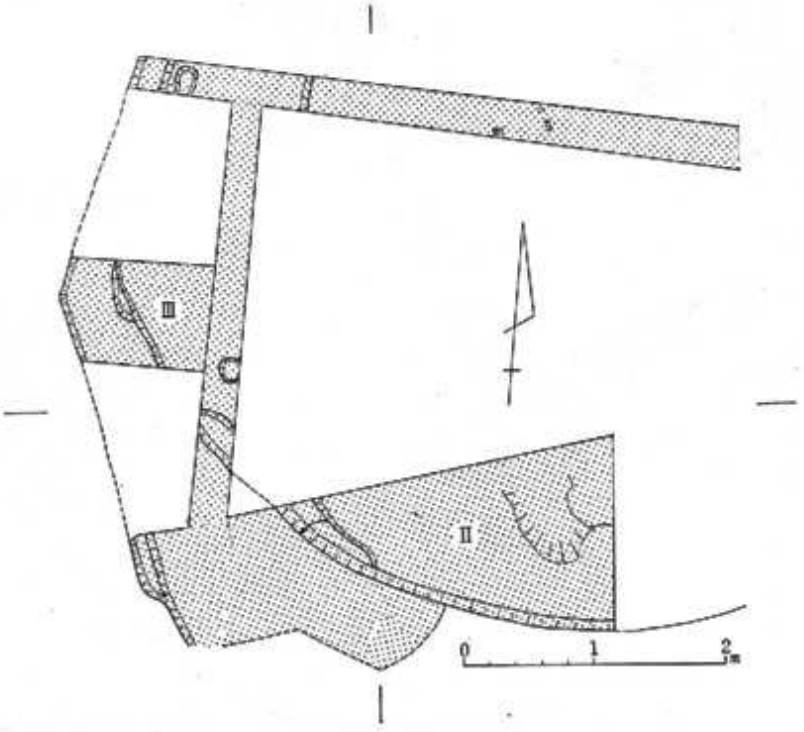
竪穴住居址Ⅱ・竪穴住居址Ⅲ（図版24―上）

Ⅱ号、Ⅲ号住居址は、当地区の保存が決定したため、確認調査だけを行なう。調査は平面にみられるプランから、2軒以上の可能性があるため、50cm幅のトレンチで壁と床を追ってゆく、まず東西に一本トレンチを設定し調査を行なった結果、床面直上から打製石庖丁（挿図60―8）（図版24）および高杯が出土、同床面は弥生時代中期のものと判明する。壁を把握するためにトレンチを西に伸ばしてゆくと、途中で一段下がりそのまま伸び、途中で周溝と考えられる溝があり、すぐ立ちあがるためそれを壁と把握、その壁の続きをみるため、南北にトレンチを設け、各々に床面から壁までを広く追いかけ、一部の周溝と、円形プランの一部の壁をおさえこれをⅡ号住居址とする。

最初のトレンチで、円形プランの壁の外にもう一段少し高くなっている壁を確認したため、第2トレンチの途中を西に追ってみると、Ⅱ号住居址の壁の外のレベルで平面になり、角度をもった壁がみられたのを、第3トレンチでその続きを追う。それによると、角度をもった壁は一直線で結び、この形から判断すると多角形の住居址のようである。これをⅢ号住居址とする。

Ⅱ号住居址とⅢ号住居址の新旧関係は、Ⅲ号住居址の土器が小片で比較がむずかしいので、切り合い関係から判断すると、Ⅱ号住居址の床はⅢ号住居址の床よりもレベルが低く、どうもⅢ号住居址をⅡ号住居址が切って築造されたものであり、Ⅱ号住居址はⅢ号住居址よりも新らしいことになる。

（阿久津）



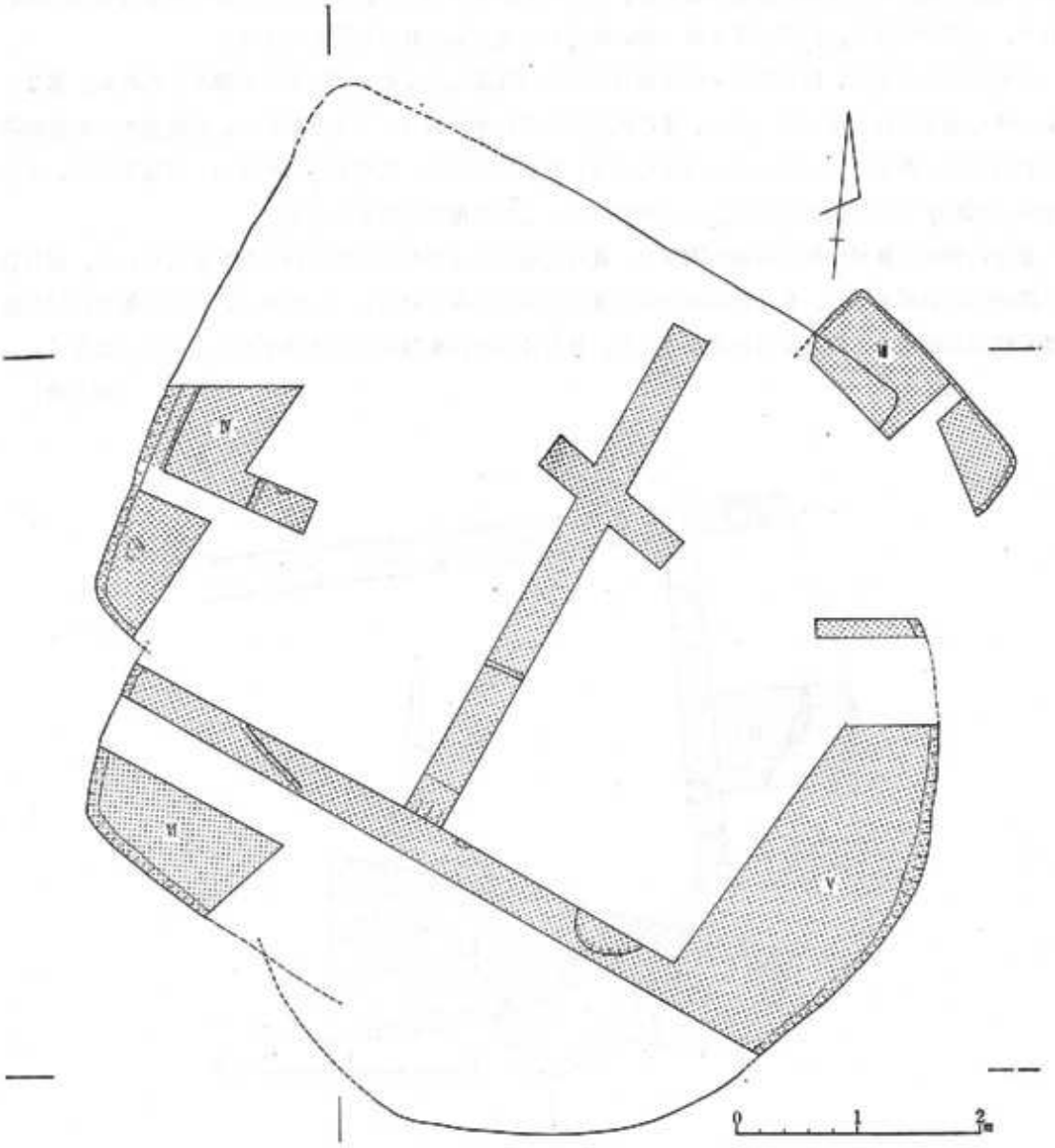
第61図　竪穴住居址Ⅱ、竪穴住居址Ⅲ（網目の部分はトレンチを示す）

住居址Ⅳ～Ⅶ　（図版24―下・25―上）

住居Ⅳ～Ⅶは、B71、D72、C71、E71にわたって、床土を排除すると、その平面が確認できた。

4基の住居址は、円形住居址1基と方形住居址3基が、各々切り合っており、このことを確認した時点では、調査日数も迫っており、すぐに保存申請を行ない、その保存も決定したので、後日の調査に期して、若干のトレンチを入れたのみに終った。

床土を除去した際に、4基の住居址が、床土直下の黄色土層（無遺物層）を肩にして、切り合っていることを認めた。



第62図　竪穴住居址Ⅳ～Ⅶ（網目の部分はトレンチを示す）

住居地Ⅵの西隅にトレンチを入れた結果、住居址Ⅳには、壁際にそって幅25cm前後、深さ10cmの周溝をともなうこととともに、住居址床面上に庄内式土器併行期と考えうる高杯形土器が、杯部を下にし、脚部を上に向けて、丁度180°転回した状態で出土した。

さらに住居址Ⅵとの切り合い関係を調べるために西側に若干トレンチをのばすと、住居址Ⅳの床面より一段下がった落ち込みを認め、この落ち込みは、住居址Ⅵの壁であることを、その平面から認め、その部分の土層を検討したが、住居址Ⅵの肩は住居址Ⅵに切られているためにのびなかった。

住居址Ⅶの北東隅のトレンチでは、住居址Ⅶが、住居址Ⅳを切って作られていた。住居址の床面は、住居址Ⅳの床面よりも高いために、住居址Ⅳの隅も確認できた。

住居址Ⅴの南東隅のトレンチでは、住居址床面に焼土面を検出し、壁際に径20cmの柱穴が検出できた。

住居址Ⅳ～Ⅴにかけてのトレンチでは、落ち込み等を認め、住居址ⅣとⅤの中央のトレンチでは、径約80cmほどのピット状の遺構を検出したが、どの住居址に対応するものかは、完掘できなかったために、不明のまま後日に期した。

以上の結果、住居址Ⅳは、一辺の径5.4mの方形住居址で、壁際に沿って幅25cm前後、深10cm前後の周溝があることが判った。住居址床直上の土器から住居址Ⅳが、庄内式土器併行器に位置づけできるので、住居址Ⅳの年代は、古墳時代前期前半と考えられる。

住居址Ⅴは、推定規模径6mの円形住居址である。

住居址Ⅵの規模は、確認してないが、その平面形は方形住居址である。また住居址Ⅳよりも、作られた時期は古いことが判った。

住居址Ⅶは、一辺の径が2mの方形住居址で、4期の住居址の中では、構築された時期は一番新しく、また規模も2mと小規模である。

4基の住居址は、円形住居址を除いて、切り合い関係からその前後関係は把握できた。住居址の平面形の変遷から考えて、円形住居址が、4基の住居址の中では、最初に作られたと考えると、四基の住居址は、住居址Ⅴ～住居址Ⅵ～住居址Ⅳ～Ⅶの順に作られたことが判る。（山本）

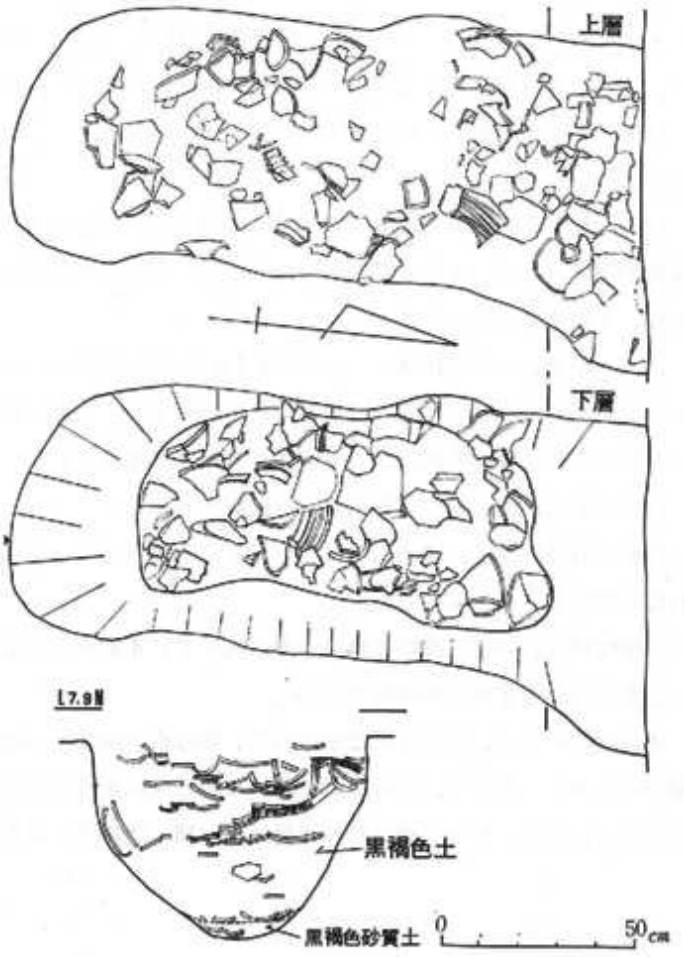
2. 土　　坑

土 坑 20 （図版26—上）

北端は調査地区でないため、仮事務所などが建られていたために未発掘に終った。したがって土坑は完形ではない。しかし坑底線が確認されているので、平面径を推定することができ、全体の規模を知ることができた。それによると、平面径1.6m×66cm、底部径1m×45cm、深さ約50cmを計測する。平面形は、長円形土坑であり、断面形は底部中央が深くなっているU字型の土坑である。

土坑は黄色土の地山層を掘っている。土坑内部は、黒褐色土層で、径3cm内外の角のない小石が混っており、底部は、同色の砂層のみが約8cm堆積していた。

土坑内の状況は、全体的に土器片が密集しており、その隙間に土砂が存在していた。土器の堆積は一部分に同様の器形が存在するようなことなく、復元作業によっても完形にはならなかった。また土器以外の出土物もみられない。出土した器形は、壺、甕、高杯、鉢、長頸壺で、多くは壺の口縁である。



第63図　土 坑 20

出土した遺物は土器のみで、完形品なく、また一時期のものである。土坑内の土層状況から、この土坑は、地山に穴を掘って不用になった土器の捨場として短期間使用していたと思われる。

（高橋美由紀）

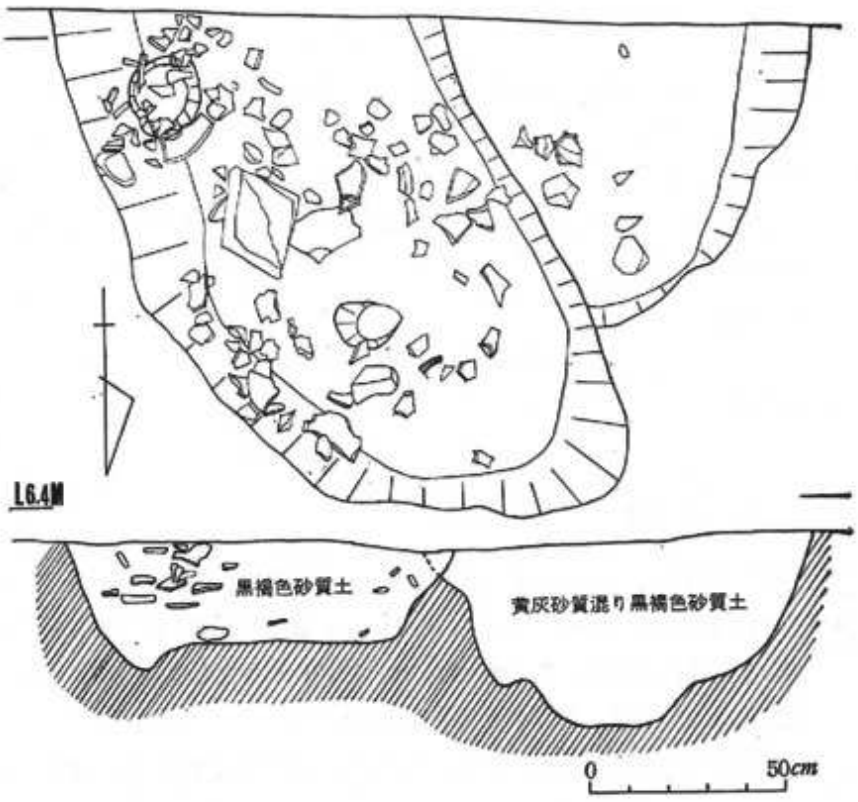
土坑21および土坑30（図版26—下）

南端部は、調査地区でないため、未発掘に終ったので、全形不明の土坑である。土坑21が土坑30を切

り込んでいる。断面形は、底部中央が深くなっているU字型土坑で底部表面はあまりなめらかではなかった。規模は東側土坑 1.9m×98cm、深さ32cmある。西側は現在で78cm×1mが残存し、深さは46cmである。

黄色土の地山層に穴を掘っている。土坑30内部は黒褐色砂層が堆積していた。土坑21は黄色土の地山層に穴を掘り、土坑30の西端部を切り込んでおり、内部土層は黒褐色砂層であり、わずかな色の相違で区別される。

土坑内の状況は、土坑21は全体的に土器が密集しており、土器片は大きくはなかった。人頭大の、角のある自然石が土器片と重なるような状況で出土した。土坑30は、土坑縁端部に遺物が集中していた。遺物は、小さな土器片と、人頭大からにぎりこぶし位の角のある自然石で互層をなして出土した。　　(高橋)



第64図　土坑21（左）および土坑30（右）

第65図　土 坑 20 断 面

土　坑　22　（図版27―下）

74グリットから77グリットのB列の溝（27溝）を調査中、76グリットにおいて溝の北壁面で覆土と同色の落込みを確認したが、円錐形を切断された状態でみられるところから、溝によっ切断されたものと考えられる。

土坑は残存部で推定すると、直径1.2m、深さ70cmのV字形を呈しており、覆土は黒褐色土で、土層中程から弥生式土器片が散在してみられ、その上下に炭化物、焼土と共に15～30cm大の礫が混入している。

出土した土器は、壺・甕・高杯の破片が一応そろっており、時期はいずれも、畿内第4様式のものである。

（阿久津）

土　坑　23

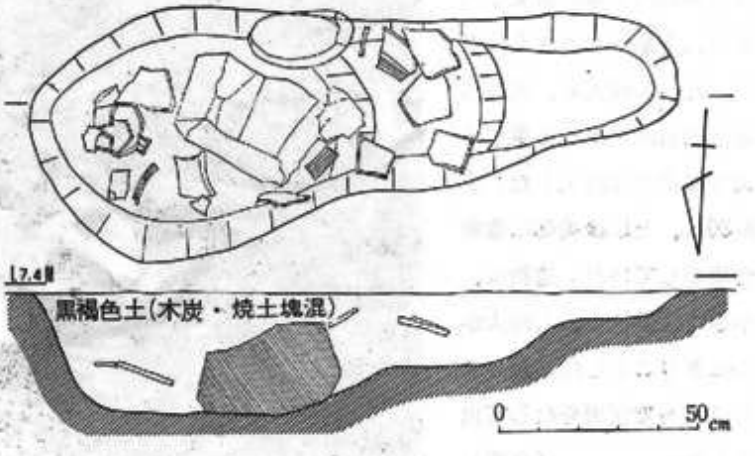
最大径1.6m、深さ0.5mの不定形を呈するもので、床土直下で落込みが確認できる。覆土は黒褐色土で、同落込みに接近してみられる小ピット2つは、覆土が灰褐色土で、明らかに同一レベルで異時期の落込みが確認できる。覆土内には土器破片が散在しているが、底面に接しているのは少なく、土坑22とは多少異なっているのが特徴である。

出土した土器は弥生式土器で、甕、高杯蓋がみられ、時期は畿内第4様式のものである。

（阿久津）

土　坑　24　（図版25―下）

長径1.7m、短径63cm、深さ30cm、17cm、7cmのこの3段になった土坑で、覆土は褐色土で炭化物、焼土などを含み、最下段の底面に接するように、径約34cmを最大とする礫が3個みられ、土器片が、それにかみ合わさるようにしてみられる。



第66図　土　坑　24

出土した土器は弥生式土器で、壺、甕・高杯がみられ、時期は畿内第4様式のものだけである。当遺跡の土坑群の中で、階段状になっているものはこれだけである。

（阿久津）

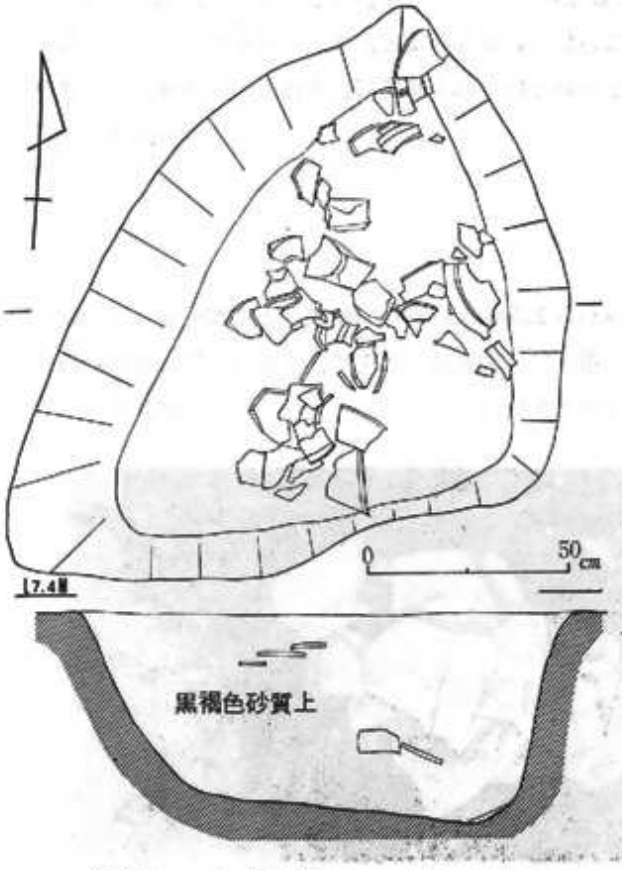
土　坑　25

南北1.52m、東西1.4mの三角形状を呈する土坑である。土坑は地山である黄色土を切って掘られている。土坑の深さは52cmあり、坑内には黒褐色砂質土が堆積していた。土器は坑底に密着するものは少なく、大部分は坑底より12～40cm程度上方にあった。土坑出土の土器は弥生中期後半の時期である。　（櫃本）

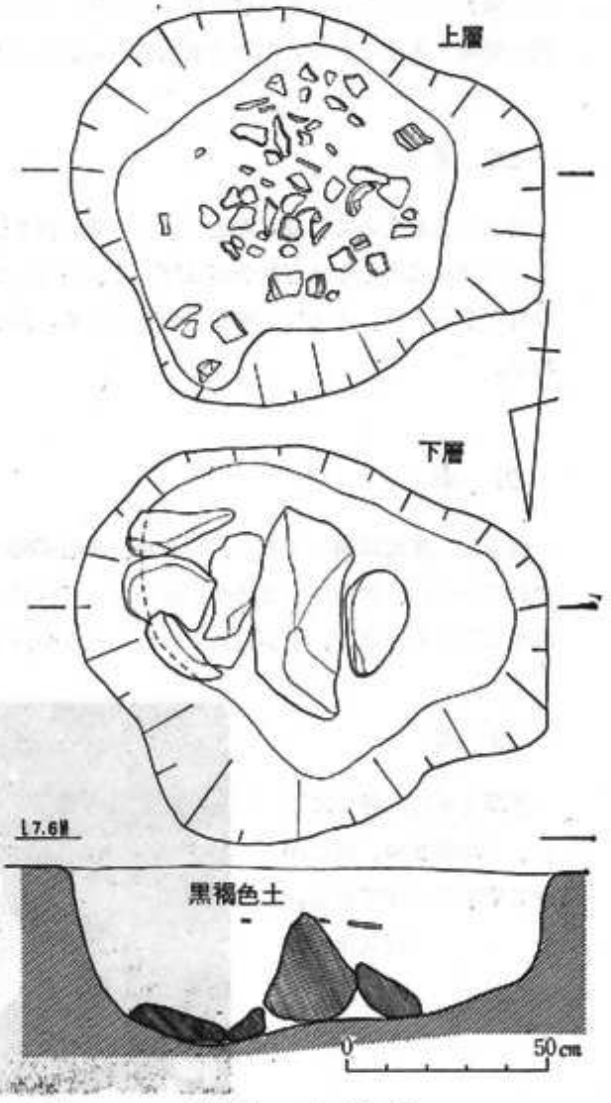
土　坑　26　（図版28―下）

径1.18×1.0m深さ45cmの不定形な土坑で、覆土は黒褐色土である。底面直上には50cmを最大径とした礫が6個みられ、土坑22、24と同一形態を呈しており、土器もその周辺と底面に散在しているのがみられる。

出土した土器は弥生式土器で壺、甕、高杯がみられ、時期は畿内第4様式のものである。　（阿久津）



第67図　土　坑　25



第68図　土　坑　26

3. 溝 状 遺 構

25 溝

東西に通るもので幅2.7m、深さ1.2m、底辺1.2mのV字形の溝で、溝を切って1号住居址、柱穴等の遺構と南北に通る農道のため、3地点の小範囲のみを調査した。

溝は全体に深さが同じで、いずれも底辺に砂質土が薄く堆積し、その上の暗褐色土、黒褐色土が堆積し、中間層から弥生土器破片を含んだ層がみられる。また土器を含んだ土層には、ブロック状に木炭を多量に含んだ薄い層があるが、土層から考えると、弥生土器片が混入した層とあまり時期的には差はないと考えられる。なお底辺にみられる砂層は、この溝に水が流れていたと判断できるもので、方向からみると、壇特山の裾を流れていた河川と結ぶ、用水路とも考えられる。しかもこの溝はⅡ号からⅦ号にかけての弥生住居址群の中を通っており、時期的にみて、6基の住居址のうちの何軒かと同一時期と考えられる。なお土層内にみられる土器の時期は畿内第4様式である。　　(阿久津)

26 溝

南北に通るもので、幅は農道があって東の落ち込めがつかめないため、わからないが、深さは溝にしては理解に苦しむほど凹凸がはげしく、一定していない。層をみると、覆土は灰褐色土で、底辺は砂質土がみられ、溝床は小礫で形成している。出土土器はいずれも陶器で、中世の頃の遺構と判断される。　　(阿久津)

27 溝

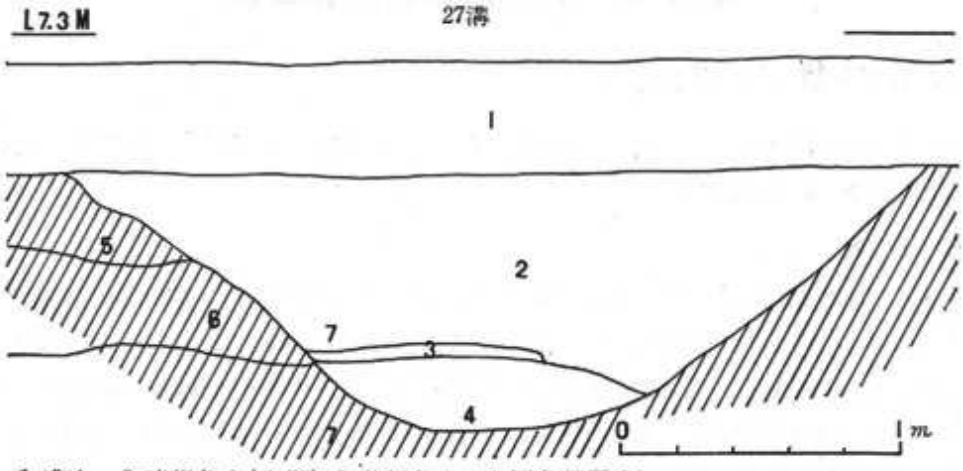
西南から東北に通っており、幅2m、底辺幅80cmから1.5mのV字形の溝で、土坑22を切って形成されているが、西南端では溝が広がりだしている。覆土は、黒褐色土が主で、土器は中間にまばらに散在しているだけで、水が流れていたかどうかは判明できない。　　(阿久津)

29 溝

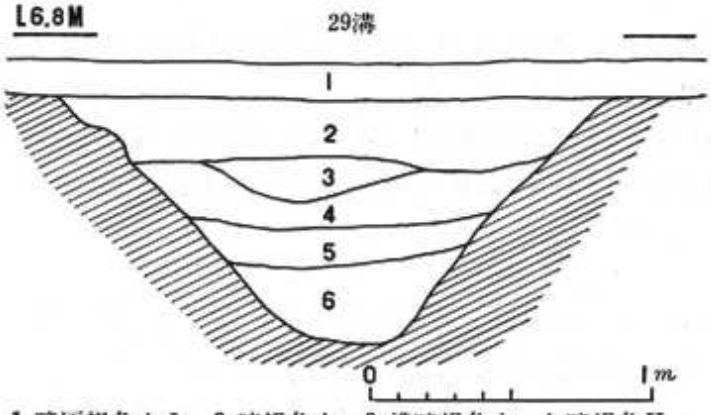
溝25と並行に通っており、平均幅2m、底辺70cmでV字形の溝である。

(阿久津)

第69図　29溝土器出土状況



1.盛土　2.暗褐色土(含炭)　3.茶褐色土　4.灰色粘質土
5.黄褐色土（地山）6.茶褐色土(地山）7.黄色砂質土(地山)



1.暗灰褐色土 I　2.暗褐色土　3.濃暗褐色土　4.暗褐色 II
5.灰褐色砂質土　6.褐色砂質土

第70図　落久保B地区溝断面

第4章　川島遺跡出土遺物

土器の器形分類（弥生時代中期）

川島遺跡の弥生時代中期の土器を、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器等に分類、それぞれ下記のように細分化して呼称する。

壺 形 土 器

壺形土器A　球形に近い豊かな胴のはった器体に、筒状の頸部をもち、頸部について大きく外反する口縁部をもつ壺である。口縁部の形態により、壺A_1、壺A_2、壺A_3、壺A_4、壺A_5と5種類に分けることができる。壺A_1は口縁端部が上下に明確に張出しているもの、壺A_2は口縁端部が斜下方に垂下する（いわゆる斜下外反する）もの、壺A_3は口縁端部を外方に折り曲げ、中に空孔ができる曲縁の形をとるもの、壺A_4は、口縁端部が肥厚するもの、壺A_5は、上下に大きく拡張するものである。

壺形土器B　外開きの頸部をもち、口縁部が屈折して上方に立ち上がる壺である。

壺形土器C　筒状の頸部が直口する壺である。壺は3形態に分れる。壺C_1は口頸部が長く、いわゆる、長頸壺形土器であり、壺C_2は筒状が短いものである。壺C_3は外開する直口の口頸部をもつものである。

壺形土器D　短い頸部に外反する口縁部をもつ。胴部上半の破片のみでは甕形土器との区別がむつかしい。

壺形土器E　卵形の器体と、外反する口径の小さい口縁部をもつ壺である。

壺形土器F　いわゆる無頸壺形土器である。

壺形土器E　筒状の頸部につづいて口縁部が多少とも内外に屈曲してたちあがる壺である。壺E_1は口縁部がななめ上にひらき、内外の屈曲がわずかである。壺E_2は屈曲して直立する幅ひろい口縁部をもつ。

甕 形 土 器

甕形土器　「く」字形の口頸部をもち、胴部径が口縁径をこえる甕である。口縁端部の形態は上方に拡張するものと上下に強く拡張するもの等がある。

大型甕形土器　甕形土器と比べて口径、器高とも2倍程度の大きさをもち、器厚も厚い甕である。この類で胴部が球をおびると短頸壺形土器と区別が困難である。ここでは便宜的に口径30cmを超えるものを大型甕と呼称する。

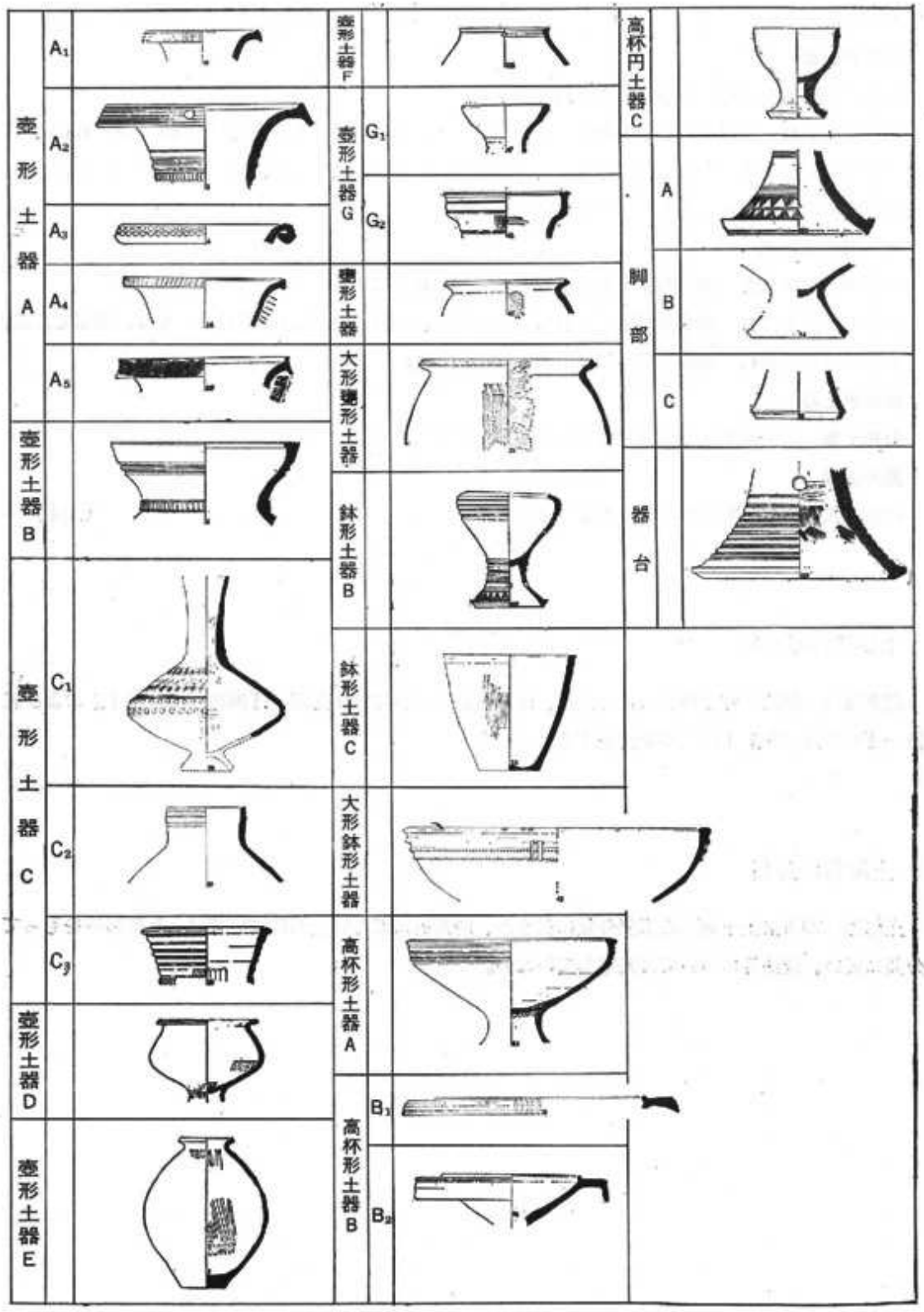
鉢 形 土 器

鉢形土器鉢A　器体がなだらかなカーブをえがいて立つ直口する口縁部をもつ鉢である。破片では高杯Aとの区別はむつかしい。

鉢形土器B　口縁部を内側にななめに大きく張り出す台付鉢形土器である。

鉢形土器C　底部から口縁部にかけて直接的に直口する鉢である。

大型鉢形土器　鉢Aの杯部をもつ大型の土器である。ここでは便宜的に口径30cmを超えるものを大



第71図　川島弥生中期の土器分類

型鉢と呼称する。

高杯形土器

高杯形土器A　杯部の形態は鉢Aと同じである。

高杯形土器B　口縁部に水平面をもうけ、口縁内端に凸帯をめぐらす高杯である。 高杯B_1は、口縁外端を少し垂下するもので、高杯B_2は、口縁外端を曲折して、大きく垂下するものである。

高杯形土器C　椀状の杯部をもつ高杯である。

高杯形土器脚部

高杯型土器脚部A　脚端部が上方に拡張されている脚部である。

高杯形土器脚部B　脚端部が拡張されていないもの、あるいは拡張のいちじるしくない脚部である。

高杯形土器脚部C　脚端部が内側に張出す脚部である。

器台形土器

台形土器　中央部が狭く上下で開いた鼓胴形の器台である。

蓋形土器

蓋形土器中央部に突起状の摘みをもつ蓋である。　(山本)

須恵器の分類

須恵器は一般的に呼ぶ呼称に従ったが、時期決定については田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』および森浩一『世界陶磁集』Ⅰの二つを併用する。

土師器の分類

土師器は20溝出土土師器の形態分類に従うが、時期的に新しい土器については、形態のみをもって分類に従い、技法等については勘案していない。

第1節　茶の木地区の出土の土器

1　周溝墓出土の土器

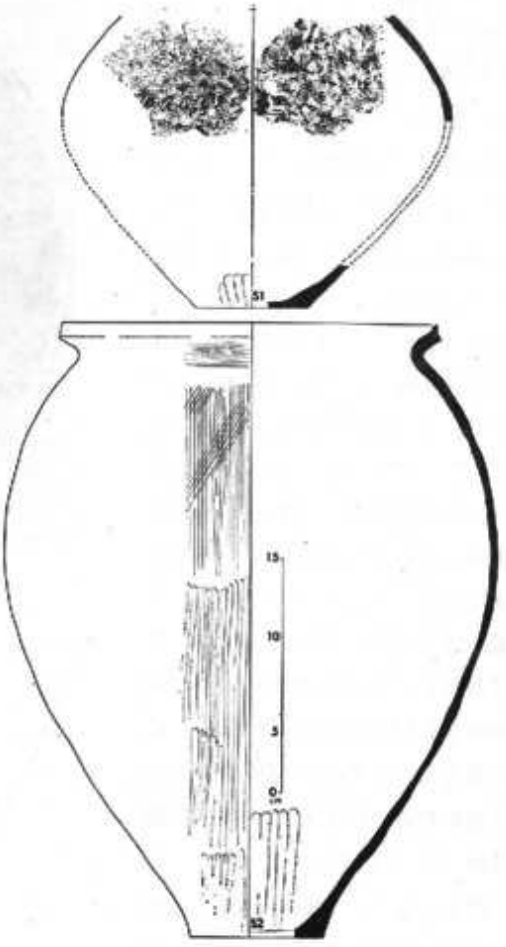
1.　周溝墓Ⅰ（図版36）

壺形土器D

S_1 は円形周溝墓北溝中央部より出土したもので、底部および胴部のみである。底部は径 6.8㎝で平底である。底部外面は幅1㎝内外の縦方向の篦磨きで整形し、内面は幅2㎝を越える篦削りを行なっている。胴部外面上半は縦方向の刷毛による調整を行ない、胴部中央におよそ1㎝間隔の篦による圧痕文を配している。圧痕文下は横方向の篦磨きを行なっている。胴部内面は指頭圧痕を残し、外面と同様の刷毛による調整がある。

周溝墓Ⅰ出土の土器は口縁部を欠いているが胴部の張りや底部の形態、およびその整形法から考えて落久保A地区出土の壺棺出土土器に類似すると考えられる。

南溝より出土したもので、口縁部および底部を欠いでいるが、1と同様の器形を示すと考えられる土器片がある。胴部上半内外面は縦方向の刷毛で調整し、下半部は縦方向の篦削りを行なっている。　（櫃本）



第72図　周溝墓Ⅰ（S_1）および周溝墓Ⅱ（S_2）土器

2.　周溝墓Ⅱ（図版36）

大　型　甕

方形周溝墓Ⅱ西溝より出土したもので完形品である。器高39.6㎝あり口縁部径24㎝、胴部最大径31.8㎝ある。口縁部はく字形に外反し端部は上方にのみ強く拡張する。胴部の張りはあまり強くなく底部に及ぶ。底部は径8.5㎝で平底であるが、焼成後に底部中央部をおよそ 6.7㎝程度穿孔する。（図版36第72図S_2）

器面調整は口頸部はヨコナデ、胴部外面上半は縦方向の刷毛をかけた後に、斜方向の刷毛を加えている。胴部下半は篦磨きで調整する。胴部内面下半は篦削りを行なっている。　（櫃本）

中世墓副葬の青磁（図版36）

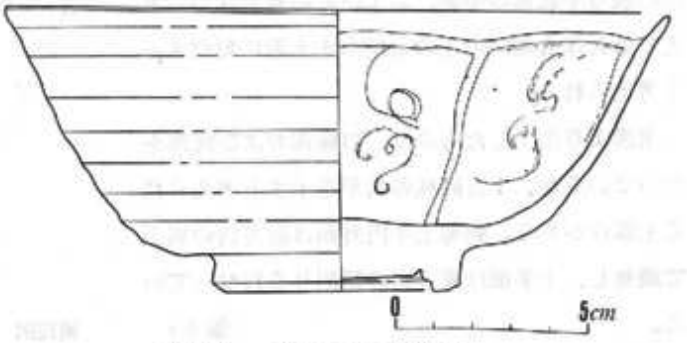
川島遺跡の発掘調査より出土した磁器は、中世墓に副葬されていたものと、耕土中に若干含まれていたものだけである。

青 磁 鉢 （完型）

この中世墓に副葬されていたのは、青磁鉢[1]一口のみである。口径16.8cm、高さ 7.3cm、高台は厚くて大型で、径6.5cm、高さ0.8cm、身の深さは5.2cmである。身の底部は非常に厚く、1.6cmをはかる。外面は、素文でロクロ目を明瞭に残し、内面は、へら削りの仕上げであり、ヘラで刻んだ大柄な、6つの花文を表わした刻花文片切彫りで、花文の中央に雲文を表わしている。そして、花文の重なりが、全体にわたって動きが認められる。高台底部を除いた内外面全体にわたって、オリーブグリーン釉が厚く重なっている。底部に墨書が認められるが水洗いの際、みのがした関係で判読できない。この墨書は、持ち主の名前[2]であろうと思われる。同じ様な例が、福岡県から出土している。

以上の様に、この青磁鉢は、全体にぼってりした重みがあり、又高台の造りは、厚くて大きい。

第73図　中世土壙墓出土青磁



第74図　中世土壙墓青磁内面

この様な造りから、唐代のものと考えられるが、実際は、北宋から南宋の初期にかけてのもので官窯の磁器の様に精巧なものではなく、浙江省竜泉系統の民窯で焼かれたものと思われる。

第75図　底 部 墨 書

註(1)　神奈川県鎌倉市大町で発見された三口の青磁鉢、広島県福山市草戸町草戸千軒出土の青磁その他、福岡地方などから多く出土している又、時期のおさえられる遺跡例として、京都市小幡から出土の青磁がある。

(2)　近藤正「出雲、荻杼発見の骨蔵器」『考古学雑54巻3号』この遺跡から出土した青磁碗に墨痕があることが報告されている。

(3)　この青磁について、全面的に京都国立博物館の藤岡了一氏に、ご教示を得たことをここに記し、謝する。

第2節　南五反田A地区出土の遺物

1.　7溝出土須恵器（図版37・39・40）

7溝出土の遺物は、すべて須恵器で、器種は甕、杯、蓋、高杯、瑞、スリ鉢である。

蓋　（4～8）

4は、器高は低く、天井部と口縁部との境界は不明瞭である。口縁部外面を巡る斜めの条線を持ち内面は横ナデ調整をしている。9～10でセットをなす。5～6は天井部と、口縁部と分ける凹線や稜は認められない。天井部のヘラ削りは、調整と同時に成形の役割りを果している。8も同様である。

杯　（9～10）

この杯は、立ち上がりは内傾し、非常に低い。立ち上がりを持つ杯身の終末に近い形態で小型である。

高台付杯身（12～13）

12、13は高台を持つ杯で、高台はあまり高くなく、わずかに外方へふんばった付け高台である。又内面は、横ナデ調整をしている。

高　杯（14～17）

この高杯は、15から17の様に脚部は短かく下方へ広がり、脚端は外反し、末端は隆起する。脚端径9㎝であり、脚高は6㎝である。

瑞　（18）

口頸部は欠損しており、頸部下端で狭少で厚いものである。丸い型で、体高は低く、厚い丸底に近いものである。

スリ鉢（19）

外上方へまっすぐのびる体部で、口縁部と厚い円板の底部とからなる。口縁端部は、内傾した面を持ち、端面は稜をなす。底部は不調整で、全体に器壁は厚い。

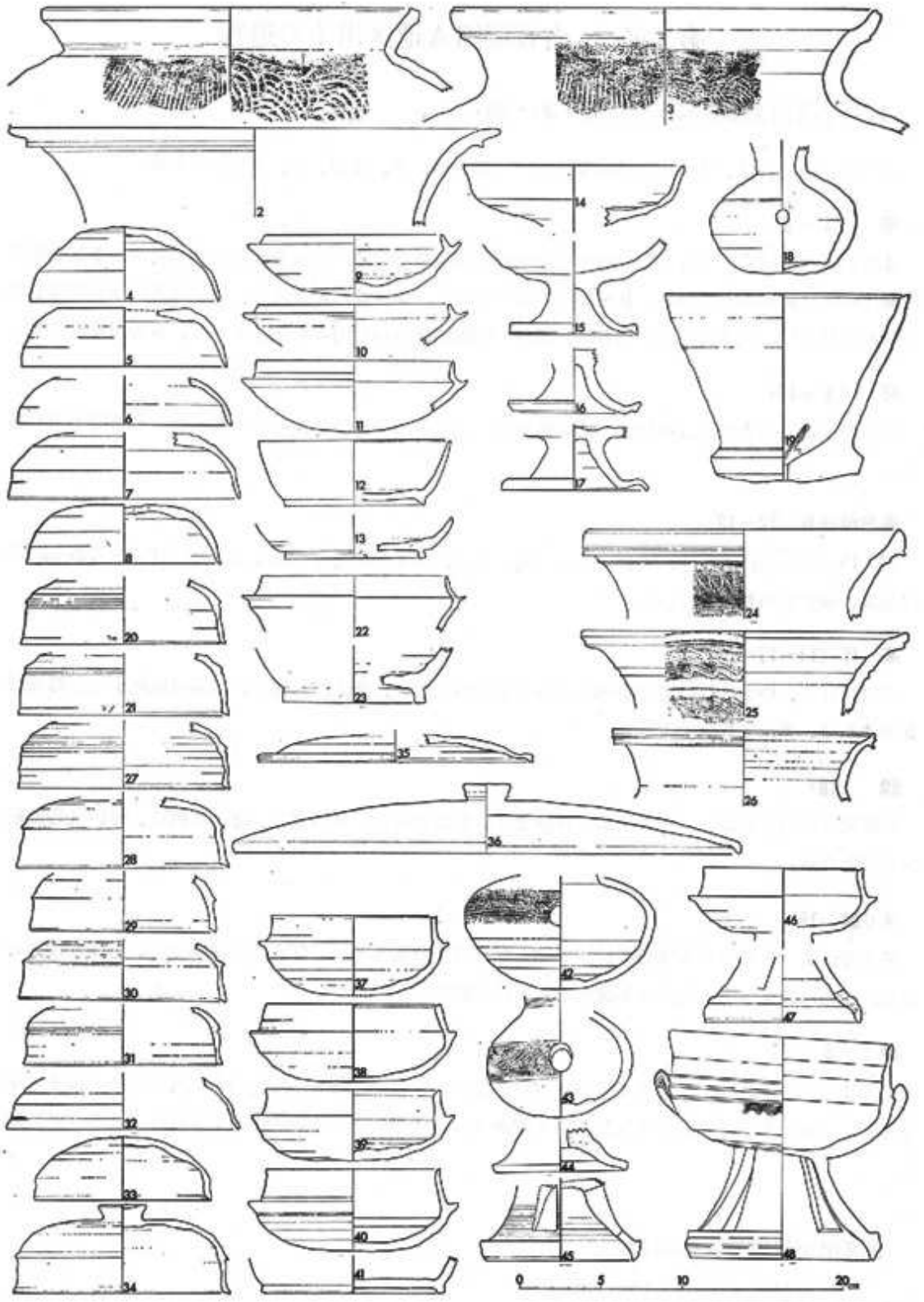
甕　（3）

1と3は、口径21㎝、外反する短かい口頸部を持っている。内面は同じ円文、外面は格子目タタキである。この口頸部は大きく外反し、口径30㎝の大型甕である。口縁端面の直下に凸帯を巡らしている。

（大村）

9溝出土須恵器（図版40）

9溝は、杯身、蓋、甕である。



第76図　7溝（1～19）・9溝（20～26）・14溝（37～48）須恵器

蓋　(20～21)

20、21は天井部と口縁部を分ける稜は短く、鋭さを欠いている。天井部は比較的平らにつくり、21は天井部に丸味のない古い形式の特徴を持っている。

杯　身 (22～23)

22は、立ち上がりの端部に面はなく、丸くおさめている。受部先端も丸くおさめている。23は、高台付高杯で、体部は外傾し、付高台より直ちに弯曲して立ち上がる。

甕　(24～26)

口径20cm内外で、中型の甕であり、口頸部の外反は直立的である。口縁端面の直下に凸帯を貼りつけして、頸部は櫛描き波状文をほどこしている。　(大村)

14溝出土土器　(図版37～40)

14溝の出土須恵器の器種は、杯身、蓋、高杯、高台付杯、瑞である。

杯　身 (37～40)

これらは、立ち上がりの端面や、受部先端の稜は甘いつくりで内へ傾斜している。底部は、受部先端から全体に甘く仕上げられている。口径11cm前後で小型であり、立ち上がりの内面に段を構成するものもある。(37、38)

蓋　(27～36)

27～31の天井部は比較的平らにつくり、その形態は、古い形式を持ち天井部に殆ど丸味がない。天井部と口縁部を分ける稜は甘く、くずれている。口径14cmから12cmである。34は、天井部中央につまみが着き、そのつまみは、中央が凹むものである。天井部と口縁部とを分ける稜は甘い。35の天井部は、ふくらみが少なく、平らな成形をしている。端部は下方へ短かく屈曲する。又、端部内面はわずかにふくれている。36は、大型の蓋で、口径34cmのもので内面は横ナデ調整後、中央部に仕上げナデを行っている。この蓋は盤とセットをなすものであろう。

高　杯 (44～48)

無蓋高杯と有蓋高杯がある。48は、無蓋高杯で杯体部には、上下を明瞭な稜線で区別した模様体があり、櫛描き波状文が横に巡り、この模様体に2個のつまみがつく。脚部は長方形の三方透しである。口径14cm、高さ14cmのものである。

瑞　(42～43)

42の体部は、やや球状をなし、横描き波状文を巡らす。頸部には稜がない。模様体上に円孔を1個穿っている。43の口頸部は、ラッパ状に開くもので、体部には、明瞭に肩をつくり、肩部沈線の直下に櫛描き列点文をほどこしている。模様体上に円孔を1個穿っている。底部は丸底である。(大村)

9溝出土土師器　（1～12）

壺　G　（5）

口径12.6㎝ある頸の短い壺で、口縁部がわずかに外反する。内外面ともに刷毛調整する。

鉢形土器　（2）

口径20.4㎝の、外傾する幅広い口縁部をもち、口縁部内外面はわずかに肥厚する。頸部と口縁部の境に、鋭い稜を有している。胴部径は口縁部径と同大である。胴部外面は刷毛調整し、その上に3条の櫛描波状文を描いている。内面は篦削りを行なう。落久保B地区表採土器（第129図）と同型のものである。

甕　C_1（1・3・4・6・7・12）

12は口径15㎝あり、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部内外はヨコナデし、胴部外面上半は縦方向の刷毛で、下半は斜方向の刷毛で調整する。内面は篦削りで成形する。3は胴部外面に叩目をつける。

甕　G　（8）

口径9.4㎝あり、口縁端部が外反する。胴部外面は縦方向の刷毛で調整する。

高杯形土器脚部（10・11）

11は短い筒状脚部と小さく外弯して開く脚端部をもち、三方向に穿孔する。

14溝出土土師器（13～19、21～26）

甕　C_1　（13・15・17・21～23・27・28）

13はわずかに外反する口縁部をもち、胴部は球形に近く丸底をなす。胴部外面は縦方向の刷毛調整を行ない、内面は上半に1.5㎝程度の粘土紐を、輪積にした痕跡が認められる。20はわずかに外反する口縁部をもち、胴部は球形状を呈する。内外面ともに斜方向の刷毛仕上げを行なう。28は口径20㎝で、胴部は長く丸底である。外面は縦方向の刷毛仕上げを行なう。27はゆるく外反する口縁部をもち、胴部外面は刷毛、内面は篦削りで仕上げる。内面に幅2㎝程度の輪積の痕跡を残す。

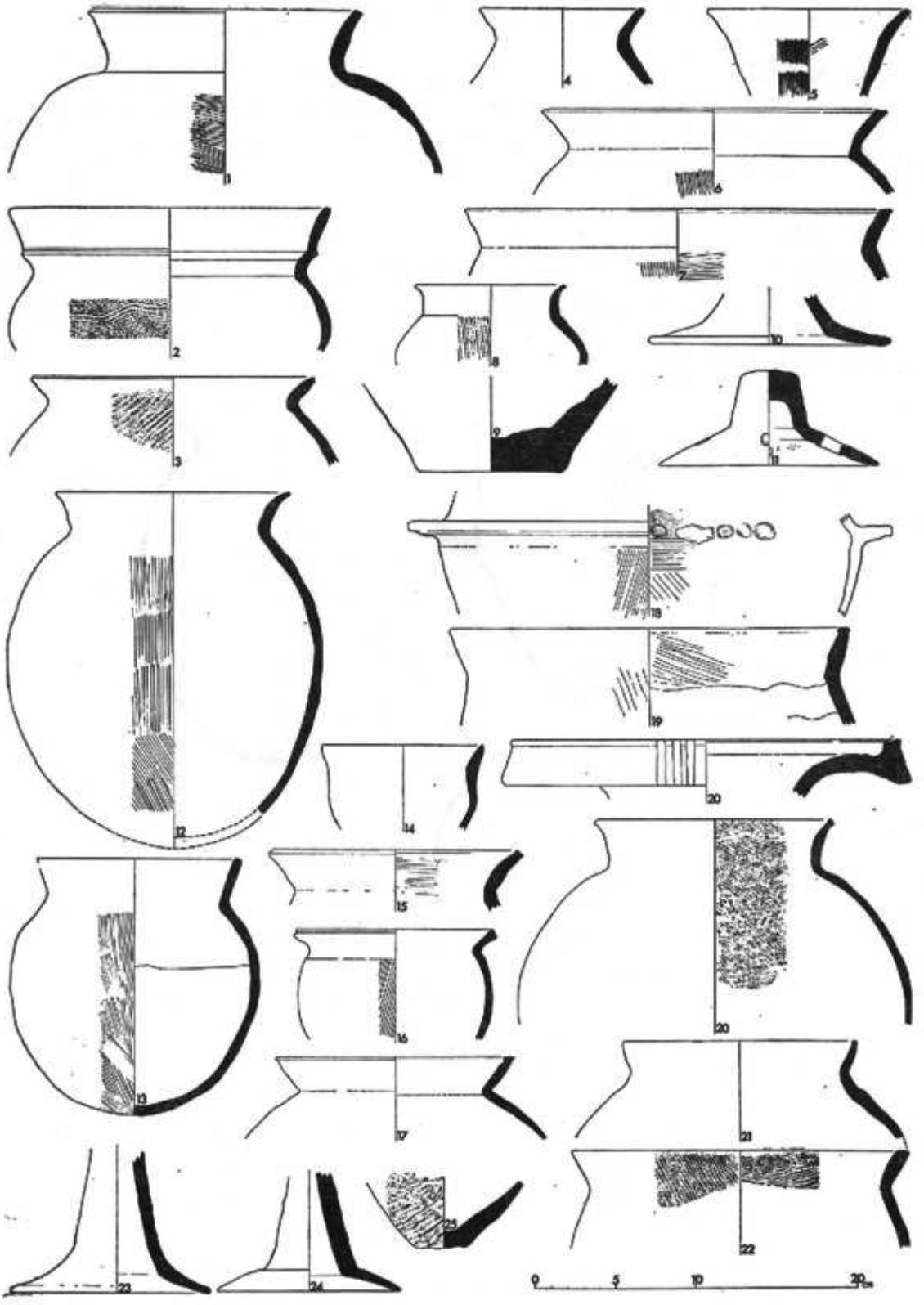
甕　C_3　（14・16）

胴部の張りが少ない小形の甕で、16は口縁端部をわずかにつまみ出している。胴部外面に斜方向の刷毛調整がみられる。

高杯形土器脚部（23～24）

比較的長い脚部と、脚端部が外反する形状を示すもので、脚部内面はいずれも篦削りを行っている。

甕底部（26）



第77図　6溝（20）・9溝（1～12）・14溝（13～19・21～26）土器

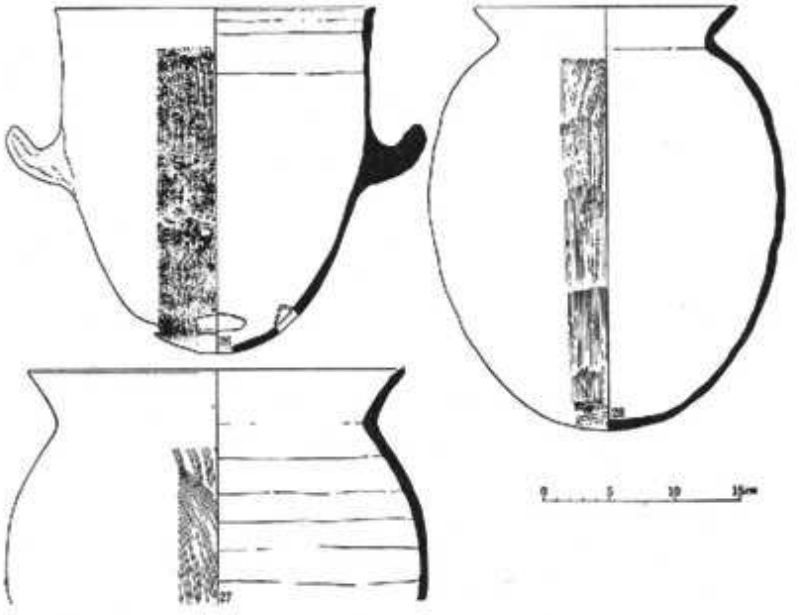
底部外面は叩目をもち、内面は篦削りする。

土 釜 (18)

土器断面は灰色を呈して硬質である。胴部外面に幅2㎝の鍔を有する。外面は斜方向の刷毛仕上げを行ない、内面に指頭圧痕がみられる。つばを貼付けるためになされたもので、鍔下半は横方向の刷毛目、さらに底部は斜方向の刷毛調整が行なわれている。

甑 (26)

口径24㎝ある。胴部は2方向に把手を有し、底部に3孔を穿つ。胴部外面は縦方向の刷毛で調整し、内面は上半が横方向、下半が縦方向の篦削りで仕上げる。内面上半に粘土紐の積上げ痕がみられる。



第78図 14 溝 土 器

第3節　南五反田B地区出土の遺物

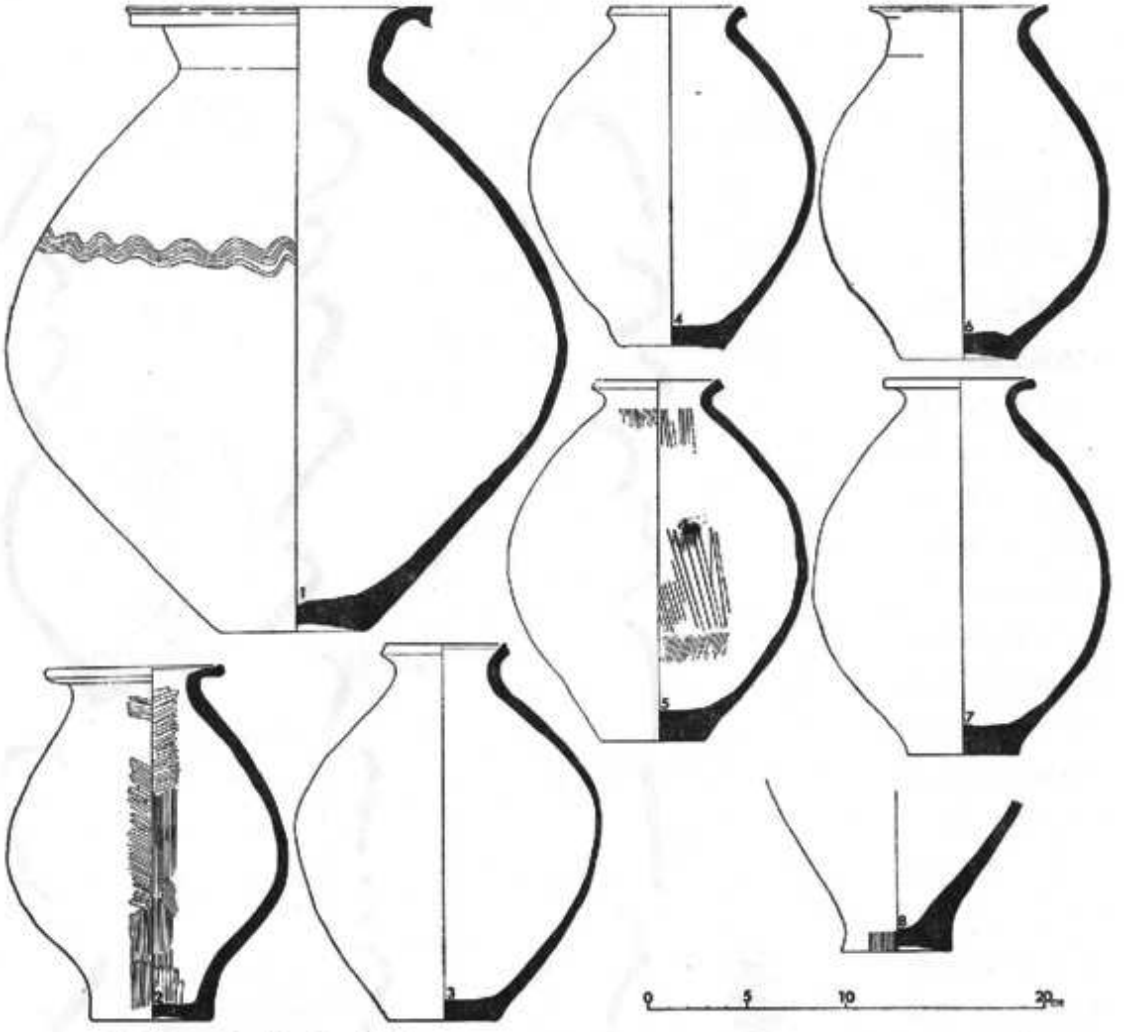
1. 土　坑（図版41）

土　坑

土坑5から出土した弥生式土器は、すべて壺形土器である。

壺形土器A

壺Aは、高さ31.8㎝、口径15.6㎝、胴最大径28.6㎝の大きさで、当土坑出土中最大のものであると同時に、他の小形土器とは形態を異にする。器体から短く直立した頸部をつけ、口縁は水平に外反させて、ヨコナデ仕上をおこなっており、ほんのわずか下腹部よりに胴が張っている。土器の外面は摩滅が激しいが、上腹部に7条の櫛描波状文をうっすらと認めることができる。



第79図　土 坑 5 土 器

壺形土器E

壺2は、ほぼ直角に外反する口縁をもち、下腹部が張っている。そして底部はぐっとしぼられて、筒状におさめられているのが特徴である。外面は、頸から胴にかけてヨコヘラ磨きで仕上げられ、下腹部から底部にかけては、縦篦磨きで仕上げられている。内面は、一番張りだした腹部を刷毛で、上方部と下方底部にかけては、篦磨きで仕上げられている。(2)

3～7については、胴部はきれいな球状を呈して、頸部で急にしぼられて、口縁がくの字形に外反する。これらの壺には何らの模様も施されておらず、内外ともにヘラ磨きで仕上げられている。5は、腹部中央を横篦磨きで、その上下は縦篦磨きで調整されている。

これらと同型式の土器は、あまり発掘例がなく、大阪府堺市の黄金山遺跡(3)、兵庫県川西市の摂津加茂遺跡(4)などで知られるにすぎない。

しかしながら、いずれの土器も器壁は、薄くつくられ、全面によく篦磨きされている。また壺Aにみるように、口縁部において横篦ナデ調整を認められる。このような土器製作上の技法は、第3様式の特徴をよく示しているといえる。この土坑の相対的時期は、第3様式（新）に比定しうるのではなかろうか。（浅岡）

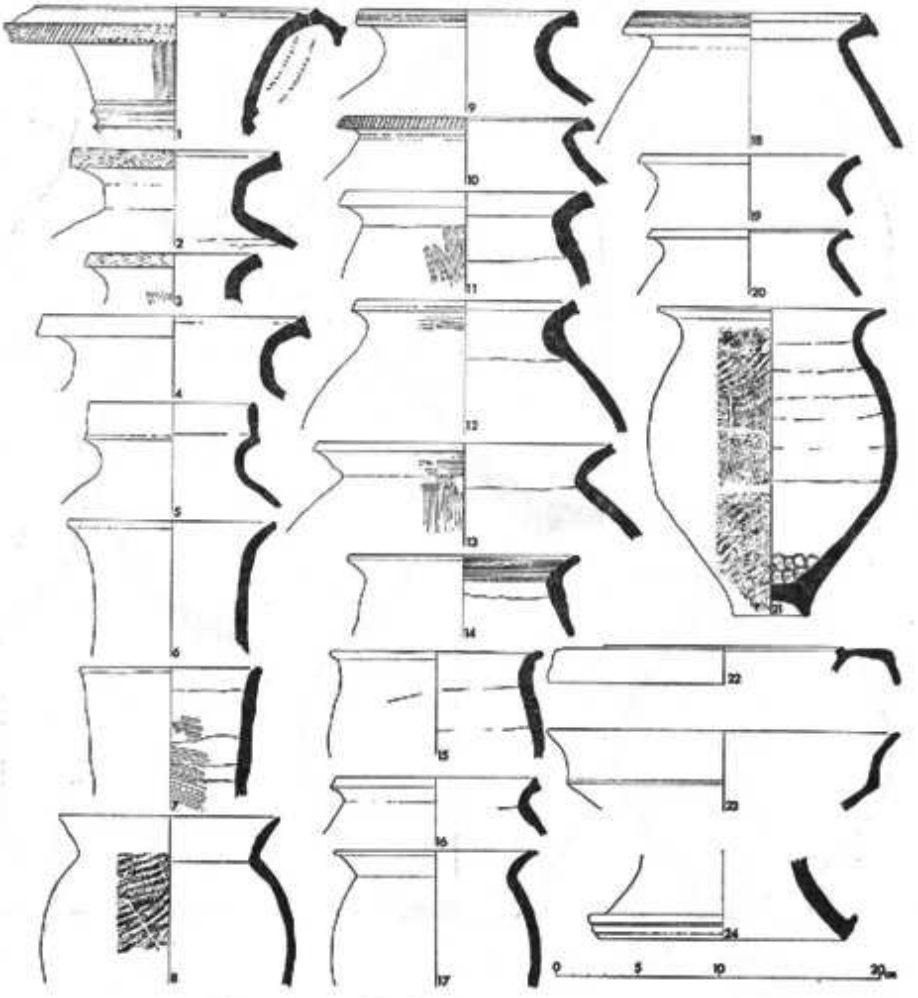
2. 溝遺構

（図版42・43―上）

16溝出土土器

壺形土器A（1）

弥生中期の土器で、1は口縁端部は外反して斜めに垂下する。端面には斜めの刻目がある。頸部は断面三角形の突帯をめぐらす。口縁部内面に2条の突帯があり刻目をつける。その間に2孔の小孔が3方にある。頸部は縦方向に刷毛目があり、頸部内面は篦磨きで調整される。



第80図　16 溝 土 器

壺形土器A（9）

外反する口縁端面に、3条の凹線文をめぐらし、器面、内外面ともに刷毛目で調整する。22溝出土の27の土器と同様の、壺形土器Aに分類できるものである。

壺　F（2～4）

筒状の頸部をもち口縁部が外反するもので、2は端面に2本の波状文を配している。外面は刷毛目調整で、内面は篦削りを行なっている。

4は幅広い口縁部が内傾し、端部はわずかに肥厚する。頸部は短い。

壺　G（5・6）

筒状の頸部をもち、口縁部がわずかに外反する。内外面は刷毛仕上で、7は内面に輪積の痕跡を残している。

甕形土器（10～18）

10・18は弥生中期後半の土器で、口縁端部は肥厚し、わずかに上方に拡がる。端面に10は刻目文・18は3条の凹線文で飾る。胴部の張りは強い。外面は刷毛で調整し、内面は篦削りによって仕上げる。

甕C_1（8・21）

21は頸部及び底部は叩目がよく残り、胴部は刷毛によって叩目が消されている。胴部の内面の上半は幅2㎝程度の粘土紐の輪積によってつくられ、底部は胴部下半にはめ込み、指でおさえてつくられ1㎝程度上げ底となっている。

甕C_2（12・13・16・20）

胴の張りが強く口縁部端面を上方につまみ出したもので、外面は刷毛目調整を行なう。内面は篦削りで仕上げる。

甕C_3（14・15・17・19）

いずれも小形で、胴部の張りは少ない。内面に輪積の痕を残す。外面は刷毛目仕上げを行ない、外面は篦削りで調整する。

高杯形土器B（22）

高杯B_3で口縁端面は無文で外面は篦磨き、内面は刷毛目で調整する。

高杯B（22）

内外面ともに篦磨きで調整する。

高杯形土器脚部A（24）

脚端部は方形状なし、外面は篦磨き、内部は篦削りによって調整する。本溝出土土器は、下層出土土器（1・9・10・18・22・24）が弥生中期後半の時期を示し、上層部出土土器は、古式土師器すなわち古墳時代前期の年代を示している。（樋本）

17溝出土土器（図版43～45）

第81図は最初保存が決定した時点で、17溝の幅、深さ、時期等を確認するために、調査範囲の南と北にトレンチを入れた際に出土した土器を図示したもので、層別にとり上げていない。(1) 第82～83図は、その後事情により17溝を全掘したものである。第82図は上層から出土した土器で、須恵器のみである。第83図は下層から出土した土器を図示したものである。

第81図　17 溝 土 器

南北トレンチ出土土器（1～25）

須 恵 器（1～4、18）

杯　身（1）

1のたちあがりは低く内傾気味にのび、口縁端部は稜をもつことなく丸くおさめる。受部はほぼ水平に外側にのびる。

2は口径10.5㎝、器高4.2㎝である。底部は糸切底である。3は口縁端部が外反する。色調は灰褐色である。口径12.6㎝である。

杯　蓋（18）

天井部と口縁部を分ける、非常ににぶい稜がみとめられる。口縁端部は丸くおさめ、天井部は扁平におさめる。口径14.5㎝である。

土師器（5～16、19～24）

甕形土器（7、8）

7、8とも口縁部が外反する甕である。7は口縁部が著しく外反し、口縁端部に稜をもつ。器体は外面を刷毛で調整し、内面は篦削りで成形している。8は7に比べて口縁部の外反はきつくなく、口縁部は内傾し、内面に稜をもつ。

壺形土器（5、9、10、19、24）

19は直立する頸部から、急にきつく外反する口縁部をもち、内面に稜が生じる。口縁部はわずかに上下に肥厚し、上下端に鋭い稜をもつ。口縁部は内外ともヨコナデ調整をほどこし、頸部は内外とも篦で丁寧に磨いている。胎土には著しい砂粒を含み、色調は薄褐色である。

10は口縁部が短く直口する壺である。口縁部外面には荒い篦状のものによる、線状のものがみとめられる。内面は指頭によって粘土をひきのばしている。胎土は砂粒を含み、色調は暗褐色である。

24は内面に荒い篦削りの痕がみとめられ、外面は刷毛目がみられる。

高杯形土器（11～17、20～23）

高杯は2形態に別れる。(1)杯部に稜をもち、稜からゆるやかに外反するもの(12、21、22)である。(2)杯底部から口縁部まで稜をもつことなく外反するもの（20、21）である。

11は杯部2と中空の柱状部から下方にきつくひろがる脚部をもち、内面に鋭い稜をもつ。また脚端部にも鋭い稜をもつ。杯底部の内面は、中央にて少しふくらみ、器厚は厚くなる。杯部下半、柱状部外面には刷毛目の痕がみとめられ、柱状部内面には絞り目の痕がみとめられる。杯部内外面、脚部外面に丹塗の痕をみとめる。口径19.7㎝、推定器高14.8㎝、脚径10.6㎝である。

12の杯部の稜はあまりきつくなく、口縁端部にて短く外反する。

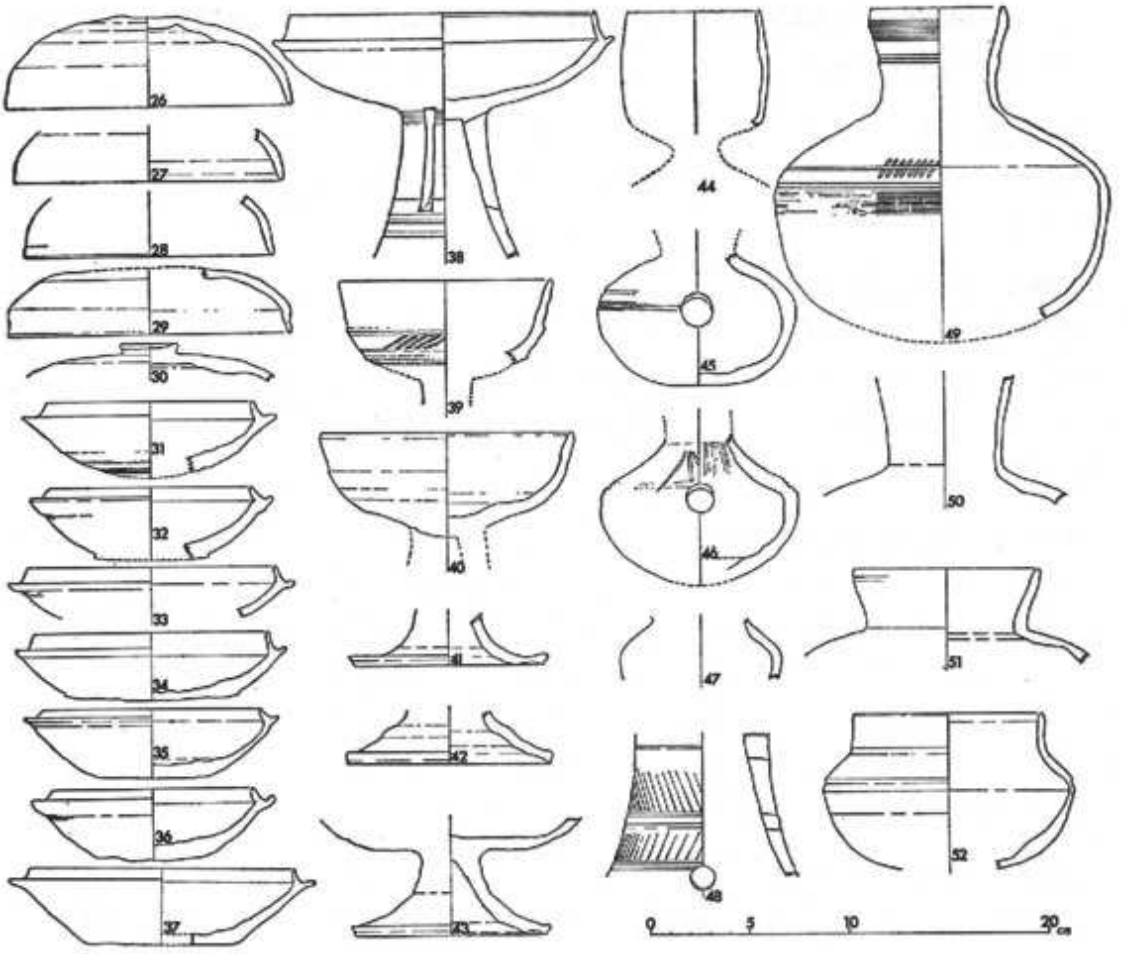
22は杯部に鋭い稜をもち、22の脚部は胎土、色調から23であると思われる。脚部はゆるやかに下半にのびる柱状部から、やがて2回にわかって急に下方にひろがり、内面には2ケ所に稜が生じる。脚内面は篦削りで成形している。

20は杯底部はほぼ水平をなし、杯部が上方にのびる。脚柱は下方に少し広がり、さらに裾にて大きく広がる。脚内面は篦で削るために、内面に稜が生じる。

17の脚は丸い円孔をうがつ。

上層出土須恵器（26～52）

杯　身（31～37）



第82図　17溝上層須恵器

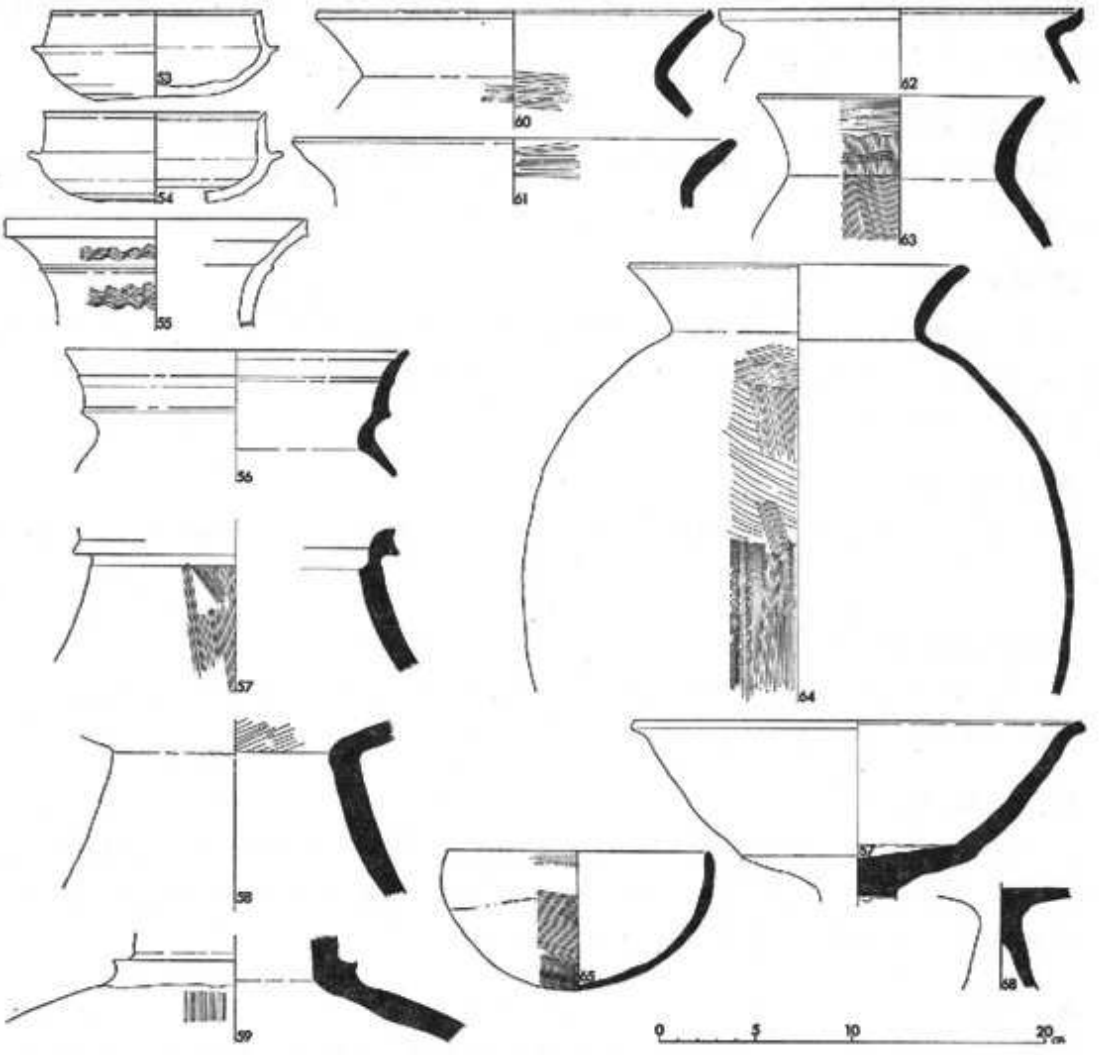
杯身のたちあがりは低く、大きく内傾する。口縁端部は丸くおさめられている。受部はかなりきつく上向きに外側にのびる。受部上面に篦による凹線をもつものがある。底部は丸味をおびる31と、平たくおさめている32、34～37がある。後者には杯部と体部の境界が非常に明瞭で段が生じる32、34と、底部と体部の境界を篦で削り、稜をもつ35、36がある。35、36には外面に巻き上げの痕がみとめられる。

杯　蓋（26～30）

天井部に中くぼみのつまみがつく30と、つまみをもたない26とがある。天井部と口縁部を別ける凹線、稜をみとめられない26、27、28と、にぶい稜がわずかにみとめられる29とがある。26の天井部は丸味をおびてつくられている。26～28の口縁端部は丸くおさめられる。29は口縁端部が短く外反し、にぶい稜が生じる。26、27の篦削りの方向は順回りである。

有蓋高杯（38）

杯部のたちあがりは内傾し、口縁端部は丸くおさめられている。受け身はわずかに上向きに外側にのびる。脚部は長脚2段透しであると思われる。上段と下段の透しを別ける部分に、2条の凹線をめ



第83図　17溝下層土器

ぐらしている。上段の透しは3方にある。脚部にはカキ目をめぐらす。口径15.8cmである。

無蓋高杯（39～43）

39は杯部口縁部と底部を、稜と櫛描列点文によって別けられる。40は杯部と底部の境界ににぶい稜をもつ。

台付椀（44）

体部しか残存していないが台付椀と思われる。椀底部と体部との境ににぶい稜をもつ。口径7cmである。焼き、胎土も良好である。

瑞　（45～47）

体部は肩に凹線をめぐらす40、45と単にまるくおさめている47とがある。45の底部は平たくおさめ

られている。46の肩部にヘラ記号をもつ。46には内面に絞り目の痕がみとめられる。45にはカキ目が若干部分であるがみとめられる。

短頸壺（49）

短かく直線的に上方にのびる口縁部をもつ。体部は肩のはりがきつく、肩部に篦による凹線をめぐらす。

長頸壺（50）

口頸部は直接的に上方にのびるが、その上部はわずかに内弯する。口頸部には篦による凹線をめぐらし、またカキ目をもつ、体部には篦による2条の凹線をめぐらし、凹線上に櫛描列点文をほどこす。凹線下にカキ目をもつ。

直口壺（51）

口頸部は上方に直接的にのび、口縁端部は単に丸くおさめられている。体部の肩のはりはかなりきつい。

下層出土土器（53～68）

63～65、67の土師器と53～54の須恵器は同一層に重なり出土し、同一時期として取り扱うことのできる出土状態を示していた。

杯　身（53、54）

たちあがりは内傾気味に上方にのびる53と、直接的にのびる54がある。口縁端部はともに内傾し、内面に浅いくぼみを有し、稜が生じる。受部はやや外上方にのびる。底部は扁平な感じにおさめる。篦削りの方向はともに逆回りである。胎土、焼きとも良好である。

甕　（55）

口頸部は朝顔状に外反する。口縁端部は上下に鋭い稜をもつ。口頸部に突帯をめぐらし、突帯の上下に櫛描波状文をめぐらす。口径15.4cmと小型の甕である。焼成、胎土とも良好である。

土師器（56～68）

甕形土器（60～64、65）

甕は2形態に別れる。(1)頸部と口縁部の境に突出した鋭い稜をもち、稜より上方に外傾気味に口縁部がたちあがるもの（56）である。(2)口縁部が外反するもの（60～63）である。

甕1の56は口縁部をヨコナデで仕上げる。内面は頸部から篦削りで成形している。

甕2の64はかなりきつく外反し、口縁端部に稜をもつ。器体外面は刷毛目で仕上げる。刷毛目原体には2種類あり、その方向にも縦方向、斜下方向に変化がある。内面は篦削りが顕著で、器厚は薄く仕上げる。胎土には砂粒を含み、色調は明褐色である。口径は17.4cmである。

63は64に比べて、外反度はかなりゆるやかである。口縁上半の内外面ともヨコナデ仕上げ、口縁部下半から器体にかけて刷毛で仕上げる。内面は頸部下から篦削りで成形する。

62は口縁端部が上方に拡張し、63、64より古い甕である。

高杯形土器（67、68）

67は杯部ににぶい稜をもち、稜の部分には粘土の継ぎ目がみとめられる。稜より上方にゆるやかに外反する。口縁端もまた短かく外反し、口縁端部には稜が生じる。全体を丁寧に篦で磨いて仕上げる。胎土には砂粒を含み、色調は薄褐色である。焼きは良好である。

椀形土器（65）

口縁部は内弯気味にのびる。口縁端は内外ともヨコナデで仕上げ、その下半全体を、外面は刷毛で仕上げる。内面は篦削りで成形する。

壺形土器（57～59）

57、59は頸部下端に凸帯文をもつ壺である。58は明褐色で、全体を丁寧に篦で磨いて仕上げる。

17溝上層の須恵器は森浩一氏の編年に従うと、Ⅲ型式後半（6世紀後半）に比定できる。17溝はこの時期をもって、その機能を放棄したものである。下層の須恵器はⅠ型式後半（6世紀初頭）に属し、63～65、67の土師器もこの時期に比定できる。下層にはこれより古い時期の56～59、62があり、弥生時代後期からの壺に近い形態のものもあるが、これらを一括して古式の土師器とした。56の二重口縁の甕は20溝にもあるが、その外開きに上方にのびる口縁部の形態は、京都府八軒屋遺跡[3]の甕にもっとも近い形態をとる。（山本）

註

(1) 2および3は17溝を掘る際の排土、もしくは床土の遺物である可能性が強く、17溝のものとは考えられない。

(2) 森浩一「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』30号、昭和37年。

(3) 山田良三「山城八軒屋土師遺跡調査報告」『古代学研究』34　昭和38年。

18溝遺物（図版46）

18溝から出土している遺物は、土師器と須恵器がある。

土師器（5・6）

この18溝からの土師器の出土品は、皿2個のみである。径10cm、高さ1.5cmの小さな皿である。

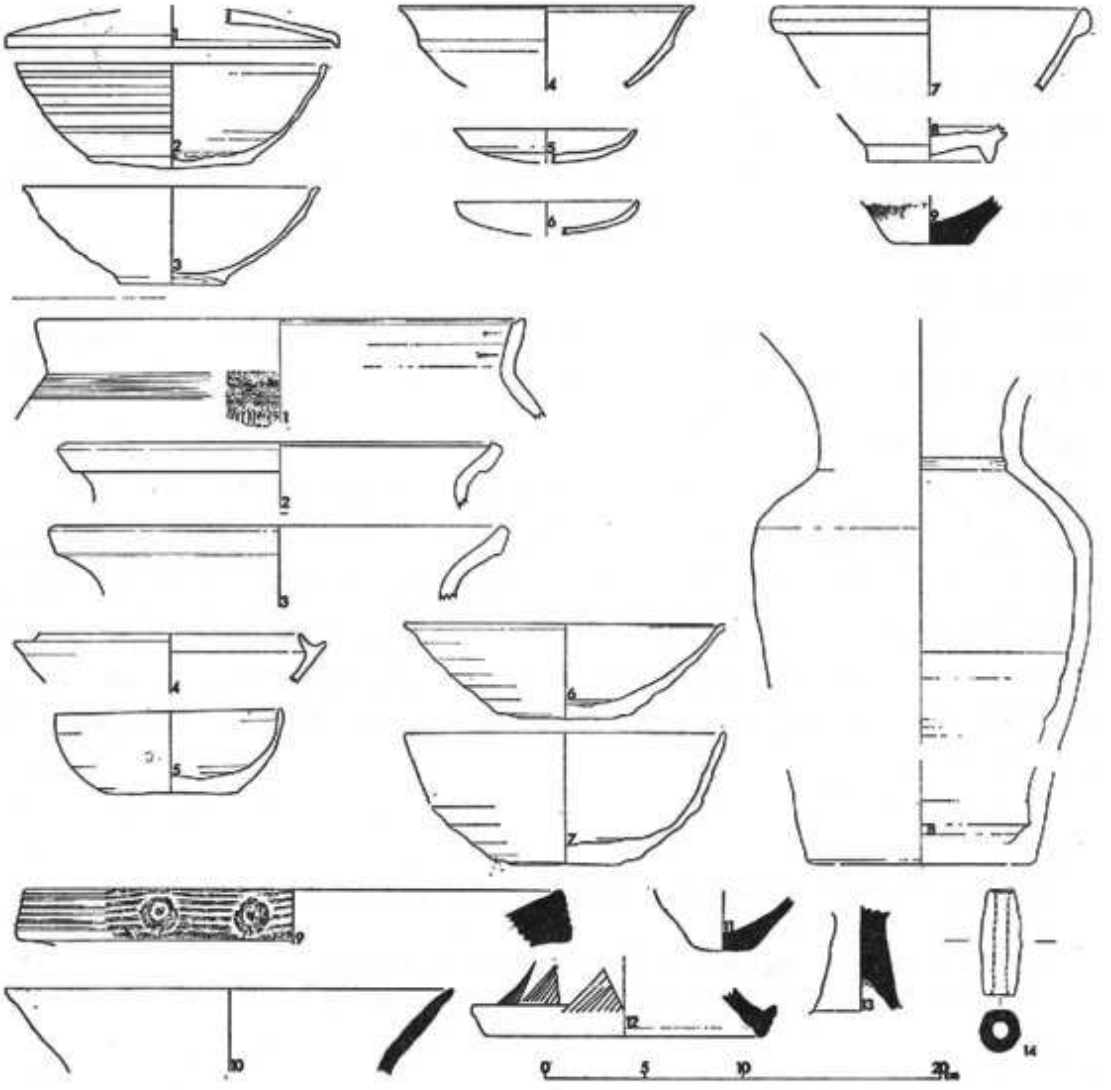
須恵器（1・2・3・4・7・8）

18溝から出土した須恵器の器種は、蓋、椀、甕である。

蓋　（1）

この蓋は、第Ⅳ型式の時期にあたるもので、8世紀の後半に比定される。

椀　（2・3）



第84図　18溝・19溝土器

口径15cm、高さ5cmである。内外面ともロクロ引きの痕を残し、底部はロクロ廻転による糸切り底である。

甕　（7）

口径16cm、高さ不明の小型の甕である。

19溝の遺物（図版46）

19溝中から出土している土器は、弥生式土器、土師器、土錘、椀、鉢、甕、壺、杯類である。

杯　（4・5）

第4は口径13cm、高さ不明、立ち上りは内傾し非常に低い。立ち上りを持つ杯の終末に近い形態で

小型である。

5は杯で、口径11cm、高さ4cmで、底部はお厚い。この土器は明石市高丘第6号窯からも、同形式のものが出土している。

椀および鉢（6・7）

この土器は、内外面ともロクロ目を明瞭に残し、底部は、ロクロ廻転による糸切り底である。

甕　（1・2・3）

口径20cm以上のもので、中型に属するものである。

土　錘（14）

長さ6cm、径1cmのものである。穴は両面からあけている。

壺　（8）

底部の径11cm、後円部は欠損しているので完全な高さは不明であるが、約30cm前後であろう。造りは、ロクロ引きである。　（大村）

第4節　落久保A地区出土の遺物

1. 土　　坑

土坑7　出土土器

壺形土器A（1～18）

24溝の壺Aは、壺A_2の形状を呈するものが大多数である。 5の口縁端部は肥厚するのみで終っている。

壺A_2には口縁径が40cmを超える大型のもの（10）と10cm以内の小型のもの（1）とその中間の口径をもつものに分けられる。中間のものも15～17cm前後のもの（6、7等）と20cmを超えるもの（8、14等）に分けることができる。口径の大小は、口縁端面の幅の広さおよびそこにほどこす凹線文の条数との関係をもつ。1は口縁端面に浅い凹線文を両端に2条めぐらすのみである。大型・中型の土器の凹線文の条数とは大きな変化をみない。

壺A_2には口縁端面に3～5条の幅の狭い凹線文をめぐらすものが大多数であるが、8の壺A_2のように大きく垂下する端面に9条の幅の狭い凹線文をめぐらすものがある。口縁端面の凹線文上には棒状浮文、円形浮文、篦描斜線文で加飾するものとそうでないものとがある。篦描斜線文と棒状浮文で飾るときは、必ず斜線文を先に施し、その上に棒状浮文を則り付ける。棒状浮文は1本単位を間隔をおいて並べるもの（6、8、17）と3本を1単位として間隔をおいて並べるもの（7、13）と5本を1単位として間隔をおいて並べるもの（9）とがある。円形浮文は連続して並べるもの（14）と間隔をおいて並べるもの（15～17）がある。10は口縁端面に5本の棒状浮文と円形浮文を間隔をおいて繰り返す。

口縁部内面は凸帯文をめぐらすもの（3、7等）と無文のものとがある。凸帯文は断面三角形凸帯文である。その上に刻目文をもつもの（7、9）もある。7は紐孔をもつ。

頸部の文様は、断面三角形凸帯文（3、10）指頭圧痕文凸帯（16）、凹線文（12、15）の3種類がある。

無文のものもある。頸部外面は多くは刷毛調整で仕上げているが、篦磨きで調整しているもの（6）もある。内面は横方向にこまかい篦磨きで調整している。

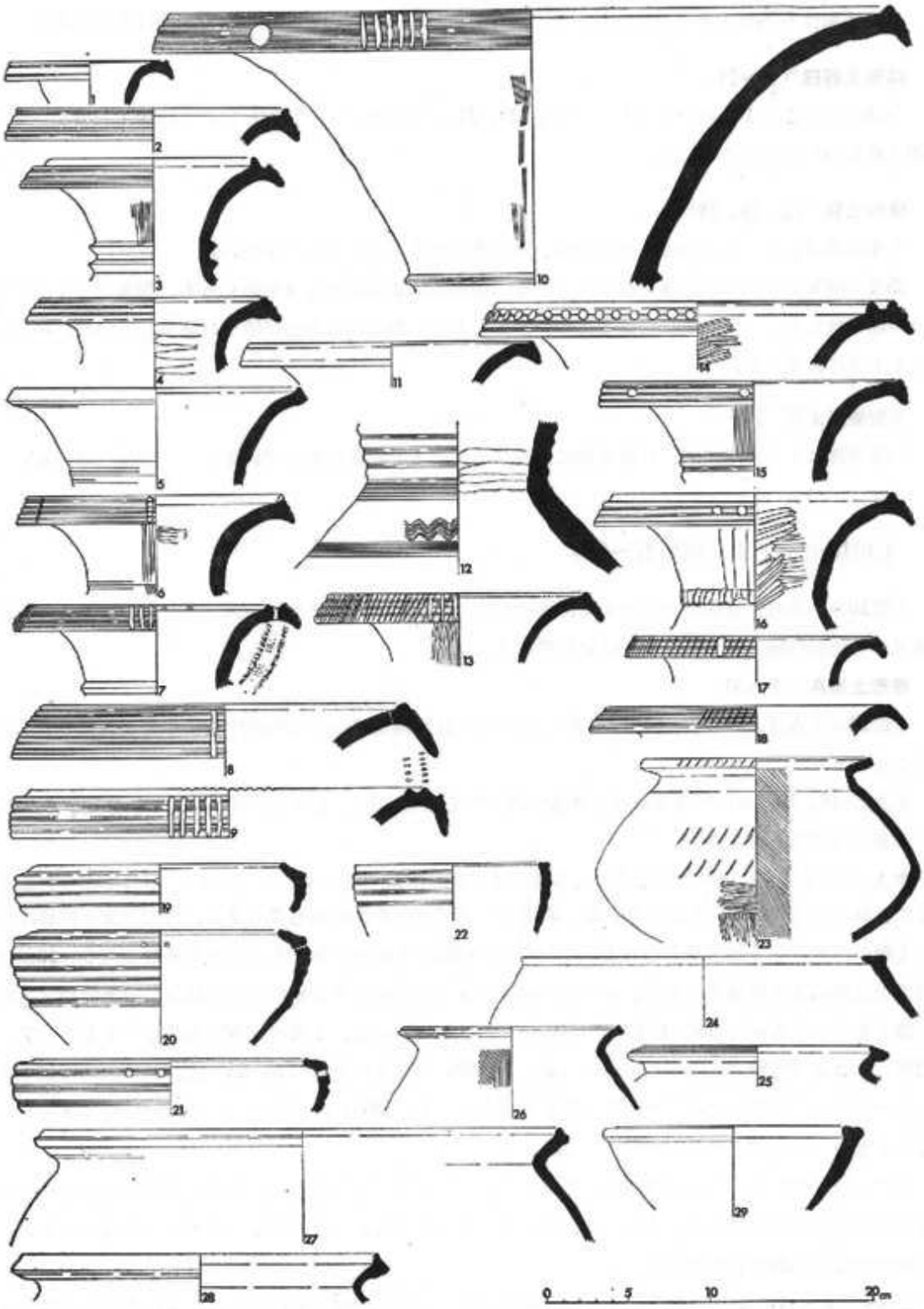
壺形土器C（22）

22は口縁部に4条の凹線文をめぐらす。

壺形土器D（23）

23は口縁端面に篦描刻目文を連続してめぐらし、胴部には2段に篦圧痕文を連続してめぐらす。胴部下半は篦磨きで調整し、内面は刷毛調整している。口縁部、頸部下1cmをヨコナデ調整している。

壺形土器F（24）



第85図　土 城 7 土 器

口縁端部は内側に水平に若干張り出す。全体に磨滅がはげしいため調整、整形痕は不明である。

鉢形土器B（19～21）

口縁直下に2対1孔の紐孔をあけている(20、21)。口縁直下から体部にかけて凹線文をめぐらす。20は6条の凹線文をめぐらす。

甕形土器（25、26、28）

全体に磨滅しているために細部の調整、整形痕にわたって不明な点が多い。

25は口縁端部を上下に大きく拡張する。その端面には3条の凸線文をめぐらす。頸部は「く」字形の頸部ではなく、「コ」字形の非常に短い頸部をもつ。26は体部外面に刷毛目調整している。28は大きく上方に拡張する。

大型甕形土器（27）

口縁端部は上下に張出す。口縁端面にはヨコナデによる凹線が生じている。（山本）

土坑10出土土器（図版47～50）

土坑10の土器は、遺構の説明ですでに述べたように、すべて第2層から出土したものである。堆積状況から比較的限られた時期の一括資料である。

壺形土器A（1～31）

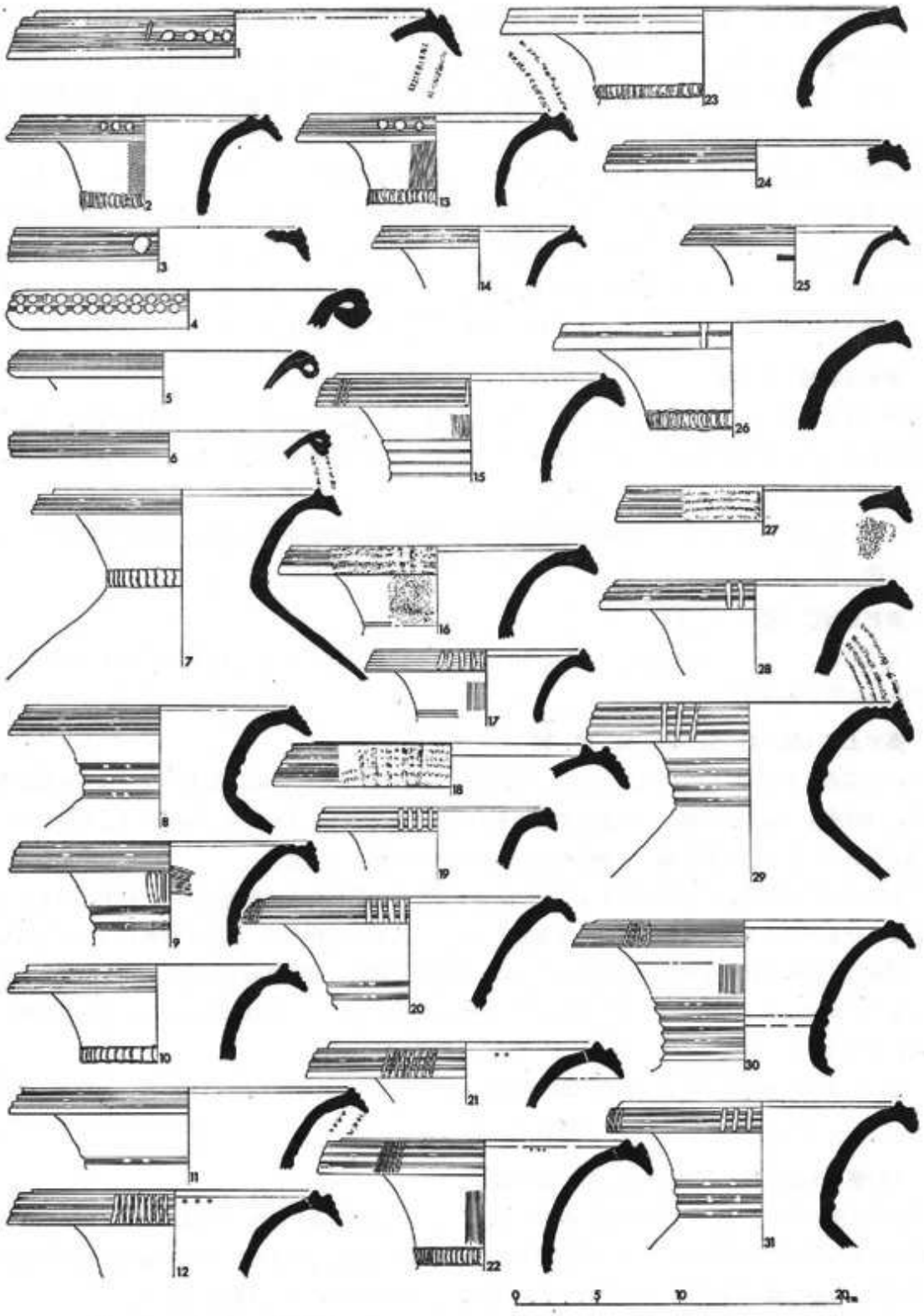
土坑10の壺Aは、壺A_2が圧倒的に多く、このことは川島遺跡の弥生時代中期後半の壺Aにも共通することである。

壺A_1（17、19）の口縁端面には、3条の凹線文をめぐらし、その上に棒状浮文で加飾でする。17は頸部に文様をもたない。

壺A_2の口縁端面にはすべて3条から5条の巾の狭い凹線文をめぐらしている。口縁端面の凹線文上に、棒状浮文を加えるもの（20、22、31等）と円形浮文を加えるもの（2）、円形浮文と棒状浮文を1組の単位として加えるもの（1）とがある。棒状浮文のみを加えるものが大多数である。18は凹線文上に篦による斜線文を加え、さらにその上に5本を単位とする棒状浮文で飾る。端面凹線文上に斜線文をもつ壺A_2は、18の1点だけである。口縁部内面には、1条の凸帯文をめぐらすもの（7、22等）、3条の凹線文をめぐらすもの（3、9、29）と無文のもの（8、11）とがある。凸帯文をもつものが多い。凸帯文の上に連続刻目文をもつもの（7、22等）の頸部には、指頭頭圧痕文凸帯をめぐらすもの（7、22等）が大多数である。

頸部と口縁部内面の文様の関係は、口縁部内面に凹線文をもつものは、頸部にも凹線文をもち、頸部下端に指頭圧痕凸帯文をもつものは、内面に凸帯文をもち、その上に刻目文をつけるものが多い。この傾向は土坑20でも指摘できる。

壺A_3は4～6の3点のみである。口縁端面には巾の狭い凹線文をめぐらし、4はその上に円形浮文で加飾する。



第86図　土 坑 10 土 器 (1)

壺Aの整形は、口縁部全体および頸部上端をヨコナデ調整し、頸部外面は大多数を刷毛目調整し、まれに篦磨きで仕上げているものがある。頸部内面は、すべて横方向に篦磨きが行なわれている。

胴部の文様および整形[1]は、(1)胴部外面上半を刷毛目調整し、胴部中央に篦圧痕文、貝殻腹腹圧痕文で飾り、その下を横方向に篦磨きし、さらにその下方を縦方向に篦磨きを行なっている。内面は全体を刷毛調整するものと、胴部上半を刷毛調整し、下半を篦削りで整形[2]しているものがある。後者の篦削りは、外面の篦磨きと対応するかのように、胴部中央をヨコ方向に篦削りし、その下方を縦方向に篦削りしている。篦圧痕文と貝殻腹腹圧痕文の割合は 3：1 である。(2)胴部外面を櫛描文で飾るものである。その中には、櫛描直線文、同波状文、円形浮文等で飾るものと櫛描斜格文と同直線文、円形浮文で飾るものとがある。外面整形は(1)と同じである。胴部破片では(1)が大多数である。

壺形土器B（32、38）

38は曲折してたちあがる口縁部が内弯している。32は口縁部が内弯することなく直口している。口縁部外面には、3条の凹線文をめぐらす38と無文の32とがある。頸部下端には、指頭圧痕文凸帯をめぐらす。

壺Bの整形は、両方とも頸部外面は刷毛調整し、内面は刷毛調整の32と指頭によるおさえで終っている38とがある。

壺形土器C（39）

39は壺C_2である。口頸部外面には4条の幅の広い凹線文をめぐらし、口縁端面にはヨコナデによる浅い凹線が生じている。

甕形土器（40～46、56～61、54、62、50）

口縁端部は肥厚し、さらにわずかに上方に拡張するものが通常である。61は口縁端部の拡張が強い。口縁端面はヨコナデ調整したまま無文のものが大多数である。文様をもつものには、幅の狭い凹線文をめぐらすもの（55、61）と連続刻目文で飾るもの（62）とある。

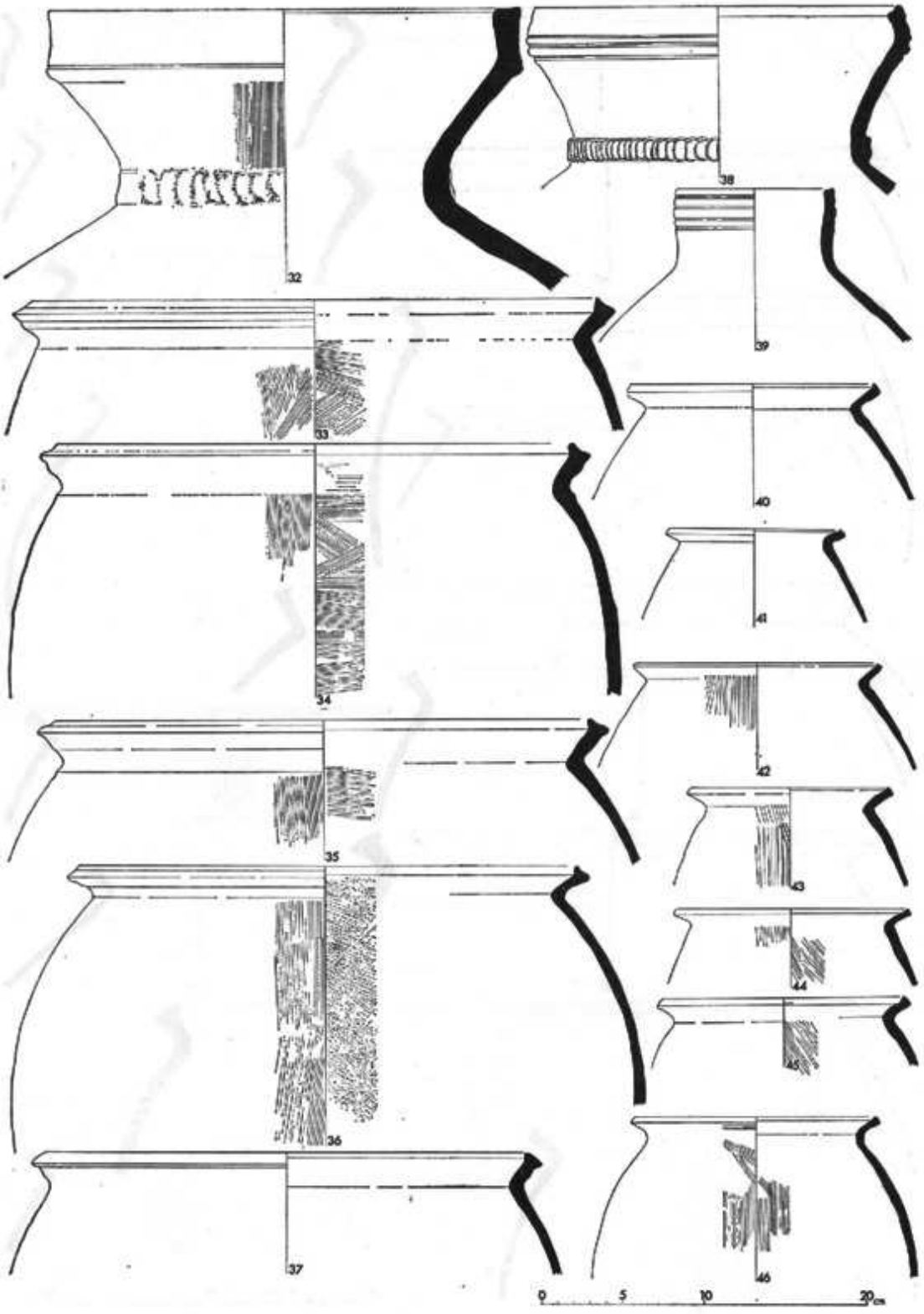
ヨコナデの範囲は、口縁部全体および内外とも頸部下1㎝前後のものが多く、それ以上におよんでいるものもある。その他の整形は、残存部分では内外とも刷毛調整する。通常胴部外面は縦方向に刷毛調整し、内面は斜め方向に刷毛調整している。刷毛目原体は、原体そのものが太く、その間隔も広いもの、原体が細く間隔も狭いもの等数種類の原体を使用している。甕の胴部を見ると外面は篦磨きを、内面は篦削りを行なっている。

甕の口径は15㎝前後のものが多く、20㎝を超えるものもある。61は胴部の張りが強く、胴部は球形に近くなると考えられ、短頸壺となる可能性が強い。

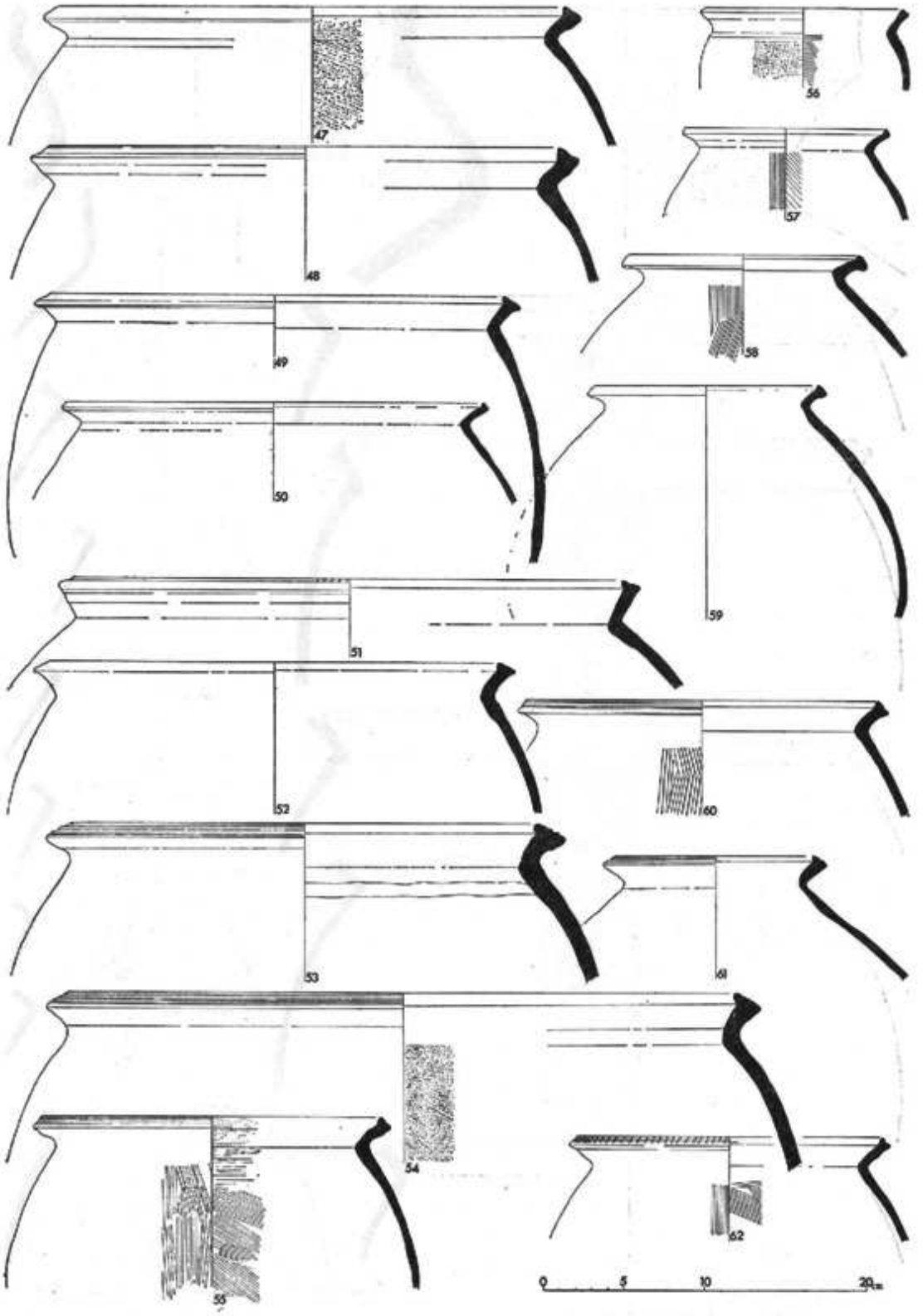
大型甕形土器（33～37、47～55、63～65、67）

口縁端部は上下に張出すもの（35、37等）と、上方のみに拡張著しいもの（54、64）とがある。前者の方が大多数である。口縁端面には、幅の狭い凹線文を数条めぐらすもの（60、61等）と連続刻目文で飾るもの（51）以外は、無文でヨコナデ調整によって整形されたまま終っている。

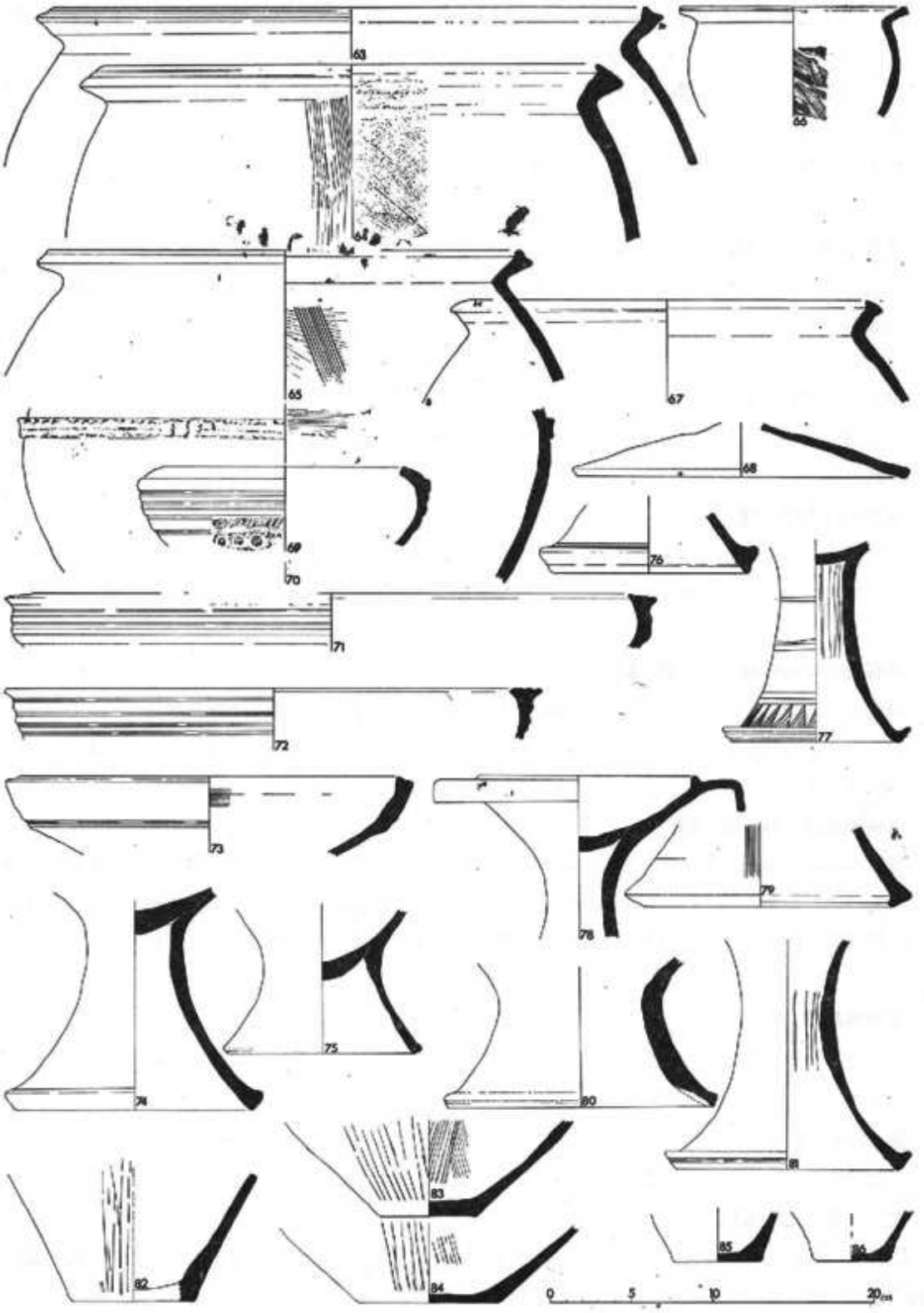
ヨコナデの範囲は、外面は頸部下2㎝内外に、内面は頸部下2㎝から4㎝内外におよんでいる。大



第87図　土 坑 10 土 器 (2)



第88図　土 坑 10 土 器 (3)



第89図　土坑10土器 (4)

型甕の胴部上半外面は、縦方向に刷毛目調整し、内面は斜め方向に刷毛目整調しているものが通常で、これは甕と同様である。通常外面に比べて内面の刷毛目の方が、目があらい原体を使用している。大型甕は口径は30～35cm程度のものが多く、40cmを超えるもの（54）もある。

鉢形土器B（69）

鉢Bは、口縁下に4条の幅の広い凹線文をめぐらし、凹線文上に篦圧痕文をほどこし、さらにその上を円形浮文で加飾する。

大型鉢形土器（71、72）

直口する杯部をもつ。杯部の形態は鉢A、と同様である。口縁端部は上下に拡張する。71、72は口縁端面に幅の狭い3条の凹線文をめぐらしており、口縁下には数条の幅の広い凹線文をめぐらす。現存する部分では、内外ともヨコナデ調整を行なっている。

高杯形土器A（73）

口縁部は斜方向にひらく。口縁端面はヨコナデ調整による浅い凹線を生じている。口縁下には1条の凹線文をめぐらす。

高杯形土器B（78）

78は高杯B_3に属す。口縁部端面は無文である。78は口縁部をヨコナデ調整し、杯部内外面とも篦磨きで仕上げる。脚部外面は縦方向に篦磨きで内面は絞り目を残し、その下を横方向に篦削りで整形している。

高杯形土器脚部A（76、77、81）

脚部は内弯している。77は脚台部端面に3条の凹線文をめぐらし、脚部下端に篦描沈線文による鋸歯文を配し、筒状部には篦描平行直線文をめぐらす。81は脚端面にヨコナデによる凹線をもつ。

脚外面は篦磨きをおこない、内面は絞り目を残し、その下方を篦削りで整形している。

高杯脚部B（74、75、80）

脚部の高さが脚高の$\frac{1}{3}$前後のもの（75）と脚部の高さと底径が等しいもの（74）と高さが底径を超えるもの(81)がある。これは脚Aにも言えることである。74は筒状部に篦描平行直線文をめぐらす。74、75は篦削りが絞り目を残すことなく脚全体におよんでいる。外面は脚部Aと同様篦磨きで整形している。

高杯脚部C（79）

外面を刷毛目調整をおこなう。内面は不明。これは脚部ではなく鉢形土器になる可能性が強いと考えられる。

蓋形土器（68）

径21cmの壺の蓋である。外面は篦磨き、内面は篦削りで整形している。

底　部（82～86）

83、84は壺形土器の底部である。外面は縦方向に篦磨きし、内面は刷毛で整形している。82、85、86の甕形土器の底部である。内面は篦削りで整形している。（山本）

註

(1) 胴部破片では壺Dとの区別が困難で、ここに壺Aの胴部として記述するものの中にも壺Dの胴部となるものもあると思われる。

(2) 壺棺出土土器の壺Dが内面を箆削りしており、内面箆削りしているものは壺Dとなる可能性が強いが区別が困難なのでここに記述した。

(3) 「大和唐古弥生式遺跡の研究」第34図423、424「弥生式土器集成」91、42、104等にその実例がある。

土坑11出土土器（図版51―上）

土坑11から出土した一括資料である。土器は破片が多かった。

壺形土器A（1～5）

口縁端部は壺A_2の形態を呈す。口縁端面は、4～5条の凹線文をめぐらし、その上に斜線文で加飾するもの（1、4）がある。さらにその上に円形浮文（4）と棒状浮文（1、2等）を貼りつけている。内面は断面三角形の凸帯文を貼り付けるもの（1～4）と凸帯文をもたないもの(5)がある。4は頸部に断面三角形凸帯文を2条めぐらしている。5はおそらく頸部に文様をもたないと思われる。2は紐孔をもつ。

高杯形土器B（6）

口縁部は斜方向にひろく、杯部外面に1条の凹線文をもつ。（山本）

土坑12出土土器（図版51―下）

壺形土器A

土坑12の壺AはA_1に属すると考える。3は壺A_2に近い形状を示す。口縁端面に3～4条の凹線文をめぐらす。3は凹線文上に棒状浮文を加え、頸部には凹線文、凸帯文で飾ることなく、頸部下端にまでヨコナデ調整で仕上げている。3のように頸部の短い壺Aには文様をもたないものが多い。口縁部内面は無文である。豊かに胴が張り、櫛描波状文、直線文を交互にめぐらす13は壺Aの胴部と考えられる。

壺形土器B（4）

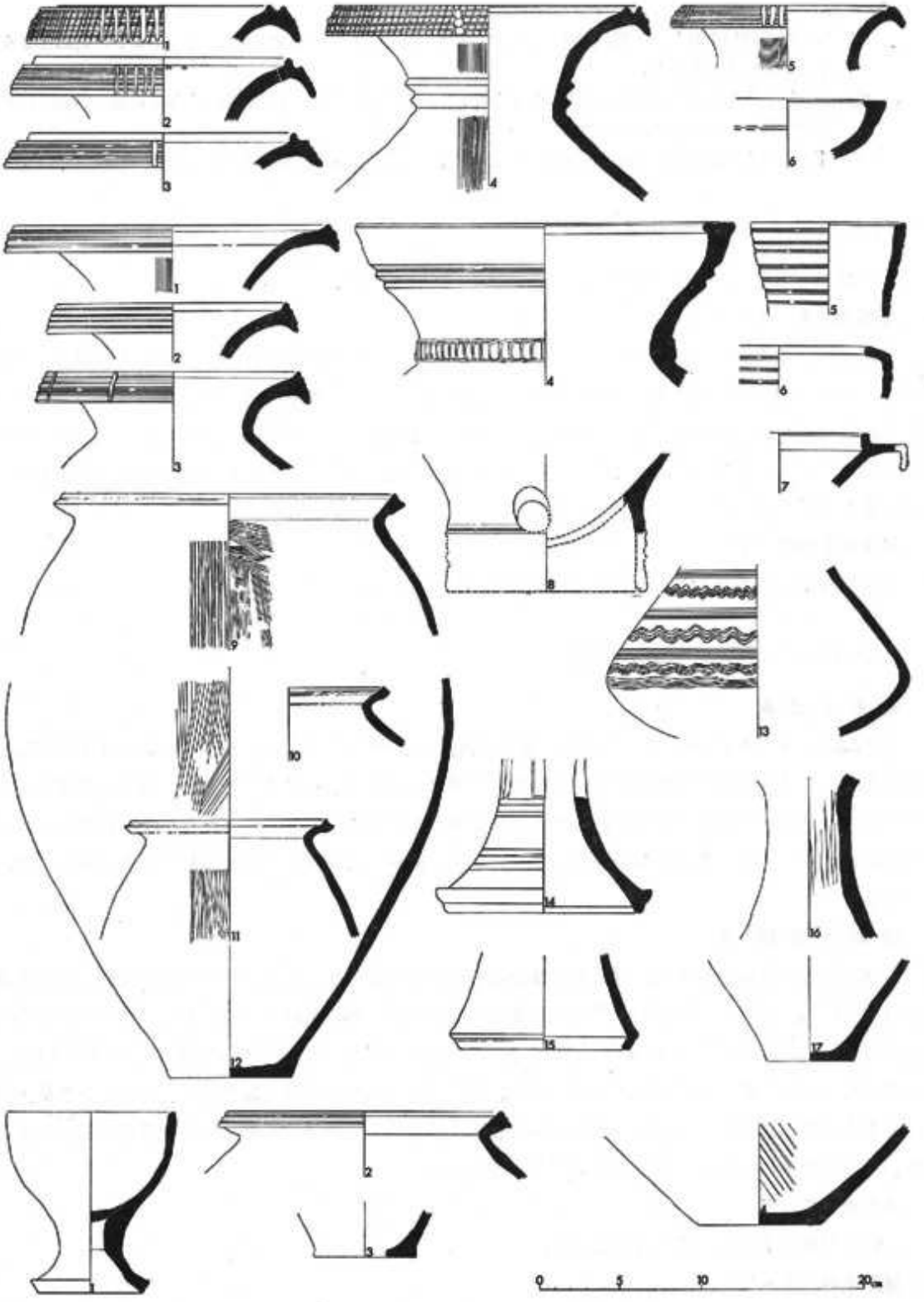
口縁端部は内外に拡張する。口縁部に2条の凹線文をめぐらす。頸部下端には指頭圧痕文凸帯を貼り付けている。色調、器厚等から考えて、4の胴部と考えられるものがある。胴部は豊かに胴の張った球形を呈し、胴部上半に櫛描波状文、同直後文を交互に飾り、その下に櫛描斜格文、直線文を配し、貝殻圧痕文を最下帯としている。器体下半は、貝殻圧痕文下を横方向に箆磨きし、その下方を縦方向に箆磨きで整形している。胴部上半は内外とも刷毛目調整している。壺Bは一般に飾らない壺[3]であるが、上記のように壺Aと共通の文様で飾るものがある。

壺形土器C（5）

口縁部外面に7条の凹線文をめぐらす。

甕形土器（9～12）

口縁端部は肥厚し、さらに上方へ拡張する。9の胴部は内外面とも刷毛調整する。12の外面は器体



第90図　土坑11・12・13・14土器

上部を刷毛調整し、その下半を篦磨きで整形する。内面は上半を刷毛調整し、下半は荒い篦削りで整形している。10の内面は指頭によるおさえつけで終っている。ヨコナデの範囲は頸部下2㎝前後におよんでいる。

高杯形土器B（7）

残存部分は内外とも篦磨きで整形している。

高杯形土器脚部A・B（14～16）

脚部A（14）は筒状部に長方形の透孔をうがち、篦描直線文をめぐらす。内面は現存部分全体を篦削りで整形している。脚台端部はヨコナデ調整で仕上げる。

脚部C（15）

8は鉢形土器Aの脚部と考えられる。（山本）

土坑14出土土器（図版80―上）

甕形土器（2）

口縁端面に2条の凹線文をめぐらす。

高杯形土器C（1）

椀状の杯部を持つ高杯である。脚部内面の篦削りの他は、篦磨きで仕上げている。杯部内面は横方向に篦磨きを施し、外面は縦方向に篦磨きをおこなっている。高杯Cは、川島遺跡ではこの1点のみである。口径10㎝、器高11㎝の小型の土器である。

底　　部（3、4）

4は壺形土器の底部で、外面を篦磨きし、内面は刷毛調整する。3は甕形土器の底部である。

（山本）

土坑15出土土器（図版76）

甕形土器（2、37）

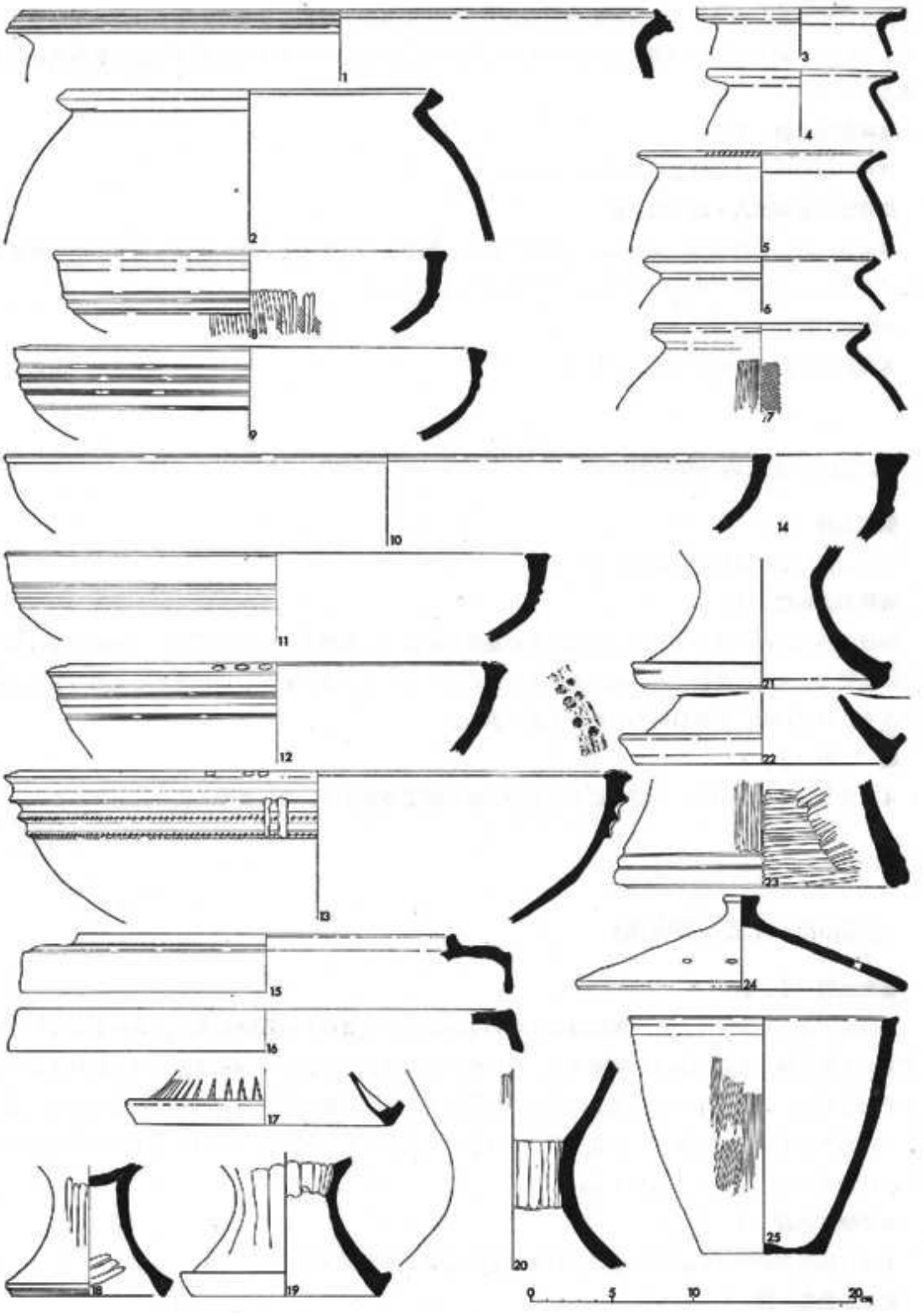
甕はほとんど磨滅するために整形痕は不明のものが多い。2は口径22㎝を数え、3～7にくらべて甕でも大型に属する。内面は刷毛調整し、口縁部および頸部屈曲部下1㎝程度またはそれ以上をヨコナデ調整する。3、4、7は口縁端部が上方に拡張する。5は口縁端面に刻目文を連続してめぐらす。7は内外面ともに刷毛調整する。3～7はヨコナデの範囲は頸部屈曲部下何㎝に及ぶかは不明であるが、口縁部付近はヨコナデ調整する。

大型甕形土器（1）

1は口縁端部の上下の拡張は強い。口縁端面には3条の凹線文をめぐらす。

鉢形土器C（25）

器体外面は刷毛調整し、内面は篦削りで整形する。ヨコナデ調整の範囲は内面では5㎝内外にもお



第91図　土坑15土器

よぶ。ヨコナデ調整は篦削りより先におこなわれており、内面の接する部分では篦で削られているところがある。外面ではヨコナデ調整は3㎝に及ぶ。鉢Cは川島遺跡ではこの1点のみである。口径は16.6㎝、器高14.4㎝、底径8.6㎝である。

大型形鉢土器（10、12～14）

口径は30㎝内外、またはそれ以上のものである。10は口径47㎝もある大型土器である。口縁端部の形態はいずれも内外に拡張する。拡張する端面がほぼ水平面をもつもの（14）と上方にあがる傾斜面をもつもの（28）と端面中央部が高く、内外がさがる八状をもつもの（38）がある。

10は無文の大型鉢である。12は口縁端面に幅の狭い凹線文を4条めぐらし、その上を円形浮文で加飾し口縁下に凹線文をめぐらす。13は口縁端面にこまかい凹線文4条をめぐらし、さらに円形浮文で加飾する。口縁下には3条の断面三角形凸帯文をめぐらし、下方2条は刻目文でさらに加飾する。凸帯文上にはさらに棒状浮文で加飾する。

高杯形土器A（8～9）

口縁端部は内外に拡張する。8は杯部たちあがり部分に3条の凹線文をめぐらす。9は口縁下に4条の凹線文をめぐらす。8の整形は杯部外面上半をヨコナデ調整し、下半を篦磨きする。内面は口縁下2.5㎝ほどヨコナデ調整し、その下を篦磨きする。篦磨きの間には、先にほどこされた刷毛目がのっている。

大型高杯形土器（11）

杯部たちあがりの部分に3条の凹線文をほどこす。大型鉢Aと呼んだ中にも大型高杯Aが含まれているであろう。

高杯形土器B（15、16）

15、16とも高杯B_2に属する。口縁端面は無文である。

高杯形土器脚部A（17、19～22）

脚端部は、断面三角形状のもの（19、21）と方形状のもの（17、22）がある。17は抉り込みによる鋸歯文で飾る。脚部Aの整形は、外面は篦磨きをおこない、内面は篦削りで仕上げる。

高杯形土器脚部B（18）

脚端面はヨコナデによる浅い凹線が生じている。18は外面篦磨き、内面篦削りで仕上げている。

蓋形土器（24）

2対1孔の紐孔をもつ。口縁部付近はヨコナデ調整する。内面は篦削り、外面は篦磨き調整で仕上げている。壺形土器の蓋であると思われる。（山本）

壺棺出土土器（図版52―上左）

壺形土器D

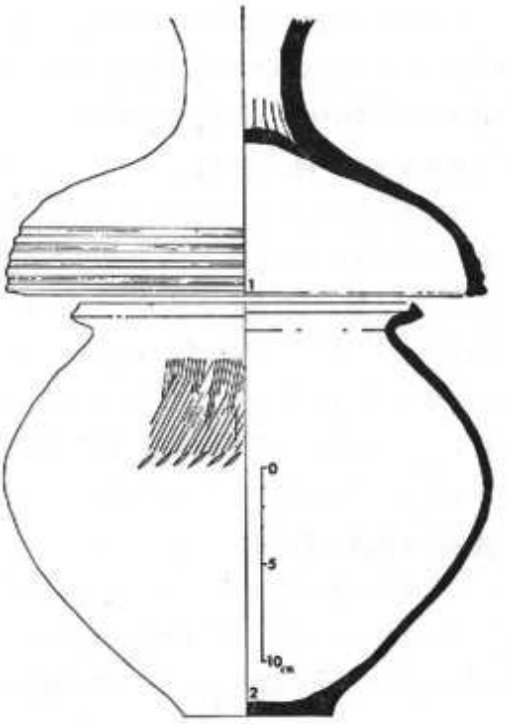
「く」字形の口縁部を持ち、口縁端部が上方に拡張する。胴部は、豊かに胴の張った球形に近い形

状を呈す。器体上半外面は刷毛調整し、胴部中央に篦圧痕文を加え、篦圧痕文下数cmを横方向に篦磨き、その下方を縦方向に篦磨きで仕上げる。内面は上半を指頭によるおさえ、下半部を縦方向に篦削りで仕上げている。器体下半の整形法は壺Aと同様である。壺Dと甕は口縁部のみでは区別は困難で、甕と呼称するものの中に壺Dを含むものがあると思われる。

高杯形土器A（1）

杯部外面に4条の凹線文をめぐらす。外面は篦磨きで仕上げる。脚部内面は絞り目を残し、その下を篦削りで整形する。

（山本）



第92図　壺　棺　土　器

第93図　土　坑　20

2. 溝　遺　構

1. 20　　溝　（図版53～70）

20溝は川島遺跡の西辺を西北から東北に流れる幅2.5m、深さ30cmの溝である。溝内には夥しい土器が層分れもなくぎっしりと堆積しており，とくに完形品については、同時に廃棄されたことは事実である。この事実をもとにして、第5章では、その同時期資料としての意義について考察を加えるが、本節では形態別に土器を分けて、各形態のもつ技術的特徴を明らかにしておきたい。

土器の類型

土器は壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、器台形土器等に分けて記述するが、各形土器はさらに細分して、壺A、壺B、…のように略記する。何をもって「壺A」とするかについては、各形土器の冒頭に説明する。

壺形土器

壺形土器は壺A～壺Hの8形に分類する。

壺A（1～4）　壺Aとは幅のある口縁部が斜めに外傾していて頸部は短く、胴部は丸味をおびていて、底部の丸いものをいう。

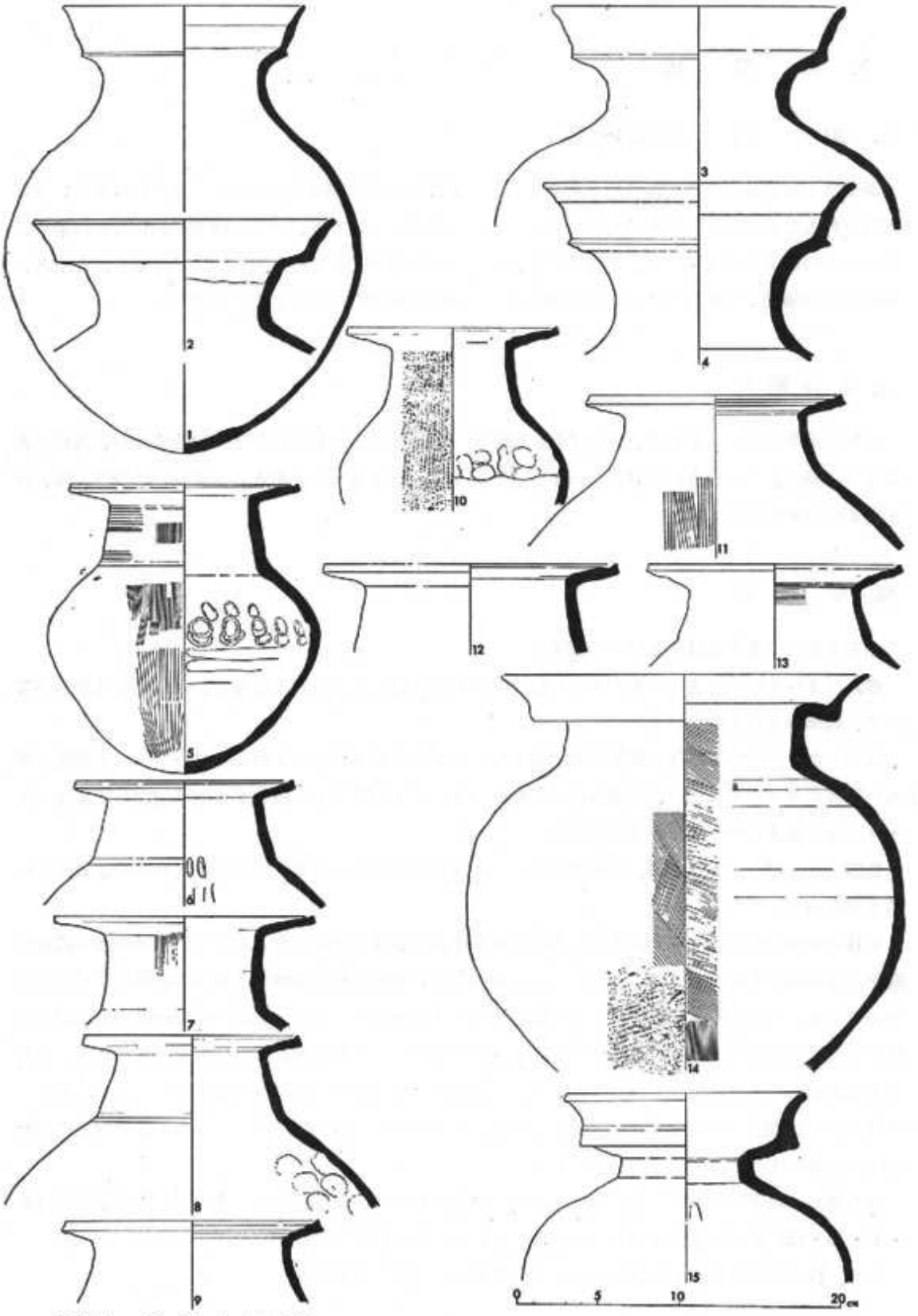
図示した4点をはじめ他の類例も器表面の保存が悪く整形痕等がよくわからないが、口頸部界に及ぶ口頸部のヨコナデ（2）、頸部外面の篦磨き（3）、頸胴部界を上限とする胴部内面の篦削り（2・4）等は壺Aの整形技法と考えてよい。

壺B（5～13）　壺Bとは、口縁部をほぼ水平に開いて頸部は内傾し、底部は尖りぎみの丸底となるものをいう。

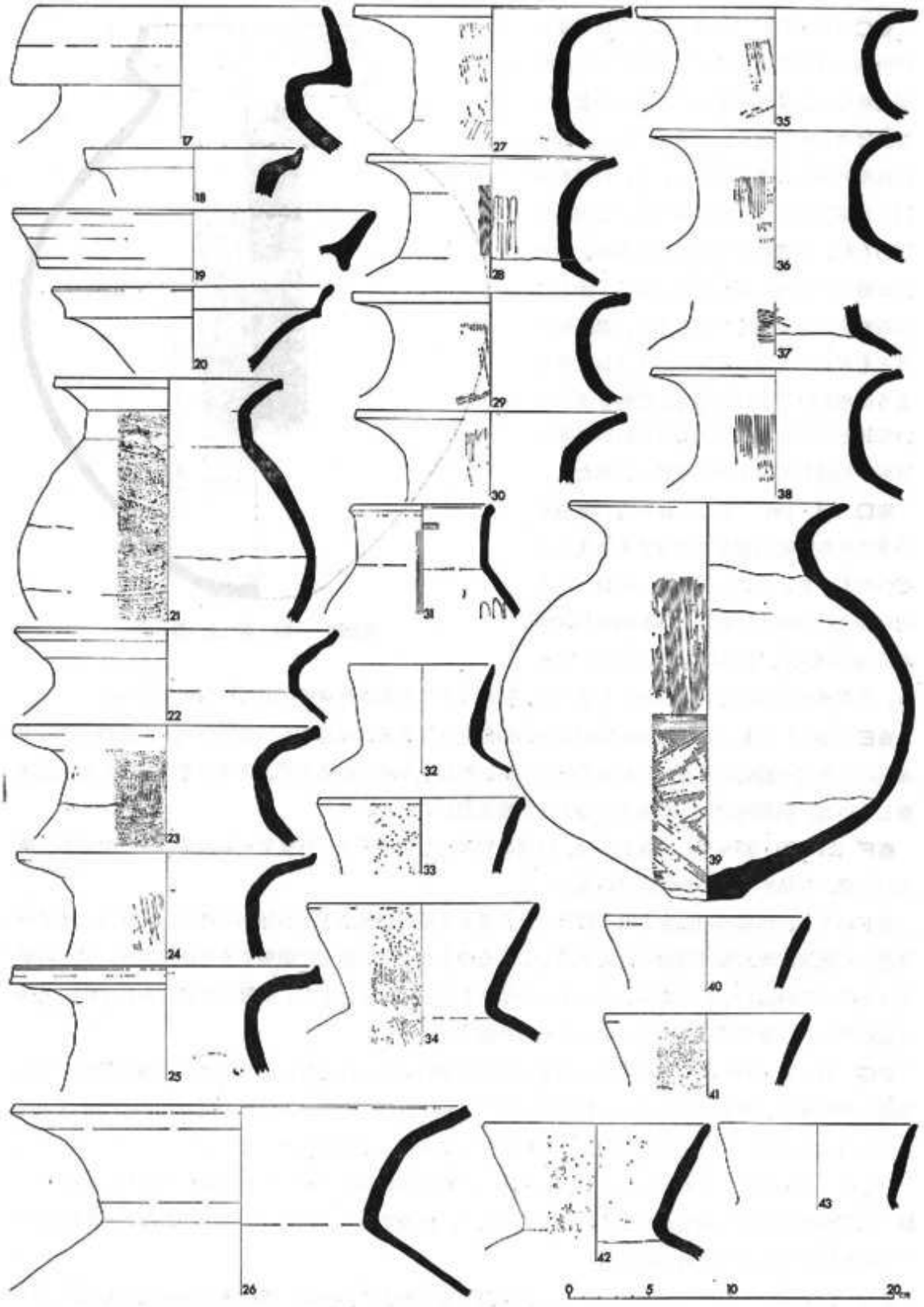
壺Bの整形技法上の大きな特色は口縁部内面に1条～3条の凹部があることと、胴部内面の指頭圧痕を含む胴部下半の篦削りの二つである。口縁部内面の凹部は幅3mm～5mmで断面U字形の浅い凹帯であり、凹帯の内外には平行する擦痕―ヨコナデ痕が認められる。胴部内面の指頭圧痕は胴部中位から上半にかけて、おそらく粘土紐を定着させるためにとられたおさえつけの痕と思われる。それは普通2段から4段に及んでいるが、胴部下半はおさえつけのあとをヨコに篦削りしている。篦けづりの方向を明瞭にのこしている個体は少ないが、左まわりのもの（10）がある。この2つの特徴的な手法は壺Bのすべての個体にみとめられる。

この他に、頸部から胴部上半にたてにこまかい刷毛をかけ、頸部はその上をヨコになでる手法（5・7・10・11）や口縁部内外のヨコナデは一般的に行なわれている。

なお、11の口縁端部には赤色物質がのこっており、分析を依頼した。

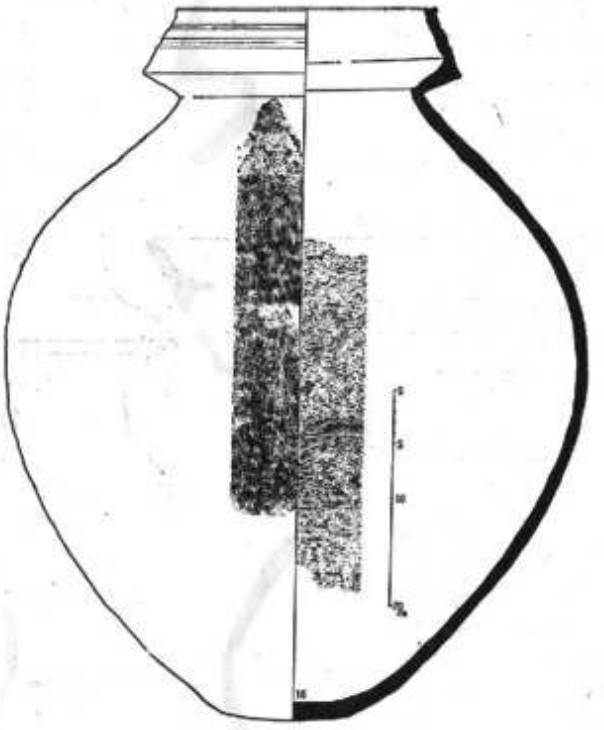


第94図　20 溝 土 器 (1)


17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
5
10
20cm

第95図　20 溝 土 器 (2)

壺C (16・17)　壺Cとは幅広い口縁部が内傾して頸部短かく、胴部が張って底部が丸味をおびるものをいう。壺Cの著しい特徴は内傾する幅広い口縁部にある。16は口縁部外面に3条の凹部があり、口縁部内面と口縁部外面下半はヨコ方向の整形痕が認められ、胴部には外面に縦方向の、内面には横方向の刷毛目が認められる。胎土には石粒を含んで固くやきしまり、器表の内外とも黒褐色で他の器種とは土質がちがうように思われる。17は全体に篦磨きされていて16とは器面調整手法でちがいがあるが器形が共通しているので壺Cに含めた。



第96図　20 溝 土 器 (3)

壺D (14・15)　壺Dとは複合口縁をもつ壺のうち胴部内面を篦削りする壺Aをのぞいたものをよぶこととする。壺Dの技術的な特色は胴部上半を粘土幅1cm～1.5cmの紐を輪積みしてつくっていることである。器面調整は胴部上半は内外とも刷毛で、胴部下半の外面はヨコの叩目で行なっている。

壺E (39)　壺Eとは、球形の胴部に短い頸部と外反する口縁部をもつ壺をいう。近畿地方の弥生後期の土器に一般的にみうけられる器形である。胴部上半を縦に刷毛で、下半を任意に刷毛で器面調整している。胴部内面には粘土紐のつぎ目が数条認められる。

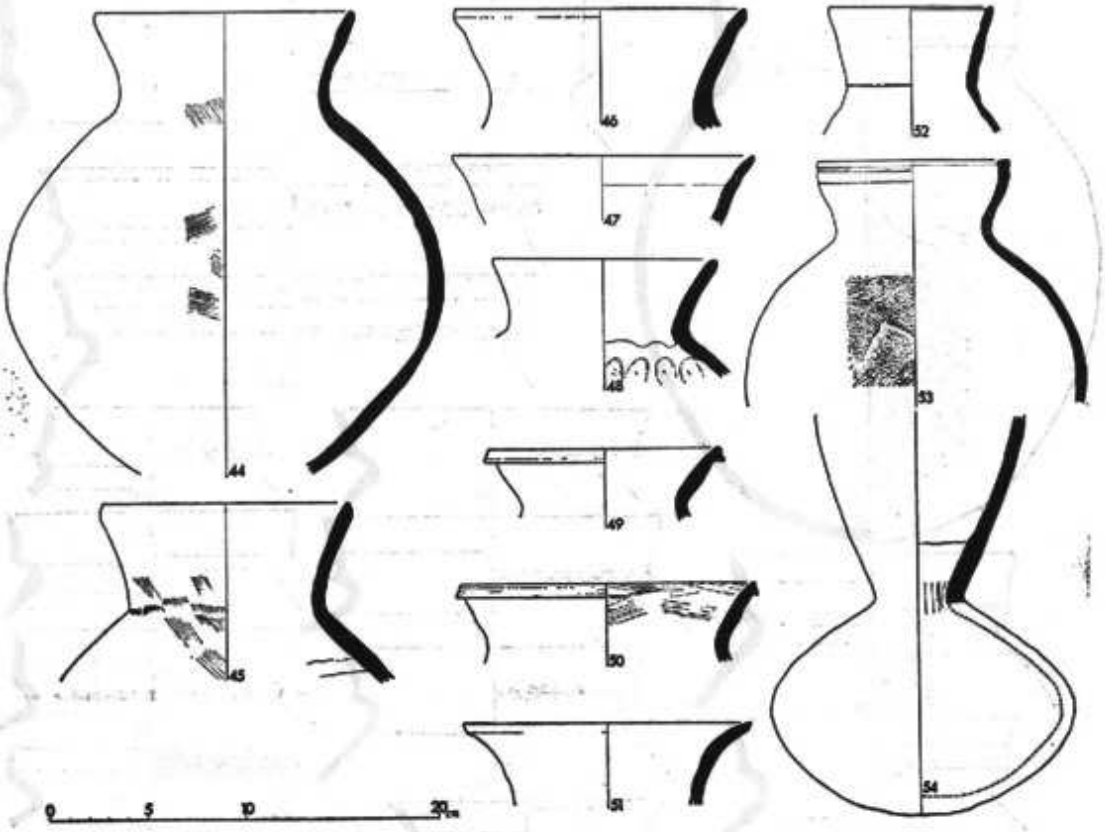
壺F (21～30・35～38)　壺Fとは、筒状の頸部をもち口縁部が外反するものを典型とするが、頸部が内傾、外傾するものを含んでいる。

壺Fのうち、頸部が内傾する21・23等には共通する器面調整の手法が認められる。それは口縁部中ほどから底部に及ぶ横方向の叩目を下地とし、その上をたてに刷毛で調整する手法である。胴部の刷毛は上半にていねいに加えてほとんど下地の叩目を消している。また、胴部下半の内面を下から上へ（底部側から口縁部側へ）篦削りする手法も共通するらしい。

壺G (31～34・40～51)　広い口縁部をもたない頸の短い壺を壺Gとする。壺Gの器面調整手法は頸部外面を縦に、内面を横方向にそれぞれ刷毛で調整し、口縁端部の内外1.5cm～2.0cmをヨコナデする傾向がつよい。胴部内面は底部から頸胴部界まで下から上へ篦削りしている。

ただし、44・45は刷毛の調整方向が、49・50は口縁端部のつくりが、それぞれ他と異なっている。44は器面を任意に刷毛調整した上を、平滑に仕上げ、内面にはとくに胴部上半に幅1.5cm～2.0cmの粘土紐輪積痕が7条みとめられる。

壺H (53・54)　長頸壺を壺Hとする。53・54とも外彎する長頸部と扁球形の胴部は平滑に仕上げ



第97図　20 溝 土 器 (4)

られており、54は胴部上半に縦方向の刷毛目をのこしている。53の胴部内面は頸胴部界から底部まで、右まわりに粗く篦削りされている。

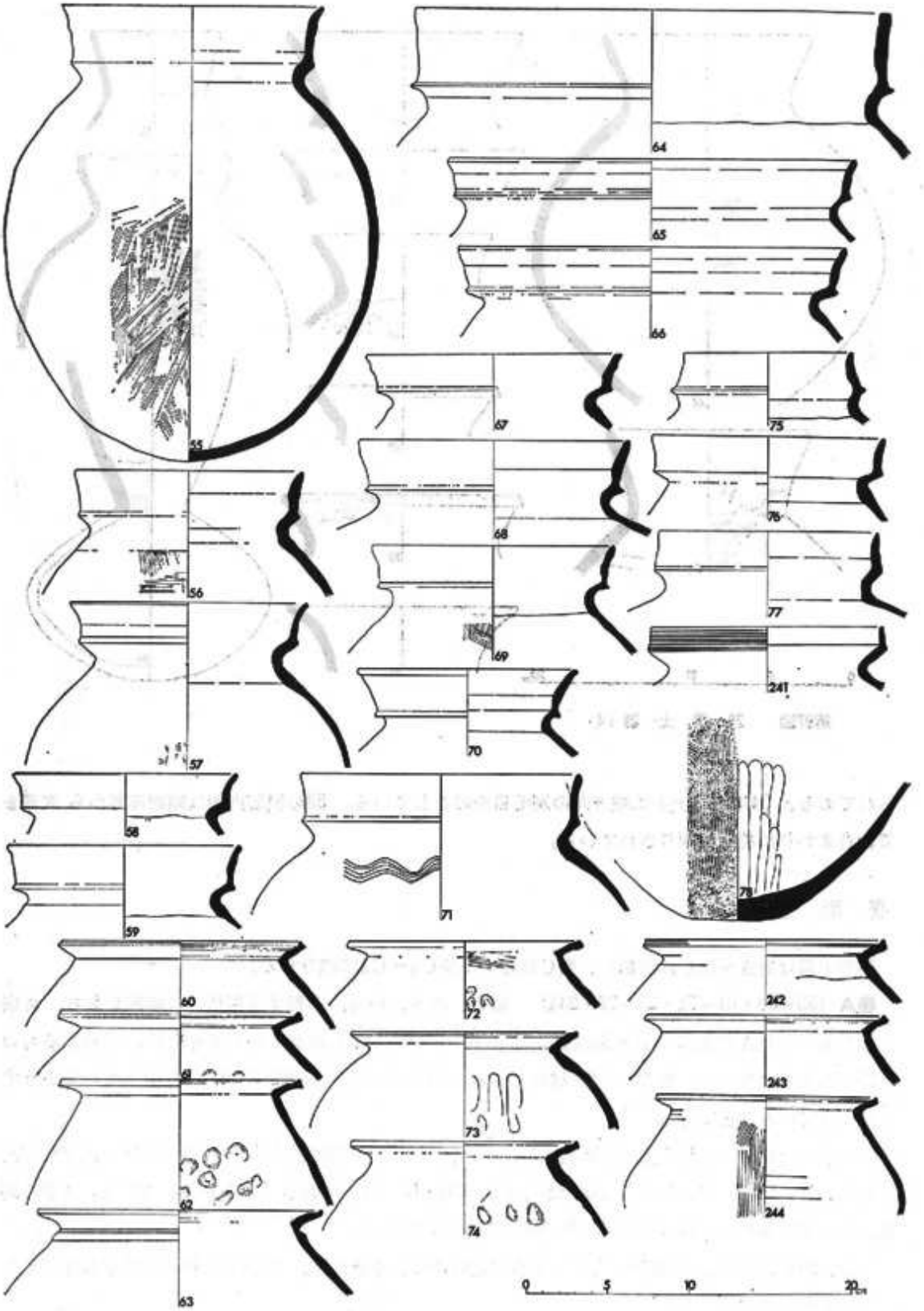
甕 形 土 器

甕形土器は甕A～甕Cに分類し、甕Cはさらに甕C_1～C_3に細分する。

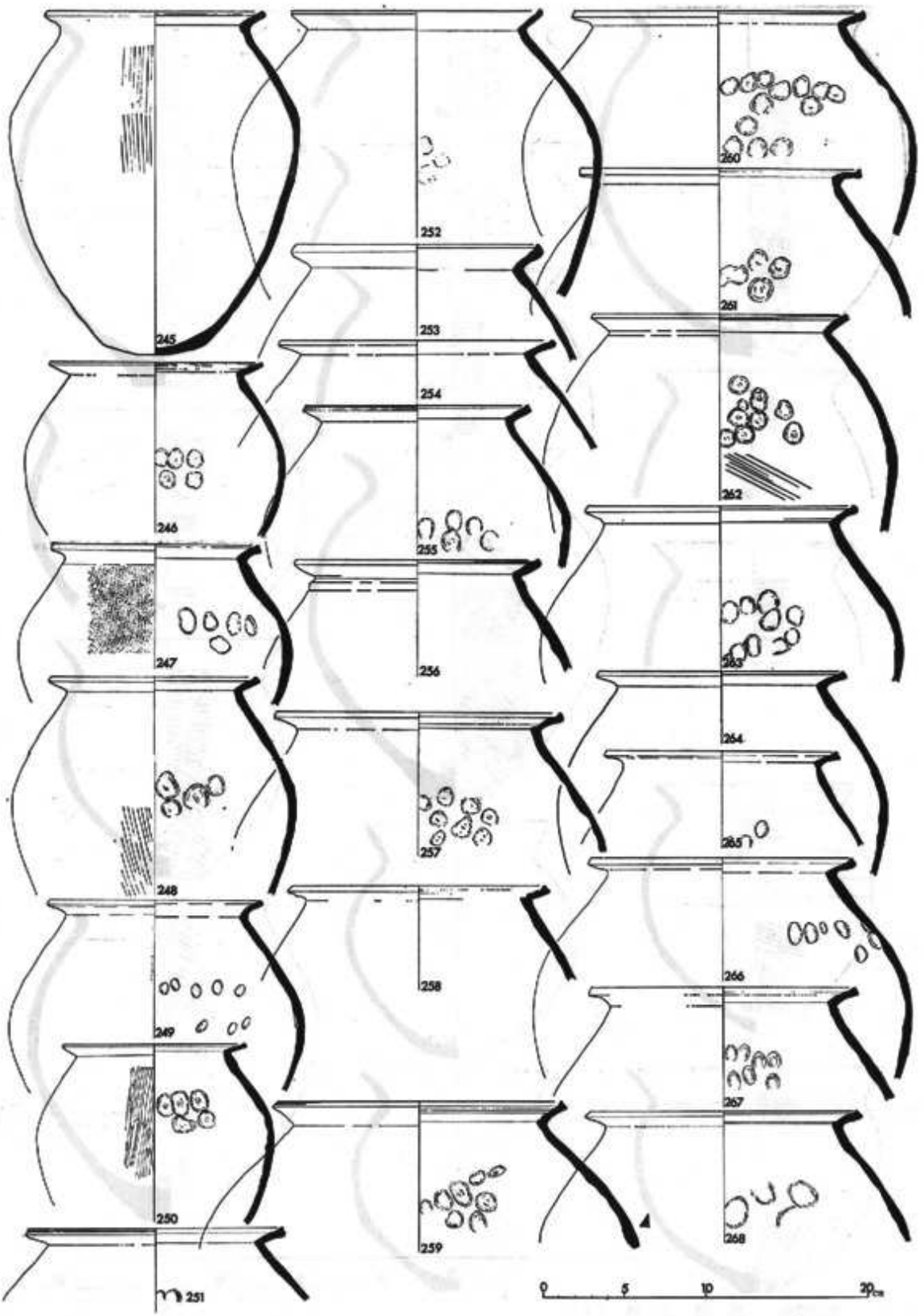
甕A (55～59・64～71・75～77・241)　直口、あるいわ内、外傾する幅広い口縁部をもち、丸底となるものを甕Aとよぶ。口縁部は直立、あるいは外傾するものがその大半を占め、内傾するもの(75)は非常に少ない。甕Aの特色は幅の広い口縁部をもつことと胴部内面を篦削りして、壁をうすく仕上げていることである。

幅の広い口縁部には横方向の調整痕が認められ、胴部内面の篦削りは55をのぞいてほとんど横方向に行なわれている。篦削りの方向がわかる2点(59・69)はいずれも〝右まわり〟である。外面の調整は刷毛で行なわれ、71はその上に櫛描波状文を描いている。

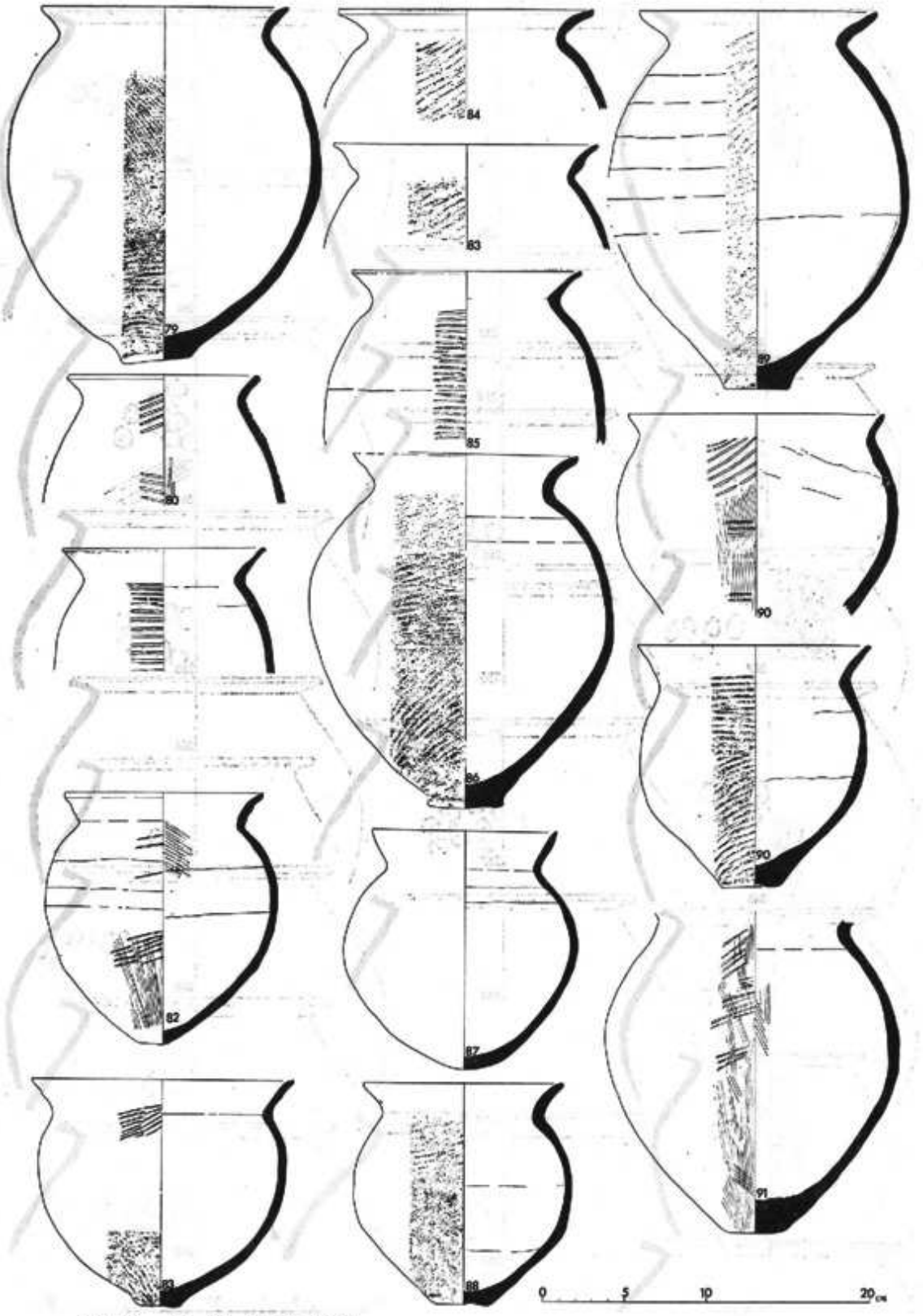
なお、241は小形ながら器形としては甕Aに近いので含ませたが、口縁部に細い櫛描平行線文をもっているのは特異である。


55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
241
242
243
244
0
5
10
20cm

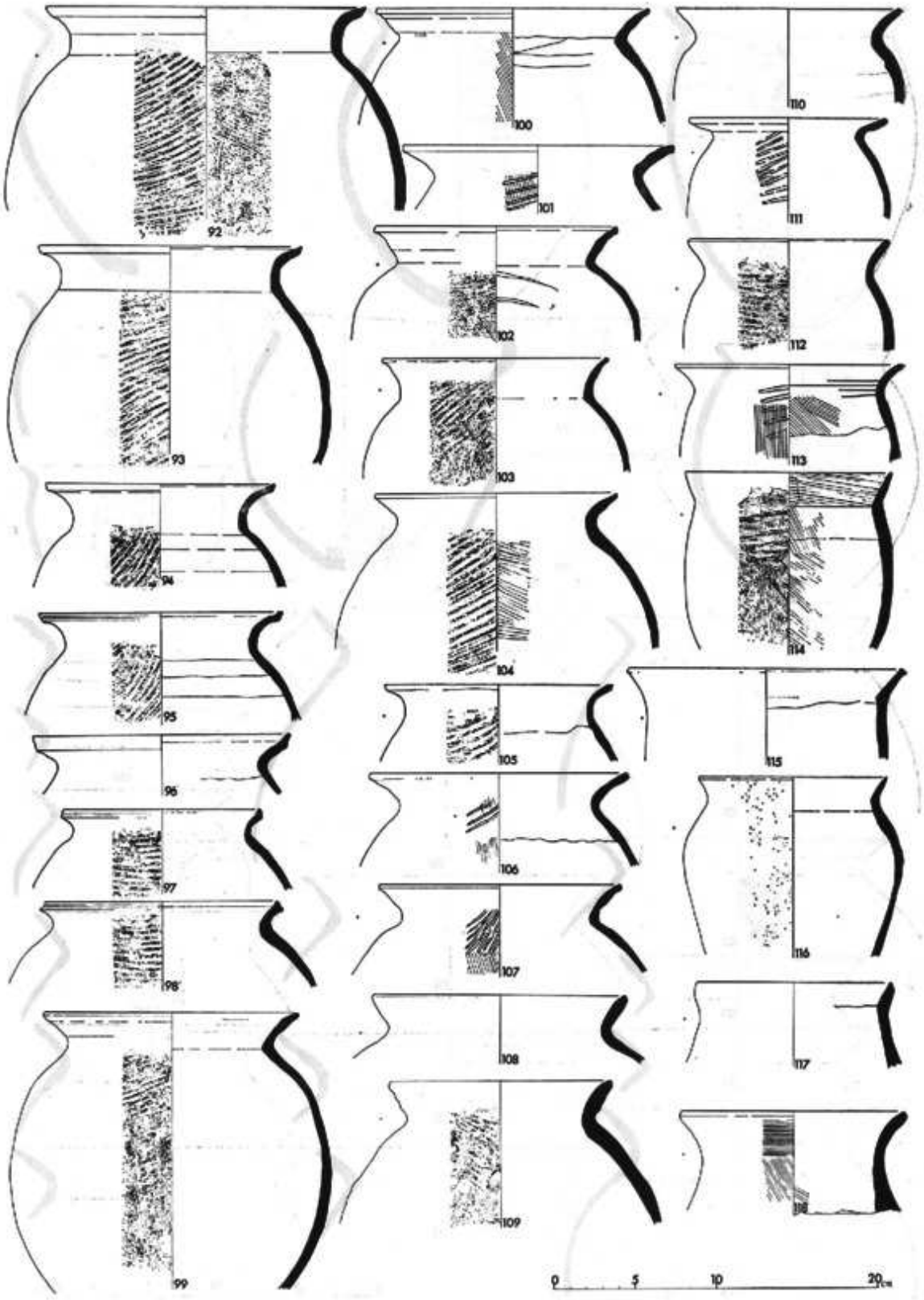
第98図　20 溝 土 器（5）


245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
0
5
10
20cm

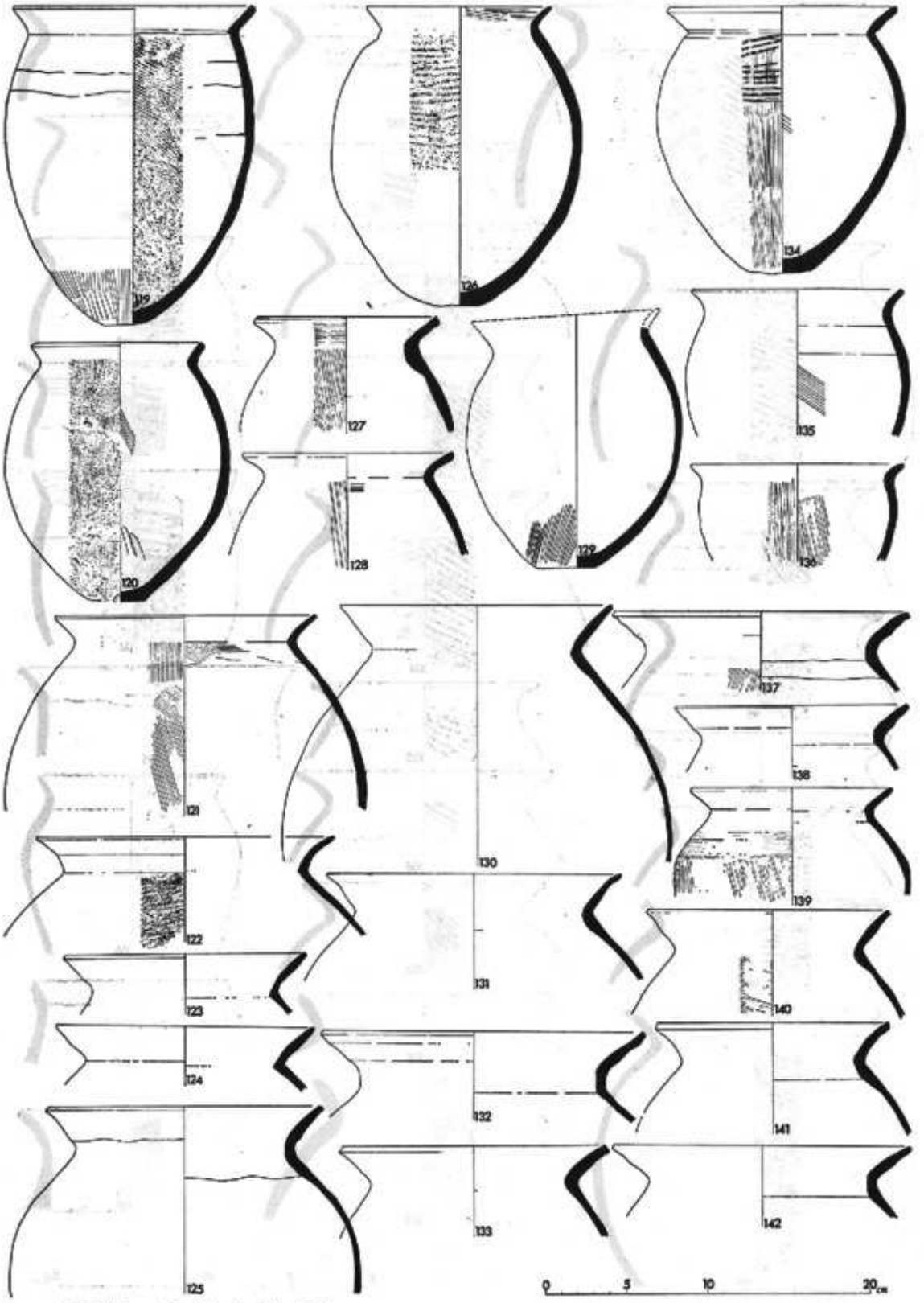
第99図　20 溝 土 器（6）



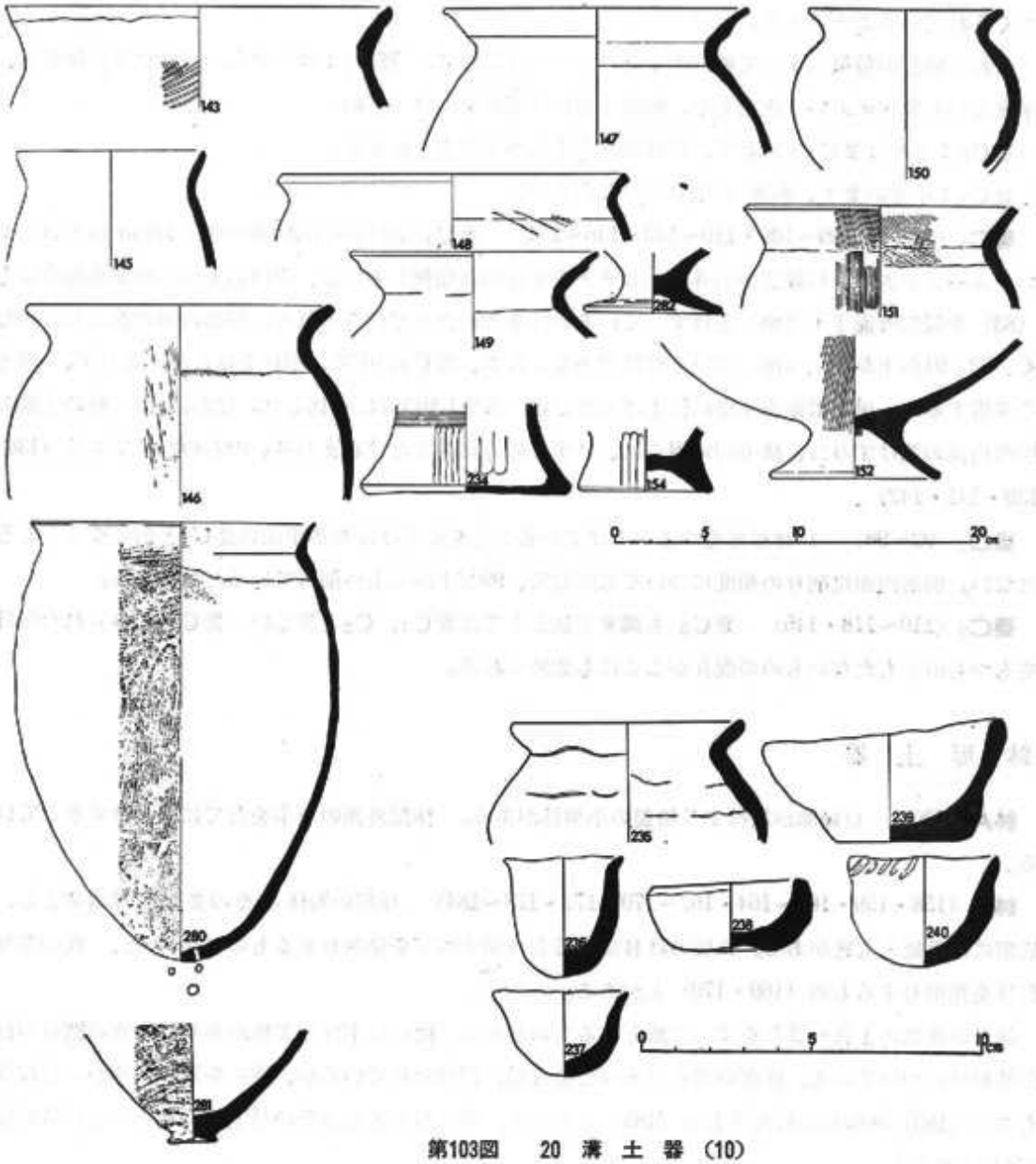
第100図　20 溝 土 器（7）



第101図　20 溝 土 器（8）



第102図　20 溝 土 器（9）



第103図　20 溝 土 器 (10)

甕B (60～63・72～74・242～268)　甕Bとは、く字状に外傾する口縁部とやや強く張る胴部をもっていて、口縁部内面に数条の凹部をもつものをいう。甕Bの特色は、口縁部内面の凹部と胴部内面の指頭圧痕である。壺Bの場合と同様この二つの手法はすべての個体に認められる。口縁部内面の凹部は幅2cm～3cmと壺Bにくらべて細く、条数は1本～3本で、2条のものがもっとも多い。胴部内面の篦削りは胴部中ほどから底部にかけて横方向に削られている。

甕C (79～151)　甕Cとは近畿第5様式ならびに後続形式にみられる普通の形の甕を一括した。共通の特色は、胴部外面に叩目があることと、胴部上半が幅1.5cm～2cm の粘土紐の輪積によって

つくられていることである。

これを細部の特徴によって細分するとつぎのようになる。 甕C_1：ゆるやかに外反する口縁部と、平底ないし尖底に近い平底をもち、胴部外面には叩目をつけるもの。

甕C_2：器形は甕C_1と同じで、口縁端部を上につまみ出したもの。

甕C_3：小型の甕で、胴部 の張りが少ないもの。

甕C_1 (79～91・99～109・119～143・146～151)　甕C_1には器高が20cm前後と10cm 前後の二つのグループがある。口縁部の内外をヨコナデでするのは類例が多いが、叩目の上から胴部外面中ほど (83) や胴部外面下半 (88) をけずっているのは小形の甕にだけみられる。胴部内面の篦削りは少なく、82と91が下から上へ削っているだけである。なお、甕C_1の中で、叩目をほとんどもたず、 刷毛を多用するか、単に器面を平滑に仕上げるだけの一群を120以降に一括した。なお、この一群の土器の胴部内面の篦けずりは、横方向に限られ、けずりの方向もまた〝右まわり〟のものだけである (130・139・141・142) 。

甕C_2 (92～98)　口縁端部をつまみ上げていることをのぞけば整形手法は甕C_1と何ら変るところはない。胴部内面篦削りの頻度についても同じで、99が下から上へ削っているだけである。

甕C_3 (110～118・145)　甕C_3 も調整手法としては甕C_1、C_2と等しい。甕C_1 にみられた叩目をもつものともたないものの混在がここにも認められる。

鉢 形 土 器

鉢A (230)　口縁部が屈折する精製の小型鉢がある。 体部外面の下半をたてにへらけずりしている。

鉢B (158・159・162～164・167～170・172・173～184)　椀形の器体 をそのまま 口縁端部とし、底部には平底と丸底がある。丸底の鉢Bには器表外面すべてを篦削りするもの (164) と、 底の部分だけを篦削りするもの (169・170) とがある。

鉢Bの底部に1孔～3孔を穿って甑とするものがある。甑には平底と尖底があり、尖底の甑は叩目が放射状についている。底部の穿孔はすべて焼成前に行なわれているが、穿孔を器の内側から行なうものと (183) 外側から行なうもの (184) とがある。穿孔のときの余分の粘土をかきとっているのは178だけである。

鉢C (153～157・160・161・165・171)　口縁部が外反する鉢形土器を鉢Cとしてまとめる。この中には小形の甕形土器にいれるべきものや、小型の壺に近いものもあるが類型化が難しいのでここに含めた。器面の調整は叩目と刷毛で行ない、篦削りするものはない。

高 杯 形 土 器

高杯形土器は高杯A～高杯Cの三型に分けて記述する。

高杯A (207～229)　高杯Aは外反する杯口縁部と外彎する杯部下半、短い筒状脚部と小さく外彎

して開く脚端部をもち、胎土に精良な粘土を使用することを特色とする。杯口縁部と杯下半部の界には屈折部があるが、それの大きいのが208で、その上に口縁端部をつまみ上げ、小さいのが221で杯部の側面観が逆三角形状になっている。脚部の穿孔はすべて4孔である。

高杯B（191～195・198～200）　高杯Bは皿形の杯部と径の大きな脚部をもち、口縁部内面に2条～5条の凹部をもつことを特色とする。口縁部内の凹部の技法は壺B、甕Bの技法と同じである。杯部下半外面は（脚部側からみて右まわりに）全体に篦削りして仕上げ、杯部と脚部は別々につくって接合している。200の杯部内面は篦磨きされているが、その篦目が 状にきれいにのこされており、一種の暗文となっている。

高杯C（185～190）　筒状の脚部の上下に大きく二段に外反する口縁部（杯部）と脚端部をつくるものを高杯Cとよぶ。高杯Cには脚の筒状部が充実しているもの（185～187—高杯C_1）と空洞になっているもの（188～190—高杯C_2）とがあり、高杯C_2の杯部は口縁端部と杯部下半が直立して深いうけ部をつくっている。

高杯C_1と同C_2には、脚端部に穿孔するものが一例づつある（185・188）が、両者とも 形の穿孔で共通する。高杯C_1の杯部と脚部は別づくりと思われるが、高杯C_2には別づくり（188）と一体づくり（189）の二つの手法がみられる。ただし189には杯部中央に栓をつめてはいないし、その痕跡もないので高杯C_2の機能については考慮する必要があろう。

高杯D（230・232・233）　椀形の杯部をもつ高杯を高杯Dとする。類例は少ない。

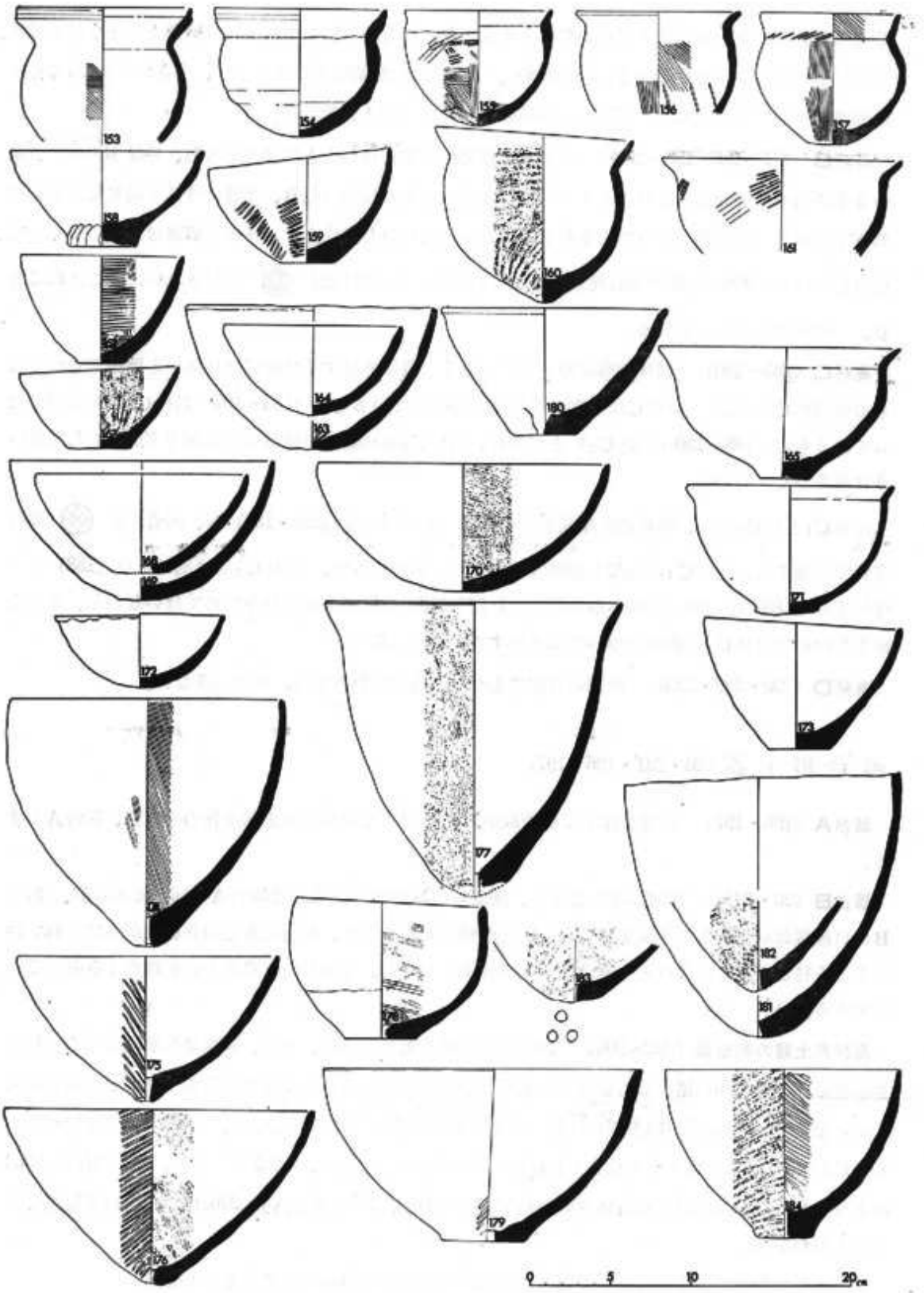
器台形土器（20・231・196・197）

器台A（196・197）　杯部が深くて側面観が><形にひらく高杯形の土器を器台と考え、器台Aとする。

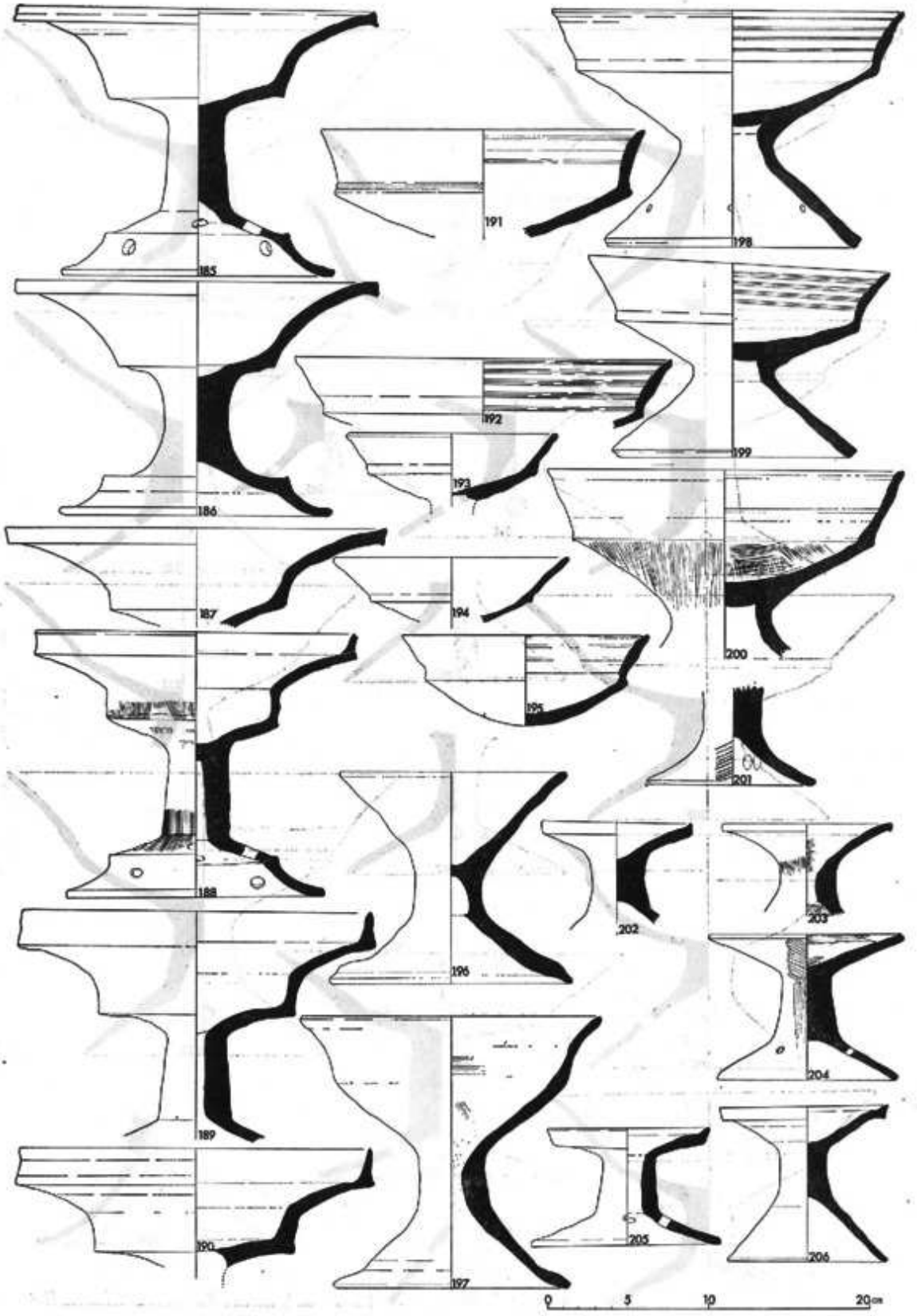
器台B（20・231）　杯部が深いことと、側面観が><形になることは器台Aと同じであるが、器台Bは口縁端部が複合して外反することと胎土が精良であること、器面に赤色の化粧土がかけられていることを特色とする。2点とも器表面の保存はよくないが、ていねいな篦磨きの痕跡をよみとることはできる。

高杯形土器の部分品（202～206）　20溝の高杯形土器には杯部、脚部、脚端部が別々につくられる型がある。202～206に掲げるものはそのようなつくり方をするものの筒状脚部を中心とする部分品である。例えば、204の現口縁端部には粘土の剝落痕が帯状に認められるので、その上に（脚部形態から類推して）218の杯部上半を接合すれば、両者は全く同型となる。このことから、他の個体には204のような剝落痕がないので接合以前の部品であると考え、205は高杯A_2、206は高杯A_1の各部品であることがわかる。

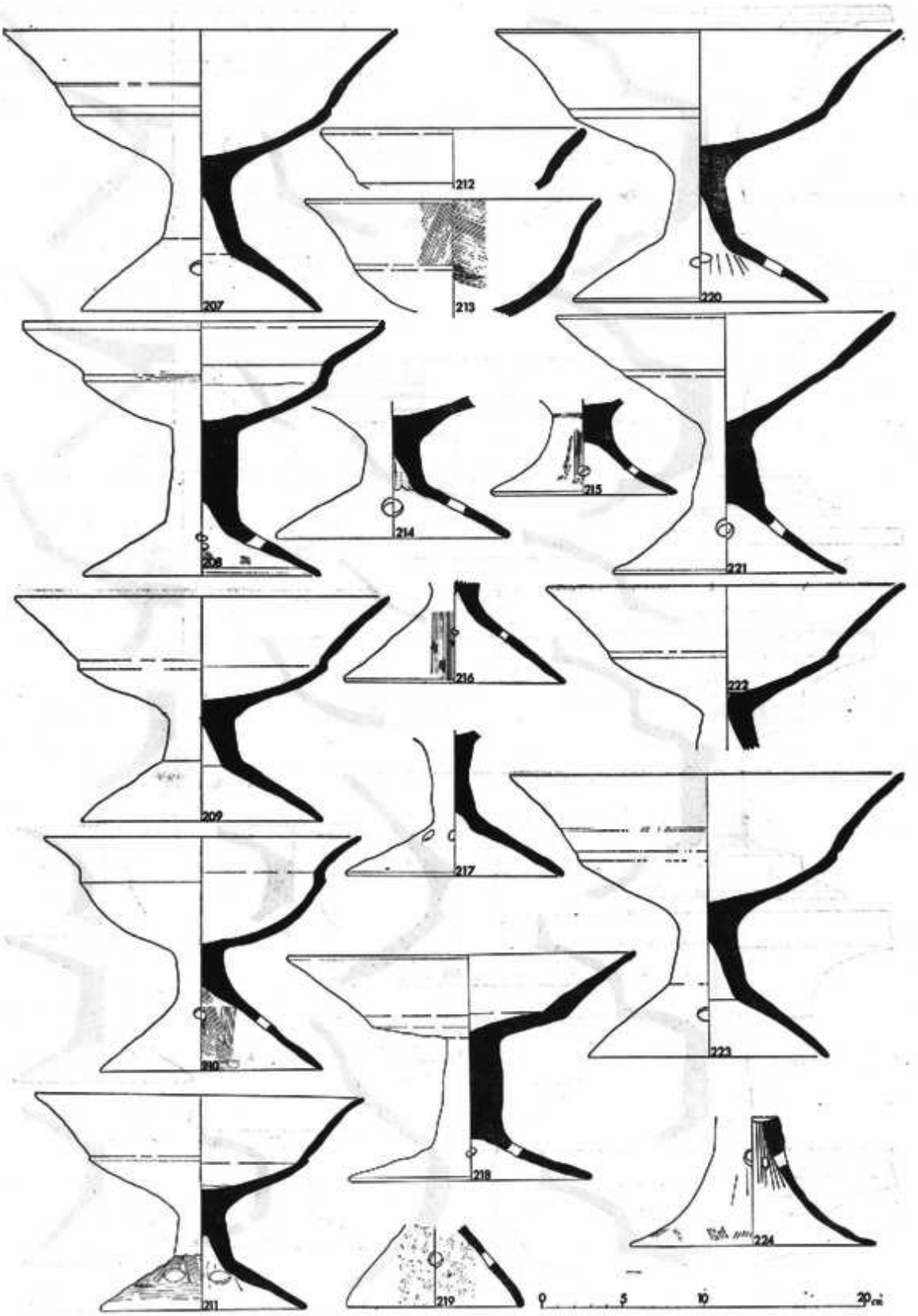
このような器形は従来器台として報告されているものが多いが検討を必要としよう。



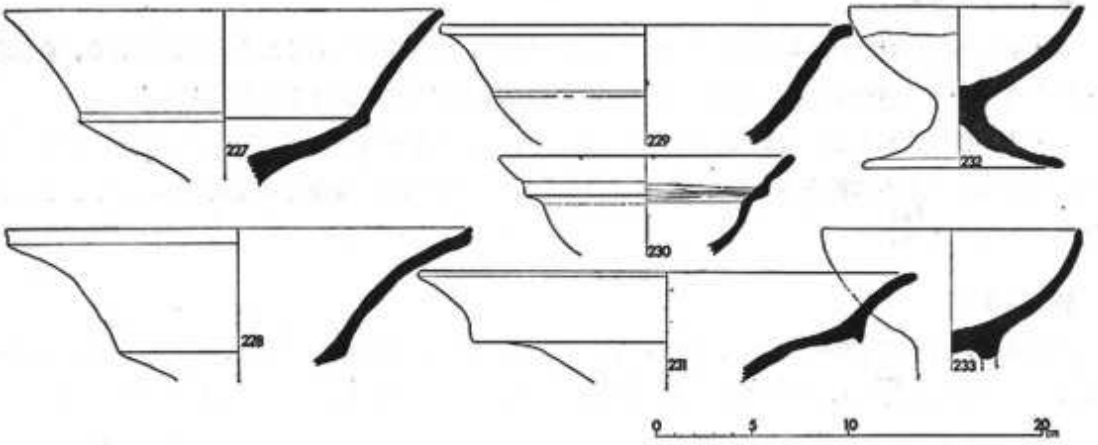
第104図　20 溝 土 器 (11)



第105図　20 溝 土 器 (12)



第106図　20 溝 土 器 (13)



第107図　20 溝 土 器 (14)

コップ形土器 (234)　底ひろがりのコップ型土器の底部と思われるもので、外面は横方向の刷毛と縦方向の篦みがき、内面は縦方向の篦けづりが行なわれている。把手付着部分はない。

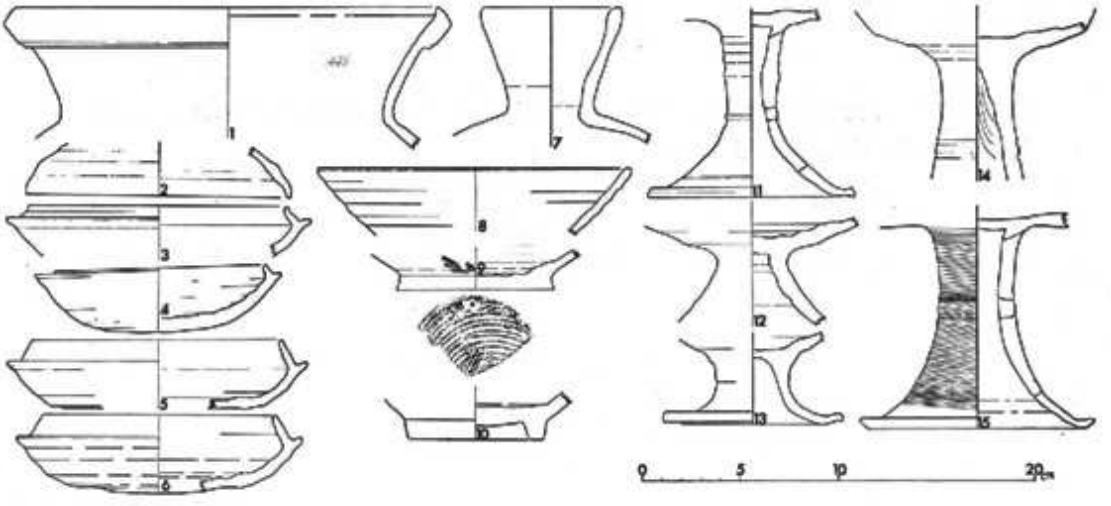
手づくねの土器 (235～240)　口径3cm～7cmの手づくねの土器が6個体出土している。235には輪積みの痕跡が、240には口縁端部に叩目の痕がある。　(石野博信)

21溝出土の土器

21溝から出土した遺物は、甕・杯・椀・瓶・高杯等の須恵器が主体である。(1)

甕　(1)

口頸部は短かく、口縁部を折りまげて断面は長方形をした段をもつ。口縁端部は外反してきた口頸部から鋭く垂直に立ちあがっている。口縁直径は21.7cmをはかる。6世紀後半に比定できよう。



第108図　21 溝 須 恵 器

杯　（2～6）

5・6の杯は口縁直径が12cm前後あり、口縁端部および受部端部は丸くおさめられており、全体も丸味をもつのが特徴的である。陶邑古窯址群のＴＫ—10号窯型式に比定できる。(1)

3・4の杯は、たち上がりが矮小化され、全体に偏平かつ粗雑なつくり方である。受部とたち上がりとの間には一条の凹線をもつものがある。陶邑古窯址群のＴＫ—209号窯型式に比定でき、2も同時期の杯蓋である。(1)

瓶　（7）

口頸部は、逆八の字形に外反し、口縁部でわずかに内反する変化をみせるが、端部は丸くおさめられている。ごく断片にしかすぎず、器形を限定することはできないが、瓶の一種であろう。

高　杯（11～15）

すべて杯部が欠損しているため、有蓋・無蓋の判定は不可能である。11・14・15は長脚二段高杯で透しをもたないもの（14）や、脚部全体にカキ目をほどこしたもの（15）が特徴的である。6世紀後半に比定できよう。

12・13は、脚部が短かく全体にずんぐりした形であるが、脚部裾には円形等の透しは施されていない。6世紀末から7世紀初頭にかけて出現してくる新しいタイプの高杯である。

椀　（8～10）

8・9の椀は、ロクロ使用による水引きの特徴をよく残しており、糸切り底を呈する。器形製作の際にロクロを全面に使用し、糸切り技法を用いるのは、近年平城京跡の発掘調査により、平安時代初期に出現することが判明している。(2) 平安時代前半期に製作されたものと考えられる。

10は、体部と底部との接点から垂直に高台がつけられている。口縁部が欠損しているため、いま一つ確定的なことはいえないが、8・9と同様平安時代前半期に属するものであろう。(2)

以上の出土遺物から考えて、21溝の上限は古墳時代後期～6世紀中葉にあてることができ、下限は平安時代前半期にまで下げられるのである。　（浅岡）

(1) 須恵器の編年については「陶邑古窯址群Ｉ」平安学園考古学クラブ1966年によって考察する。
(2) 「平城京発掘調査報告Ⅲ」奈良国立文化財研究所

22溝出土土器（図版71～75）

壺形土器A（1～41）

24溝の壺Aには、30cmを超える大型のもの（17）もあるが、大多数が20cm前後のものである。壺Aは壺A_2の形態をとるものが大多数である。22、26は壺A_4の形態をとり、27は壺A_1の典型的な形をとる。109、110は壺A_5の形態を呈す。

壺A_2の口縁端面にはすべて巾の狭い凹線文をめぐらす。口縁端面の凹線文上の加飾には円形浮文、棒状浮文、篦描斜線文を用いる。円形浮文のみを加飾するもの(16、17等)と、棒状浮文のみを加飾するもの（7～12等）、円形浮文と棒状浮文を加飾するもの（14、15等）、斜線文と浮文を加飾ものとがある。円形浮文の加飾方法は、2個を上下に並べて連続するもの（41）と3個を1単位として間隔をおいて並べるもの（16）、3cmもある大きい円形浮文を1個を間隔をおいて並べるもの（17）、棒状浮文を間隔をあけて交互に並べるもの（19、14）とがある。棒状浮文は1本か数本を1単位として間隔をおいて並べる。

口縁部内面の装飾は1条の凸帯文をめぐらすものが大多数である。凸帯文に刻目文をめぐらすもの（38、24）もある。他の装飾は櫛描波状文をめぐらすもの（21）と、円形浮文を連続してめぐらすもの（41）が各々1点づつある。内面に紐孔を穿つもの（11）がある。

頸部には凸帯文をめぐらすもの（10、21）と凹線文をめぐらすもの（3、5等）と文様をもたないもの（25、14等）とがある。凸帯文は指頭圧痕文凸帯が多く、42のように断面三角形凸帯文と指頭圧痕文凸帯を重ねるものがある。

壺A_2の整形は、頸部外面を刷毛調整で仕上げるものが大多数でまれに篦磨きで仕上げる。頸部内面はこまかい横方向の篦磨きで仕上げる。

壺A_1は口縁端面に凹線文をめぐらす。27は頸部と胴部の界が明確でなく、なだらかに胴部につづき、川島遺跡では量的に少ない壺Aである。

壺A_4は口縁端部、口縁内面ともに篦圧痕文をめぐらす装飾法をもつ壺である。28は頸部に刻目文凸帯をめぐらす。

壺A_5は2点ある。107は口縁端面、口縁部内面とも櫛描波状文をめぐらす。色調はこげ茶を呈し、他の土器との色調は異質である。

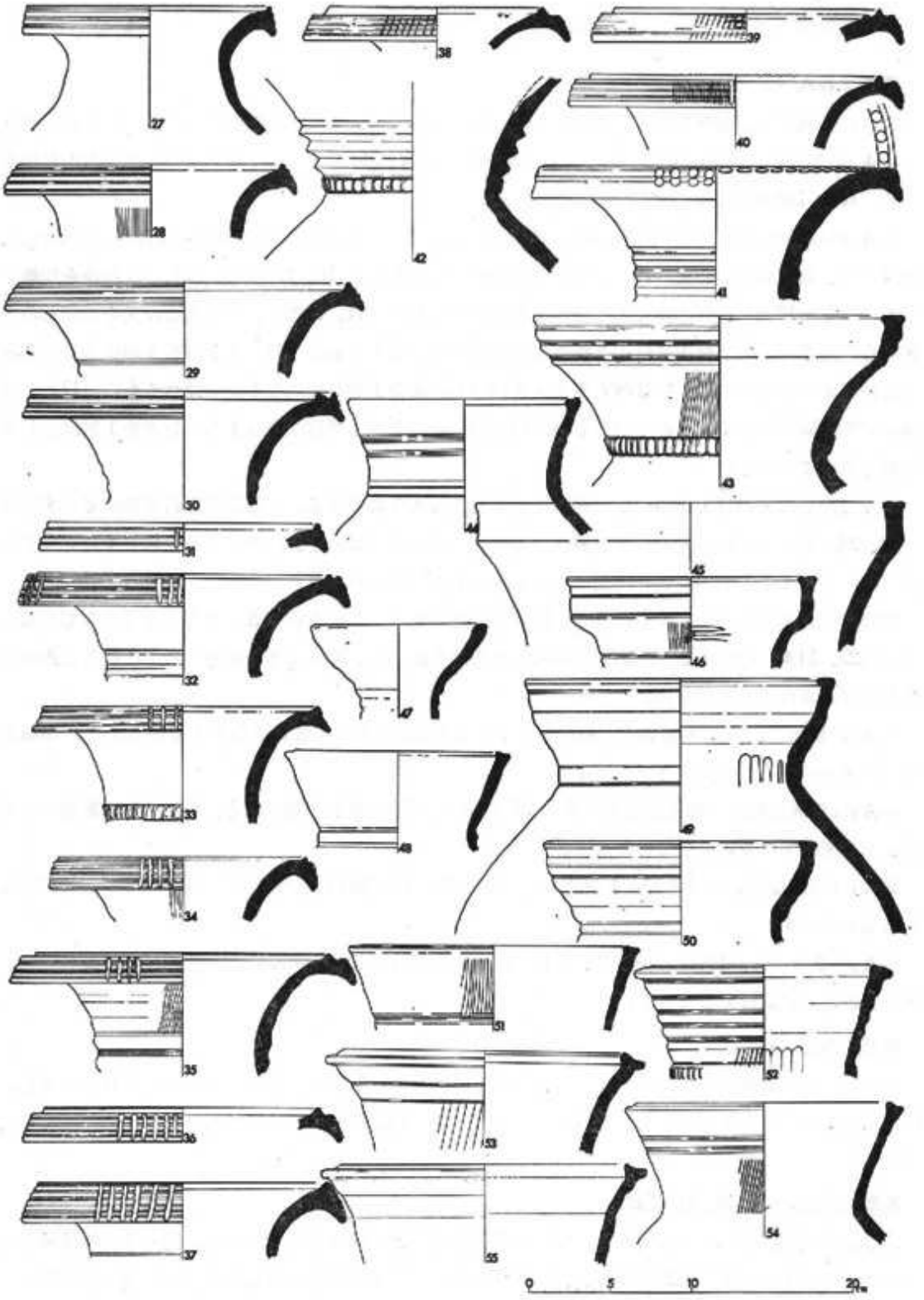
壺形土器B（43、45）

43は口縁部に3条の凹線文をめぐらし、頸部下端には指頭圧痕文凸帯をめぐらす。壺Bは頸部下端に指頭圧痕文凸帯をめぐらすことを常とする壺である。45は口縁部には凹線文をめぐらすことなく無文である。

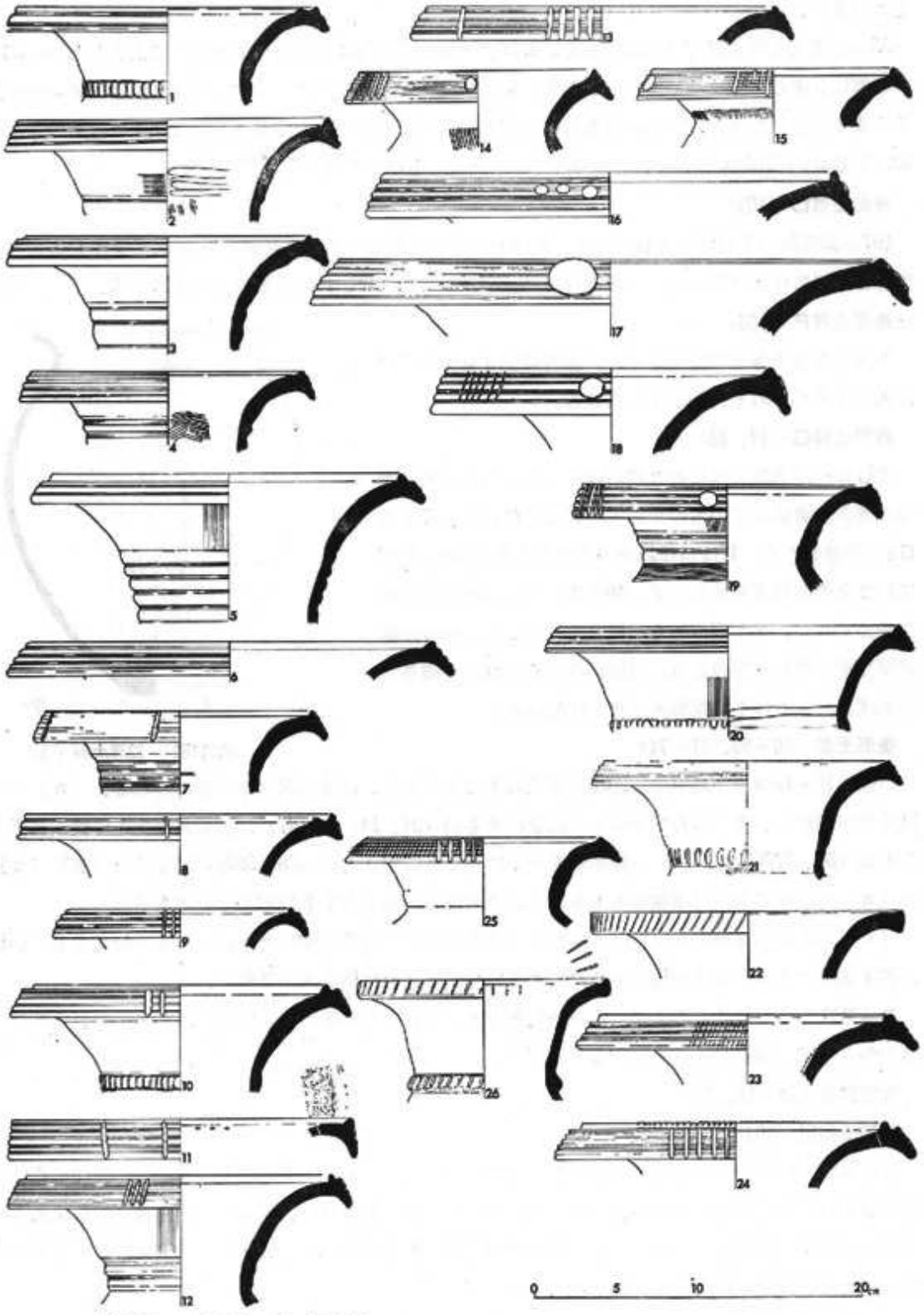
壺形土器C（44、48、51～54）

壺C_3の形態を呈する。内外、とくに外側に強く拡張し、凸帯文を貼り付けたと同じような効果を呈する口縁端部をもつもの(52、53、55)と、口縁端部を若干肥厚するもの(44、48等)との二種類がある。

壺C_3の口頸外面には、凹線文をめぐらすものが多くみられる。口頸部上端に2条の凹線文をもつ



第109図　22 溝 土 器（1）



第110図　22 溝 土 器（2）

ものが多い。

55は凹線文と呼ぶほどのものでなく、ヨコナデ調整で自然に生じた凹線というにふさわしい。52は口頸部に5条の凹線文をめぐらし、頸部下端に指頭圧痕文凸帯をめぐらす。口頸部内面はヨコナデ調整による隆起帯が生じている。外面は刷毛調整で仕上げるものと、篦磨き整形で仕上げるものとがある。壺C_3は宇田森遺跡、唐古遺跡では片口状となるものがある。

壺形土器D（107）

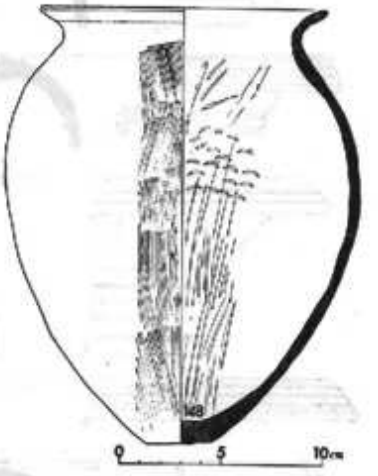
107は脚部がつく台付の壺Dである。器体上半を横方向にこまかい篦磨き整形で、下半を縦方向に篦磨き整形で仕上げている。口縁部はヨコナデ調整で仕上げ、口縁端面は沈線状になる。

壺形土器F（108）

外面は篦磨き整形で仕上げる。口縁端面はヨコナデ調整によると考えられる沈線が生じている。

壺形土器G（47、46）

壺Gは川島遺跡ではこの2点のみである。この器形は讃岐の紫雲出遺跡にそのものがある。47は壺G_1に、47は壺G_2の形態をとる。47は口径11cmの小型の土器である。頸部には2条の凹線文をめぐらす。46は巾の広い口縁部に凹線文をめぐらし、また頸部にも凹線文をめぐらす。その凹線文間は刷毛調整痕がのこる。内面は巾広くヨコナデ調整で仕上げるが、その下は篦磨きで仕上げている。



第111図　22溝土器（3）

甕形土器（56～59、61～74）

口径は10～15cm前後のものと20cmを超えるものとがある。口縁端部は3形態に別れる。（a）は口縁端部が肥厚し、さらにわずかに上方に張出すもの（24、14）と（b）口縁端部が上方に強く拡張するもの（56、57等）と（c）口縁端部を上下に強く拡張するもの（58、59等）である。（b）（c）は（a）に比べて広い口縁端面をもち、そこに凹線文をめぐらすものが大多数である。

（c）の甕の口縁端面の凹線文上に円形浮文を加飾するもの（69）と棒状浮文を加飾するもの(61)が各1条づつある。62は凹線文をめぐらさないが口縁端面に棒状浮文で飾る。

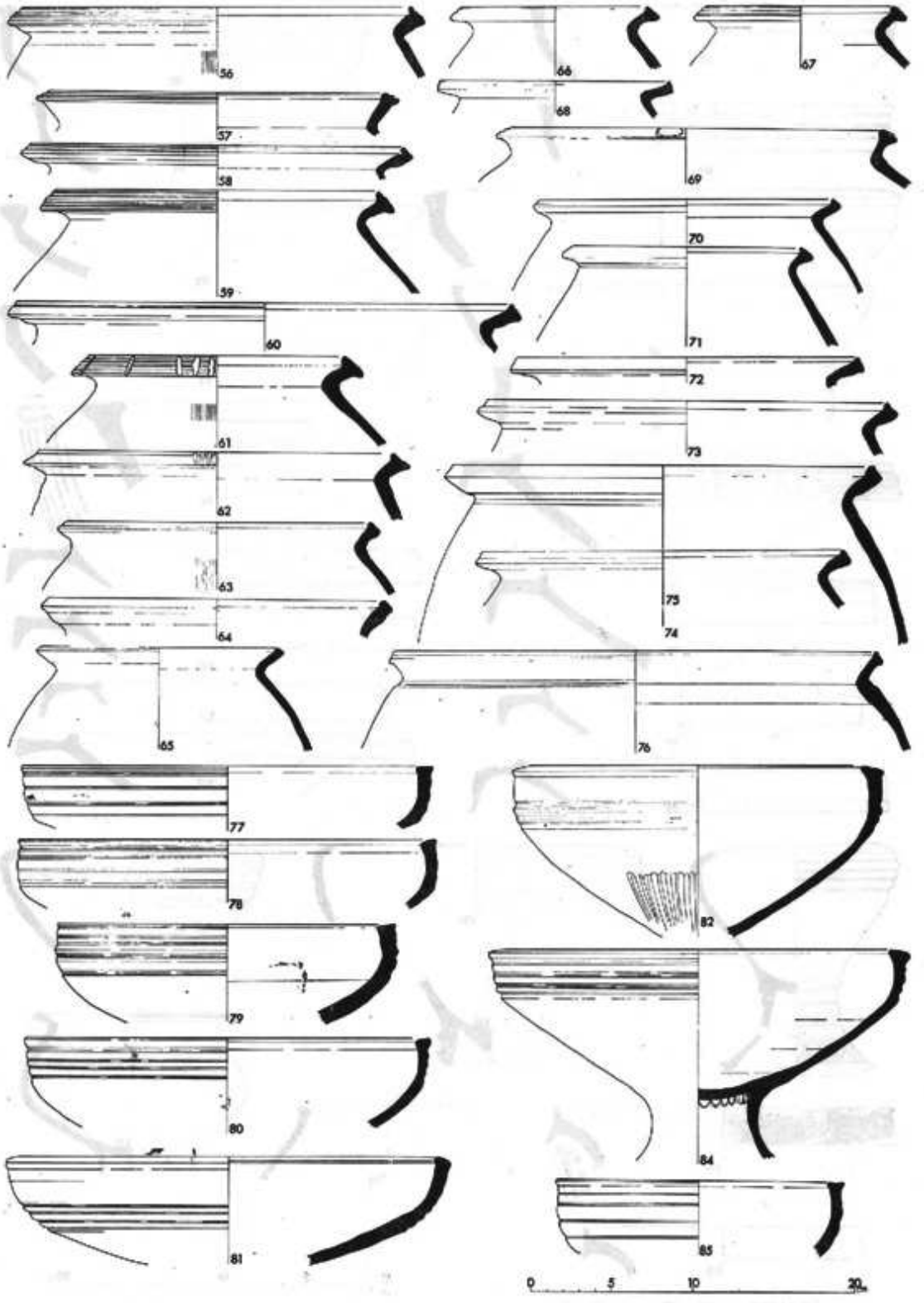
甕は磨滅がひどいためにヨコナデの節囲等細部にわたる整形痕は不明な点が多くあるが、器体上半は内外とも刷毛調整で仕上げているものが多い。

大型甕形土器（60、76）

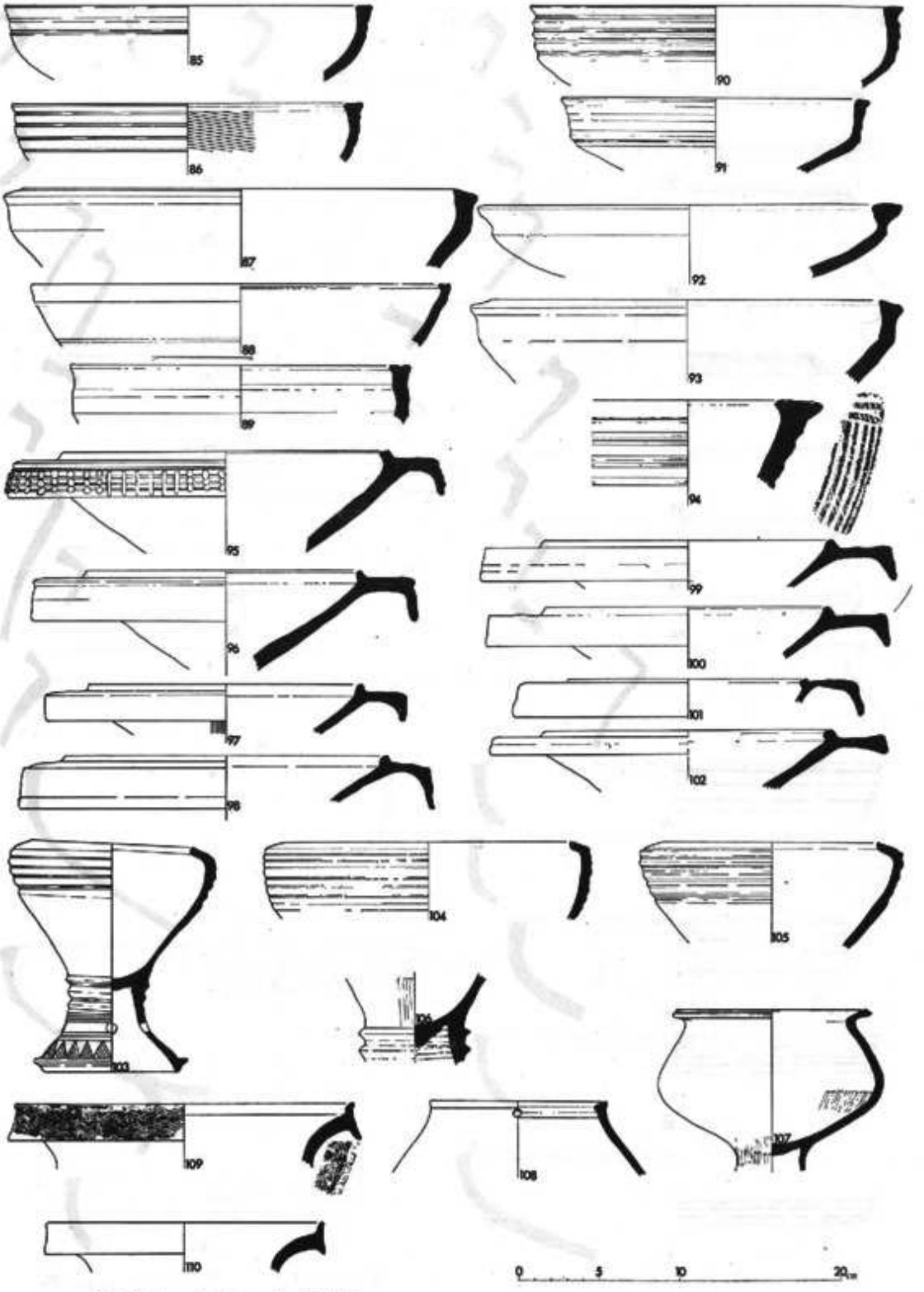
鉢形土器B（103～106）

口縁部直下に数条の凹線文をめぐらす。103は口縁直下に4条の凹線文をめぐらし、脚部と器体の界に3条の凸帯文をめぐらすが、凸帯文上にヨコナデ調整をもちい、図示すると凹線文的に見える。凸帯文下は篦描沈線文をめぐらし、下端に篦描沈線文による鋸歯文を飾る。脚部に小円の連孔をもつ。脚内面は篦削り整形で仕上げる。

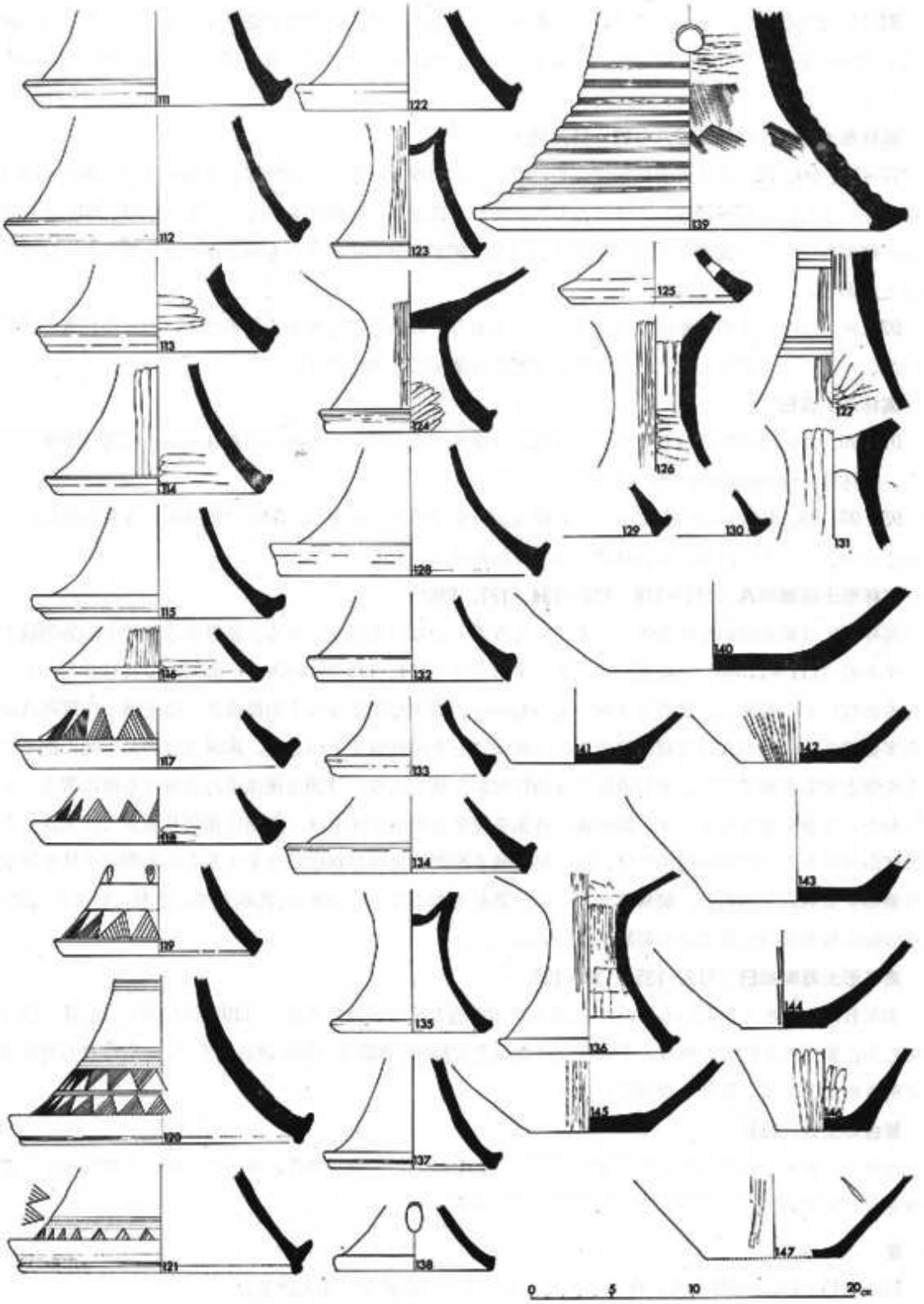
大型鉢形土器（84）



第112図　22 溝 土 器 (4)



第113図　22 溝 土 器 (5)



第114図　22 溝 土 器 (6)

84は口縁端部が内外に拡張する。口縁端面には5条の巾の狭い凹線文をめぐらし、その上に棒状浮文を加飾する。口縁直下には3条以上の巾の広い凹線文をめぐらす。残存部分はすべてヨコナデ調整で仕上げる。

高杯形土器A、鉢形土器A（77～91、93）

77～86、90、91は器体外面に凹線文をめぐらす。凹線文の用いる部分は、口縁直下に数条の凹線文をめぐらすもの（77～79等）と杯部たちあがる部分に数条の凹線文をめぐらすもの（81、82）とがある。杯部外面は荒い篦磨き整形で仕上げ、内面は刷毛調整で仕上げるものと篦磨き整形で仕上げるものとがある。

92は杯部はヨコナデ調整により大きく凹めており、口縁端部が大きく拡張する。92は高杯Aではないが、一応ここで記述した。この器形は播磨野田遺跡に実例がある。

高杯形土器B

97、99、100、102は高杯B_1である。102は口縁端部を肥厚するのみで中期3の高杯に近い形態である。高杯B_1は口縁端面は無文である。

95、96、98、101は高杯B_2である。口縁端面は無文のものが多い。52は口縁端面に3条の凹線文をめぐらし、その上に円形浮文と棒状浮文とで加飾する。

高杯形土器脚部A（111～118、120～134、137、136）

高杯Aには脚端部の拡張が著しいものとそう著しくないものとがある。拡張する脚端部が方形状を呈すもの（111～115等）と断面三角状を呈するもの（114、116等）がある。脚部には文様をもつものともたないものがある。脚部で文様をもつものは、24溝だけではなく川島遺跡全体を通して脚部Aが大多数である。脚部Aの文様は篦描文には鋸歯文と平行直線文とがある。鋸歯文は脚部下端に飾ることを常とする文様であり、平行直線文は筒柱部の文様である。 120は篦描平行直線文を間に置き上下にわたって鋸歯文をめぐらす。脚部Aは外面を篦磨き整形で仕上げ、内面は篦削り整形で仕上げるものばかりである。内面の篦削には、絞り目を残す範囲で篦削り整形で仕上げるものと脚部全体を篦削り整形するものとがある。脚端部はヨコナデ調整をおこなっているが、篦削りで消されているために、その痕を残さないので本来の範囲にわからない。

高杯形土器脚部B（119、135、138、125）

脚部Bは文様をもたないものが川島遺跡全体を通じて大多数である。 119は筒状部には▽状の透孔をもち、篦描き沈線文で飾り、下端は篦描鋸歯文で飾る。125は円形の透孔をもつ。 脚部Bも外面は篦磨き整形、内面は篦削り整形で仕上げる。

器台形土器（139）

外面には数多くの巾の広い凹線文をめぐらし、その上に円形の透孔をうがつ。内面は脚端部から6㎝をヨコナデ調整で仕上げ、その上は刷毛目を残す。

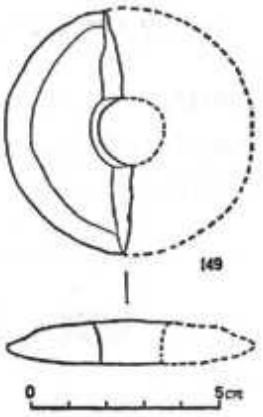
底　　部

140～145、147は壺形土器の底部であり、外面は荒い篦磨きで仕上げる。

146は甕形土器の底部であり、外面は荒い篦磨き、内面は篦削り整形で仕上げる。（山本）

22溝出土土製品

およそ半分に損なわれているが、径約6.6cmの円形をなし、中央に、径およそ2cmの小孔がある。断面は、厚み中央部で1cmあり、端部に向って次第に厚みを減じている。器外面は若干凹凸があるが、磨滅してその整形を観ることができない。重量は現在16gあり、原状は35g程度の重量と考えられる。22溝の時期は弥生中期後半である。　（槿木）

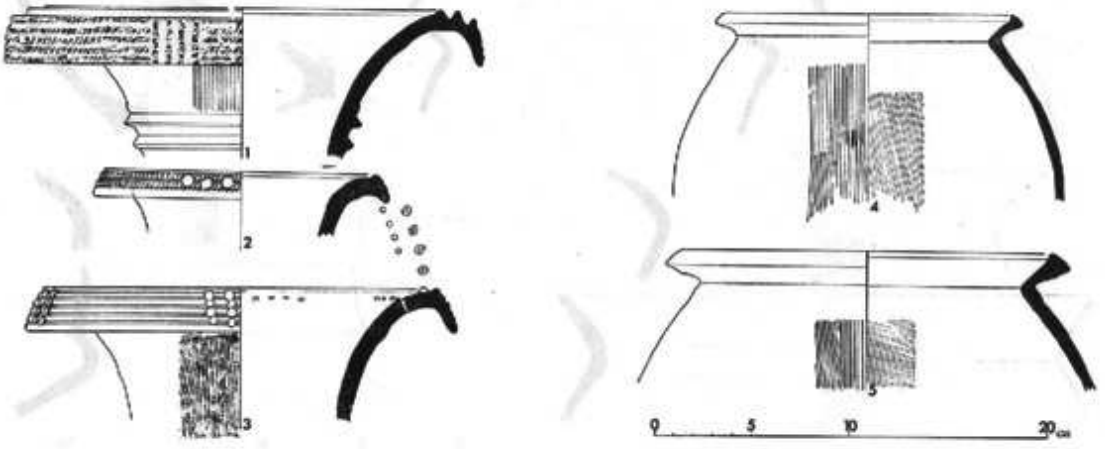


第115図　22溝出土紡錘車

25溝出土土器（図版83—下）

壺形土器A（1～3）

1、3は壺A_2で、2は壺A_1である。2は2条の凹線文をめぐらし、その上に斜線文、円形浮文を加飾する。円形浮文は横方向に三個を一単として横に間隔をおいて並べる。1は口縁端面に4条の凹線文をめぐらし、凹線文上に斜線文、棒状浮文でさらに加飾する。口縁部内面は2条の凸帯文をめぐらす。頸部にも2条の断面三角形凸帯文をめぐらす。3は口縁端面に4条の凹線文をめぐらし、その



第116図　25 溝 土 器

上に円形浮文を加飾する。円形浮文は縦に4個を並べ、それを2列に配し方形状のものを間隔をおいて配置する。内面は円形に近い角のある浮文を連続してならべる。また紐孔をもつ。これはかえって文様化し、小円孔と言った方がよいのであろう。

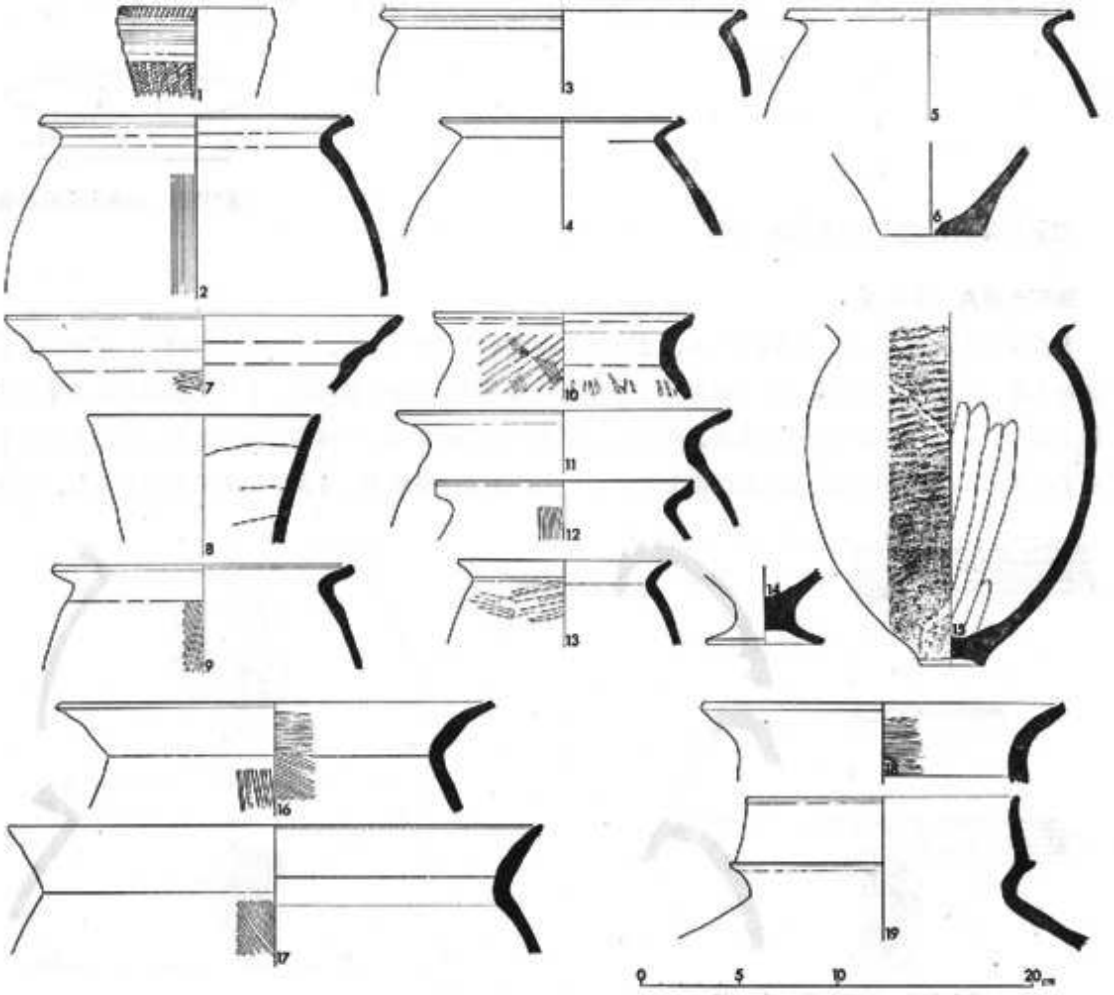
壺A_2は頸部外面は刷毛整調し、内面は篦磨きで仕上げている。

甕形土器（4～5）

口縁端部は肥厚し、上方に拡張する。胴部は内外面とも刷毛整調している。口縁部、頸部上端はヨコナデ調整する。　（山本三郎）

落久保A地区表採土器（1）（図版52）

第117図の土器は、川島遺跡調査前の、用水路付替工事に際して出土したもので、その場所から考えて20溝および22溝の土器と考えられるが、すでにその確認を行なうことができないため、一括表採品として図示した。



第117図　落久保A地区表採土器（1）

壺形土器C（1）

口頸部外面に3条の凹線をめぐらし、口縁端部には斜線文、頸部下方には櫛描文を配している。川島では類例のないものである。摂津に特徴的な土器である。

甕形土器（2～5）

口縁端部は上方に拡張するもので2は刷毛調整を行なう。

以上は22溝にともなう土器と考えてよいであろう。いずれも弥生中期後半の土器である。

壺 G（8）

頸の短かい壺で頸部内外面ともに刷毛仕上している。内面には輪積痕が3条みられる。

鉢 A（7）

20溝出土230の土器と、同形であろうと考えられる。外面下半は篦削りしている。

甕 A（19）

内傾する幅広い口縁部をもっている。胴部内面は篦削りしている。

甕 C_1（15～17）

15は口縁部を欠くが、外面は叩目をつけ、刷毛で調整する。内面下半は篦削りしている。16・17は内外面ともに刷毛で調整する。

甕 C_2（9～13・18）

いずれも口縁端部を上につまみ出している。10は外面に叩目をつけ、刷毛で調整する。内面は篦削りである。

台付土器（14）

20溝282と同形で、台付甕の脚台であろう。（櫃本）

落久保A地区表採土器（2）（図版52）

壺 A（1）

幅広い外反する口縁部をもっている。

甕 A（2～4）

4は口縁部外面に凹線をめぐらす。20溝241の土器と同形である。山陰・九重式土器とみられる特徴に類似する。

甕 C_1（5・6・11～15）

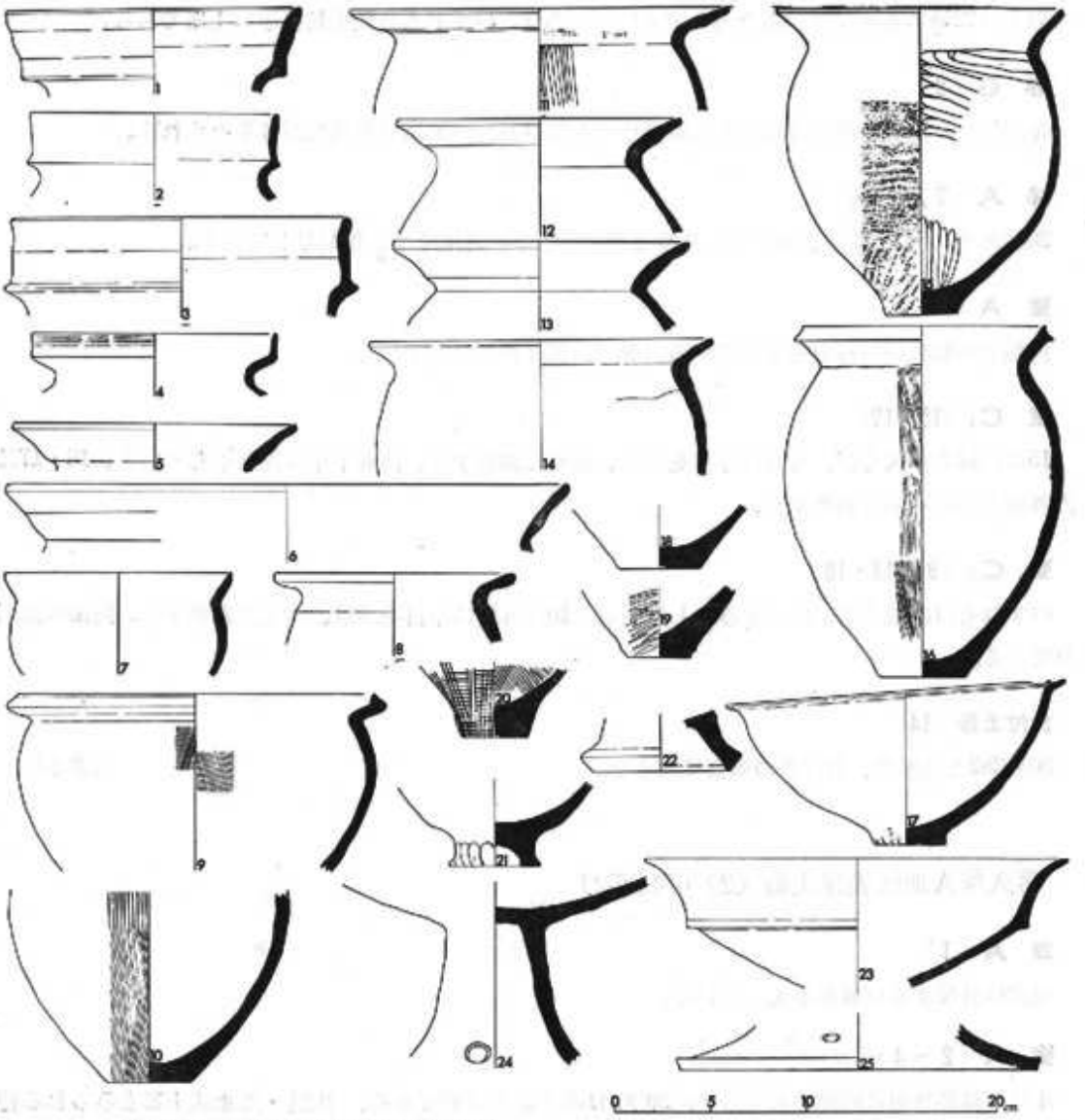
ゆるやかに外反する口縁部をもっている。15の土器は外面は叩目をつけ、内面上半は横方向の、下半は縦方向の篦削りで調整する。

甕 C_2（16）

口縁端部を上方につまみ出している。外面は刷毛で調整する。内面は下半が下から上へ、上半は斜上方へ篦削りする。

甕 C_3（7・8）

胴部の張らない小形の甕で、内外面ともに刷毛調整をする。



第118図　落久保A地区表採土器（2）

高 杯 A（23）

明瞭な段がある。内外面とも篦磨きを行なう。

高　杯（24）

脚部外面は篦削りを行なう。

鉢　C（17）

口縁部が外反する。刷毛調整である。

底　部（10・18～22）

19は叩目がみられ、10、20は刷毛で調整する。20は縦・横両方向の刷毛による調整である。21は甕の、22は台付鉢の台部であろう。　（樋本）

第5節　落久保B地区出土の遺物

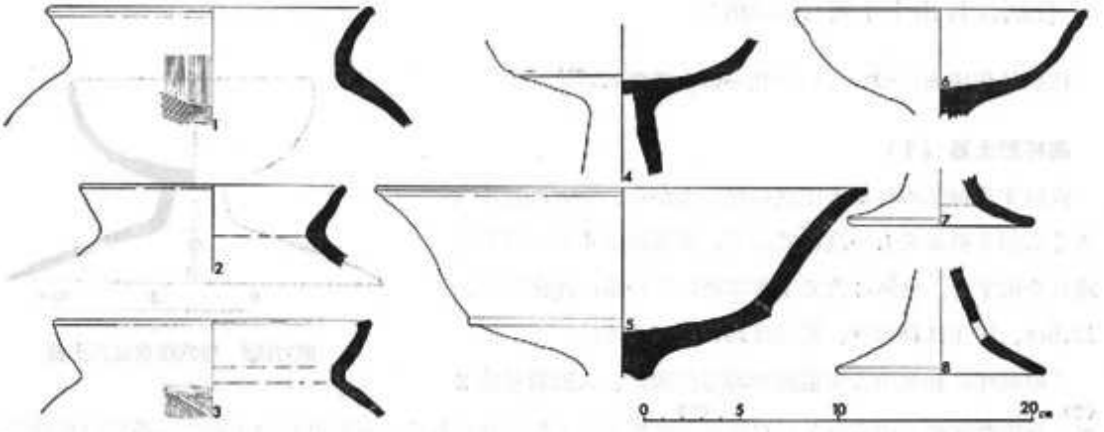
1. 竪穴住居址

住居址Ⅰ出土土器（図版84）

住居址Ⅰの床面についたものだけを図示した。住居址Ⅰからは土師器の他に鉄鋌、フイゴが検出された。

甕形土器（1～3）

口縁部の形態は2種類ある。(1)口縁部がゆるやかに外反する甕（1、2）である。(2)口縁部が内弯し、口縁端面が内側に内傾するものである（3）。1は外面は刷毛目調整で仕上げ、内面は篦削りで仕上げる。3は外面を刷毛目調整で仕上げる。胎土は細い砂粒を含み、色調薄褐色である。



第119図　住竪穴居址 Ⅰ

高杯形土器（4～8）

高杯は2形態に分類できる。(1)杯部に鋭い稜をもち、稜の部分にはつぎ目がみとめられ、つぎ目からゆるやかに上部へ外反するもの（4、5）である。(2)杯底部から口縁端部まで稜をもつことなく、ゆるやかに外反するもの（6）である。高杯1の稜は粘土をつぐ際に生じるものである。4の高杯はカマドの支脚として使用されていたために、二次的な火を受けて整形痕、調整痕とも不明である。

脚部（7、8は）中空の柱状部は、やがて急に下方に広がる。脚端部は稜をもち断面は角形を呈する。内面は篦削りしているために、下方に広がる部分に鋭い稜が生じる。胎土は杯部、脚部とも砂粒を含む。

この住居址出土土器は、いまだ須恵器を伴うことのない時期の土師器であり、甕1、2、高杯1、2とも大和川床の大阪府船橋遺跡のO－Ⅰ型式[(1)]に近い形態を取り、O－Ⅰ型式前後に比定できる。大阪府布施市小若江北遺跡（小若江Ⅰ式[(2)]）、岡山県笠岡市王泊遺跡の、王泊5層[(3)]の布留式よりは、新らし

い時期の土師器である。[4] 布留式が4世紀後半に、船橋O—II型式が須恵器を伴なうことから、その実年代を5世紀後半と考えるならば、住居址の土師器は5世紀前半にその位置づけが可能であろうと考える。 (山本)

註

(1) 原口正三、田中琢、田辺昭三、佐原真、『河内船橋遺跡出土遺物の研究』（2）大阪府文化財調査報告第11輯、昭和37年。

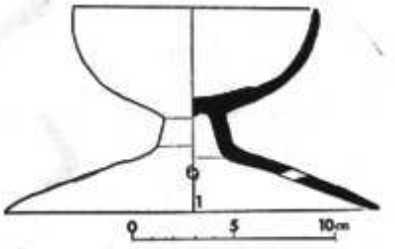
(2) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』昭和31年。
横山浩一「手工業生産の発展—土師器と須恵器—」『世界考古学大系』日本III、昭和34年。

(3) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 昭和31年。

(4) 小若江I式と船橋O—I型式の関係は、後者が後出であることは明らかであるが、壺2等ではその区別は、現在では困難な状況にある。ここでは甕1、高杯1等で後者の時期に考えた。

住居址IV出土土器（図版87）

住居址IV床面についていた唯一の土器である。



第120図 竪穴住居址IV土器

高杯形土器（1）

直口する椀状の杯部と中空の柱状部から、下方に急に大きく広がる脚部をもつ高杯である。脚部には4個の円形の透孔を配する。全体は篦で丁寧に磨いている。杯部口径は12.6cm、脚径は18.2cm、器高は10.6cmである。

この高杯は和歌山吉田遺跡の53号住居址[1]、大阪府松原2層[2]、兵庫県播磨大中遺跡7号C住居址[3]に類似の土器がみられる。松原2層の土器に一番近い形態である。吉田遺跡、松原2層とも庄内式併行の土器と伴出しており、この高杯も庄内式併行の時期と考えられる。 (山本)

註

(1) 和歌山県教育委員会『吉田遺跡第2次調査概報』 昭和46年。

(2) 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高等学校研究紀要』復刊第3号、昭和43年。

(3) 上田哲也他「播磨大中」播磨町教育委員会、昭和40年。

2. 土　　坑

土　坑　20（図版77～79）

壺形土器A（1～24）

口縁は肥厚発達している。垂下する口縁端部に、多条（3～6条）の凹線をめぐらし、その上に円形浮文や棒状浮文を加飾する。円形浮文のなかで6は上下4列、左右4列を一単位として細かい浮文を加飾する。斜線文と棒状浮文（7～9）、棒状浮文と円形浮文（2、5）の組合せ使用がある。棒状浮文の使用は変化に富んでいる。口縁内面に凸帯をもつものも多く（5～8、13、15～17、19、21、22）、さらに凸帯に篦で刻目を入れるもの（7、8）もある。

頸部には凹線をめぐらすものが多いが、3のように指頭圧痕凸帯を下方にめぐらすものもある。また断面三角形凸帯と指頭圧痕文の組合せもある（7、23）。凹線をもたないもの（9）、指頭圧痕文のみのもの（5）もある。2は頸部に綾杉文を配する。頸部の調整は、外面を上下方向の刷毛で、内面は篦磨きによる。24は壺形土器A_4に分類され、口縁部が肥厚し、内外面ともに篦による連続刻目文を配している。内外面ともに篦磨きで調整する。

壺形土器C_1（26～28）

28は脚台を欠くが、算盤玉形の胴部に長くて細い筒状の頸部がつくものである。口縁部には3条の凹線を配し、頸部には凸帯文を配する。胴部は波状文、直線文、円形浮文を使用して加飾する。内面は頸部に絞り目があり、胴部内面は刷毛で調整する。

甕形土器（35、36、38、39、41、42、43～45）

口縁端部は肥厚し、上方につまみ出しているものが多い。35は口縁部に3条の凹線をめぐらし、5本の棒状浮文で加飾する。頸部上方はヨコナデ調整する。胴部には篦による刻目文を配する。36は口縁部に篦による刻目文を配し、円形浮文を加飾する。42は胴部上方外面を篦磨きし、内面を刷毛調整する。38は胴部に上下二列の篦による刻目文を配している。

大形甕形土器（34、37、40）

いずれも口縁部は肥厚し、上下に拡張する。34は棒状浮文で加飾する。37の胴部上半は、外面を縦方向の、内面を斜方向の刷毛で調整する。

鉢形土器B（29）

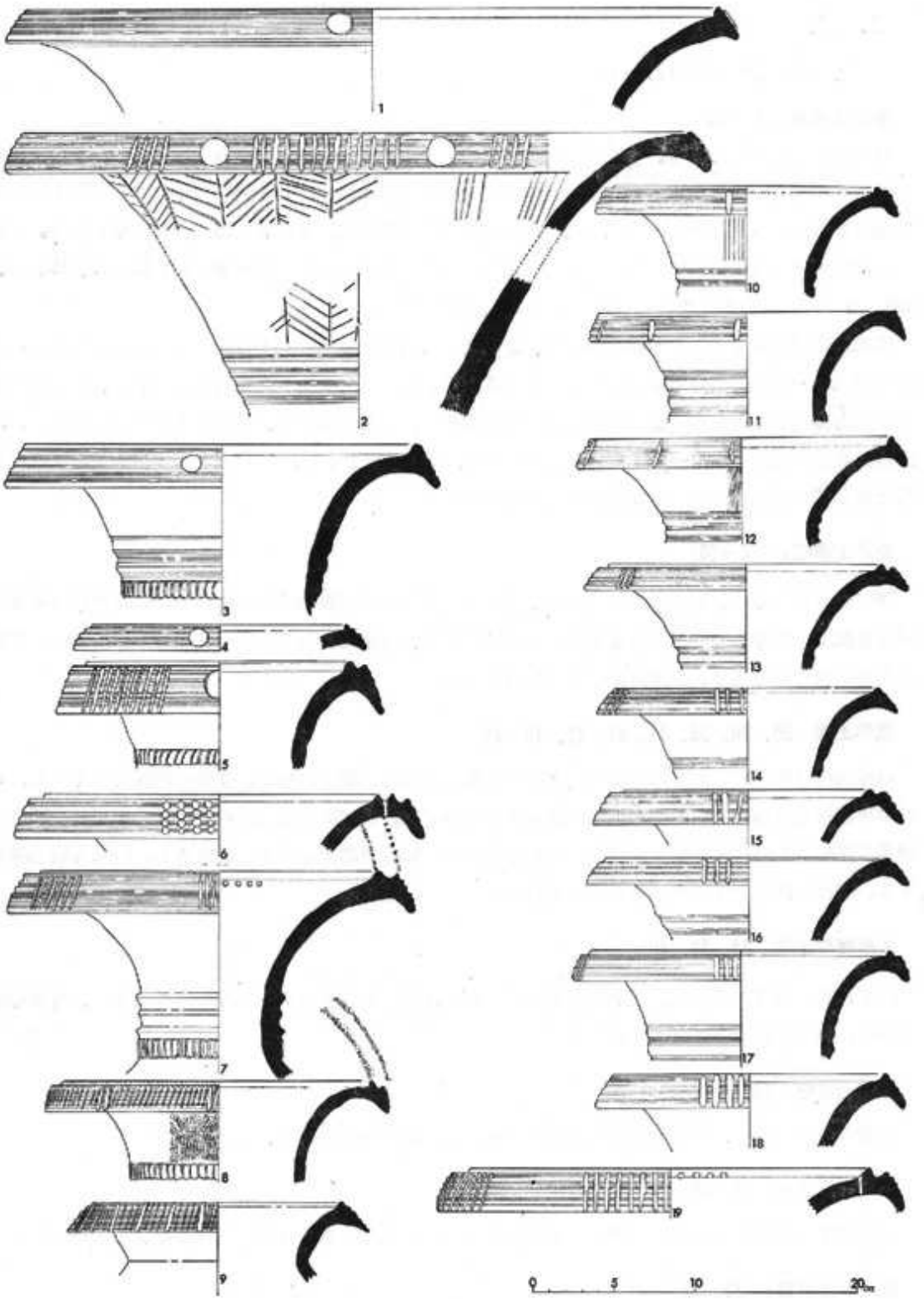
脚部のみであるが、鉢部と脚部に2条の断面三角形の凸帯文を配し、円孔を穿つ。

大形鉢形土器（47、48）

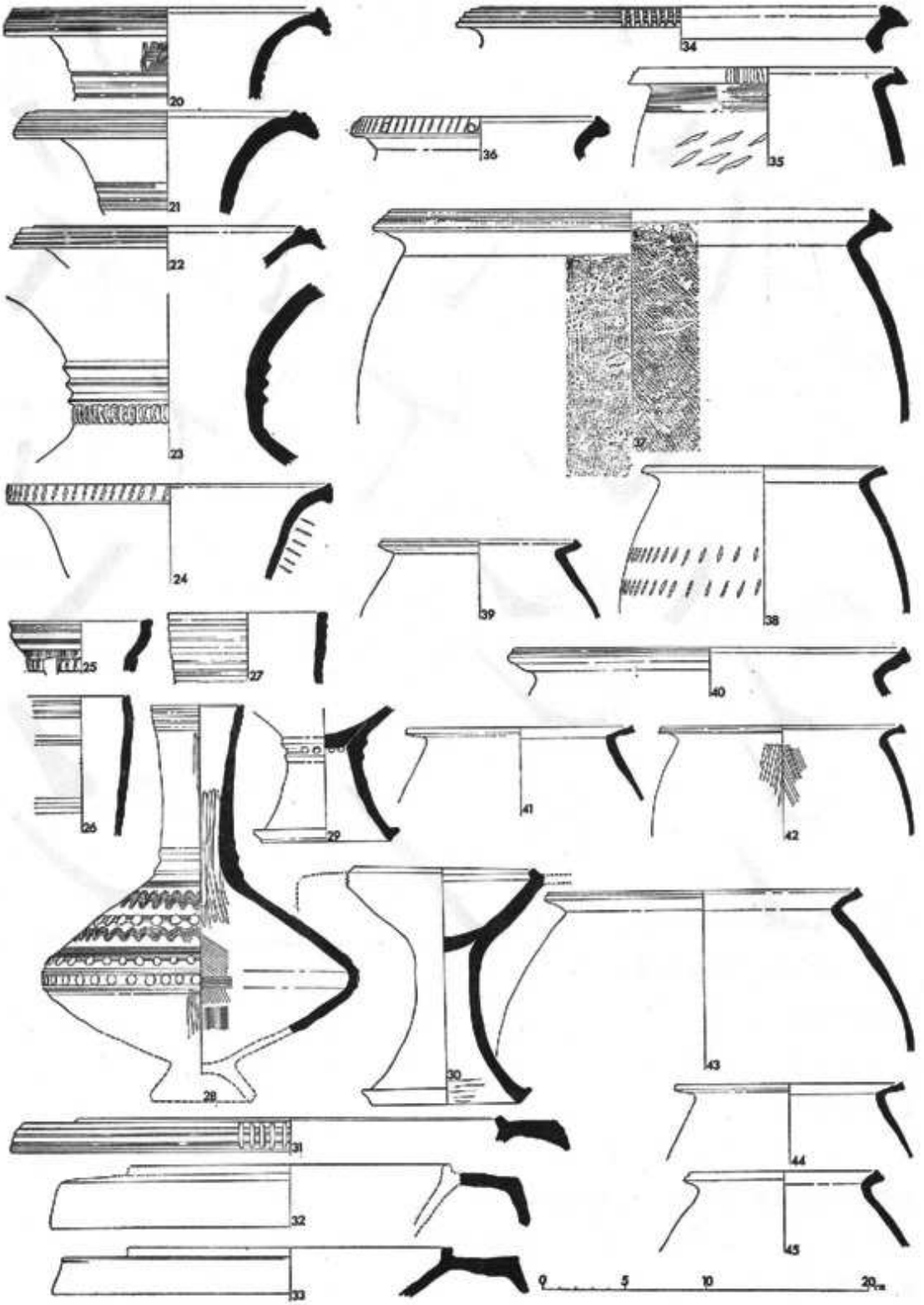
口縁端部は内面に突出する。48は口縁端面に円形浮文を配する。3条の凹線を配する。

高杯形土器B_1（31、33）

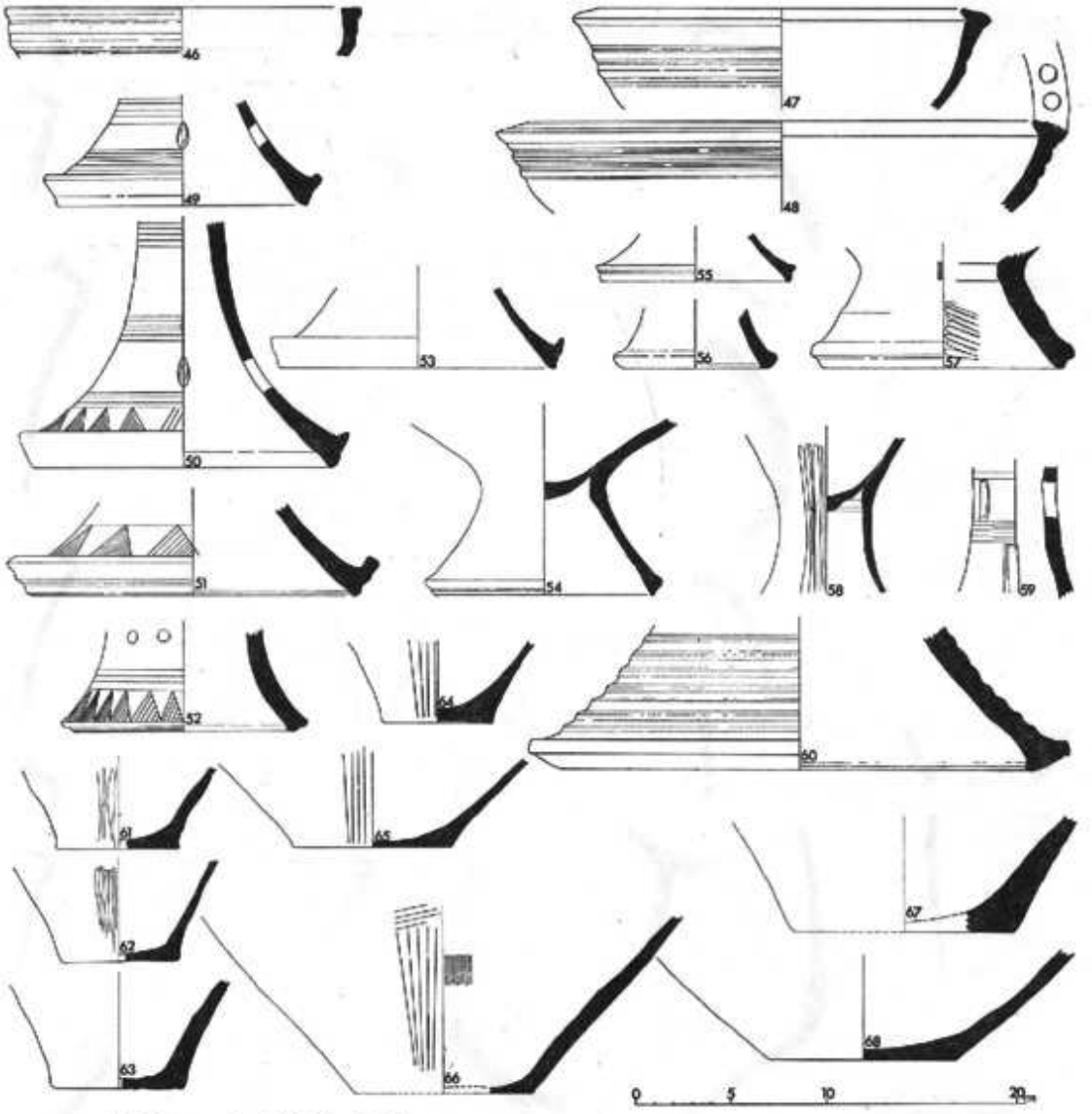
口縁部は外方は水平に延びる。31は3条の凹線をめぐらし、5本の棒状浮文を加飾する。



第121図　土坑20土器(1)



第122図　土坑20土器(2)



第123図　土 拡 20 土 器 (3)

高杯形土器B₂ (32)

口縁端部が垂下する。器面は篦磨きによる調整である。

器台形土器 (60)

底径約33.5cmある。脚端部を内外に拡張する。

高杯形土器脚部A (49～59) ・同B (54)

高杯形土器の脚部で、脚端部を外上方に拡張する。鋸歯文を配するものも多い。

底　部 (61～68)

壺形土器および甕形土器の底部である。　(高橋・櫃本)

土　坑　21　（図版83上）

壺形土器A（1）

1は口縁端面に3条の凹線文をめぐらし、その上に斜線文、棒状浮文で加飾する。

甕形土器（2～4）

口縁端部は肥厚し、上方にわずかに張り出す。外面は刷毛調整で仕上げている。

鉢形土器B（8～9）

口縁下に凹線文をめぐらす。8は口縁下に6条の凹線文をめぐらし、凹線文下は篦磨き整形で仕上げる。8は2孔1対の紐孔をうがつ。

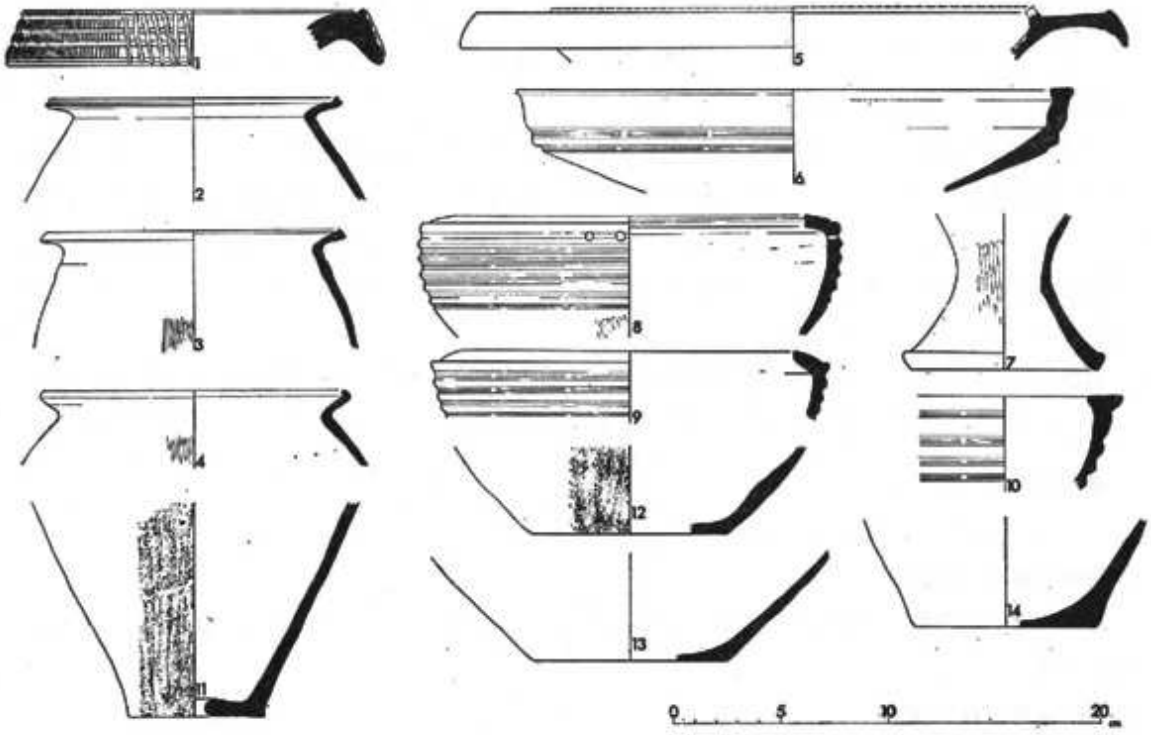
大型鉢形土器（10）

口縁端部を内外に強く拡張する。口縁下には数条の巾の広い凹線文をめぐらす。

高杯形土器A（6）

立ちあがる部分が明確である。たちあがる部分に2条の凹線文をめぐらす。川島遺跡の高杯Aは、6のように杯部立ち上がりの部分が、明確にたちあがるものは極く少ない。

高杯形土器B（5）



第124図　土　坑　21

5は高杯B_2に属する。口縁端面は無文である。

高杯形土器脚部B

脚部外面は篦磨き整形で仕上げ、内面は篦削り整形で仕上げる。

底　部（10～14）

11はこしきであり、荒い篦磨き整形で仕上げる。12・13は壺形土器の底部である。

（山木）

土坑22出土土器（図版81）

壺形土器A（1～13）

口縁端部の形態は壺A_2が大多数である。8は頸部から同じ器厚のまま折り曲げて、口唇部は上に張り出すことなく丸味をおびているが、垂下する口縁端部をもつから壺A_2に扱う。

壺A_2の口縁端面に数条の巾の狭い凹線文をめぐらす。口縁端部の凹線文上の加飾には篦描斜線文と棒状浮文がある。棒状浮文のみのもの（1～3等）と、斜線文と棒状浮文とで二重に飾るもの（7、11等）とがある。8は口縁端面下端にのみ斜線文をもちい、その上に棒状浮文で飾る。

口縁部内面には文様をもつものともたないものがある。文様には凸帯文、櫛描波状文、小竹管文がある。壺Aの口縁部内面の凸帯文はかならず断面三角形の貼付凸帯文である。凸帯文の条数は1条のものが多いが、2条をめぐらすもの（2）、3条をめぐらすもの（14）もある。7は凸帯文に刻目文をめぐらす。12は凸帯文間に小竹管文でさらに飾る。8は凸帯文下に波状文を飾る。小竹管文・波状文は以上の各々1点のみである。

頸部には文様をもつものともたないもの（18、4）とがある。文様には断面三角形凸帯文と指頭圧痕文凸帯、棒状浮文がある。凸帯文には指頭圧痕文凸帯をめぐらすもの（9、14）と、断面三角形凸帯文を数条めぐらすもの（14）と、両者をめぐらすもの（16）がある。その際断面三角形凸帯文が上で指頭圧痕文凸帯が必ず下で、頸部と胴部の境界をなす。断面三角形凸帯文が凹線文に変っても同じことが言える。

胴部文様には櫛描波状文・同直線文・同斜格文・円形浮文・篦圧痕文・貝殻圧痕文がある。圧痕文のみで飾るものは極くわずかである。圧痕文が櫛描文と構成するときは必ずその最下帯に飾る。

壺形土器B（18）

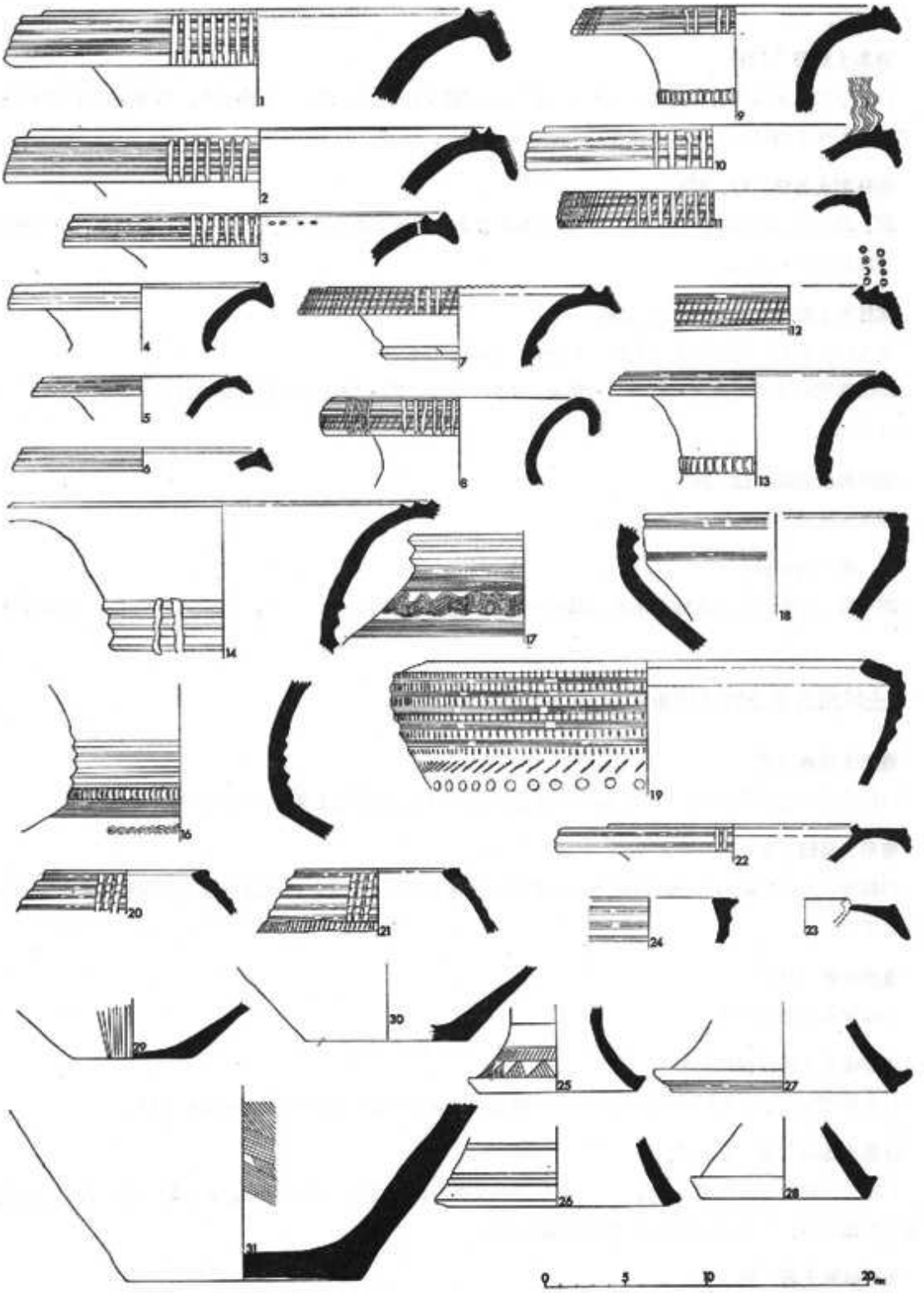
口縁部上下端に各々1条の凹線文をめぐらす。口縁部は直口している。

壺形土器F（20、21）

21は口縁下に5条の凹線文をめぐらし、その上に棒状浮文を加飾する。凹線文下には刻目文凸帯をめぐらす。

大型鉢形土器（24）

内外に拡張する口縁端面に巾の狭い3条の凹線文をめぐらし、口縁下には巾の広い凹線文をめぐら



第125図　土 坑 22 土 器

す。

鉢形土器B（19）

口縁下に5条の凹線文をめぐらし、凹線文と凹線文の間を刻目文で加飾する。凹線文には貝殻圧根文と円形浮文を飾る。鉢Bの中では大型である。

高杯形土器B（22、23）

22、23とも高杯B_1である。23は口縁端面に2条の凹線文をめぐらし、その上に棒状浮文を加飾する。23は無文である。

高杯形土器脚部A（25、27、28）

脚Aには脚部に文様をもつものともたないものがある。

25は脚部に篦描直線文・斜線文・鋸歯文をめぐらす。27・28は無文である。内面は篦削り整形で仕上げる。

高杯形土器脚部B（26）

脚部に篦描平行直線文をめぐらす。

底　部（29～31）

29～31は壺形土器の底部である。31は内面に刷毛目を残す。（山木）

土坑23出土土器（図版80中）

壺形土器A（2）

口縁端部はA_2形状を呈す。端面に凹線文をめぐらし、内面は1条の凸帯文をめぐらす。

壺形土器B（5）

口縁部は垂直に直口する。口縁外面は4条の凹線文をめぐらす。内面はヨコナデ調整による隆起が生じている。

甕形土器（15）

口縁端部は肥厚する。

大型甕形土器（14）

口縁端部は上下とくに上方に拡張する。端面には3条の巾の狭い凹線文をめぐらす。

鉢形土器A（6～9、11～13）

口縁下に数条の凹線文をめぐらす。11は口縁上端を円形浮文で飾る。6、9、13は高杯Aになる可能性が強いが、ここでは鉢Aと一緒に記述した。

大型鉢形土器（10、8）

口縁端部は内外に強く拡張する。8は口縁部に4条の凹線文をめぐらし、その上に棒状浮文で飾

る。10は口縁部を著しく、内傾させて、口縁外面には深い凹線文を 1.5cmの間隔をあけて2条めぐらし、その間の部分は凸帯文の様相をおびる。凹線文上には円形浮文を連続させてめぐらしている。川島遺跡では異質な大型鉢で、讃岐紫雲出遺跡には多く見られる。

器　台（16）

脚端部を内外に拡張させる。底径約31cmの器台である。外面には幾条もの断面三角形の凸帯をめぐらし、その上に刻目文を飾り、さらに棒状浮文を加飾する。凸帯文間はヨコナデ調整をおこなう。

（山本）

土坑24出土土器（図版80中）

壺形土器A（1～3）

壺A_2に属する1、3と、壺A_3に属する2とがある。壺A_2は、口縁端面に4、5条の凹線文をめぐらし、その上に円形浮文を貼り付けるもの（3）と棒状浮文を貼り付けるもの（1）とがある。3は内面に1条の刻目文凸帯をめぐらす。1は頸部外面を刷毛調整をおこない内面を横方向に篦磨きで整形している。図示しなかった壺Aの頸部に巾の広い凹線文をめぐらしているものがある。

胴部文様は、櫛描波状文、直線文、斜格文と円形浮文で、最下帯を貝殻圧痕文を配するものと、篦圧痕文のみを胴部中央部に飾るものとがある。

壺形土器B（7）

口縁部には凹線文をもたない。口縁部はヨコナデ調整をおこなう。頸部外面は篦磨きで整形している。

大形甕形土器（5）

口縁端部は上方に拡張する。ヨコナデの範囲は外面で頸部下約1.5cmである。外面は刷毛目調整している。内面は磨滅がひどいために不明である。

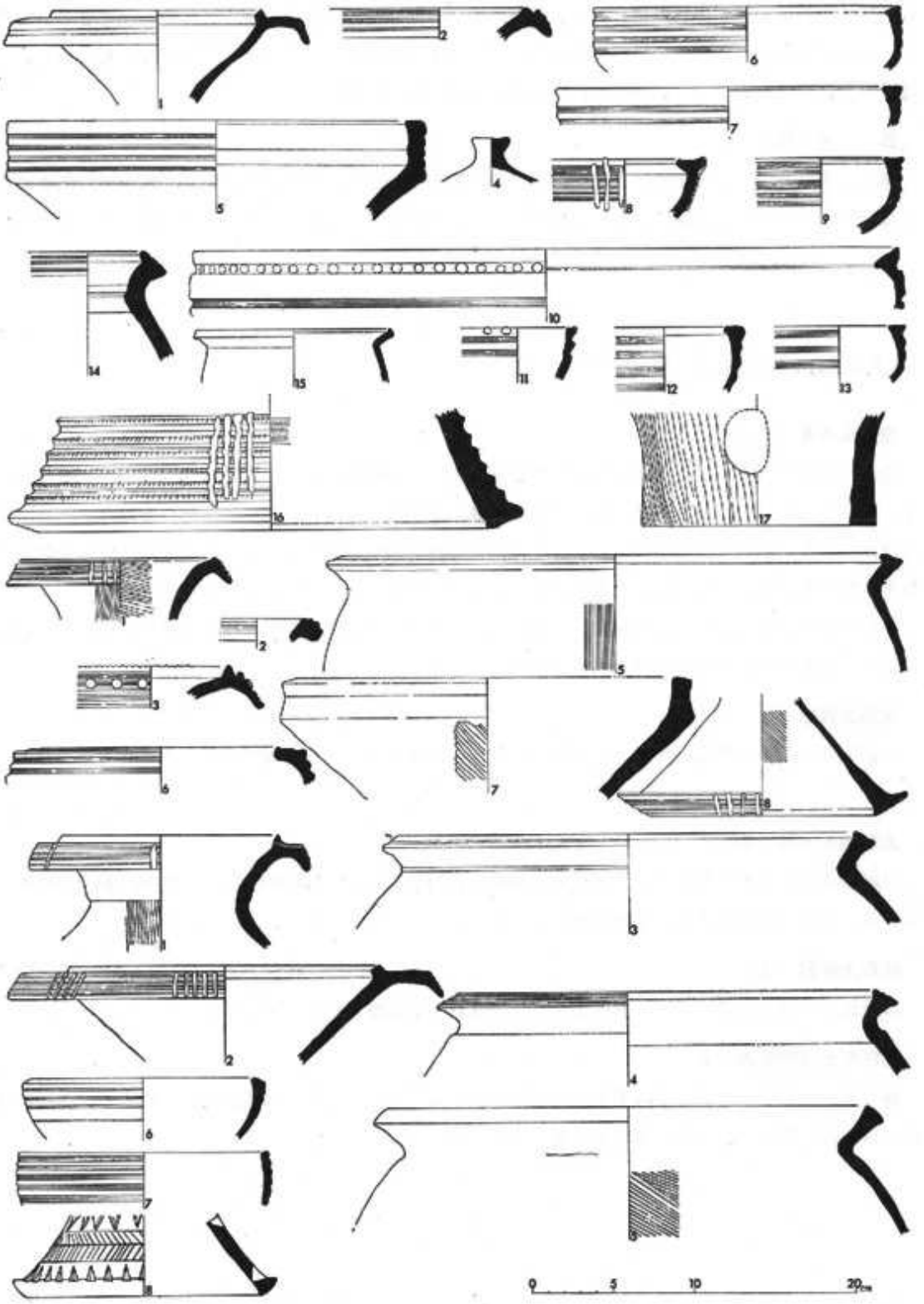
鉢形土器B（6）

口縁部に凹線文をめぐらす。現存する部分はヨコナデ調整で仕上げている。

高杯形土器脚部A（8）

強く上方に拡張する脚端面に4条の凹線文をめぐらし、凹線文上に棒状浮文で加飾する。内面には刷毛目が残っており、その下は磨滅のため不明である。

（山本）



第126図　土坑23・24・25土器

土坑25出土土器（図版82上）

壺形土器A（1）

1は壺A_2である。口縁端面には凹線文をめぐらし、その上に棒状浮文で飾る。内面は広い水平面を設け凸帯文を1条めぐらす。頸部には文様はない。外面は頸部、胴部とも刷毛で仕上げている。

大型甕形土器（3～5）

口縁端部は内外に拡張するもの（4）と拡張の著しくないものとがある（35）。4は口縁端面に凹線文三条をめぐらす。5の外面は、箆磨きをおこない、内面は刷毛目調整で仕上げている。5のヨコナデの範囲は内外面とも頸部下1.5cm前後である。他は磨滅がひどいため調整痕は不明である。

鉢形土器A（6）

口縁部外面には4条の浅い凹線文をめぐらす。7は一応鉢Aと考える。7は外面に凹線文をめぐらす。

高杯形土器B（2）

高杯B_1の形態を示す。口縁端面に凹線文をめぐらし、その上に4条を1単位とする棒状浮文を貼り付ける。外面は箆磨きで口縁部はヨコナデ調整で仕上げている。

高杯形土器脚部A

8の脚部の上下端に抉り込みによる鋸歯状文を飾り、その間を箆描沈線文による綾杉文で飾る。

（山本）

土坑26出土土器（図版82下）

壺形土器A

口縁端部は壺（1～8）A_2が多く、壺A_1、壺A_3は各1点ずつである。

壺A_2の口縁端面上に斜線文を加飾し、さらに大きな円形浮文を貼り付ける。端面を凹線文で飾らない壺Aは2点ある。壺A_1（5）は櫛描波状文で飾り、壺A_3（8）は無文である。

壺A_2の口縁部内面は、凸帯をめぐらすもの（2、7）とそうでないもの（1、3等）とがある。6は口縁内面に○文様をめぐらしている。7は口縁部内面に水平面を広く持ち、そこに3条の凸帯文をめぐらしている。図示できなかったものに2条の凸帯文を内面に持ち、土坑22の12の土器と同じように凸帯間に小竹管文を飾るものがある。

頸部の文様には断面三角形の凸帯文をもつものと指頭圧痕文凸帯をもつものとがある。

胴部文様は、櫛描直線文、同波状文だけを組み合わせるものと、それに斜格文、円形浮文を組み合わせるものがある。

甕形土器（10、11、12）

口縁端部は、拡張の著しいもの（11）と、著しくないもの（11）がある。11は口縁端面には4条の凹線文をめぐらし、その上に棒状浮文を加えている。磨滅がひどいために細部の整形に関しては不明

である。11、12は赤褐色を呈する。

大型壺形土器（9）

口縁端部を上下に張出す。ヨコナデの範囲は、内面で頸部下0.8cmである。それ以下を刷毛調整で仕上げている。

鉢形土器A（14、16）

口縁下には数条の凹線文をめぐらす。

大型鉢形土器（13、15）

13は口縁端面に巾の狭い凹線文をめぐらす。口縁下には3条の巾の広い凹線文をめぐらす。

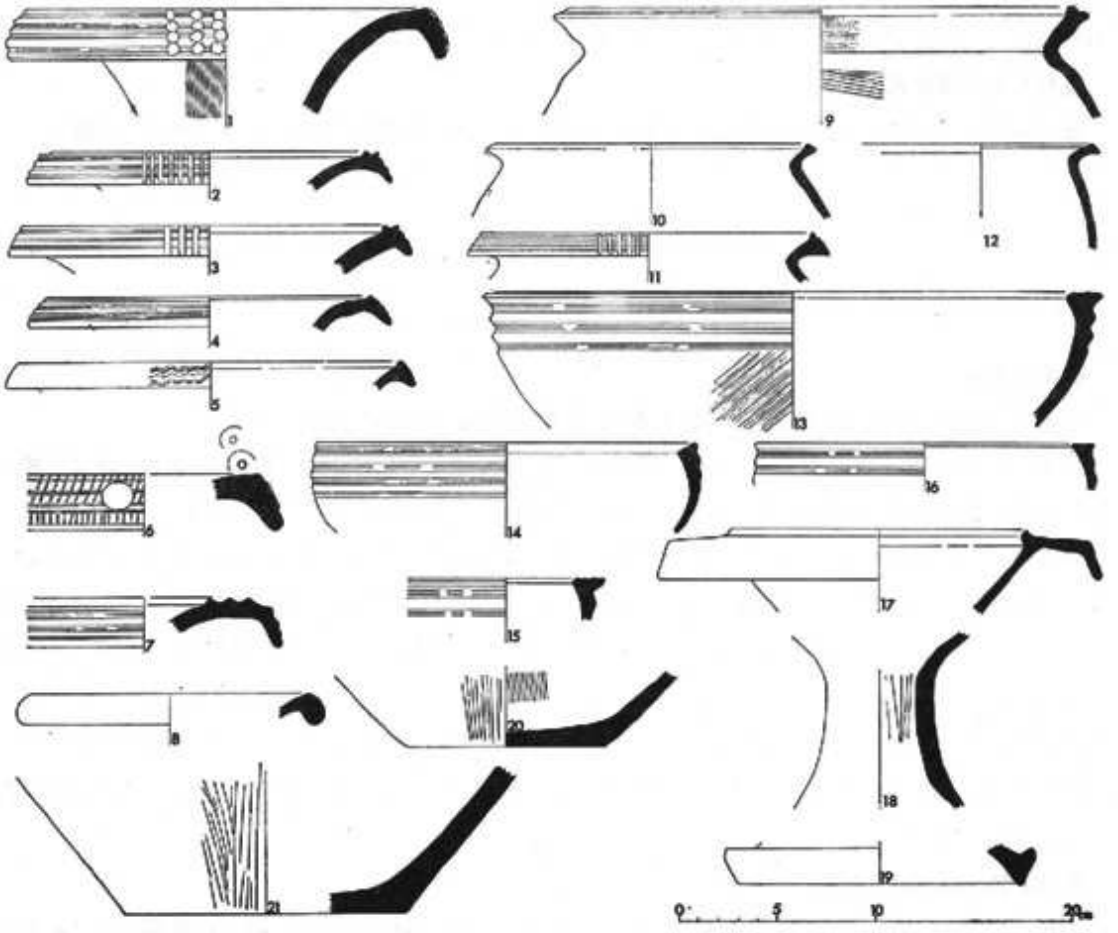
高杯形土器B（17、18、19）

17、18、19はともに色調は赤褐色であり、同一土器であると考えられる。

口縁端面の形態は、高杯B_2である。端面は無文である。脚端部は拡張する脚Aである。

底　部（20、21）

壺形土器の底部である。20、21とも箆磨きで整形し、内面は刷毛目で仕上げている。　（山本）



第127図　土　坑　26

3. 溝　遺　構

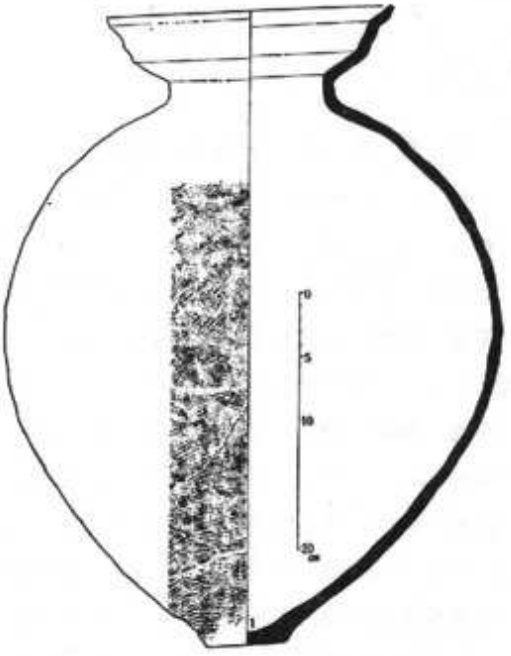
29 溝 （図版87）

壺 形 土 器

E76地区溝底部に密着して出土したものである。他は、図示することのできない細片のみである。器高50㎝、胴部最大径39㎝の壺形土器である。複合口縁をもち、頸部は短く直立する。胴部はやや丸味を帯び、底部は尖りぎみで平底である。

口縁部および頸部は、横方向にこまかい刷毛をかけている。胴部から底部にかけて、横方向の叩目を行ない、縦方向の刷毛をかけている。特に胴部上半は下地の叩目をほとんど消している。内面は刷毛によって調整されている。時期は和歌山市・井辺弥生遺跡、第3層の土器（第27図10）に近似するもので、川島20溝の時期、すなわち古墳時代初めと考えられる。

（樋本）



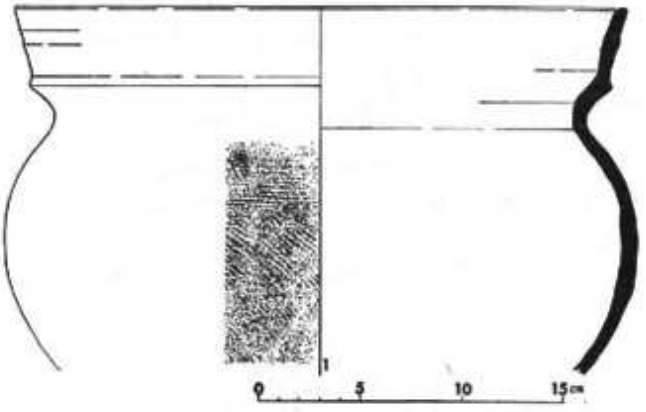
第128図　29　溝

落久保B地区表採土器

鉢形土器（1）

1は落久保A地区の表採の土師器である。口縁部は外傾気味に上方へ直線的にのびる。口縁部下端、すなわち口縁部と頸部の界に鋭い突出した稜をめぐらす。口縁部はヨコナデ調整で仕上げる。口縁部内外面ともにわずかに肥厚し、それはヨコナデの際に生じたふくらみと考えられる。胴部外面は刷毛で仕上げる。刷毛目の方向は最初横方向に、その下は斜下方向である。内面は頸部下を篦削りで整形している。口径は31.4㎝の大型の土器である。1は小若江南遺跡（小若江Ⅱ式）のものとまったく同型であり、刷毛目の方向も一致し、この時期に位置する土器であろう。

（山本）



第129図　落久保B地区表採土器

第4節　各地区出土の石器

各地区において出土した石器を分類すると、石鏃、打製石庖丁、石槍、扁平片刃石斧、太型蛤刃石斧、凹石、タタキ石などがみられ、これらの石器の出土が集中してみられるのは、60～70グリット間、すなわち溝が多くみられるところと、住居址が集中してみられるところであり、川島遺跡の住居址群の範囲をうかがい知ることができる。

打製石鏃　(図版85、86)

石鏃は全部で27点出土しており、材質は全部サヌカイトである。その形状を分類してゆくと、平基（無茎）式、凹基（無茎）式、凸基無茎式、凸基有茎式がみられ、平基（無茎）式の中には、二等辺三角形状（a型）のものと、砲弾型を呈しているもの（b型）との二型式に分類できる。

平基（無茎）式a型(20、22、23)　3個あり形状はいずれも正二等辺三角形状を呈しており、20、22は基辺の主要剝離はあまりしていない。

平基（無茎）式b型 (21、24～27、30、33)　7個あり小型のものがめだつ。21、25～27、30、33は、大剝離面を残したまま主要剝離を行っており、24は砲弾型を呈している。

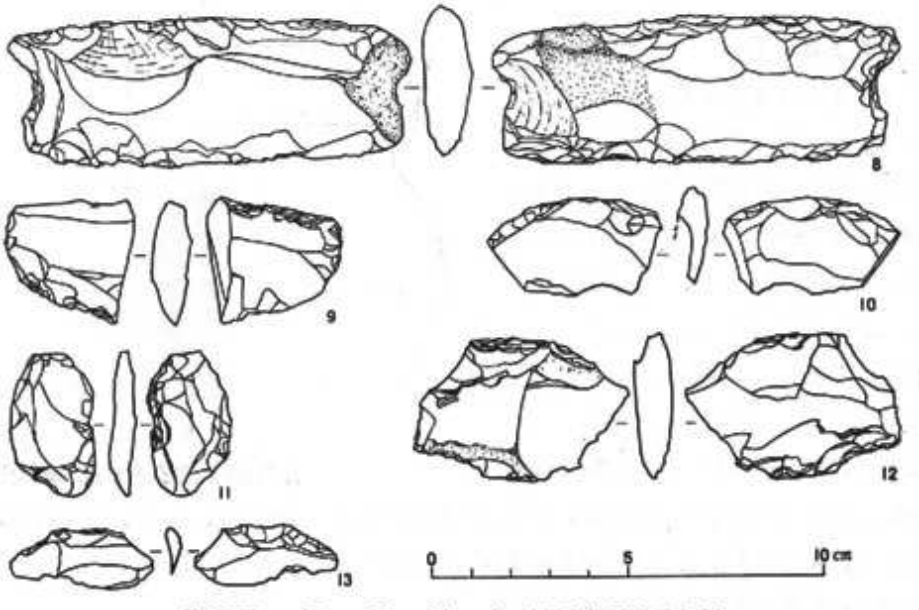
凹基（無茎）式 (14～18)　5個あり、凹基の形状はいずれも左右対称の逆刺で、V字形に深くくぼませたもの (14) と比較的浅いもの (15～18) がみられる。

凸基有茎式 (19、29、34)　3個あり、19、29にみられるように基辺の両端をわずかに剝離させただけのものと、34にみられる円基の2種類がみられる、なお立岡遺跡出土の石鏃の中に（挿図○）尖基のものが1個みられる。

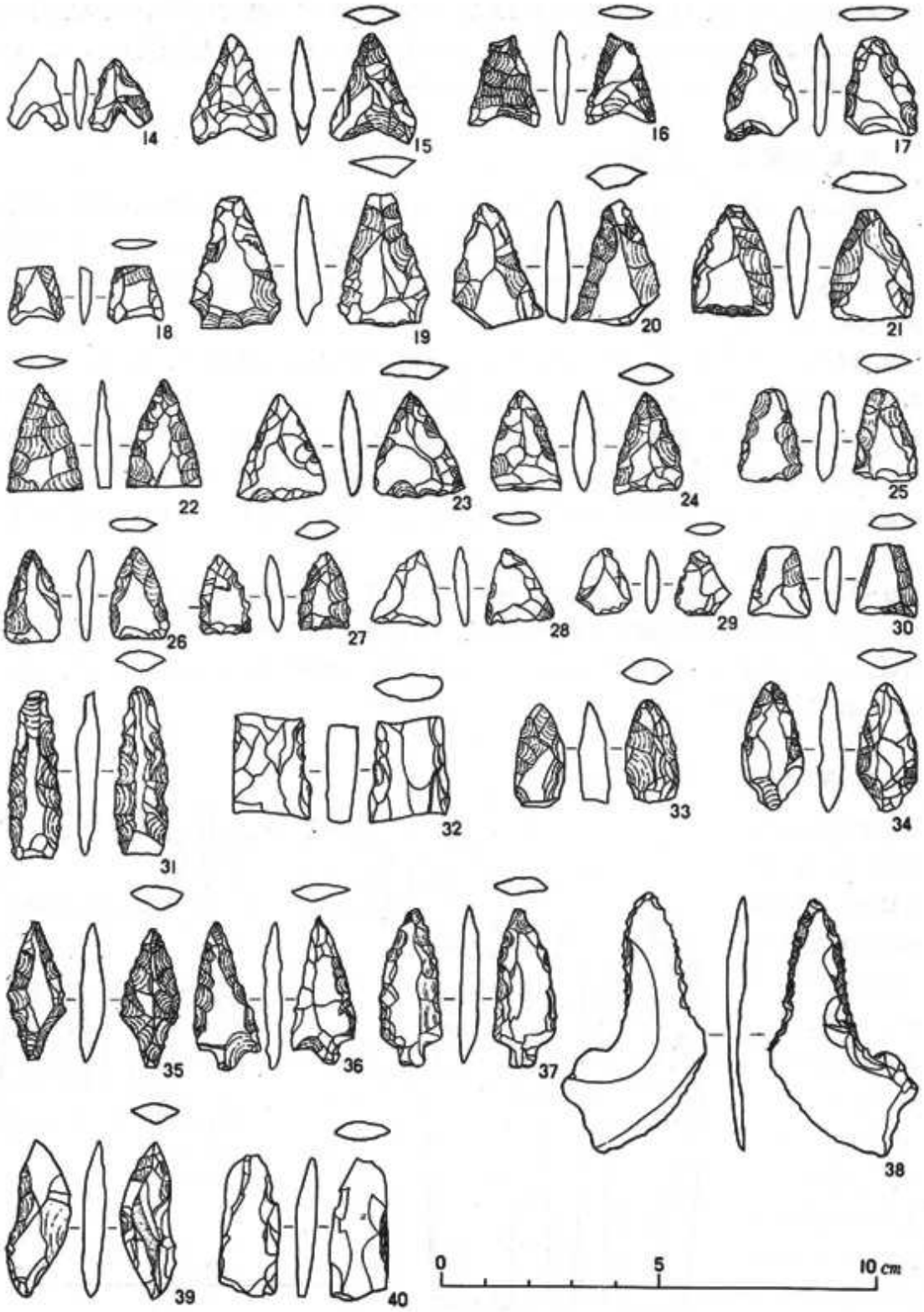
凸基有茎式(35～37)　3個あり、鏃身と茎との区別の明確なものと(36、37)、明確でないもの(35)とに分類できる。

未完成石鏃
(38、39)
38は形状からみて平基（無茎）式で、39が凸基有茎式になるものと考えられる。

石槍（図版85、86）
石槍は3個みられるが、



第130図　石　器　(1)　（8は竪穴住居址Ⅱ出土）


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
5
10 cm

第131図　石　器　(2)

いずれも小型のもので、材質はサヌカイトである。 完存しているもの31の長さは3.9㎝、32、40は破損しているため長さは不明であるが、幅から考えていずれも5㎝未満のものと考えられる。31は尖端の部分が磨滅しているのがみられるが、側面の部分の磨滅は観察できない。

打製石庖丁　（図版85上）

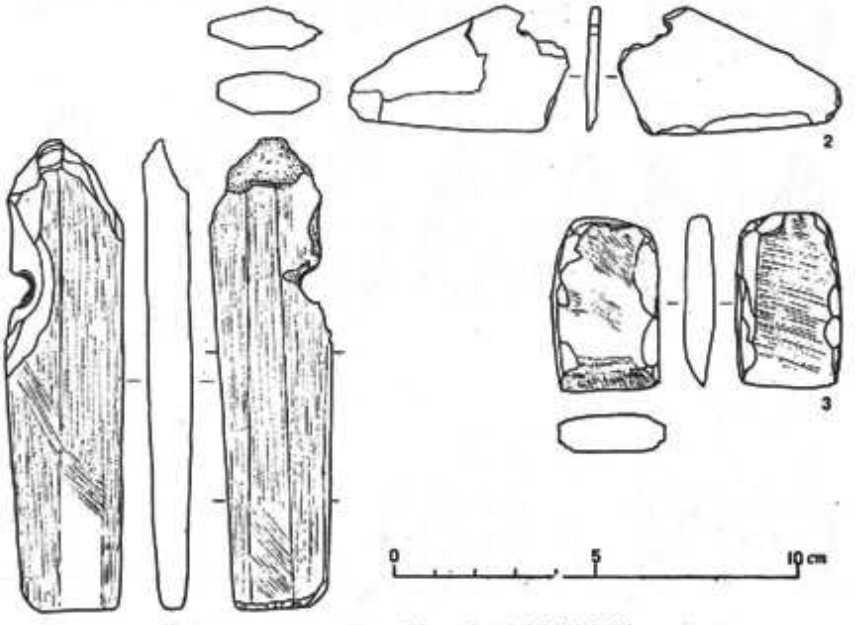
当遺跡出土の石庖丁は主にサヌカイトを材料とする打製品である、しかし2にみられる角一片岩の一種を薄い板状に剝離し局部的に磨製を施し三角形状のものに紐かけ孔を通し、石庖丁として使用したものもみられる。形状からみると、紐かけは孔2個と考えられるが、残っている孔では紐ずれの痕跡は明確ではない。

8、12は瀬戸内海地方に多くみられる石庖丁で、8は長さ10.4㎝、巾3.7㎝で、12は長さ不明で巾3.6㎝で両面とも大剝離の末端を、さらに剝離、調整して刃としているものである。 これは紫雲出遺跡の打製石庖丁のⅢ型に類似しており、横長剝離を使用している。なお8の石庖丁は正面右側に磨滅がみられ、その部分だけ調整面が完全に磨滅し、右下がりに向かって磨滅しており、その部分に左手の親指が丁度あたる部分に位置することが観察された。このことから同石庖丁を使用した者は左ききと考えられる。

9～10は破片であるが、形状を復元してみると、磨製石庖丁にみられる楕円形のものと類似するもので両面とも大剝離の末端を細かな調整によって、形状を整えているのがみられるが、9のように、片の部分はむしろ8と同じ調整を行ない、背の部分をより密な調整をしているのがわかるが、紐かけがみられないのが特徴である。

磨製石剣　（図版85上）

硬質粘板岩を材質として、長さ残存116㎝、巾2.4㎝～約3㎝で、両側面は各々並行に研磨しており、正面と裏面は2本と1本の綾線がみられ研磨痕がみられるが、同時に両面とも先の方向に向かっていたから右へ擦痕状のものがみられるが、状況か



第132図　石　器　(3)　（3は土坑18出土）

ら判断すると使用のための擦痕ではなく、と石による擦痕であろう。この石剣の中程に半円形状の孔がみられ、主要剥離の後、孔の部分の調整をしておりそれも、前側のみに剥離面を残しているところから、石剣として使用していたのが破損してしまったので、矢柄研磨器のようなものに2次使用したものと考えられる。

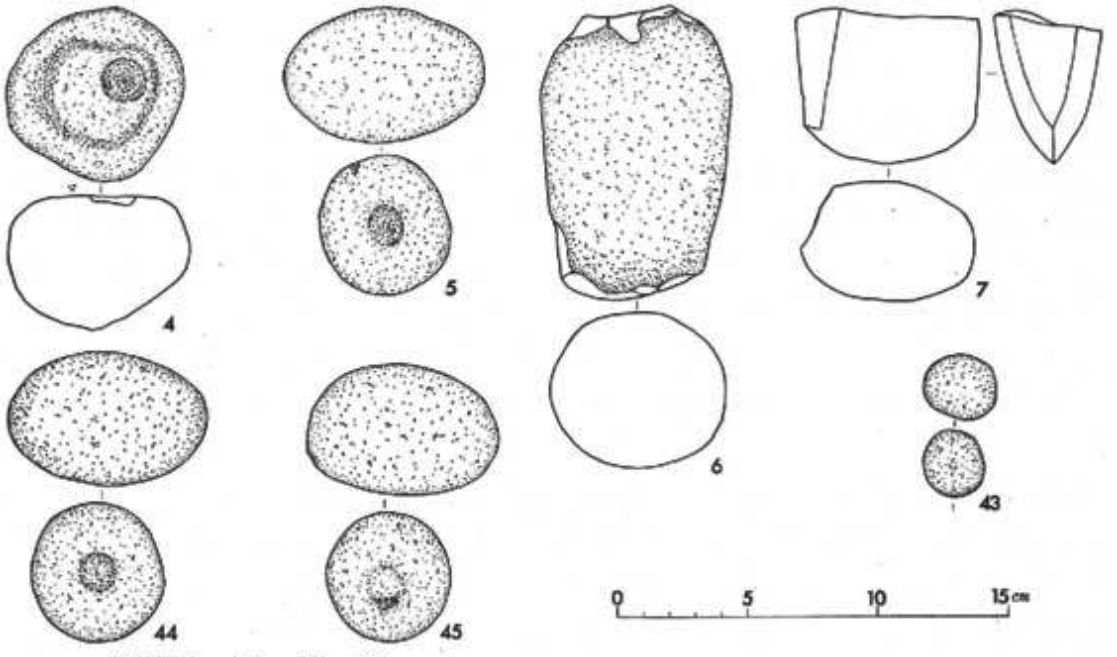
扁平片刃石斧（図版85上）

長さ4.2cm、巾2.5cm、厚さ0.7cmの扁平な板状をなす片刃の小型石斧であり、両面ともやや右下がりの研磨がみられるが、両側面はあまり顕著ではないが、角の部分は荒い剥離が残されている。なお刃部は刃に対し80度程の左から右への擦痕が観察できる。

太型蛤刃石斧（図版86下）

閃緑岩を材質として、残存長さ5.7cm、巾7cmの断面楕円形の棒状を呈しており、刃は両面からまるくとぎだして、縦断形状が蛤刃状を呈する石斧である。

凹　　石（図版86下）



第133図　石　器（4）

花崗岩を材質として横径7cm、縦径5cmのもので、凹状のある部分は平坦な自然面を残しているところにみられ、全体を丸くするよう、形状を整えている。

たたき石（図版86下）

両方とも花崗岩を材質としており、5は、わずかに0.5cm程の使用痕が認められるだけで、大きな剥離はない、6は両面とも大きく剥離しており横径6.8cm、6cmの楕円状のもので、比較的握りやすいものである。

（阿久津）

第5章　ま　と　め

第1節　川島・20溝の土師器群

川島遺跡落久保A地区の20溝から 526点の完形土器と口縁部破片が一括出土した。この一括資料の個々については第4章第3節1項で記述したとおりであり、これをもって本書では本節2項で説明らかにするとおり古墳時代の土器＝土師器として理解している。[1]

1.　20溝・土器群の組成

第4章第3節(111頁) で報告したとおり、20溝から出土した土器（少なくとも完形土器）は同時に廃棄された一括資料であることは事実である。この同時期資料であるということを前提にして20溝・土器群の組合せを検討する。

A型土器群　壺A・甕A・鉢A・高杯A・器台A・Bの組合せをA型土器群として20溝・土器群の中で一つの特色を有するものと考える。

共通する特色の一は、壺Aと甕Aの土器製作技法上の共通性である。壺Aと甕Aはともに直口、ないし外傾する幅の広い口縁部をもち、体部は球形に近く、底部は丸い。また、両者とも体部内面を篦削りして器壁を薄く仕上げ、胎土・色調も共通する。

壺A・甕Aと鉢A・高杯Aが同型であることの説明には他の遺跡の資料を必要とする（第135図)。壺A・甕Aは岡山県五万原遺跡第3号住居跡床面上の土器[2]と全く同じであり、同住居跡床面上からは高杯Aが併出している。鉢Aは新しい時期につづく器形であるが古い段階のものとしては岡山県新屋敷遺跡[3]や同・山田原遺跡[4]等に類例がある。なお器台Aも岡山県酒津遺跡[5]に同器種がある。

これらの併出関係をみると、各遺跡はいわゆる酒津式土器の段階の中部瀬戸内地域に分布の中心があるように思われるので、壺A・甕A・鉢A・高杯A・器台A・B を同型・同種の土器群と認定した。

なお、A型土器は甕Aが京都府八軒屋谷遺跡[6]に、鉢Aが大阪府船橋遺跡[7]等にある。鉢Aは広範な分布をもつ器形であるので、必ずしも分布の中心は明らかでないが、甕Aは近畿への流入として捉えることができる。ただし、多量の土師器を出土している船橋遺跡には類例はない。高杯Aも分布は限定されず、近畿から瀬戸内にかけて広く多量に分布している。

B型土器群　壺B・甕B・高杯BをB型土器群とよぶ。このうち壺B・甕B・高杯Bは技術的に共通するところの多い土器である。その顕著なものは、口縁部内面に数条の凹部をもつこと（三者共通）と、胴部内面の〝おさえ〟一指頭圧痕と指頭圧痕を含めて胴部下半を篦けづりする手法(前二者)である。胎土は比較的石粒を含み、固く焼きしまっている点でも共通している。このように壺B・甕B・高杯Bは製作技法が等しいことを紐帯として同型の土器群とすることに問題はないであろう。

壺C・壺Eには前三者のようなつよい共通性はない。ただ、壺Cはその一つ (16) の口縁部外面に幅の広い凹部が3条あることと、胎土のやきしまりと色調が類似していることからB型土器群に含め

て考えるべきものとした。

壺Cと器形が類似しているのは中部瀬戸内よりは西部瀬戸内—東九州地域に大分県安国寺遺跡[8]をはじめ若干の例がある。この地域に壺Hに似た器形がしばしば含まれている[9]ので、壺HもB型土器群の範疇で考えることとした。

なお、壺B・甕B・高杯Bに共通する土器整形技法（B型技法と仮称する）は中部瀬戸内・東部瀬戸内・近畿の各地方には注意すべき類例はないが、西部瀬戸内と九州については十分には確かめていない。

C型土器群　壺D・甕C・鉢B（甑）・鉢C・高杯C・高杯DをC型土器群とよぶ。

C型土器群の壺は複合口縁の壺と口縁部を小さく外反し体部球形の壺、甕は叩目のある甕、高杯は複合する口縁部と脚端部をもつ高杯といった感じにまとめられる。とくに出土数の多い甕Cは叩目のある甑（鉢B）や高杯Cとともに C型土器群を代表するものであろう。

これらは近畿地方に分布の中心を置く器種であり、そのような意味で鉢C・高杯Dを加えた。壺D・壺Eは溝20からの出土数は少ないが、やはり分布の中心は近畿中心部にあるものであり、壺F、壺GについてもC型土器群に入る可能性がある。

各土器群の関係　川島・20溝の土器群がA型・B型・C型の三型に類別できることがわかった。それでは三つの土器群がそれぞれどのような特色をもち、どのような関係にあるのかを検討したい。

川島・20溝の土器を三つの土器群を主体として各代表型を図示すれば第134図のとおりである。

第134図とさきの説明によって各土器群の特色を要約するとつぎのようになる。

A型土器群は酒津式土器、ならびに酒津式土器と併行するであろう土器と親縁関係にある中部瀬戸内の土器群である。

B型土器群は川島・B型技法ともよぶべき独特の整形技法を特色とし、しかも20溝の中では個体数も多くて安定した技法であることを示している。それにもかかわらず、この技法は播磨の中はもとより瀬戸内地域に現段階では類例を求めることはできない[27]。

C型土器群は叩目手法で代表される近畿地方に分布の中心をもつ土器群である。壺・高杯は少なく、甕が圧倒的に多い。

各土器群の個体ごとの出土量は第134図に示すとおりである。

土器群ごとに比較すればA型土器群76個体、B型土器群217個体、C型土器群198個体、その他35個体で、B型土器群とC型土器群の量はほぼ等しい。この意味はC型土器群が近畿地方に分布の中心をおく土器群であって、播磨が弥生時代後期以来近畿中心部の影響をつよくうけつづけていることを示すものである。それと同時に甕型土器の中で甕B（158個体）と甕C（162個）が圧倒的に多いことからわかるように古墳時代に入っても煮沸用具として弥生時代以来の叩目のついた甕がひきつづき生産され使用されていたこととB型技法によって新しく生産された薄手の甕が多用されたことを示すものであろう。このことは、播磨が近畿地方とほぼ同程度に中部瀬戸内との強い結びつきをもっていたことを示唆している。

つぎに各器型別に検討しよう。

壺でもっとも多いのは三つの土器群に含めていない壺F（16個体）と壺G（17個体）で、ついで壺B（13個体）となっている。これらは器高20cm前後の中型の壺として共通しており、もっとも多用された大きさであることを示すものであろう。そして壺C・壺D・壺Eや壺Aのような比較的大きな壺は合せて10個体で、さほど大量には使用されていないこともわかる。

甕についてはさきにみたとおり、甕Bと甕Cがもっとも多くてその合計は320個体となり、その他の全器種の合計171個体をはるかにしのいでいる。甕Aが31個体と少ないのは、その大きさが甕B・甕Cの平均器高20cm弱に対し、甕Aのそれが30cmと高いことでわかるように、甕Aは大きくてよごれていない土器であり、その本来の用途は煮沸用具ではないことを示している。

鉢は永い年代と広い分布をもつ鉢Bがもっとも多くて25個体あることと精製の鉢Aが1個体だけであることが注意をひく。なお甑と甕とが併用されたものとして、その数値をくらべると甕B・甕C320個体に対し甑は14個体しかなく、甑が非常に少ないことを教えている。これは食料調理法の中に占める甑の役割がそれほど多くないことを示すものであろう。鉢Aがただ一個だけで非常に少ないのは、鉢Aが日常生活の必要から生まれた形態でないことによるのかもしれない。

高杯では高杯Aが圧倒的に多くて32個体あり、ついで高杯Bの9個体、高杯C6個体となっている。高杯Aが水こしされた良質の粘土を使用していて日常雑器でないと思われるのに多量に使用されていること、高杯BがB型技法という独特の技法で比較的数多くつくられていることがわかる。高杯Cは近畿のいわゆる庄内式土器の高杯の中に飾られた土器が多いことから類推されるように本来は日常生活から離れて使用されたものであるために数少ないのであろう。

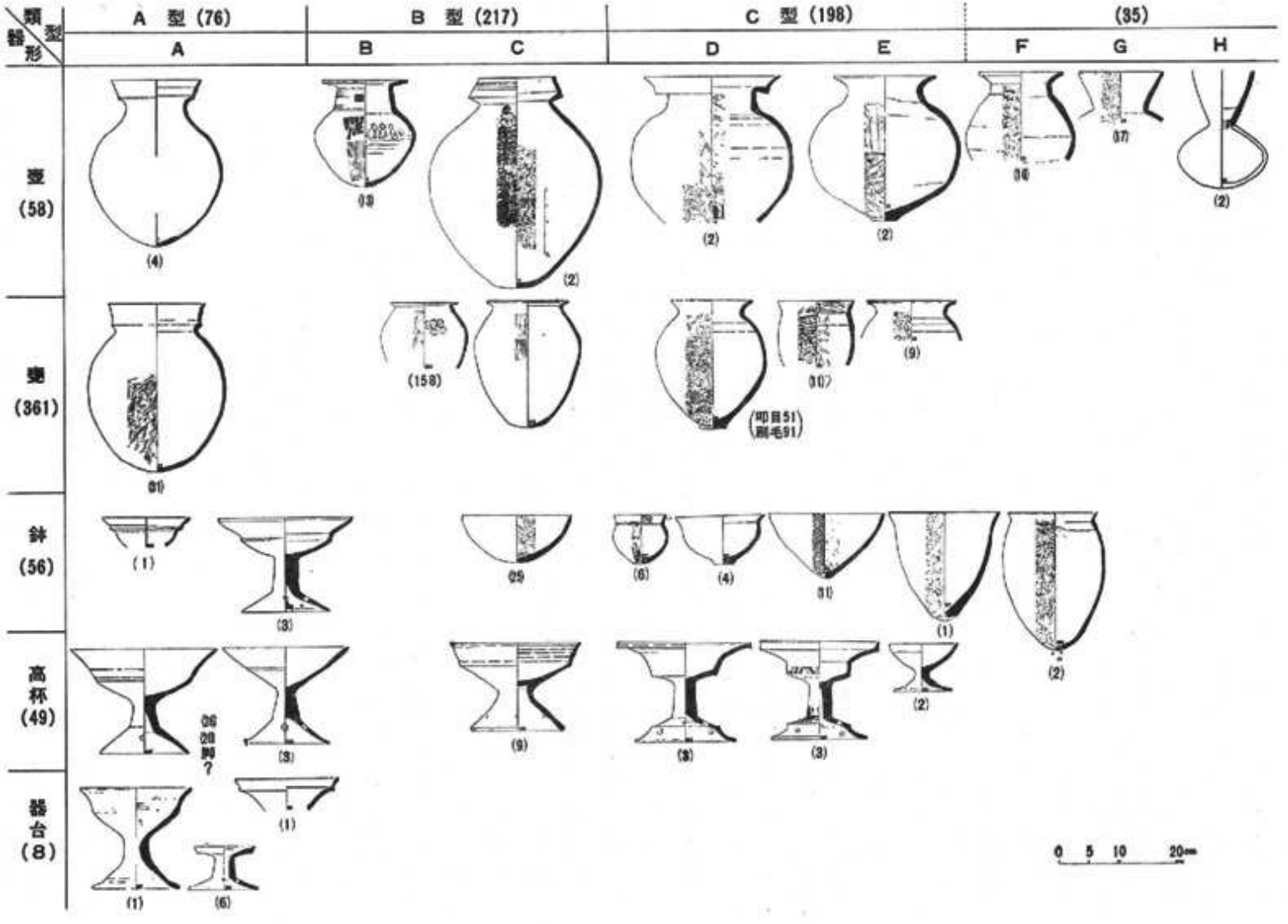
2. 20溝土器群の相対年代

川島・20溝の土器群は一本の溝の中から一括出土した完形品を基準としているので、全く同時に廃棄された同時代資料であることを再度確認しておきたい。

前項で分類したA型・B型・C型3種の組合せは、同時代資料内における類似性の強い土器の類型であって20溝の中で年代を異にするものではない。ただ、従来言われている土器編年にあてはめるとA～C三型の土器群の中で古い要素や新しい要素の占める割合はちがっている。例えば、C型土器群は畿内弥生第5様式の要素をつよくもつ、というよりむしろ畿内第5様式そのものであり、A型土器群は中部瀬戸内の酒津式土器の新しい要素をもっている、という概括的な指摘は可能であろう。それでもなお本項ではA～C三型の土器群が同時期のものであるという事実にもとづいて、従来の土器編年の中に占める位置を検討し、その後に本土器群が使用された時期の葬送形態、言いかえれば川島・20溝土器群ははたして弥生時代の土器なのか、あるいは古墳時代の土器なのかを考えたい。

(1) 相 対 年 代

20溝土器群に対応するであろう播磨の土器は、今里幾次氏によって紹介されている[10]姫路市小山遺跡V地点と同構詰遺跡の資料によって代表されるであろう（第135図）。構詰遺跡の土器は今里氏も指摘しておられるように、いわゆる庄内式に併行する土器群であり、小山V地点の壺3種も同じと考



第134図　川島20溝土師器集成

えてよい[11]。

川島・20溝土器群の中には橋詰遺跡の甕と同種の体部球形で口縁端部がわずかにのび、体部外面には細い叩目を、内面は篦削りする特色をもった一群はない。形の上では20溝の甕C_1・甕C_2が近いけれども橋詰例のような斉一性は認められない。この差が年代差か地域差かについてはにわかに決め難いが、現在の資料によるかぎり夢前川以西の瀬戸内には典型的な庄内式土器は認められないので、同時代の地域差と考えておきたい。この場合、いわゆる庄内式土器は播磨平野海岸部を分布の西限とすることとなる。

小山V地点の壺1は、川島20溝土器群の中にはないが、伴出した小山壺2は20溝の壺Cと、小山壺3は20溝壺Dとそれぞれ同じ形態である。前者は必ずしも一致しないけれども複合口縁の壺で、口縁帯がややふくらみをもって内彎する点を共通の要素として摘出したい。後者は複合口縁の下段の口縁が水平に近く開く点などよく類似している。ただ、両者とも比較資料が少ない（小山V地点各1点、川島20溝各2点）のでこれをもって20溝土器群の年代を決める証拠とするのは弱いけれども、少くとも播磨の中で、小山V地点と20溝土器群には共通する要素があり、従って形式学的には橋詰遺跡の土器群とも併行するであろう、という見通しをもつことは誤りではあるまい。

つぎに資料の制約から播磨では決めることのできなかった相対年代を近畿以西―瀬戸内沿岸部の広い範囲から検討してみたい（第136図）。

川島・20溝の土器群の中で、弥生後期の土器からの系譜をもっともたどりやすいのはC型土器群であろう。さきにも指摘したようにC型土器群は畿内第5様式の特色をそのまま残している一群である。例えば壺E・壺Fは長頸壺とともに畿内弥生時代後期の壺形土器の典型的な組合せを構成する器形であって、奈良県唐古[12]、大阪府西ノ辻[13]、同・池上[14]、兵庫県田能[15]等多くの類例をあげることができる。ただし20溝・C型土器群は畿内第5様式の土器構成要素から長頸壺を欠落しているのが注意される。

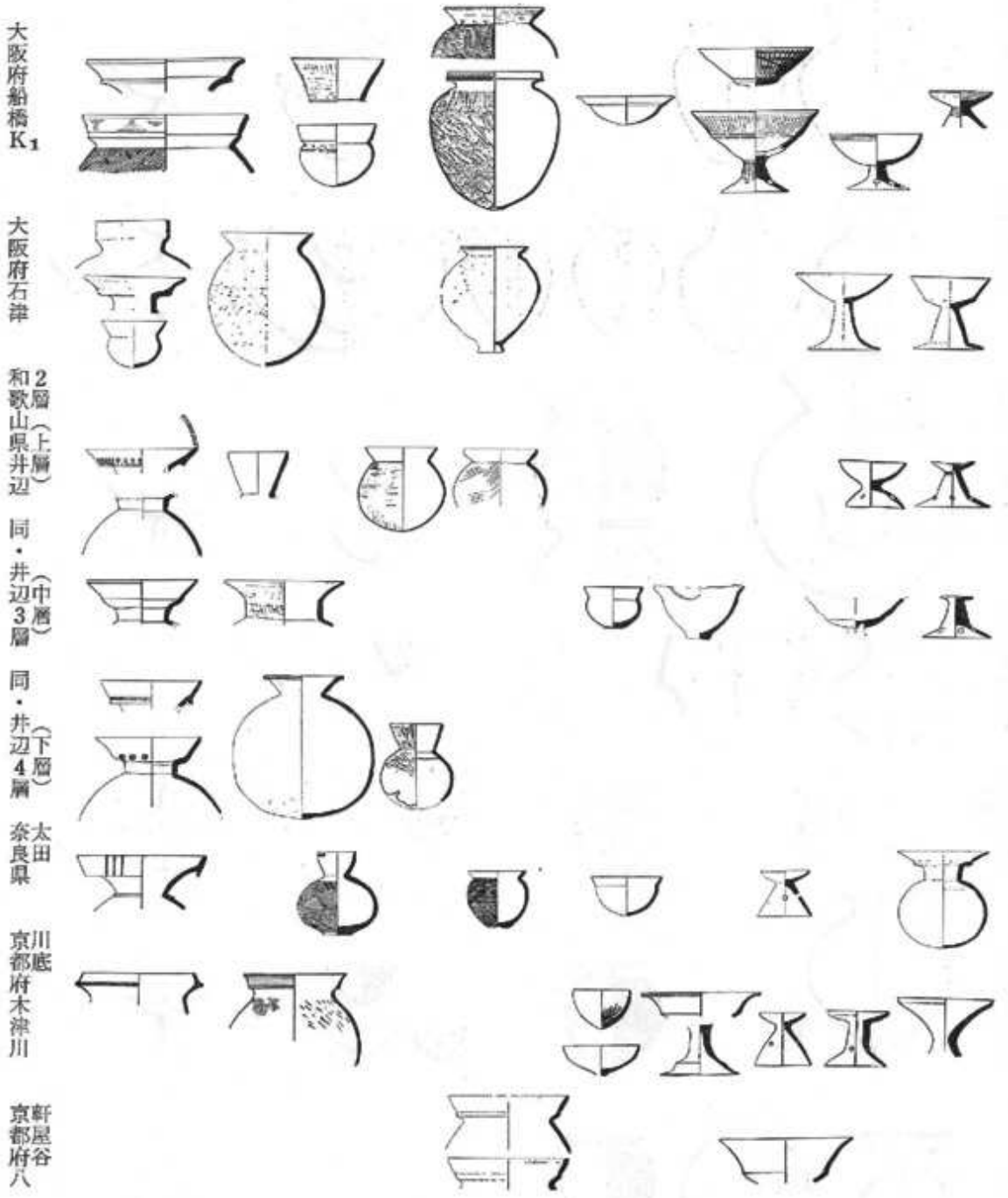
甕Cは類例をあげるまでもなく畿内の弥生後期の甕であり、とくに甕C_1の中の体部表面に叩目をもたない一群（130～142）がややまとまって体部内面にヨコ方向（右まわり）の篦けづりを行なっているのが目立つ程度で、技術的にも弥生後期（さかのぼれば弥生中期末）以来の系列の内にあることは確実である。

鉢Cのうち飯として使用されているものの系譜も弥生中期末・後期初頭に位置づけられる大阪府西ノ辻I地点式土器の中に求められるものであり畿内自生のものと考えうるものである。

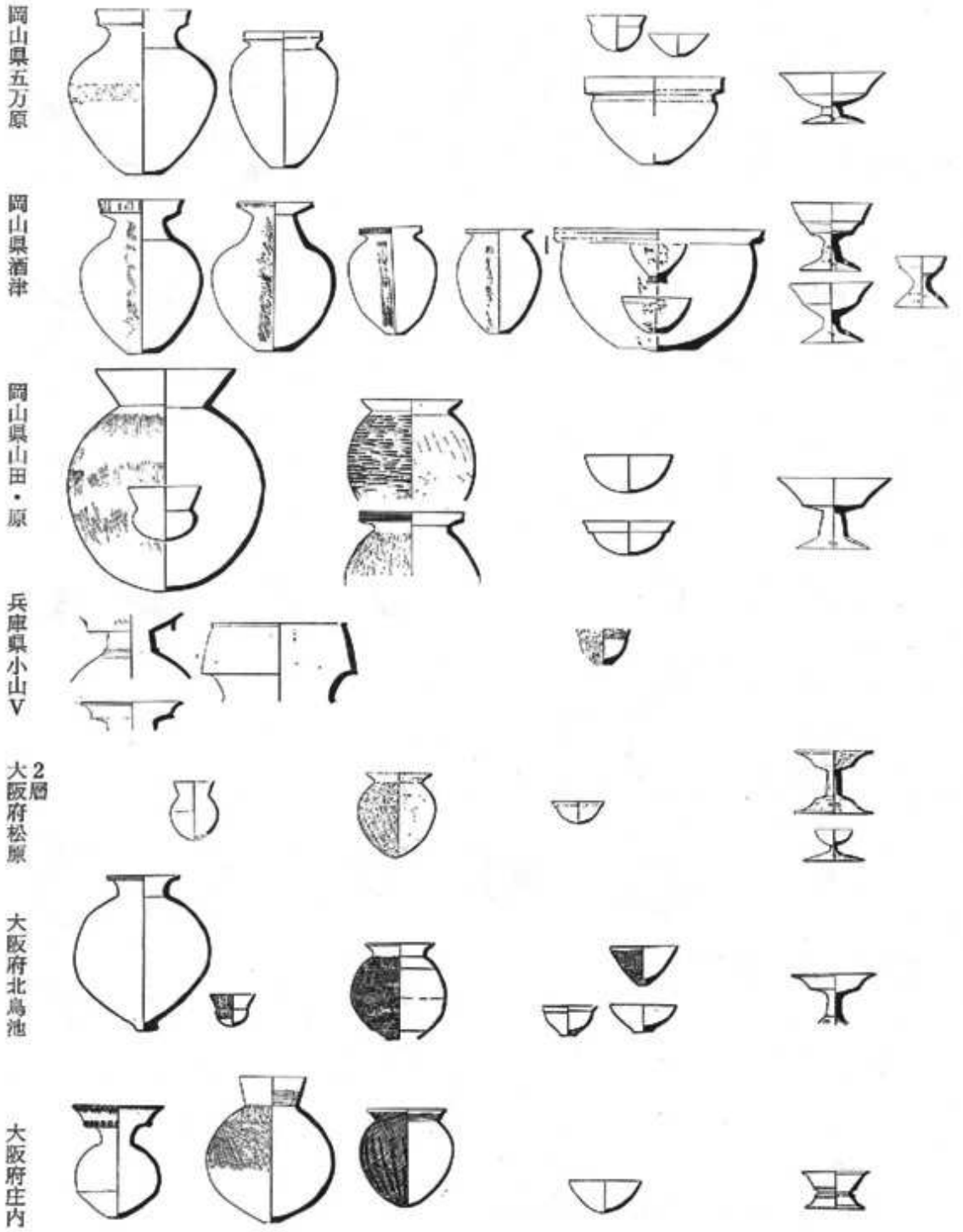
高杯Cは確実に弥生後期と認められる土器の中にその典型的な祖型は求め得ないが、つぎの段階にあらわれる高杯Cの分布の濃いのは畿内地方である（大阪府国府、同船橋、同庄内等）。

複合口縁の壺形土器と汎称される壺C・壺D・壺Aの系譜については問題が多い。その問題とは、奈良県桜井茶臼山古墳をはじめ各地の古式古墳から複合口縁の埴輪壺が検出されていることにある。古墳から出土している土器と川島・20溝土器群との関係は次項でとりあげることとし、ここでは複合口縁をもつ壺の系譜をたどってみたい。

昭和41年、森浩一氏は「茶臼山式壺」の「より古いものは唐古遺跡ではV様式の壺群に二個出土し



第135図　近畿・瀬戸内出土、川島関連土器（1）



第136図　近畿・瀬戸内出土、川島関連土器（2）

ているだけだが、酒津式の壺ではこの形態が主体をしめており、また北九州や東九州のV様式土器、たとえば安国寺式でも多数が存在している。したがって大和の古墳文化の伝播にともなって茶臼山式壺が金蔵山古墳や銚子塚にも出現したと考える必要はなく、それぞれの地域の先行的形態から生みだされたと考えることもできるのである」(16) と指摘して茶臼山式壺が当然畿内地方で自生したものであろうという漠然とした通説の再検討を求めた。これをうけて昭和43年桐原健氏は「二重口縁をもつ土器の系譜と性格」(17) を追求した。桐原氏は「弥生式土器の口縁が立ちあがりを見せるのは各地域共に中期末か後期初期に限られていて次期には一地域を除いて激しい退潮が始まっている。その特殊な一地域—瀬戸内東部では後期前半の上東遺跡やそれに続く芋岡山、立坂、向木見遺跡において土器口縁は却って発達を見せている」と概括したあと「瀬戸内東部において二重口縁は高坏には上東式、壺には酒津式から現われ、王泊五層で壺の二重口縁は固定し、高坏の外反口縁は崩れて行く。」これに対し、畿内では「唐古V様式には口縁の昂りはない。一旦断絶した次期において二重口縁をもつ壺は現われ、布留式には定形化の段階に迄進んでいる。」と主張した。

森、桐原両氏が指摘しておられるように 畿内の 複合口縁をもつ壺の実例が少ないことは 事実である。弥生後期の土器を多量に出土している奈良県唐古、大阪府池上、兵庫県田能の各遺跡の壺形土器の中に占める複合口縁の壺の比率はそれぞれ10%に満たない。ところが両氏が複合口縁をもつ壺の祖形として求めた瀬戸内の土器—酒津式土器にもまた問題がある。一つは、森氏が指摘しておられるように酒津式土器の壺形土器の主体を占めているのは複合口縁の壺であり、従ってこの器形は「それぞれの地域の先行形態から生み出された」とすると、畿内第5様式の唐古遺跡45号地点（45号地点上層にも第5様式の土器があり、従って45号地点の土器は弥生時代後期の中でもっとも新しい時期とは言えない）の中にわづか1点ではあるが完形の複合口縁の壺があるので畿内第5様式と酒津式の前後関係は複合口縁の壺を指標とすれば、酒津式あるいはその先行形態が古く唐古第5様式が新しいことになる。酒津式土器の先行形態とは上東式土器か上東式土器につづく弥生時代終末の土器に当てられている津島上層式（白江Ⅱ式）である。津島遺跡の津島上層式の実態は発表されていないので不明であるが、併行すると言われる白江Ⅱ式の資料によるとこれは上東式よりは酒津式に類似した形式であって、形式学的には唐古第5様式より古いとは言い難い(18)。より先行する上東式土器の壺形土器には複合口縁の壺を生む要素が畿内第5様式の壺形土器より強いとは認められない。

上東式土器の壺形土器の形態から複合口縁の壺の要素を摘出することが可能であるとしてもそれは畿内第5様式の壺（川島・20溝の壺D）のもつ要素と同程度であろう。つまり複合口縁の壺の出自を確かめることなく畿内であると考えることへの森浩一氏の批判は正しいが、桐原説の程度にまで拡大するには根拠となる資料が乏しいと言わざるを得ない。

川島・20溝B型土器群はさきにB型技法とよんだ類例のない土器整形技法を用いているので一致する類例を求めることはできないが壺Bの器形を手がかりとすれば、酒津遺跡の酒津式土器（「弥生式土器集成」、図版9の6）にもっとも近い例を見出すことができる。この比定は甕B(245) が酒津式の甕に酷似していることからも傍証できるのでB型土器群を酒津式併行期に想定することができる。

20溝A型土器群は前項で若干の類例を求めたように土器の構成要素は岡山県五万原3号住居跡とも

っともよく一致しており（壺A・甕A・高坏A）、ほかにも甕Aが京都府八軒屋谷に鉢Aが岡山県新屋敷、同山田原、大阪府船橋K１下層に、器台Aが岡山県酒津に、それぞれ類例を求めることができる。このような類例関係からわかることは、A型土器群が酒津式土器の新しい要素をもつ一群（五万原３号住居跡）より新しい形式にのこる器形（鉢A—船橋KI下層）を含むことから、酒津式土器に併行する形式であって、より新しい要素をもっていることと、分布が中部瀬戸内から大阪湾岸と京都府に及ぶ広い範囲を占めることなどである。

川島・20溝土器群のA型・B型・C型の三型の土器群のそれぞれの特色と相対年代を要約すればつぎのとおりである。

C型土器群は畿内第５様式そのものであること

B型土器群は川島・20溝独特の技法をもちながらも器形からは中部瀬戸内の酒津式土器との類縁関係が求められること

A型土器群は中部瀬戸内の酒津式土器の新しい要素をもち、岡山県から京都府に及ぶ広い分布範囲をもつこと

くりかえし確認しているようにこれら三型の土器群は同一時期のものである。つまり、川島・20溝の土器群は、年代的に古い要素としては畿内第５様式の、新しい要素としては酒津式の新しい段階の特色をもちながらも全く同時期の資料であり、地域的には瀬戸内西部から畿内地方に類例を求めうる土器群であることが明らかとなった。

(2) 葬送形態との関係

川島・20溝土器群の相対年代は酒津式土器の段階であることが前項で確かめられた。本項では、20溝土器群の段階の葬制を検討して結びとしたい。

播磨には西条52号墓や養久山墳墓群・横山墳墓群のような弥生時代後期から古墳時代前期に想定されている墓制が知られている。

これらの墳墓の主体部、ならびに旧墳丘面から完形土器を含む土器片が検出されているが、一部をのぞき土器実測図は公表されていないので厳密な比較検討を行なうことはできない。

西条52号墓の土器は主体部に接した墳丘上に４個すえられていたもので、器形はいづれも川島・20溝の壺Eに似て頸部には刻目突帯をめぐらしている[19]。

養久山５号墓は中方双方状の尾根整形が認められ、中心主体には壺をすえ、そのまわりを不整形の石で囲んでいた[20]。中心主体の壺は体部球形で、口縁部は現状では外反して短頸壺のようになっているが、口縁端部をよくみると明らかに擬口縁であり、同時に出土している複合口縁の破片からみても本来は複合口縁の壺形土器である可能性がつよい。

横山墳墓群の土器は明らかに酒津式に併行する器形をもっている[21]。

西条52号墓の主体部は「日本の考古学Ⅲ」（河出書房、昭和41年）掲載の写真によると、不整形に割った石を上ひろがりに積んで石室とし、その内側におそらく木棺をおさえたであろう石が両側壁に接して一列に並んでいる。このような石室を仮りにもっとも早く注意された西条52号墓をかりて「西条

52号墓型石室」と仮称しよう。

西条52号墓型の石室は岡山県から兵庫県西部にかけて分布している。その時期は、岡山県山陽町便木山墳墓群が神原英明氏のご教示によれば、王泊6層期[22]であり、兵庫県吉福墳墓群は庄内式併行期[23]（兵庫県教委資料）、同横山墳墓群は酒津併行期である[21]。

これらの土器形式はいづれも一墳墓出土の数点の完形品だけでは決め難いが、さきに検討を経た川島・20溝土器群の土器に当てはめることはできる。すなわち、吉福墳墓群はC型土器群に、横山墳墓群はA型土器群に近い。このように比定できるならば、川島・20溝土器群の時期には西条52号墓型の埋葬が行なわれていたことがわかる。この時期には大和では箸墓古墳[24]が京都府では元稲荷山古墳[25]がつくられていたであろう。

このように考えると、すでに明らかなように西条52号墓型石室は大型の前方後円墳がつくられている時代の一定地域の葬法であることを示しており、従来、公表もされていない伴出土器をもとにして喧伝されていた弥生時代墳墓の定型も再検討を必要としよう。

この考え方は必ずしも弥生時代のある時期以降に集団墓から抜き出て埋葬される人々が存在することを否定するものではない。それは現に方形周溝墓とよばれる葬法によって弥生時代中期以来全国的に認められていることである。

このことは同時に、かって近藤義郎氏が提唱された弥生時代墳墓の三つの型という考え方[26]も、提唱者の規定するとおり、それぞれの段階を示すものとして使用する限り正しいことを示しており、年代変遷として捉えることの誤りであることを教えている。つまり、壮大な首長墓がつくられるようになってもなお、同じ地域内に集団墓が営まれていることの実例である。（石野）

註

(1) ここで、古墳時代の土器―土師器に対する私の立場を説明しておかねばならない。土師器とは、森浩一氏も指摘されるとおり（「日本の考古学V」）「古墳時代の素焼土器」と考える。そうするとある地域で〝土師器が出土した、ということは、その土器の時代には当然高塚古墳がつくられていたことになる。ただし、これには〝日本のどこかでは、という註釈をつけなければならない。言いかえればある地域で土師器が出土しても、その地域内に高塚古墳が成立していたと考える必要はないのである。旧国の範囲に地域を限っても、高塚古墳のない古墳時代があり、高塚古墳のない古墳時代の土器―土師器があって当然である。

(2) 間壁忠彦、間壁葭子「岡山県美星町五万原遺跡」倉敷考古館研究集報第5号、昭和43年10月。

(3) 鎌木義昌「岡山県倉敷市西阿知町新屋敷遺跡の土器」弥生式土器集成資料編所収、昭和33年。

(4) 間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」倉敷考古館研究集報第2号、昭和41年11月

(5) 鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」弥生式土器集成資料編所収、昭和33年。

(6) 山田良三、石部正志「山城八軒屋谷土師遺跡調査報告」古代学研究34、昭和38年。

(7) 原口正三、田辺昭三、田中琢、佐原真『河内船橋遺跡出土遺物の研究(2)』平安学園研究報告第3号、昭和37年4月。

(8) 鏡山猛ほか『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』毎日新聞社、昭和33年3月。

(9) 小林行雄、杉原荘介編『弥生式土器集成本編1』東京堂、昭和39年。

(10) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態(一)」考古学研究第16巻第1号、昭和44年8月。

(11) 小山Ⅴ地点の土器は、今里氏は弥生第５様式としておられるが、註10文献、第12図１の壺は庄内遺跡の飾られた壺と酷似しており、庄内式と考えるべきであろう。図示されている他の複合口縁の壺２点ほかの土器については、形式的には明言できないが、これらが同じピット内から一括出土したという事実を重視して、すべてをいわゆる庄内式の段階の土器として認めたい。

(12) 末永雅雄、小林行雄、藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部研究報告16、昭和18年。

(13) 小林行雄「大阪府枚岡市西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」、「大阪府枚岡市西ノ辻遺跡Ⅳ地点の土器」、「大阪府枚岡市西ノ辻遺跡Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｈ地点の土器」弥生式土器集成資料編，昭和33年。

(14) 「池上、四ツ池遺跡」13・16、第２阪和国道内遺跡調査会、昭和45年・同46年。

(15) 尼崎市田能遺跡調査委員会編『田能遺跡概報』尼崎市教育委員会、昭和42年。

(16) 伊達宗泰、森浩一「土器」（『日本の考古学Ⅴ、古墳時代下』河出書房所収）昭和41年12月。

(17) 桐原健「二重口縁をもつ土器の系譜と性格」考古学研究57、昭和43年。

(18) 白江Ⅱ式を畿内第５様式より古いと考えると、津島上層式との併行が考えられている都月坂２号墓は第５様式より古く、都月坂１号墓、備前車塚、桜井茶臼山古墳等は第５様式と併行することとなろう。

(19) 四条古墳群発掘調査団「四条古墳群調査略報」昭和39年６月、土器は松本正信氏のご好意により実見させていただいた。

(20) 是川長・松本正信・加藤史郎『養久山』―播磨・揖保川水系における弥生墳墓―昭和42年１月。

(21) 兵庫県教育委員会、村上紘橋氏のご教示による。

(22) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』昭和31年。
神原英明「用木古墳群発掘調査概報」山陽町教育委員会，昭和46年３月。

(23) 村上紘揚・伊藤晃・松下勝・石野博信「兵庫県佐用郡吉福墳墓群の調査」日本考古学協会昭和43年度大会研究発表要旨，昭和43年10月。

(24) 末永雅雄『日本の古墳』朝日新聞社、昭和36年、所収。
朝日新聞，昭和45年５月29日版によると後円部墳頂から都月坂１号墓型の特殊埴輪が検出されたといわれる。特殊埴輪については近藤義郎、春成秀爾「埴輪の起源」考古学研究第13巻第３号、昭和42年がある。

(25) 梅原末治『椿井大塚山古墳』京都府文化財調査報告23所収、昭和39年。新聞報道によると、京都大学の調査によって前方部から都月坂１号墓型といわれる特殊埴輪が検出されたという。

(26) 近藤義郎「前方後円墳の成立と変遷」考古学研究第15巻第１号、昭和43年。

(27) 脱稿後、姫路市水屋川遺跡から１点出土した。
（兵庫県教育委員会資料、松下勝、山本三郎両氏のご教示による）

第2節　播磨中期弥生式土器の実態

―土坑出土土器を中心に―

川島遺跡における弥生時代中期の土坑は、大別して落久保A地区の土坑10、土坑12等から群集する一群と遺跡最西端の落久保B地区の土坑22、土坑26等からなる一群に分けられる。

各土坑からは、多量の土器が出土し、これらは比較的限られた一括資料として取り扱うことができるものと考える。土坑以外の25溝、22溝等からも弥生時代中期の土器が多量に検出された。個々の土坑、溝出土土器の説明は第4章ですでに述べた。ここでは各々の土坑、溝の前後関係及び土坑、溝出土土器の相対年代、各器種の地域的特色等に分けて記述する。

各々の遺構の前後関係　土坑22出土土器は壺A_1、A_2、壺B、壺F、鉢B、大型鉢A、脚B、脚Cによって構成しており、甕が出土していない。壺Aは口縁端面には幅の狭い凹線文をめぐらし、凹線文上に斜線文を加飾するものがある。頸部文様は凸帯文(断面三角形凸帯文、指頭圧痕文凸帯)のみに限られ、凹線文を使用するものを見ない。胴部文様は櫛描文と圧痕文の組み合せで飾る。鉢Bは幅の広い凹線文上に刻目文を加飾し、円形浮文でさらに飾る。壺Bの凹線文は佐原真氏が凹線文C種と呼称する用いかたで上記の壺A、鉢Bの凹線文の用い方よりも時期的に新しい手法として考えている。[1]

土坑11は壺A_2、高杯Cと限られた器種ではあるが、壺Aの口縁端面の凹線文上に斜線文で加飾し、頸部に凸帯文をもつ等、土坑22の壺Aと同じ特徴をもつ。

土坑26は、壺A_1、壺A_2、壺A_3、甕、大型甕、鉢A、大型鉢、高杯Bから成る。壺Aの装飾法は土坑22と同じ特徴をもち、鉢A、大型鉢も土坑22と同じく口縁下に巾の広い凹線文をもつ。

25溝は、壺A、甕等があり、壺Aは土坑22と同じ特徴をもつ。

以上の土坑22、土坑25、土坑11、26溝は同一時期の所産として考え、出土土器も同時期であると考える。

上記の特徴をもつ土器を播磨の中で比較すると、市ノ郷3類土器[2]よりも新しく、姫路市飾西東山遺跡[3]、赤穂市野田遺跡[4]等出土土器と同じ特徴をもち、土坑22等と同時期と考える。これらの時期を今里幾次氏の「播磨弥生式土器の動態」の編年に照らすと中期4の時期に相当し、今里氏の編年に従い以下中期4[5]と呼称する。

中期4は中部瀬戸内地方では前山I式[6]、新邸式[7]、荒池式[8]と併行し、畿内では畿内3様式(新)と併行するものと考えて問題はないと考える。

土坑10、土坑20は、中期4よりも新しい時期として捉えられる。

土坑10は壺A_1、壺A_2、壺A_3、壺B、壺C_2、甕、大型甕、大型鉢、鉢B、高杯A、高杯B、脚A、脚B、脚Cによって構成されている。壺Aには頸部に幅の広い凹線文が使用され、口縁端面は凹線文、棒状浮文で、口縁部内面は中期4と同様に凸帯文で飾っている。胴部文様も櫛描文で飾るものが少なくなり、篦圧痕文、貝殻圧痕文のみを胴部中央に飾る土器が、圧倒的に多くなる。甕、大型甕は中期

4と大きな変化はみられないが、ヨコナデの範囲が少しひろくなる。鉢A、高杯B、大型鉢は中期4と比較して装飾、整形痕とも変化なく個別に識別は困難である。鉢Bは中期4から凹線文以外の装飾をとり去り、脚部にも凹線文が用いられると考えられる。

土坑20は壺A_1、壺A_2、壺C_1、甕、大型甕、高杯A（鉢A）、高杯B、脚A、脚B、脚C、器台より構成される。土坑10と同じ特徴をもち、脚では脚Aが多い。土坑20では土坑10にない器台を見る。

以上の土坑10、土坑20は同一時期と考えられる。中期5と一応仮称する。

22溝は壺A_1、壺A_2、壺A_4、壺A_5、壺B、壺C_3、壺F、壺G、甕、大型甕、鉢A、鉢B、大型鉢、高杯A、高杯B、脚A、脚B、脚C、器台等が出土した。この中には中期4、中期5に比定できるものもあるが、中期4、中期5よりも形態的には新しい要素をもつ一群の土器がある。壺A_2では中期5と同じく頸部に凹線文をもつが、口縁端面の棒状浮文、内面の凸帯文をとりさったもの、壺C_3の存在、甕、大型甕の口縁端部が上下に拡張するものがそうである。その他の鉢A、高杯A、高杯B、鉢Bは、中期5との変化は乏しい。22溝の新しい要素をもつ一群と中期5の関係は、大きくは同じ中期5の範ちゅうに入ると考える。土坑10、土坑20は中期5でも古い時期に、22溝は新しい時期に比定できると考える。ここで中期5を2時期に別けて考えるときは、土坑10、土坑20を中期5（古）、22溝を中期5（新）と細分して以下記述する。

中期5を播磨の中でみると、東溝遺跡の住居址3、4出土土器[9]、橋詰北遺跡[10]、名古山遺跡住居址出土土器[11]等が知られている。これらは川島中期5（古）とは様相が違う。東溝住居址、名古山住居址は、畿内的様相を色濃く持ち、畿内4様式そのものであるのに、川島中期5（古）の土器は畿内4様式とは様相が違い、中期4の特徴を受け次ぎ、播磨的な畿内4様式併行を形成している。川島中期5（新）と、東溝住居址等はかなり類似する。これら播磨の中に見る三者の関係は、川島中期5（古）、中期5（新）は上記ですでに述たように時期差を考えられるが、川島中期5（新）、東溝、名古山等の関係は時期差なのか、それとも遺跡を構成する集団の相異なのかは、資料等に偏差をもつ現在では明らかにしがたい。

中期5（古）、中期5（新）と2時期に別けて他地域との併行関係は現段階では困難であるが、中期5は中部瀬戸内では前山Ⅱ式[12]、紫雲出Ⅲ式[13]と併行し、畿内では唐古Ⅳ式[14]と併行する時期のものであると考えて大過はないであろう。ただし前山Ⅱ式、唐古Ⅳ様式は中期5（新）の時期に近いと考える。

時期決定に良好な資料をもたない土坑、溝に関してその時期を最後にみたい。土坑14は、中期4の時期に、土坑22、土坑25、土坑15は、中期5に相当するものと考えている。土坑5も中期5の時期と考え、中期5の中でも新しい段階のものであろうと思われる。土坑12も、壺Aから中期5（新）の時期と考える。土坑6は中期4、中期5の土器がある。

各器種の総括　川島遺跡における中期4、中期5を各器種ごとに総括し、各器種の年代、地域的特色を見ていきたい。

壺Aは中期4、中期5を通じて、(1)口径が30cmを超える大型のもの、(2)10cm前後の小型のものと(3)その中間の中型のものとがある。(2)の中型で口径が16～20cm前後のものが大多数で、小型、大型のものは少ない。小型の土器には口縁部内面、頸部に文様をもたないのが常であり、また中型の土器に

おいても頸部が短いものは頸部に文様をもたない。

本遺跡の壺Aは、中期4、中期5を通して壺A_2が圧倒的に多く、川島遺跡の壺A_2は播磨の土器を特徴づけるものである。

中期4における壺A_2の実態は、口縁端面にはすべて幅の狭い凹線文を多用し、凹線文上に篦描斜線文を加飾するものが、約40%程度の割合いで見らる。さらに棒状浮文、円形浮文を加飾するのが通常である。円形浮文より棒状浮文の個体数が多く、これは中期5と同じ傾向を示す。口縁部内面の文様には、櫛描文で飾ることは1点（土坑22の12）のみで、他は凸帯文で飾ることを常とする。

頸部の文様は凸帯文のみで飾る。凸帯文は断面三角形凸帯文と指頭圧痕文凸帯とがある。大多数は単独に凸帯文を頸部に飾るが、断面三角形凸帯文と指頭圧痕文凸帯を二重に飾るものがある。その場合は指頭圧痕文凸帯が必ず下で頸部と胴部の境界線をなしている。

胴部文様は櫛描直線文、同波状文、同斜格文、円形浮文、篦圧痕文、貝殻圧痕文で飾る。圧痕文を用いる際は櫛描文の下、文様の最下帯を常とする。この手法は中部瀬戸内地方に特有な方法であり、畿内地方（大和、河内）には見い出すことのできないものである。特に貝殻文は播磨を東限として、摂津、河内、大和にはみられない。

中期5（古）における壺A_2の実態は、口縁端面にはすべて幅の狭い凹線文を多用し、凹線文上に棒状浮文、円形浮文を加飾することを常とする。中期4で見られた凹線文上の篦描斜線文は、ほとんど姿を消し、土坑10、土坑20ではその示める割合は5%にみたない。口縁部内面を文様で飾るものと、無文の比はほぼ等しい。文様は凹線文3点、円形浮文1点、櫛描波状文1点以外は1条の凸帯文で飾る。

頸部文様の変遷は、中期4と中期5を分ける大きな根拠としてここでは扱った。頸部文様には、中期4から続く指頭圧痕文凸帯と凹線文とがある。その比は土坑10、土坑20では1：3である。中期4に見られた断面三角形凸帯文は凹線文に変る。同じ凸帯文でも指頭圧痕文凸帯は、中期4と同じく指頭圧痕文凸帯をもち、単独には中期4と中期5の分離は困難である。凹線文と指頭圧痕文凸帯を二重に飾るものがあり、これは中期4に見られた壺A_2の装飾法で中期5では断面三角形凸帯文を凹線文に変るだけである。これは凹線文と断面三角形凸帯文が同じ目的をもつ文様であり、断面三角形凸帯文は凹線文が使用されることにより消滅していくが、指頭圧痕文凸帯は凹線文に代用されることなく、それ自体が解体[15]していく方向にゆくことの良好な資料である。

胴部文様は櫛描文も若干のこるが、中期5では胴部中央を篦圧痕文、貝殻圧痕文のみを胴部中央にめぐらすものが多くなる。

中期5（新）の壺Aは、中期5（古）と同様に頸部に凹線文をもつが、中期4、中期5（古）を通じてみられた口縁部内面の凸帯文、口縁端面の凹線文上の棒状浮文は、消滅していくのである。[16]また中期5（古）の時期にみられた頸部に飾る指頭圧痕文凸帯も姿を消していくのであろう。

壺A_3は口縁部のみしか残っていないが中期4から中期5の時期と考える。川島遺跡の資料では中期4は無文であり、中期5は凹線文が口縁端面にめぐらす。5点のみである。

壺A_4は3点あり、その装飾法は口縁端面、口縁部内面とも篦描斜線文であり、凹線文の使用をまったくみることなく、中期3と考える。土坑20の壺A_4は混入として捉えたい。

壺A_5は2点のみであり、壺A_4と同じく凹線文を使用しない。22溝の109は口縁端面、口縁部内面とを櫛描波状文を用いる。

壺A_1は畿内通有の壺Aであり、大和唐古遺跡[17]、河内船橋遺跡[18]に多くみられる。壺A_2は唐古遺跡、河内四ツ池遺跡[19]、山畑遺跡[22]にも若干みられるが、大和、河内では量的に少なく、摂津田能遺跡[21]、同加茂遺跡[22]、播磨川島遺跡等に多く見られる。摂津、播磨で盛行する壺Aである。壺A_2は播磨市之郷3類土器(中期3)、加茂遺跡の中期3にその萌芽を見るが、中期4・中期5になり典型的に定着する。壺A_2でも摂津と播磨では、口縁部内面の装飾が異なる。摂津では櫛描波状文、同列点文、同扇形文等で華麗に飾るのに比べて、播磨においては凸帯文で飾り、櫛描文はほとんど見ない。壺A_3、壺A_5は類例を実見することなく、比較的類例の少ない土器である。

壺Bは頸部に指頭圧痕文凸帯をもつことを常とする土器である。壺Bは中期3の段階にすでに播磨市之郷3類土器、摂津加茂遺跡、同田能遺跡[24]、河内田ノ口遺跡、大和唐古遺跡、紀伊宇田森遺跡[25]等に広く分布しており、中期4、中期5においてもこの範囲に及んでいる。唐古第4様式の壺Bは指頭圧痕文凸帯を篦圧根文に変えるが、川島遺跡の中期5は未だ指頭圧痕文凸帯を用いており、中期4と中期5の区別は困難である。型式学的には土坑10の32、22溝の45、土坑24の7は凹線文手法をもちいないことから中期3に入れることも可能であるが、土坑10、土坑24はその共存関係より中期4、中期5まで残るものと考える。

壺C_1(土坑10の28)は摂津加茂遺跡、田能遺跡、河内山畑遺跡とまったく同型の実例がある。山畑例は櫛描文のみで飾り中期3に、加茂例は櫛描文、円形浮文、突帯文で飾り中期3に、田能例は凹線文のみで飾り中期5に各々比定できる。川島例は櫛描文、円形浮文、凹線文、凸帯文で華麗に飾り中期4の時期に考えても問題はないであろうが、土坑内の一括資料として中期5(古)に扱った。壺C_1の細頸壺は畿内第2様式から畿内全般に多くの実例を見るが、算盤玉形の胴部をもつものは多くなく、以上の実例の他に吉備潤徳遺跡[26]、同南方3式[27]に実例を見る。壺C_1自体は吉備では実例が少ない。

壺C_2は壺C_1に比して口径部がかなり短く、川島遺跡では中期5の時期である。壺C_3は川島遺跡では口頸部に2種類ある。ひとつは口頸部上端が突出して、凸帯文的に見えるものは、(22溝の53、54)吉備保園内遺跡[28]にあり、保園内遺跡の壺C_3は突出した部分に刻目文をもつ。もうひとつは突出した部分をもたない22溝の48、52等であり、これは大和唐古遺跡、紀伊宇田森遺跡、讃岐紫雲出遺跡、大空遺跡[30]等に実例を見い、地域的には広く見られる。以上は畿内4様式併行期に位置し、ここでいう中期5の時期のものである。ここでは中期5(新)の時期として考えたい。唐古、宇田森例は頸部下端に圧痕文をもつが、川島、大空例では沈線文、凸帯文をもつ。唐古、宇田森例は壺C_3、多くは胴部にタタキをもつ。壺C_3は、播磨市之郷3類土器、国分寺台地遺跡にみる中期中葉に壺C_3と関連する可能性が考えられる直口壺(壺C_3)があるが、中期5に広く盛行する器形であろう。

壺Dは上半部のみでは甕との区別がむつかしい。壺棺出土土器は畿内では見られない器形であり、中部瀬戸内地方に盛行する器種である。円形周溝墓の土器も壺Dである。壺Dは内面下半を篦削りで仕上げる。壺Dは中期4から中期5の時期が考えられる。

壺Eは全体篦磨きする精製土器で、口径、器高ともほぼ一定している土器である。現在まで出土例

の少ない器形である。無文化の傾向をもつことから中期5（新）の時期と考える。壺Eは土坑5のみに、8個体の完形品が出土し、他遺構にはみあたらない土器であり、ある一定した機能を有していた土器であろう。

壺Fは4点のみである。凹線文、棒状浮文、刻目文凸帯で飾る壺Fと、無文の壺Fがある。前者は土坑22(中期4)からの出土であり、壺Fに棒状浮文をみるものは、讃岐北谷遺跡以外では例をみない。後者はヨコナデ手法、篦磨きで整形され中期5と考える。大和、河内でみる断面方形のものは、川島遺跡では見い出されずかえって中部瀬戸内地方の壺Fと共通性をもつようである。

壺G_1は北谷遺跡[29]、紫雲出遺跡等に同型の土器を見る。壺G_1は中部瀬戸内地方に多い器形であり、川島遺跡では1点のみである。北谷例（紫雲出Ⅰ式併行）では口縁部に2～3条の凸帯文をもち、紫雲出Ⅱ式では1条の凸帯文をもつものが多く中期4に位置づけしている。佐原氏はこの器形に中期4に盛行するものと考えている。川島遺跡では凹線文をもち中期5に比定できると考える。

壺G_2は紫雲出Ⅲ式に同型のものがみられ、佐原氏は畿内第Ⅲ様式の同種の壺形土器(壺B）との関連を考えている。ここでは壺Bと別けて考えた。時期は紫雲出Ⅲ式と同時期の中期5に位置づけられとる考える。

甕は上方にわずかに拡張するものが中期4、中期5（古）を通じて通常である。中期5（新）は口縁端部が上下に拡張する。口縁端面は無文のものが大多数であるが、刻目文、凹線文をめぐらすものもある。甕の内面下半に篦削りの整形痕をもつこの手法は、大和、河内、摂津にはなく、中部瀬戸内の特有な手法であり、中期段階においては播磨を東限とする手法である。播磨の篦削りは中部瀬戸内の影響のもとにおこなわれた手法と考えられる。

大型甕はすでに述べたように口縁端部が上方に拡張するものと、明確な段階をもって上下に拡張するものがある。後者は前者に比して型式的には後出のものである。前者の多くは中期4・中期5(古)の時期に比定でき、後者は中期5(新)の時期と考える。大型甕の凹線文の用い方は、中期5の土坑10では、16点中4点と25%であり、中期4・中期5を通じては35%[30]程度の割合で用いられる。大型甕の凹線文は大和・河内・吉備に特徴ある手法であり、摂津には少ない文様である。播磨においては量的には無文のものが多いが、ある程度凹線文をもつ大型甕がある。吉備・大和に見られる頸部に凸帯文をもつものは川島遺跡では皆無である。

鉢A、高杯Aは大型鉢と同じく中期4、中期5を通じて変化の乏しい器形であり、個別に時期の識別は困難である。中期4、中期5を通じて口縁直下から数条の凹線文をもつものと杯部のたち上がり部分に凹線文をもつものとがある。分布は後述する大型鉢と一致する。22溝の92は、高杯Aとは形態を異にする。この器形は赤穂市野田遺跡にみられ中期4に考える。

鉢Bは口縁下に数条の凹線文をめぐらし、脚部上半に断面三角形凸帯文（中期4）、凹線文（中期5）をめぐらし、脚部下半には鋸歯文で飾る定形的な装飾法をもつ台付鉢形土器である。時期的には中期4から見られ、後期には続かない器形である。中期4の鉢Bは、飾西東山遺跡、土坑22に実例を見る。2点とも口縁下の凹線文に篦描斜線文、刻目文で飾り、土坑22ではさらに円形浮文、貝殻圧痕文で飾る。中期5の鉢Bは中期4にみられた凹線文以外の文様は姿を消す。中期5の古い段階に属する土

坑10では篦描斜線文、円形浮文が残っている。鉢Bは現在まで播磨を除いて畿内、中部瀬戸内地方にも出土例の極く少ない器形[31]であり、分布の中心は播磨であると考えられる。鉢Bは口縁部を内側に斜上に張り出す部分を除くと讃岐（稗佐古遺跡、南川遺跡等[32]）にみることができ、口縁下に凹線文、脚部に篦描沈線文、抉り込み鋸歯状文をもつ定型化した台付鉢との関連が考えられる。

鉢Cは川島では1点のみである。吉備南方Ⅲ式に小型ではあるが鉢Cと考えられる1点がある以外は、類例のみない土器である。川島の鉢Cはヨコナデ調整、内面篦削りを用いていることから中期4から中期5に比定してよいと考える。

大型鉢は中期4・中期5を通じて、川島遺跡では形態的な差はみられない器形であり、個々については時期の識別が困難である。大型鉢は、口縁端部が内外に拡張する口縁端面に幅の狭い凹線文をめぐらすものと、そうでないものとがある。前者の方が多い。端面凹線文上には円形浮文、棒状浮文をさらに加飾するものもある。口縁下に幅の広い凹線文をめぐらす。以上の特徴は中期4、中期5とも同じである。土坑15の12の口縁下に凸帯文で飾る大型鉢は、口縁端面に幅の狭い凹線文をもち、中期3までさかのぼることなく中期4に位置づけてよいと考える。土坑23の口縁端部を内傾さす大型鉢は、川島遺跡では異例で、紫雲出Ⅲ式、瓜池式期の讃岐、吉備に特徴的でその関係で捉えた方がよいと考える。大型鉢の分布の範囲は広く大和、河内、紀伊、近江、摂津、播磨、吉備、讃岐に及び東海、三河、尾張にまでおよぶ器形である。

高杯B_1、高杯B_2とも中期4、中期5を通じて形態的な差はみられない土器である。しいていえば中期4は土坑22、市之郷3類土器の実例のように、口縁端面の凹線文上に篦描刻目文、円形浮文、棒状浮文で飾るものが多く、新らしく中期5になると、無文のものが多い傾向を示す可能性があるように思われる。「弥生式土器集成」では高杯B_1を畿内第3様式(古)に位置づけているが、高杯B_2と同じく、川島では中期5の段階まで続く。高杯B_1は播磨、摂津、紀伊と限られた地方に多い器形である。高杯B_2は、高杯B_1とかさなって大和、河内に拡大し、高杯Bの定型化された形態になる。後期には高杯B_2には残らない。讃岐紫雲出Ⅲ式にもみられる。

脚部と杯部との対応関係は鉢B、鉢C、高杯Bについてはあきらかである。

脚Aは無文のものと、篦描鋸歯文、同沈線文で飾るものとに大別できる。脚Aは中期3（市之郷3類）、中期4にも存在するが、中期5になり脚部の大多数を占める形態である。脚Bは中期3（田能鋳型ピット）中期4に多い形態であり、中期5にも残存する。脚Cは類例の少ない脚である。川島中期4、中期5の脚部に飾る篦描鋸歯文は大和、唐古遺跡にはみられることが極く少ない文様[33]である。摂津・田能遺跡、加茂遺跡では中期の器台、脚部に鋸歯文を見る。吉備では、後期の上東式土器の特徴のひとつになる篦描鋸歯文は、吉備では中期の脚には見られることなく、後期の上東式[34]の器台の出現をまたねばならなく、摂津[35]、播磨からつたわった文様であろう。鋸歯文自体は、土器としては脚部、器台に限られた器種にしかもちいられない。土器以外では銅鐸の鰭、褌横帯に普遍的に鋸歯文が飾られる。以上のように鋸歯文は、特殊な文様であり、その性格は一種のマジカル的なものであろうと考える。抉込み鋸歯文は、吉備に多い文様である。川島遺跡では7点で大和唐古遺跡、摂津加茂遺跡と同程度にみられる。

器台は2点のみで中期5のものに限られる。中部瀬戸内では後期の上東式をまたねば器台の出現がない。

以上みてきた播磨川島遺跡の中期4、中期5の土器は、播磨独自の装飾法、器種の存在を見ながらも、畿内よりは中部瀬戸内的な特色が強くうかがえる。（山本）

註

(1) 小林行雄、佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会、昭和39年。
(2) 今里幾次「播磨市之郷弥生式遺跡の研究」『古代文化』第14巻第9号、昭和7年。
(3) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態(一)」『考古学研究』第15巻4号、昭和44年。
(4) 有年考古館にて松岡氏から教示を受ける。野田遺跡は壺A_2、甕、鉢B、大型鉢、高杯、高杯B等がある。壺A_2口縁端面は凹線文をもち、頸部は指頭圧痕文凸帯、断面三角形凸帯文で飾り、凹線文をみない。口縁部内面は凸帯文をもつ。大型鉢は凹線文をもつものと凸帯文をもつものがある。
(5) (3)の播磨の中期弥生式土器の項を参照した。中期3は畿内第3様式（古）に併行する。ここでは中期と後期の界は小林行雄氏の説に従う。
(6) 鎌木義昌「岡山県児島市福浄前山遺跡の土器」『弥生式土器集成』資料編　昭和43年。
(7) 近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』第8号　昭和28年。
(8) 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成本編1』　昭和43年。
(9) 石野博信、松下勝『播磨・東溝弥生遺跡Ⅱ』　昭和44年。
(10) (3)と同じ。
(11) 上田哲也、河原隆彦『播磨の弥生文化』　昭和41年。
(12) (6)と同じ。
(13) (1)と同じ。
(14) 末永雅雄、小林行雄、藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部研究報告16、昭和18年。
(15) 佐原氏は指頭圧痕文凸帯→刻目文凸帯文→篦圧痕文と文様が変遷するなかで解体していくと考えている。川島遺跡では中期4、中期5とも指頭圧痕文凸帯を用い、上記の変化をみずにその文様が消滅したのであろう。
(16) 円形浮文は中期5（新）にいたっても残っていくものと考える。
(17) (14)と同じ。
(18) 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成本編2』　昭和41年。
(19) 『池上、四ツ池遺跡13』第2阪和国道内遺跡調査会　昭和46年。
(20) 藤井直正「山畑遺跡」『枚岡市史』第3巻　昭和41年。
(21) 尼崎市田能遺跡発掘調査会編『田能遺跡概報』兵庫県社会文化協会、昭和42年。
(22) 末永雅雄、石野博信他『摂津加茂』関西大学文学部考古学研究第3冊　昭和42年。
(23) 壺A_3は吉備の口縁端部のつくりに類似する。児島市上之町保育園遺跡にその類似する壺をみるが、川島遺跡の壺A_3は細分であるためにその関連は速断できない。
(24) 21と同じ。
(25) 小賀直樹『和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報』和歌山文化財研究会、昭和43年。
(26) (8)と同じ、潤徳遺跡は脚はつかない。
(27) 出宮徳尚、伊藤晃『南方遺跡発掘調査概報』岡山市遺跡調査団　昭和46年。
(28) 間壁葭子「児島上之町保育園遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6号　昭和44年。
(29) (1)紫雲出の中に実測図がある。
(30) この中には短頸壺になる類も含まれていると考えられ、壺の凹線文使用はこれより若干少ないことになる。

(31) 河内・田ノ口遺跡に類例がある。

(32) 潮見浩「山陽地方Ⅰ」『弥生式土器集成本編1』 昭和43年。

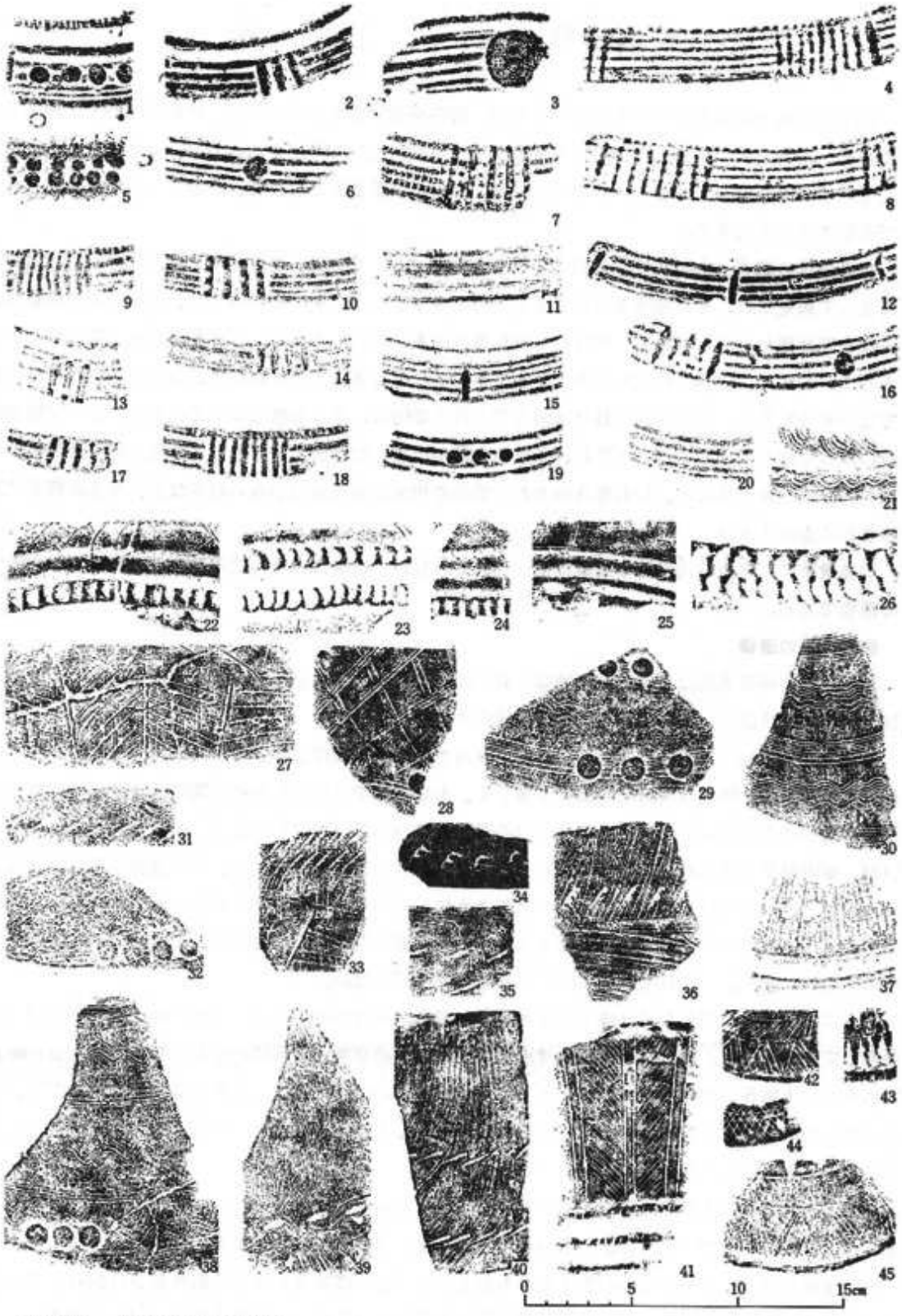
(33) 器台の凹線文下に見られる。他報告書では2例だけである。

(34) 鎌木義昌「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」弥生式土器集成資料編 昭和43年。

(35) 摂津の高杯形土器の脚文様は、長方形、円形、楕円形等種々な透孔をもつものが量的に多く、鋸歯文は、前者に比してその数は少い。播磨では摂津の透孔を利用する高杯形土器の脚は、極めて少なく箆描鋸歯文が量的に多い。

（付 記）

この拙稿をまとめるにあたって、石野博信氏に多大な御教示を得た。御芳名を記して謝意を表する。



第137図　各地区出土土器拓本

第3節　ま　と　め

以上に川島遺跡の調査結果を述べてきたが、調査を進めた東から西へと、時期を問わずに配列したために、川島遺跡の変遷については理解に困難な面があるかと考えられるので、ここにそれらを整理して若干の補足をしておきたい。本節では第1節および第2節において、土器については論述したので省略することとする。

川島遺跡の調査は山陽新幹線新設工事の事前調査であったため、遺跡の南北範囲については路線幅によって規定され、その範囲を確認することはできなかった。東西については、おそらく遺跡範囲の一部を確め得たと考えられる。すなわち川島遺跡の東西に、一本のトレンチを入れたと考えてよいであろう。しかし、すべての住居址および水田等の確認はなされていないため、より具体的な資料としては不充分である。特に五反田B地区南に残る自然堤防は、現在畑地となっているが、かつて県道敷設の際の土取りによって地下げされ、多数の土器が出土したと伝えること、また現在の川島部落が自然堤防上に立地するなど、なお集落の主たる場所を想定できる地点がみられるなど、今後の調査に期待される点が大きい。

川島遺跡には弥生時代以前の遺構は検出されていない。遺構は弥生時代中期中葉以後から鎌倉時代の遺構である。

弥生時代の遺構

弥生時代中期の遺構は土坑および墳墓と若干の溝である。大まかにいって墳墓は東端部の茶の木地区、土坑および溝は、西部の落久保地区に検出された。

墳墓は茶の木地区において4基の周溝墓が検出された。方形周溝墓3基と円形周溝墓1基である。最近における弥生時代の周溝墓の調査は著しく、川島遺跡では中期後葉の時期には、円形周溝墓と方形周溝墓が共存することが確められた。円形周溝墓については類例が少なく、比較検討の資料に乏しいが、福岡県平原遺跡や、時期的には新しくなるが北陸地方などにみられ、川島遺跡のみの特殊例と考えることはできない。また関東にみられるような、方形周溝墓のくずれてきたものと考えることも妥当ではないであろう。今後の類例をまちたい。周溝墓台上部および周辺に、土坑墓の可能性があるものが見られるが、いずれも確実に限定する資料を得ていない。

さらに同時期の墳墓としては落久保A地区西北隅の壺棺墓がみられる。特に円形周溝墓と時期的に共存していることは、壺形土器が円形周溝墓の壺と同様の形態と整形技法をもっていることから確実であろう。土坑5については、土坑墓としてよいか否かについて、なお慎重を要するであろうが、その土坑の形態および土器の出土状況や精製の壺形土器などからみて、他の土坑と異なった特殊な土坑であると考えざるを得ないであろう。

他の土坑についても性格は不明であるが、土坑墓と認めるには不適当と考えられ、土坑10などは、土坑本来の機能が終わった後に、土器の堆積があったと考えられる状況であった。

竪穴住居址は完掘していないが弥生期のものとしては、住居址Ⅱがある。高杯及び打製石庖丁が出土している。竪穴住居址Ⅲ・Ⅴ・Ⅵの時期は弥生中期後葉以後から古墳時代初期の間にあることは確

かであるが、いずれに属するか正確を期すことはできない。

溝遺構は25溝・22溝が中期中葉および後葉のものである。

後期の遺構は五反田A地区で検出された6溝のみが確実である。

古墳時代の遺構

落久保B地区で検出された竪穴住居址Ⅰは、唯一の完掘した住居址で、3.20m×3.55mの方形の住居址である。南壁の東寄りの部分でカマドが検出された。また住居址内から、鞴口と鉄滓が検出され工房址と考えられてよいであろう。西日本ではカマドの検出例は少なく貴重な資料といえよう。竪穴住居址Ⅳは竪穴住居址Ⅰより若干古く位置づけられる時期のものである。

溝遺構としては南五反田A地区の7溝および14溝がみられ、5世紀後半～8世紀初頭頃まで継続したものである。16溝および17溝は弥生中期後半～6世紀後半のものである。

落久保地区で検出された20溝は、溝としては浅く、須恵器の出現しない時期のもので、いわゆる古式土師器を多量に出土したが、その位置づけについては前節で述べた。21溝は7世紀のものである。

奈良・平安時代の遺構

時期を確定できる遺構は18溝および19溝のみである。いずれも北から南に流れる小溝である。

掘立柱建物址は茶の木地区で建物址Ⅰ・Ⅱの2軒が検出された。いずれも時期を確定できないが、恐らく周辺から出土する糸切底の須恵器、すなわち平安期と考えられるが、断定のかぎりではない。建物址Ⅳについても同様である。いずれの建物も大規模な構造をもつ建物ではなく、おそらく主要な建物に付随する雑舎的な建物であろう。

鎌倉時代の遺構

茶の木地区で検出された土坑墓は、人骨の検出もあり副葬品の青磁鉢から13世紀頃のものと考えられる。この時期は火葬墓など盛行する時期で、土坑墓の確実な例としては数少ないもので、極めて優秀な青磁鉢の副葬など中世墳墓の重要な資料であろう。（櫃本）

時期＼地区		茶の木地区	南五反田		落久保	
			A地区	B地区	A地区	B地区
弥生時代	中期中葉				土坑11・14 25溝	
	中期後葉	周溝墓Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ？・Ⅳ？		土坑5	土坑10・12・15 22溝 壺棺	土坑20・22・23・24・25 竪穴住居址Ⅱ・Ⅲ？
	後期		6溝			竪穴住居址Ⅴ？・Ⅵ？
古墳時代			7・14溝	16・17溝	20・21溝	竪穴住居址Ⅰ・Ⅳ・Ⅶ？
奈良平安時代		建物址Ⅰ？・Ⅱ？	建物址Ⅳ？	18・19溝		
鎌倉時代		中世土坑墓				

第2表　川島遺跡時期別遺構一覧

立　岡　遺　跡

第6章　立岡遺跡の調査経過

1. 第1次調査　—予察調査—

（昭和43年8月）

太子町立岡附近に遺跡が発見されたのは随分と以前のことである。第2次世界大戦中軍需産業の増産を目的として、電気会社が本遺跡の背後にある太子山の南麓を削平して社宅を建設した時に、数基の箱式石棺が発見され、多量の玉類や鉄刀等が出土したと伝えられていた。その後も太子山の開発が幾度か行なわれたが、道路敷設工事において、多量の須恵器（6世紀頃）が出土していた。更に昭和35年頃太子中学校のすぐ北側に鉄塔工事の掘さくを行なった時にも、弥生式土器の破片がかなり出土した。その後考古学の発展に伴って遺跡の分布調査が2回にわたって行なわれたが、その時にも、本遺跡の周辺には、表面に土器片（須恵器、弥生式土器）が散布しており、その範囲は立岡、山南、東麓を中心として、立岡地域全域におよんでいることがわかっていた。

以上のようなことから、山陽新幹線の路線が決定された時点で、この地区に埋蔵文化財の包蔵が予想されたので、予察調査を必要とすることは当然である。その後、兵庫県教育委員会の依頼によって、東洋大学附属姫路高等学校の生徒を使って、二度にわたってボーリングステッキによる土層調査を行ない、有機質を含有する土質が、かなりの広範囲に拡大することを知った。

これにもとずいて、昭和43年7月21日から夏期休暇を利用して予察坪掘り調査を行なうことにした。調査は中学校から立岡に通ずる道路の西側（立岡山の東麓部分）を重点的に行なうこととし、きたるべき本調査を考慮して、新幹線路線内に幅16m、長さ40m区内のグリッドを組み、基本的には4m平方のグリッド方式をとり、うち1m×4mをトレンチ調査した。したがってトレンチの総数は40カ所におよぶこととなる。ツボ掘調査としては随分と大規模に過ぎるという批判もあったが、これは川島地区での予察調査では規定の10カ所のツボ掘調査によっては間隔があきすぎて、本来の目的の一つであった大津茂川流域の沖積堆積状況すら察知しえないうえに、遺跡の埋蔵を具体的に報告する資料すら満足に得られなかったこと、とともに自分達の予察と本調査の結果とが遺跡の範囲、内容ともにかなりのへだたりがあったことによっても、立岡遺跡のツボ掘調査が大規模すぎると言えなかったと思っている。更には立岡遺跡の東方に接する矢田部遺跡では、時間の関係から川島遺跡同様に拡散的なツボ掘調査を行ない弥生後期の遺構や奈良乃至平安時代頃の遺構の一部分を確認し、報告したにもかかわらず調査のまま工事が行なわれ、遺跡が破壊し去られ、更にはその附近にも民間商店が建設されて、基礎工事中に遺物が多量に出土したことから振返っても、予察調査の重要性が理解されることと思う。

立岡遺跡では幅16m、長さ40mの範囲のグリッド式ツボ掘り調査の結果、ほぼ全域にわたって、遺構の存在を確認した。その成果の概要を記述しておくと弥生時代後期の住居址1、同時期の溝2、奈良乃至平安時代頃の方形柱穴状ピット多数と須恵器片および土師質の燈明皿を確認した。これらの遺物及び図面は調査中に整理し、遺物は復元して太子町教育委員会に渡し、調査成果は山陽新幹線埋蔵

文化財審議委員会で報告し、本調査の必要性を報告した。

なお本予察調査に参加した者は、中溝重則、河原隆彦、前田陽子、高原達也、西川和男、河井孝幸等の教師及び大学生と東洋大学附属姫路高校生徒十数名によって行なった。　（上田哲也）

2. 第 2 次 調 査　—山陽新幹線本線部分—

（昭和43年11月13日～昭和44年2月8日）

昭和43年11月13日（水）

本日より第2次発掘調査が開始される。6m方眼のグリッドを組む。昭和43年8月に行なわれた予察調査のトレンチがあり、その方向に従うと同時に、前回グリッドを取込むため6mとする。

11月14日（木）～16日（土）

作業に参加していただく地元の人達は、なお取入れの後始末などで2名程度であり、調査ははかどらない。ベルトコンベアの手配をし、東側より耕土を取り除く。

11月18日（月）～24日（土）

先週と同様に地元の人達の参加は1～2名である。グリッドの名称を決定する。杭に東側より西へ1、2、3と数字を付し、北よりA・B・Cと記号を与える。グリッドそのものの呼称は、常に北西の杭の記号と番号によって示すこととする。A1～A3、B1～B2、C1～2の表土を除く。A1北東隅の落込みの検討を行なう。住居址の可能性はない。

11月26日（火）～12月1日（日）

26日より7名～9名の作業員の参加があり、遅れている排土作業が順調に進行する。AラインはA8まで、BラインはB5、CはC4まで排土作業を終了する。

12月3日（火）～4日（水）

B5、C5の排土作業。

12月6日（金）

A9表土除去。

12月8日（日）

B6排土作業

12月9日（月）

B6、C6の排土作業を行なう。糸切底の須恵器、土師器が散見する。表土はおよそ半分ほど取り除く。

12月10日（火）～11日（水）

A11、B9までの排土作業。

12月13日（金）

A11、B9の精査に入る。

12月14日（土）

A11 5溝を掘る。本溝はB11を抜け、C11から東に曲り、C10、C9と西に延びる。

12月16日（月）

寒気はなはだしい。時おりみぞれ降る。B8、C8を検討する。南東に延びる溝は、東西の5溝によって切断されている。

12月17日（火）

竪穴住居址Iの検討を始める。他はB8、C8の精査。

12月18日（水）

住居址Iの平面をほぼ確認する。B7、C7の検討を行なう。柱穴らしきものが検出されるが、その全体を見るまでに至らず。

12月19日（木）～21日（土）

住居址掘り下げを始める。径10cm内外の炭火材がかなりみられる。土器片の出土多し。B10のピットを掘る。D10の畔を取除く。

12月23日（月）～25日（水）

住居址Iを掘り下げる。炭火材はいずれも住居址中央部に向う配列を示す。

第138図　竪穴住居址Ⅰ

12月26日（木）～29日（日）

立岡山山裾西部地区の、排土作業を開始する。27日に炭火材実測を部分的に行なう。住居址Ⅰは南西部分が、やや明確ではないが、方形の平面を示し、南北7.4m、東西8m程度の規模をもつようである。

昭和44年1月6日（月）

A、B12の排土作業。7溝の検出を始める。

1月7日（火）～8日（水）

住居址Ⅰの北西隅の部分を検討する。土質の変化は顕著ではない。西部地区は排土作業を完了する。

1月9日（木）

B5・6グリッドのピットを掘る。B15・16を掘る。溝状のものがみられるが、浅く〝たまり〟のような状況である。

1月10日（金）～11日（土）

柱穴の調査と竪穴住居址Ⅰの精査。

1月13日（月）～14日（火）

竪穴住居址Ⅰの西側床面の検出。建物Ⅱおよび建物Ⅲの検討。いずれも柱穴の検出は困難である。

1月15日（水）

竪穴住居址Ⅰの西北隅床面を検出。床面に接して35cm×25cm程度の角のない石が2個出土、B12・13グリッド掘り下げ。

1月16日（木）～17日（金）

柱穴実測および写真。

1月18日（土）

審議委員会委員現地立会。

1月20日（月）

柱穴実測。A15・16掘り下げ。

第139図　A15・16地区土器出土状況

1月22日（水）

住居址床面検出。Cラインの清掃。A′12グリッドの調査。

1月23日（木）～25日（土）

住居址床面検出。鉄片出土。

1月27日（月）

5溝検出、D8付近は溝に沿って柱穴が検出される。14個ある。

1月28日（火）～31日（金）

5溝を掘る。D8からD1まで掘り上がる。遺物は糸切底をもつ須恵器がある。

2月1日（土）

住居址床面清掃

第140図　6 溝 の 状 況

2月3日（月）～4日（火）

住居址床面清掃、南側ベッドの切れた部分より鉄斧が出土。

2月5日（水）

A6地区3溝最終的に掘り上げる。

第141図　13溝内土器出土状況

2月6日（木）

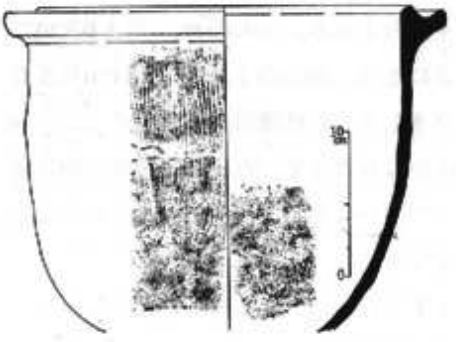
住居址写真。A'14、9溝掘り下げ。

2月7日（金）

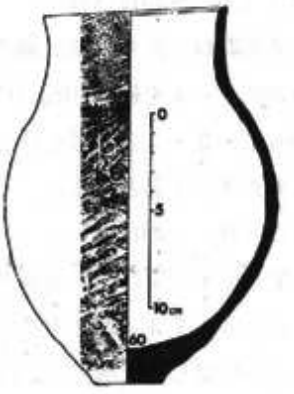
航空写真撮影のため清掃。

2月8日（土）

A16土器検出、溝としては続かず。後世の攪乱で須恵・土師・弥生の土器が混在する。本日で調査を終了する。　　（樋本）



第142図　C9地区耕土出土



第143図　No1坪掘りピット出土

3. 第 3 次 調 査　—山陽新幹線に伴なう北側側道部分—

（昭和45年8月7日～昭和45年9月10日）

昭和45年8月7日（金）

調査の打ち合せのため太子町に出向する。8月10日より開始とし、その間に小形バックホーンで耕土を取り除くこととし、現場においてその深さおよび場所について協議する。

8月10日（月）

本日より作業を開始する。耕土を除いた面積は調査面積の3分の1程度である。若干の耕土と床土を除く。

8月11日（火）

排土作業を続行する。一部遺構面直上まで下る。

8月12日（水）～14日（木）

排土作業を継続する。

8月17日（月）～20日（木）

排土作業を続けるとともに、一部遺構面までさげる。土坑Ⅰを検出し掘り下げる。土坑内堆積土は濃黒褐色で、土器片および骨片が出土した。

8月22日（土）～23日（日）

排土作業を23日で終り、2次調査と同様に、6×6mのグリッドを組み、南よりY・Zとし、東から西へ1・2・3と番号を打ち、北西隅の杭をもってグリッド名とする。

9月24日（月）～25日（火）

Y3・Y4の床土をはぎ、遺構面まで下げ、遺構を検出する。Y3では2次調査の2溝と推定できる溝を検出し、2溝とし、同様にY4でも2次調査の溝と考えられる3溝を検出し3溝とした。

8月26日（水）～29日（土）

2溝は、平面的には溝巾の輪郭が、明確ではないので、グリッド名の北壁にトレンチを入れ、断面観察より、溝巾約2.55m、深さ64cmの規模を確認し、土層は3層に分け、地山は黄

第144図　2 溝 東 西 断 面

褐色土でその上に砂利層があることが判る。

8月31日（月）

Ⅰ溝をさらに掘りすすむとともに、Y1の床土をはぐ。

9月1日（火）～2日（水）

Y1で1溝を検出し、掘り下げる。土層は褐色土のみで巾1.1m、深さ165cm程度の浅い溝である。1溝は2層目の灰色砂層を掘り進め、2溝は3層目の黒色土上面まで掘り進む。

9月3日（木）～4日（金）

3溝を掘り上げる。巾3.05m、深さ63cmでほぼ南北に走る。地山の上に深さ6cm程度のかなりひきしまった砂礫層があり、そこに土器の破片をかなり含んでいた。2溝は部分的に地山を確かめているが、砂利層を掘り進める。実測を終了する。

Y6・Y7については遺構は存在しない。

9月5日（土）

Y9において不明瞭ではあるが、薄黒色の住居址の土層を認める。2溝掘り下げ。

9月6日（日）

Ｙ９の土層変化は住居址と考えて誤りないようである。Ｙ10遺構面の精査。２溝掘り下げる。

９月７日（月）

Ｙ９住居址南側部分における床面及び、肩部の検出を行なう。１溝・２溝の平面図作成。写真撮影。２溝を終わる。

９月８日（火）

住居址の検出に全力を集中する。一部床面にいたる。床面は非常に硬い黄褐色土である。平面の一部は、北側が調査面積外にあるため、全容は確認できない。調査面積を拡張することは地主の承諾が得られないこと、調査日数、経費の不足から不可能である。ほぼ住居址北辺を確認できることと、保存処置を講じることが可能な点を考えて断念する。

９月９日（水）

住居址床面の精査を続けるも、土器の出土はわずかである。中央部に炉址を確認する。炉内の焼土及び灰の堆積は10cm程度である。

９月10日（木）

柱穴を掘る。やや不揃いであるが６本と考えられる。実測及び写真撮影を終って調査を終了する。

９月11日（金）

住居址部分の保存について協議し、住居址部分は削平を中止し、北側境界は盛土をした後に石垣を築くこととする。砂を入れる。

（横木・山木）

第145図　２溝東西断面図

第7章　立岡遺跡の遺構

1. 竪穴住居址

1. 竪穴住居址Ⅰ（図版33、34）

立岡遺跡で検出された弥生期の住居址は2軒である。

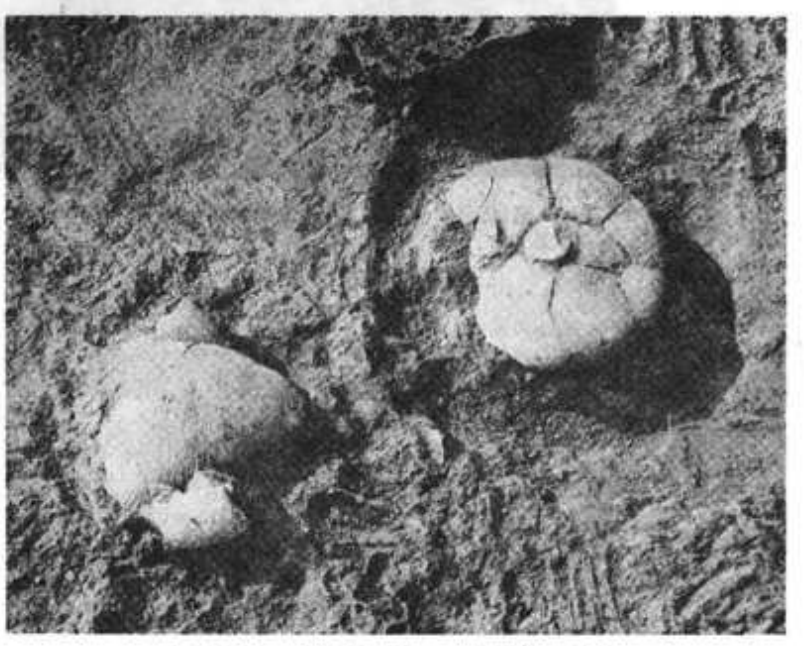
A10地区で検出された住居址である。後述する竪穴住居址Ⅱとは、最短距離で約5.5m南方の位置にある。

住居址は地山である黄色土を掘り下げてつくられ、南北7.4m、東西8m、深さ37cmの規模をもっている。形状は東辺長に比べて、西辺がやや長いために、不整形であるが方形を示している。内部構造の特徴は、東辺から南辺にかけて、幅1.3m、西辺から南辺にかけて幅1.2mのいわゆるベッド状の造り出しの施設があることである。それは北辺については見出せなかった。また南辺においても、中央部西よりの地点では、長さ1.6mのみ切れている状況である。ベッドの高さは床面より15cm程度で、外に向うに従って若干高くなる傾向がある。

住居址内の周溝は北辺と東辺の一部にのみ掘られている。幅8cm、深さ7cmのU字状のものである。焼土、灰、炭がつまっていた。溝の端は緩やかに立上って、次第に浅くなり、消滅する。

主柱穴は4本あり、およそ2.7m～2.8mの間隔を保っている。主柱穴のうち北東の柱穴は炭火した柱が立った状況で一部検出された。第10章第1節での所見によるとケヤキ材とのことである。径は約10cm、深さは床面より18cm程度である。

住居址内は一面に焼材が検出された。それらは種材と考えられるもので放射線状に検出された。また種材と同様に、茅状のものがみられた。種材の径は正確を期し難いが、6cm程度であろうと考えられる。また種材の規則正しく並んでいると考えられる地点があり、床面近くでは30cm程度と考えられる状況が観取された。



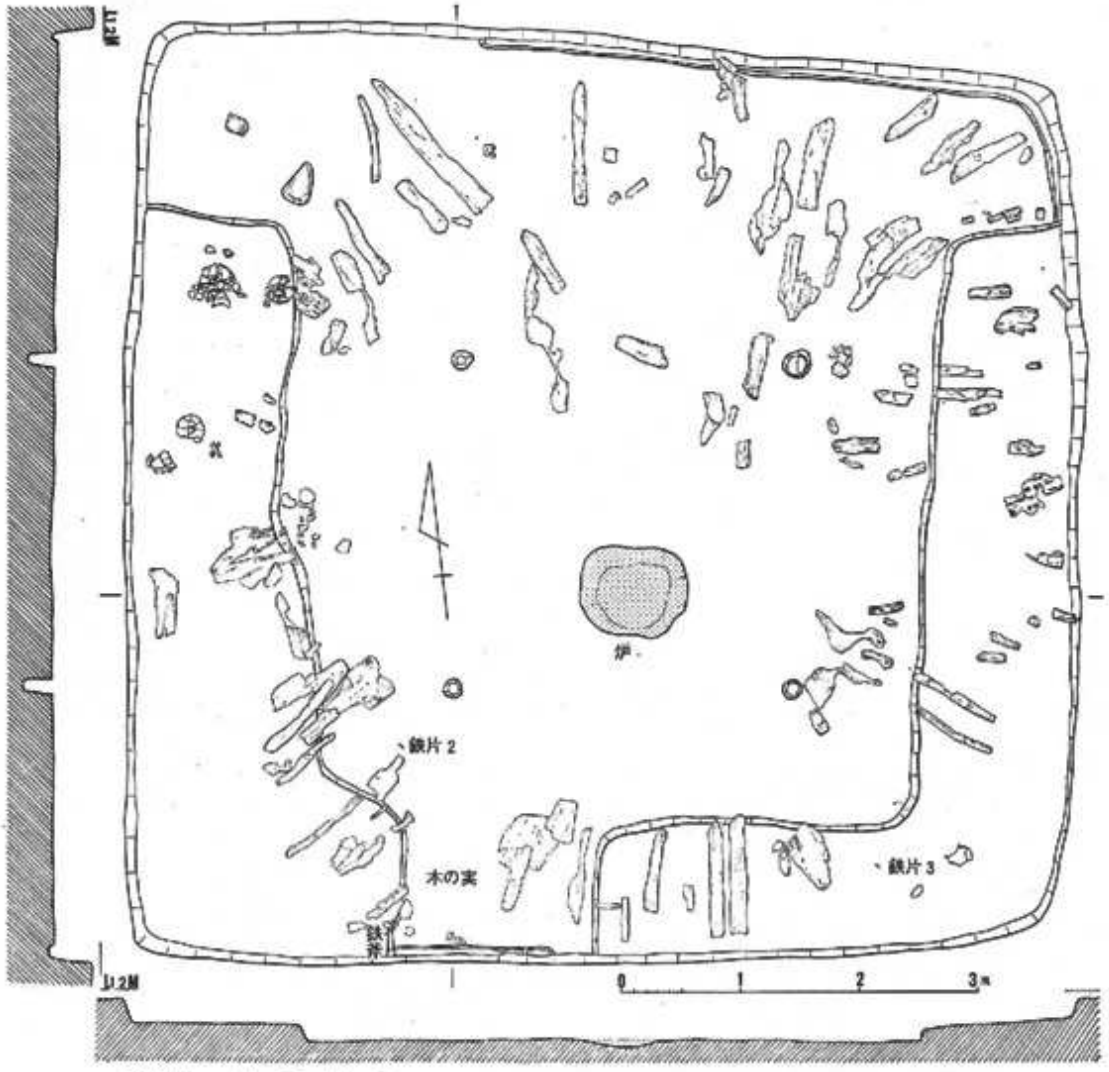
第146図　竪穴住居址Ⅰベッド上出土土器

炉は中央部よりやや南

に偏している。規模は90cm×70cm、深さ6cm程度の不整円形でわずかに窪む程度である。灰の堆積がみられた。炉の表面は堅く焼き締っているというような状況ではなかった。

遺物の出土は西北部ベッド上において、甕および鉢形土器、南辺のベッドが切れている部分より甕および壺口縁部が検出された。またこの部分径約60cmの範囲からは、第10章第1節に同定された、ムクロジュの炭火したものが、かなりの個体数が検出されている。さらに鉄斧1点が床面について出土した。この部分はわずか1cm程度の窪みになるが、顕著に掘り窪められているとは考えられない。南東部のベッド状および南西主柱穴とベッドの間の床面上より、鉄鏃の茎の部分かと思われるような鉄片が検出されている。さらに使用痕などもみられないが、15cm×20cm、および25cm×35cmの円礫が2個床面に接して検出されている。

住居址内の堆積土の状況は明確な層別れができなく、灰・炭および焼土が混入した黄褐色土が一層みられるのみで、通有の住居址のごとく、流入土による堆積状況とは相違していると考えられた。住居址周辺には支柱穴と考えられる柱穴などは検出されていない。　　（櫃本）



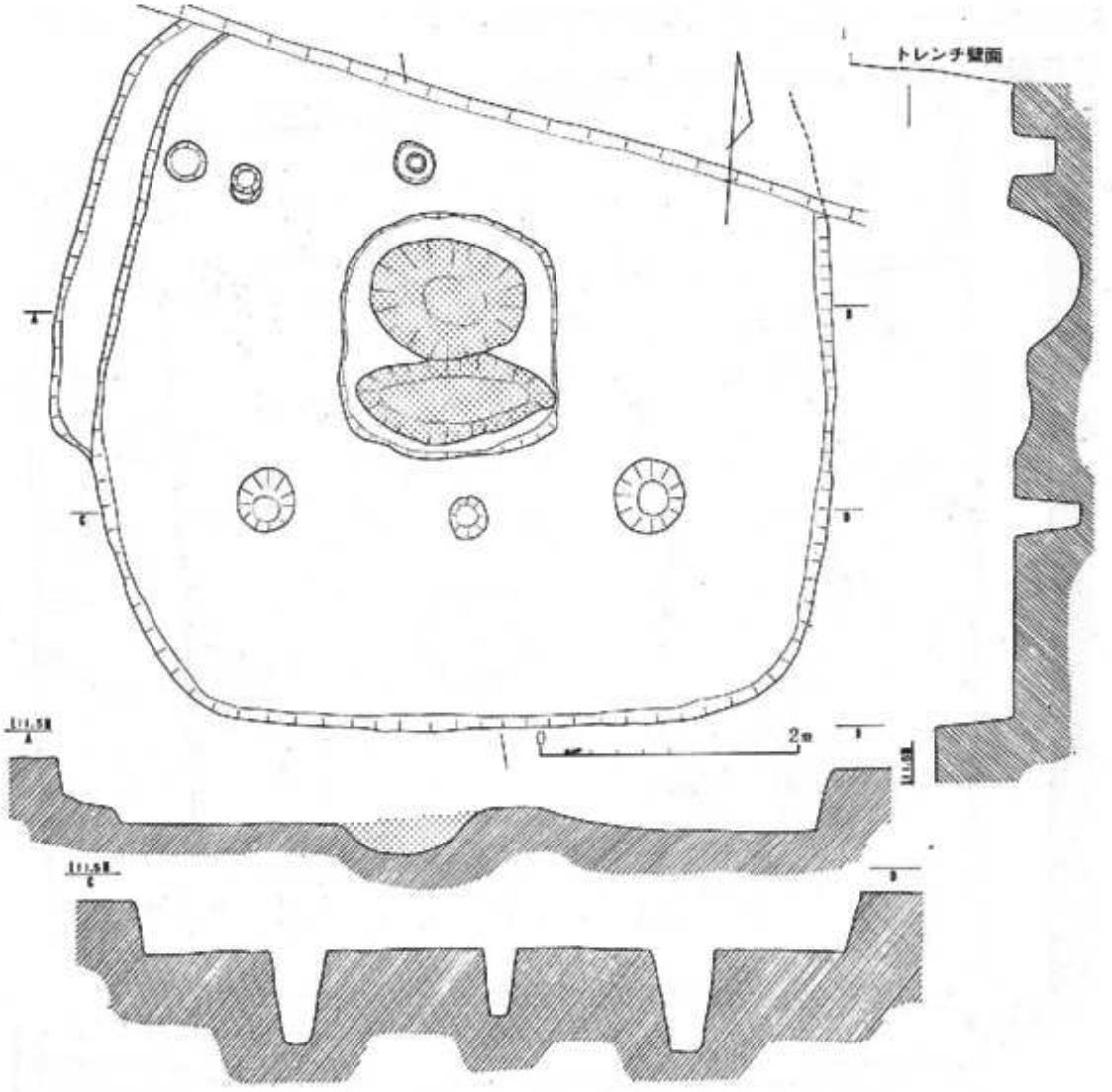
第147図　住居址 I

2. 竪穴住居址Ⅱ（図版32下）

Y10地区で検出されたが、北辺については水田のため調査を行なうことができなかった。住居址は地山である黄色土を掘り下げてつくられ、堆積土は薄灰黒色土であった。

住居址の形状は隅丸方形で、東西6ｍあり、南北は不明である。西辺は幅48cm、長さ現状で3.5ｍ程の張り出し部がある。床面より12cm高く、壁際に向って高くなっている。これは別の住居址を切ってる可能性はない。また拡張された可能性は否定できないが、床面の高さが相違することと、非常に傾斜をもっていることから、やはり不自然で、播磨・東溝遺跡住居址2の張出しと同様のものと考えられる。

床面は住居址肩部より42cmあり、非常に堅く、1cm程度の厚みで剥離する状況であった。柱穴は北



第148図　竪穴住居址Ⅱ

側西端が検出されていないが、南側東西に並ぶ3本は、両端の柱穴が大きく深い、径44cm、54cm、深さ74cm、78cmあり、中央柱穴は径30cm、深さ52cmである。北側柱穴は南側柱穴に対応すると考えられるが、北西柱穴は2本の柱穴の切り合がみられる。中央柱穴は径31cm、深さ34cm、柱の径は15cm、北西柱穴は径23cm程度で深さ48cmである。北西柱穴より50cm西で径32cm、深さ62cmの柱穴がみられる。

柱穴で囲まれた住居址中央部には炉がみられ、1.68m×1.91mの炉周辺は、最も高いところで10cm程度の高さをもった、堅く締った状況がみられた。炉は1.2m×93cm、深さ50cmの北側の掘り込みと、1.54m×64cm、深さ14cmの南側の掘り込みがあり、北側が深い。いずれも灰がつまっていたが、北部は表面は焼き固められており、炉としての機能をはたしたもので、南は灰等のかき出し口と考えられる。

出土遺物はわずかで、土器数点のみが検出された。住居址の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

(櫃本)

2. 掘立柱建物址（図版31上）

建 物 Ⅰ

柱穴の掘り方は一辺約45cmの方形で、埋土は黒褐色土を呈しており、掘り方間が各々1.9mの2間×3間の建物で、この地域で確認された建物址では、柱穴の組合わせが最も明確なものである。

建 物 Ⅱ

建物Ⅰの東に接しており、一辺45cm平均の方形の掘り方をもつ1間（4.2m）×3間（各2.4m間隔）の建物である。

掘り方の埋土は黒褐色を呈しており、建物Ⅰの東側面の一部と建物Ⅱの西側面の一部は2.4mの間隔をもって併行している。

建 物 Ⅲ

建物Ⅱの東に接しており、一辺45cm平均の方形の掘り方をもつ1間（3m）×2間（各2.5m間隔）の建物である。

掘り方の埋土は黒褐色土を呈している、当建物の西側面の一部は建物Ⅱの東側面の一部と3、4mの間隔で併行しており、建物Ⅰの北側面と当北側面が同一線上に位置している。

以上のことから、建物Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは掘り方の形状および方向が同じであることから、建築プランは同一時期に形成したものと考える。

建 物 Ⅳ

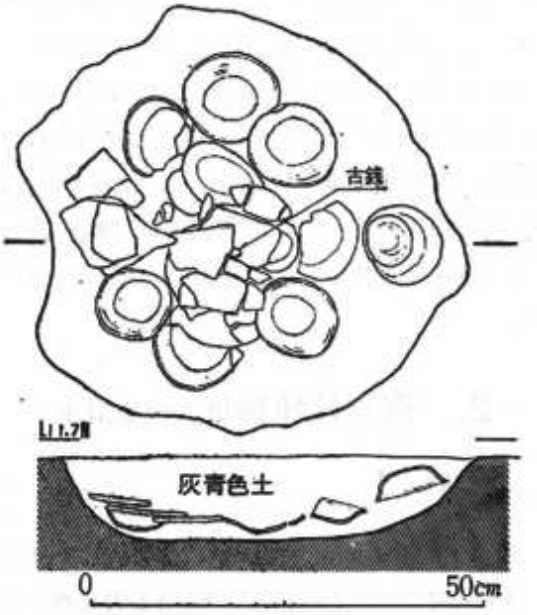
建物Ⅰ、Ⅱと重複してみられ、直径30cm平均の円形の掘り方をもつ5間×4間の建物である。ただ4間の並びは各2.35m間隔でみられるのに対し、5間の並びは3間が各3m間隔で、2間が各2.5m間隔でみられることから、部屋割りを変則的な造りにしたものであろう。

掘り方の埋土は灰褐色土を呈しており、全体をみてみると、5溝で一部説明しているL字型に形成されている柱穴群と関連をもつものと考える。（阿久津）

3. 土　　坑

ピ　ッ　ト　17（図版31下）

なお柱穴群の中に、円形の直径52cm、深さ11cmの小ピット（挿図149、図版31）がみられ、その中に土師質の燈明皿が10個確認された。出土状況を述べると、ピット内の覆土は灰褐色土で、それをはずすとすぐ須恵器甕の破片が4片みられ、それをはずすと燈明皿がみられ、その上面に古銭が1個のっている。磨滅がはげしいので字体は確認できなかった。燈明皿は積み重ねず、ならべるようにして置いてある。（阿久津）



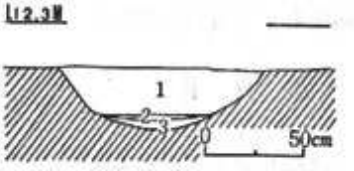
第149図　ピ　ッ　ト　17

4. 溝　遺　構　（図版32上、35下）

1　溝

発掘地区の最東部で検出された。北北西から南南東に向う幅1.1m、深さ65cmの小溝である。土層は暗褐色粘質土が溝底部に堆積し、上部に褐色砂層、褐色粘質土が堆積する。土器の出土は少なく、須恵器等を含まない。時期は弥生後期である。

（樫本）

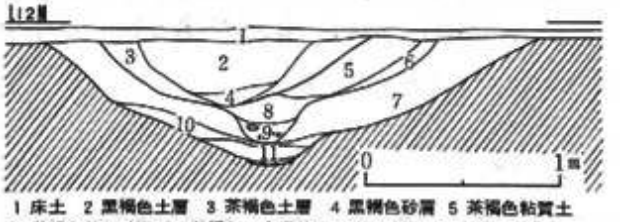


1 褐色粘質土層　2 褐色砂層
3 暗褐粘質層

第150図　1 溝断面

2　溝

北北西より弧状をなして、南東に向う溝である。第3次調査（北側道部）において、溝幅を確認したが、それによると幅2.55m、深さ64cmの溝で、複雑な土層の堆積状態であった。最下層に礫層がある。その上に薄草色粘質砂層がみられる。顕著な礫層が第9層にもみられる。



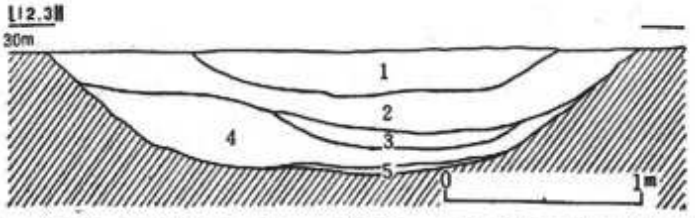
1 床土　2 黒褐色土層　3 茶褐色土層　4 黒褐色砂層　5 茶褐色粘質土
6 茶褐色粘質砂層　7 茶褐色斑点混り褐色粘質砂層　8 灰茶色砂層
9 礫層　10褐色粘質砂層（鉄分混）　11薄草色粘質砂層

第151図　2　溝　断　面

時期は弥生後期のものであろう。

3　溝

ほぼ北東から南西の方向に走る。溝はZ・Yラインではほぼ南北方向に流れ、Xラインで南西方向に向う。本溝は掘立柱穴下にあるため、A・X・Y・Zラインと、Cラインの一部を掘ったのみである。溝幅はZラインで3.05m、深さ63cmを測る。溝幅は建物址下の部分もほぼ同様であるが、Cラインでやや狭くなっている。



1.黒褐色土　2.茶褐色土Ⅰ層　3.黒褐色土　4.茶褐色土Ⅱ層　5.砂利層
第152図　3 溝 断 面

土層は最下層は小礫層（砂利層）で、茶褐色土Ⅱ層・黒色土層・茶褐色土Ⅰ層・黒褐色土の順で堆積が見られる。土器の包含はあまりみられないが、ほぼ弥生後期の溝と考えられる。

4　溝

竪穴住居址Ⅰの南西隅から1.5m位置にある、幅20cmの小溝である。溝は北西から南東に向うが両端は確認されていない。すなわち北西端は5溝によって切断されたあとは未調査である。また南東端は同様に東西方向5溝によって切られたあとD8地区では検出することができなかった。深さは15cmと浅く、堆積土は褐色土である。灰青色土の堆積をもつ、消滅してしまうような溝状遺構とは、やや相違するようである。土器は土師質の細片で時期を決定することはできないが、須恵器は含んでいない。（樋本）

5　溝

北から南に通る数本の溝の他に、遺跡を囲むようにしてみられる溝が確認でき、それを調査していくと、幅80cmから1.5m、1.7mと北端が細く、南、東に行くにしたがい太くなっている。深さも30cmから40cm、50cmと少しずつ深くなっており、覆土の状況は、底辺は粘土質の層が薄く堆積し、その上層に灰褐色砂質土がみられる。このことから、この溝は少くとも水が入っていたことが考えられ、時期も第157図にみられるように、糸切底をもつ須恵器が数片出土していることから平安時代以降のものと思われる。この溝の南側に接して馬てい形のピットが一列にならんでいるのがみられ、ピットの一部には礫も確認できることから、柱列のようなものとも考えられるが、川島遺跡でも、溝にそって同形状のものがみられることから、他に類例を求めることが必要である。

この溝の内側と考えられるところに、溝にそって南北と東西に40cm幅の柱穴が、2.3mと2m間隔でみられ、形状からみて、L字形の建物が、L字形の溝の内側に存在していた可能性が考えられる。

以上のことから、L字形の溝は周溝的なものであろうかと考えられるが、内部の建物はその構造、規模からみて、大規模なものではなく、大規模な建物に付属するものと考えられる。　（阿久津）

6　溝

5溝に沿った、東西方向の溝状遺構である。幅52cm、深さ18cmある。両端はD8地区で消滅する。堆積土は灰青色土で、糸切底須恵器片が含まれている。本溝状遺構と同様のものが、さらに南のD8～D10地区にもみられる。

7　溝

13ラインをほぼ南北方向に向う、古墳時代の溝である。溝はBラインで幅1.2mあり、Cラインで若干弧状を示して南々東方向に向い、幅80cmと若干細くなる。堆積土は黒褐色土で一層である。土器はAB地区で壺形土器（第158図）が検出された。土器は溝底に密着しており、口縁部が胴部内にあって上部より圧力がかって破砕したような状況であった。　（榎本）

5.　その他の遺構

掘立柱建物址の柱穴と考えられるものがみられるが、建物として組合すことができない。またB9地区の2.2m×1.1m、深さ15mの浅い楕円形状のピットなどもみられるが、土器なども含まず性格は不明である。

7溝以西については見るべき遺構はない。A・B各15・16地区は、第162図に示す土器が雑然と出土する地点があるが、一種の「溜り」のような状況であり、かってこの山裾部分は、用水路が走っていたらしく、上層は乱れている。

No.1の坪掘りによって第143図の壺形土器を検出したが、灰色土層から出土したもので、土器の示す時期と一致しないものである。

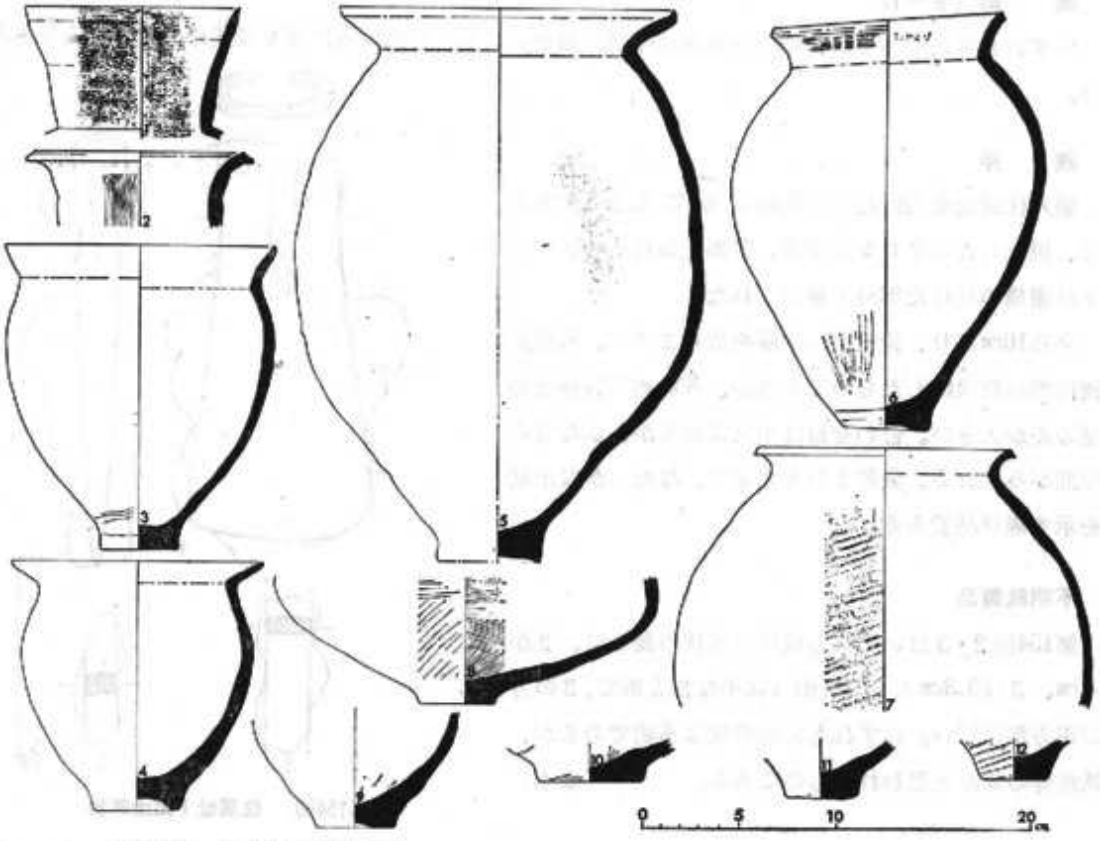
さらに10年ほど前まで使用していたもので、埋没した野井戸が4ケ所検出されている。すなわち1溝東部のもの、3溝西X5地区のもの、A6付近掘立柱建物址Ⅱ北側、7溝東側A12地区のものである。　（榎本）

第8章　立岡遺跡出土の遺物

1. 竪穴住居址

1. 竪穴住居址Ⅰ（図版91）

住居址Ⅰは多量の炭火材が検出されたことから被災したものと考えられ、出土土器も二次的に火を



第153図　竪穴住居址Ⅰ土器

受けたためか、器面は脆弱で調整方法について観察でき難いものが多い。住居址床面およびベッド上に密着した土器は、12個体程度である。

壺形土器（1～2）

筒状の頸部が直口する1の土器は、外面を縦方向に、内面を横方向に刷毛で調整している。

2は筒状の頸部をもち、口縁部は外反する。外面に縦方向の刷毛で調整する。

甕形土器（3～7）

3および4は、外反する口縁部端部が丸くおさめられ、胴部の張りが少ない。底部は4が上げ底になる。いずれも器面の保存がわるく、詳細に観察できないが、3の内面にわずかに箆削りを行なっているのがみられる。5は外反する口縁端部を上につまみ出し、胴部はやや張りをもっている。外面ロ

縁部から頸部は、横方向の刷毛で調整し、胴部は叩目を、上半および底部は上下の刷毛で、胴部中央は横方向の刷毛で消している。 6は外面は刷毛で調整し、 胴部内面は 横方向の箆削りを行なっている。7は胴部が張り、外面に叩目をつける。

鉢形土器（8）

口縁部が直立し、底部は平底である。器外表面は箆削りし、内面は1単位15～16本の刷毛目で左から右へ調整する。

底　部（9～12）

いずれも平底であるが、12のみ外面に叩目が観察される。時期は畿内第Ⅴ様式に比定されるであろう。

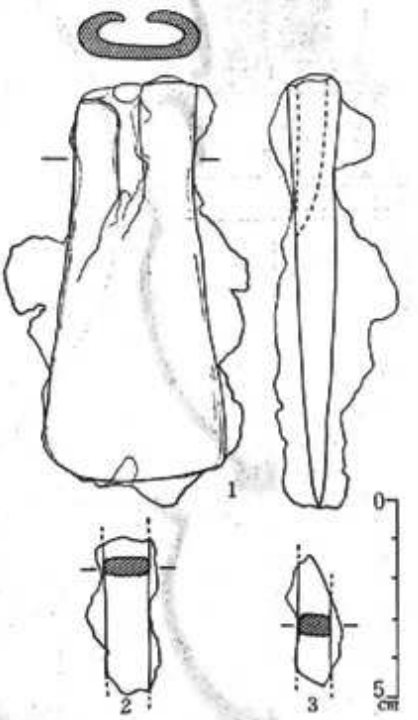
鉄　斧

竪穴住居址南辺付近の床面について出土したもので、炭火したムクロジの実や、甕形土器などと、ベッド状遺構の切れた部分で検出された。

全長10cmあり、袋穂部は両縁を折りまげて、断面長楕円形の筒状にしたものであるが、きわめて長径と短径の差が大きい。合わせ目は中央にあるが、かなりの隙間がみられる。袋部より刃先まで、なだらかな形状を示す無肩品である。

不明鉄製品

第154図2・3はいずれも破片で現状の長さは、2が4cm、3は3.3cmある。断面は扁平な長方形で、3の方が正方形に近い。いずれも元の形状は不明であるが、鉄鏃等の茎かと思われるものである。　（標本）



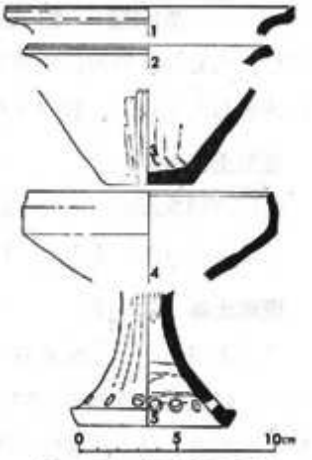
第154図　住居址Ⅰ出土鉄器

2.　竪穴住居址Ⅱ出土土器（図版93上右）

住居址から出土した土器は図示した5点のみである。3・5は床面についていたものである。

1・2は甕形土器の口縁部である。現存する部分はヨコナデ調整で仕上げる。1は口縁端部を上方に拡張する。3は甕形土器の底部であり、外面は縦方向に箆磨きで仕上げ、内面は縦方向に箆削りで仕上げる。

4は曲折して内傾ぎみにたつ口縁部をもつ高杯形土器である。5は高杯形土器脚部である。脚端部は断面三角形状に上方に拡張する。脚



第155図　住居址Ⅱ土器

端には円形の透孔をめぐらす。脚部外面は縦方向に篦磨き、脚部内面は絞り目を横方向に篦削りで仕上げる。

以上の住居址出土土器は、川島遺跡の中期5（畿内4様式併行期）の時期に比定できる。3の甕形土器内面篦削りで仕上げる手法は、畿内地方（大和、河内、摂津）の弥生時代中期の甕形土器にはみることのない手法[(1)]であり、中部瀬戸内地方の甕形土器にはみることのできる手法[(2)]である。中部瀬戸内地方との関係で播磨の弥生時代中期の内面篦削り手法[(3)]を捉えなければならない。

住居址Ⅱは床面につく3、5が、中期5の時期に属するもので、この住居址が放棄された時期は中期5（畿内4様式併行期）であると考える。（山本）

註

(1) 畿内地方は第3様式（新）、第4様式の時期に、壺形土器、甕形土器の器体外面下半、高杯形土器脚部内面に篦削り手法をみる。壺、甕形土器の内面には篦削り手法はみない。（小林行雄、佐原真「紫雲出」詫間町文化財保護委員会、昭和39年）

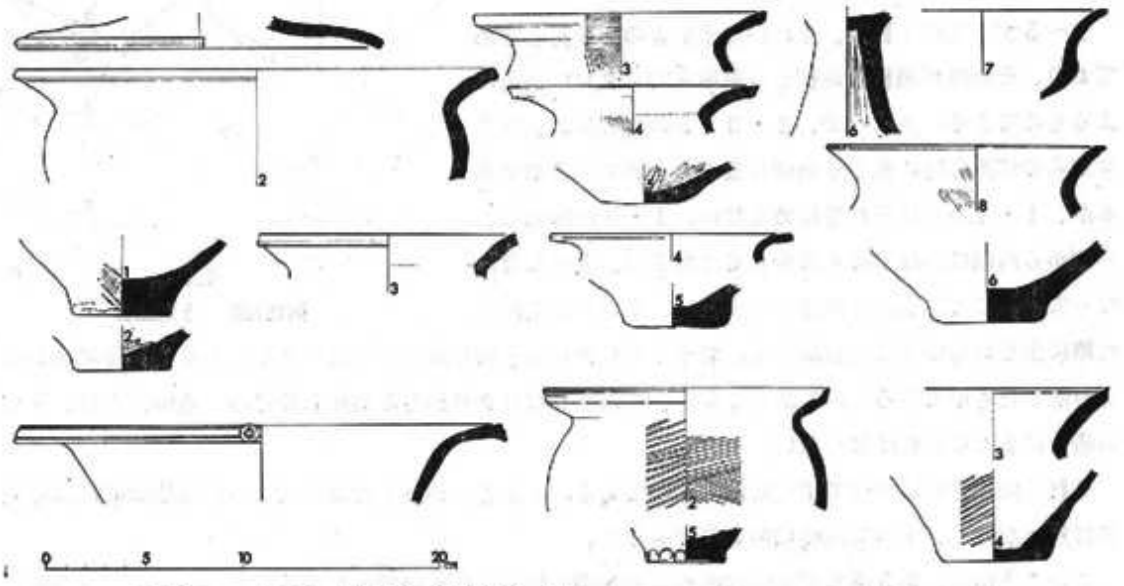
(2) 中部瀬戸内地方の篦削り手法は、益池式期の新しい段階に甕形土器の器体内面下半、高杯形土器脚部内面にみられ、児島上之町保育園内遺跡の土器の時期（畿内第4様式併行期）になると壺形土器、甕形土器の器体内面、高杯形土器脚部内面にこの手法をみる。（間壁3「児島上之町保育園内遺跡」倉敷考古館集報第6号、昭和44年）

(3) 川島遺跡では中期4・中期5の甕形土器内面、高杯形土器脚部内面に篦削り手法がみられ、壺形土器にも内面篦削り手法がみられる。整形段階におけるこれらの手法は瀬戸内地方との関係が強くうかがえる。

2. 溝遺構出土土器（図版93）

1 溝 （図版93下左）

1は高杯形土器の脚部であろう。2は外反する口縁部をもつ鉢形土器であり、外面全体はこまかい篦磨きで仕上げている。3、4は外反する口縁部をもつ甕形土器で、口縁端部は上方にわずかに拡張



第156図　1（上）・2（中）・3溝（下）土器

する。外面は刷毛目調整で仕上げる。5は壺形土器の底部であろう。6は高杯形土器の脚部である。7は杯部に稜をもち、稜から上方に外弯する高杯形土器である。

以上の土器型式は弥生時代後期（畿内第5様式）の時期に比定できる。

2　溝　（図版93下右）

3、4は口縁部を外反する甕形土器である。3は口縁端部がわずかに肥厚する。1、2、5、6は底部である。1、5、6は壺形土器の底部であろう。1は外面に叩き目をほどこす。これらの土器は弥生時代後期（畿内第5様式）に考えて問題はないであろう。

3　溝　（図版93上中）

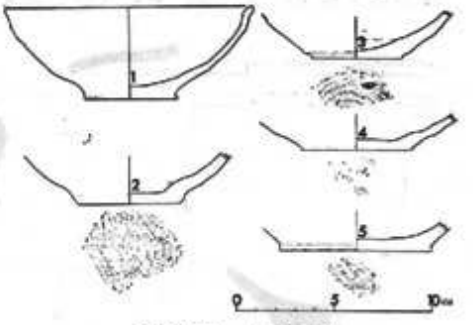
1は頸部から口縁部にかけて大きく外反した壺形土器である。口縁端部は下方に拡張し、口縁端面には擬凹線文をめぐらし、その上に竹管文をほどこした浮文を貼り付ける。口頸部外面は篦磨きで仕上げる。口径は25cmである。

2、3、4は甕形土器である。2、3は口縁部を外反したのち、端部を上方に拡張する。3は器体外面に斜方向の叩き目をほどこし、内面は刷毛目調整で仕上げる。4は甕形土器の底部で外面に叩き目をほどこす。

以上の土器は弥生時代後期（畿内5様式）の時期に比定できる。　（山本）

5　溝

図157に示したように、須恵器の杯でしめられており、1をのぞいた2～5は底部のみしか検出できなかった。1は、きれいにロクロ調整された半球形をなし、口縁部先端がわずかに外反し、まるくおさめられているのが特徴である。



第157図　5溝土器

1～5すべての土器は、きれいな水引きの痕跡をとどめており、その成形過程は最初から最後までロクロの使用によるものである。ところで、2・3・5の底部には、ロクロからの切離し時に生じる糸切り痕をとどめているのであるが、1・4からはそれを認めえない。1・4の底部は、外側から内側にかけてほんの少しではあるが、先とがりになっているのである。このような痕跡は、糸切り痕を消した際に生じたものとは認めがたく、おそらくロクロから切り離しの際にヘラか、あるいは金属板かで切り離したものであろう。しかしながら、このようなロクロからの切離し技法の二者の存在は、今後の研究にまたなければならない。

これらの須恵器はすべて平安時代のものである。しかも、前述したような二つの技法の間には時期差は認めがたく、すべて同時期のものであろう。

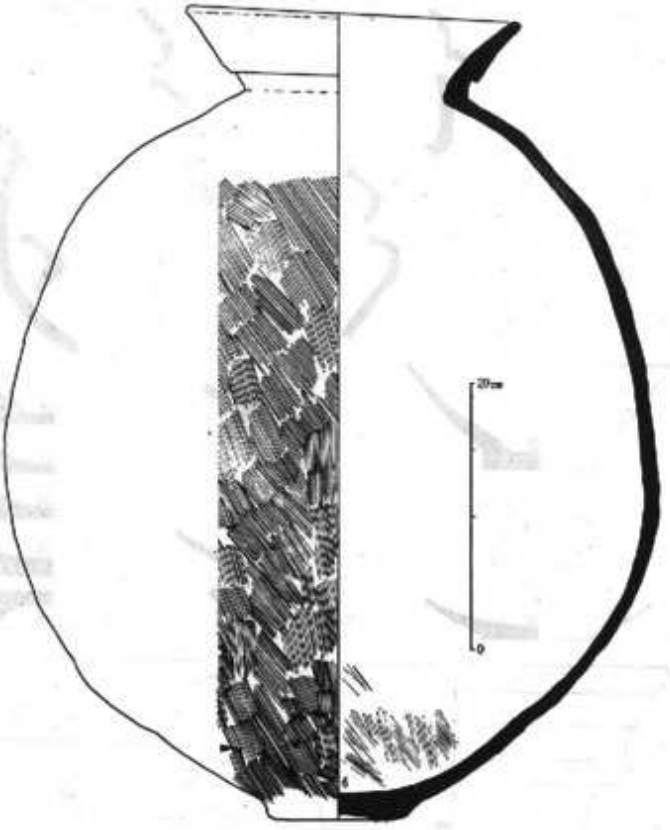
このことから、第5溝は平安時代のある短時期に使用されたのではなかろうか。　（浅岡）

7溝出土土器（図版93上左）

壺形土器（1）

総高61㎝、口縁部径25.3㎝、胴部径49.4㎝あり、口縁部と頸部の境において段をなした後に、やや強く外反する口縁部をもっている。胴部は最大径が下半部にある。調整法は口頸部はヨコナデし、胴部外面および内面下半は、斜方向の刷毛調整を行なう。本溝出土土器の時期は特徴的な口縁部によって古墳時前期頃と考えられる。

（櫃本）

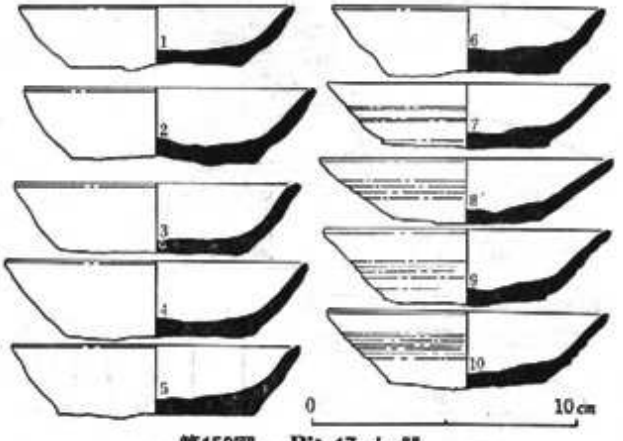


第158図　7溝土器

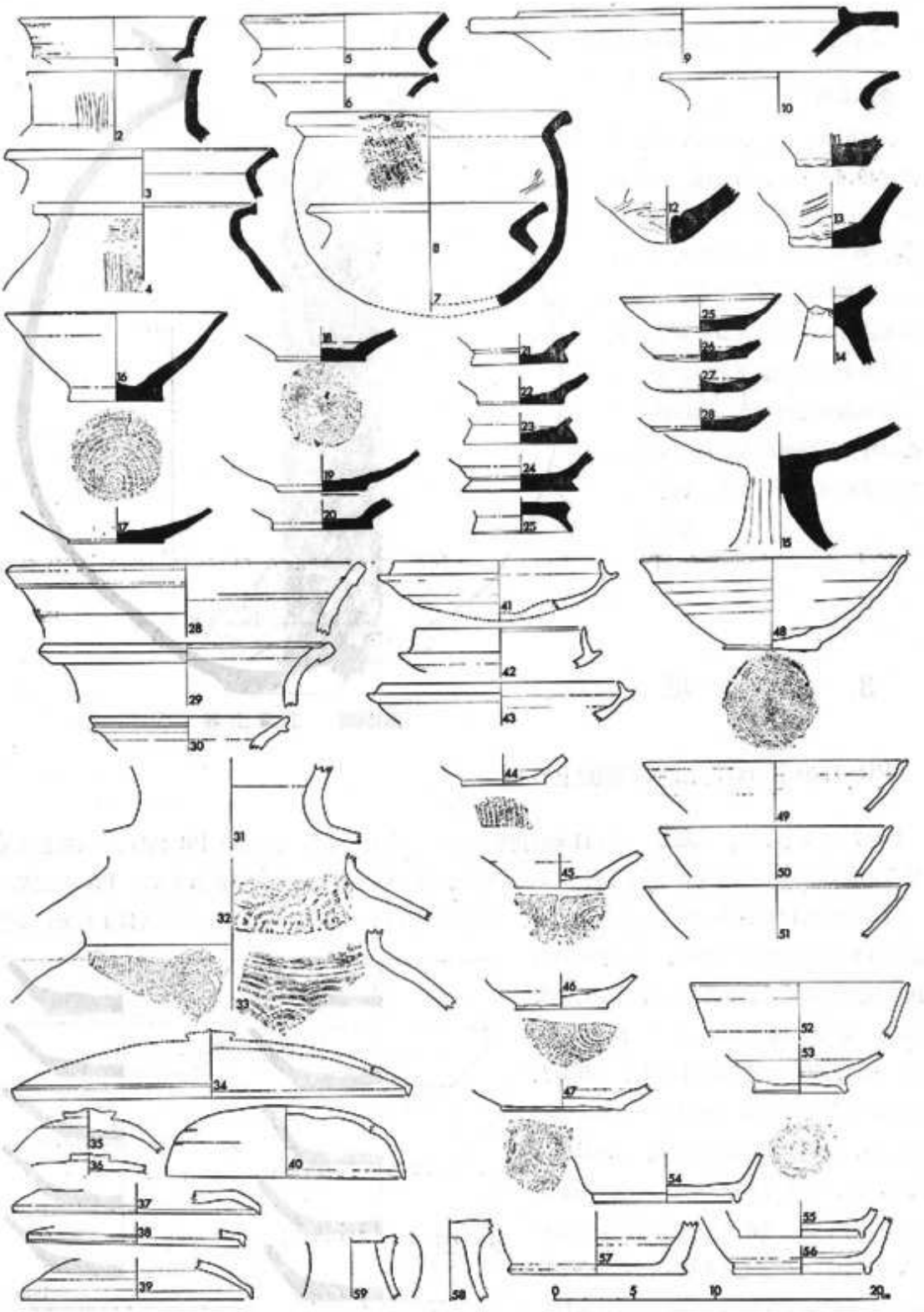
3. 土　　坑

Pit 17出土の灯明皿（図版92上）

Pit17の大きさは、径52㎝、深さ11㎝の円形状を呈したものである。このPit内は、灰褐色土の単一土層であり、このPitに含まれている遺物は、同一の時期と考える事が出来る。Pitの底部に土師の灯明皿10個が置かれていた。そして、この灯明皿のすぐ上部、灰褐色土中に古銭1枚と、須恵器片4個が含まれていたが、この1枚の古銭は腐食が激しく、判読する事は不可能であり、確実な時期をとらえる事は出来ない。又、同様に須恵器片4個も、少片のため時期をおさえる事は不可能である。灯明皿の10個は、すべて完型品で、口径11㎝内外で、又、高さは3㎝内外である。この灯明皿の製作は、ロクロ成形技法によるもので、底部は、すべてロクロ廻転による切り離し手法の糸切り底である。　（大村）



第159図　Pit 17土器

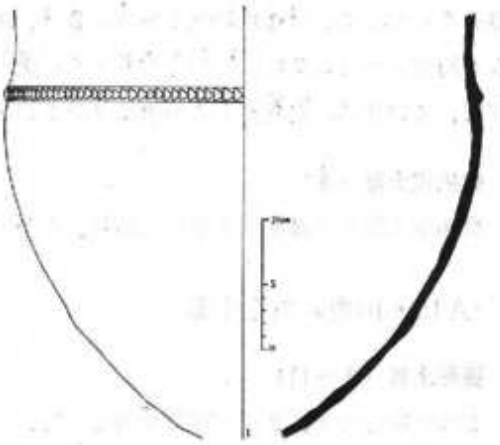


第160図　立岡遺跡表採土器

2. Pit 27

L字型に形成されている柱穴群の中のC10地点内に埋甕のあるピットを確認した。同ピットは直径40cm、深さ45cm、甕に接してわずかであるが掘り方がみられる。

甕は縄文時代晩期の船橋式の粗製土器に併行するもので、高さ約43m、口縁部直径約34cm、器厚7mmで焼成は少々悪く、胎土は小石を含んでいる。口唇部はなめらかで、口縁部には刻目の張り付け凸帯が1条まわっており、外に反りをみせながら内反している。器面は全体的に少し研磨されているようであるが、それは特に口縁部にみられる。（阿久津）



第161図　pit27土器

4. 表面採集の土器（図版92下）

この立岡遺跡から表面採集した土器は、弥生式土器および土師器、須恵器がほとんどである。

須恵器

この須恵器の器種は、杯身、蓋、高杯、甕、椀等である。

甕　(28～33)

口径21cmから12cmのもので、中型と小型のものである。口頸部は短かく、口端部は折りまげて、外方は中央に稜を持つ断面、三角形の段をなす。

杯身（41～43）

立ち上がりは矮小化し全体に浅く扁平である。受部は、水平又は上向きに外方へのびている。立ち上がりを持つ杯身の終末に近い形態である。

蓋　(34～39)

34は、口径約24cmの大型である。盤とセットをなすものであろう。37～39の口縁端部は、下方へ短かく屈曲し、先端は鈍い稜をなす。

椀　(41～56)

これらはすべて、ロクロ廻転技法によるもので、内外面ともロクロ目を明瞭に残している。又、底部は、廻転ロクロによる糸切り底である。

土師器（16～28）

これらも同様に、ロクロ技法によるもので、廻転ロクロを利用した糸切り底である。1は、二重口

縁をもった壺で、口径約10cmである。3は、短かく外反する口頸で、上端に狭い面をつくっている。5も同様である。7は、短かく外曲する口縁で、やや内弯する。外面は刷毛目仕上げである。15は高杯で、浅い杯で、内外面とも平滑になでている。

弥生式土器（8）

高杯型土器で口縁部は水平に広がり、その内端に1条の突帯を巡らしている。　　（大村）

A15・16地区出土土器

甕形土器（1～11）

1は底部を欠き、2は口縁部を損なっているが、ほぼ同形のものである。頸部から口縁部へ、ややするどく外反し、胴部は丸味をおびている。胴部外面は叩目をつける。胴部上半及び下半部は、刷毛による調整がみられる。内面は縦方向の刷毛による調整が行なわれている。

3・4・9・10は頸部がゆるやかに外反し、口縁端部をつまみあげている。胴部は張りが少なく、外面に叩目をつける。内面は刷毛で調整する。

5・6・7・8は、頸部から口縁部にゆるやかに外反し、口縁端部が面をなす。

鉢形土器（12）

口径36.2cmの土器で口縁が外反し、端部は面をなす。外面は篦磨きで、内部は刷毛で調整する。

高杯形土器（13・14）

脚部のみで、脚内面は篦削りである。

底　部（16～22）

17・19は外面に叩目がある。20・21は刷毛目がみられる。

器台形土器（15）

脚部のみで、上下各4孔の穿孔がある。器面内外ともに刷毛目がみられる。

皿形土器（23）

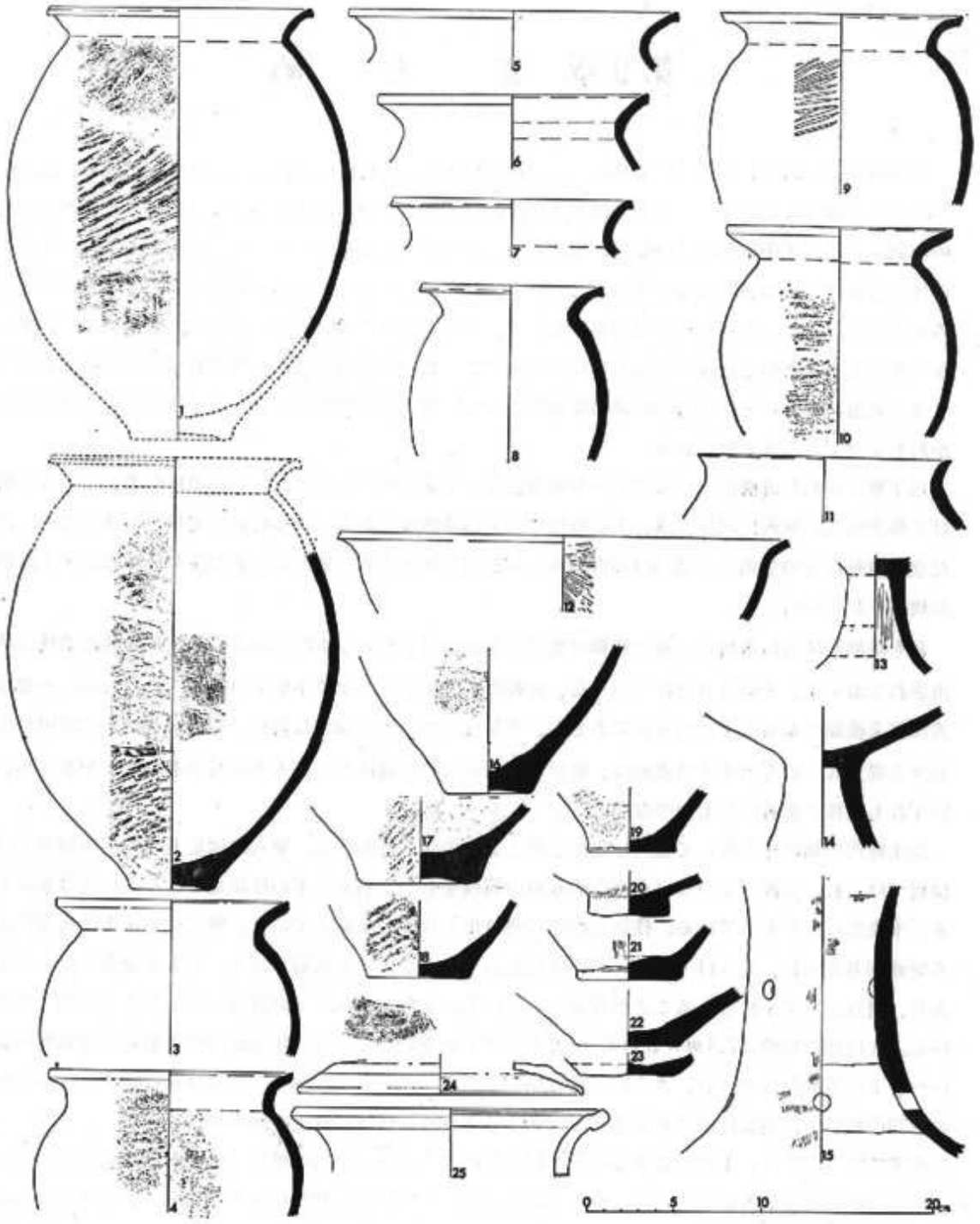
底部のみで口縁部を欠くが、いわゆる燈明皿で、底部は篦削りされている。

須恵器（24・25）

24は杯蓋で、天井部中央を欠くが、宝殊形のつまみをもつものと考えられ、口縁端部は下方に短かく屈曲して、内面にかえりをもたない。天井部外面は刷毛目がみられる。

25は口径18.3cmの甕で、口縁端部は外側をふくらましている。

以上の土器は、特別な遺構にともなうものでなく、弥生後期の土器と奈良末期の須恵器が共存する、二次的移動をうけたもので、比較的まとまった状況で出土したものである。　　（櫃本）



第162図　A15・16地区出土土器

第9章　ま　と　め

立岡遺跡で検出された各々の遺構について述べてきたが、遺跡の範囲は川島遺跡と同様に、南北については不明確な点が多い。しかし川島遺跡に比べて若干両側道の調査が実施されたこと、調査区域の北側にある太子中学校建設の際に、土器が出土したとの聞込みがあること、立岡東部の矢田部付近の坪掘り調査では顕著な遺構の検出がなされていない点などから、遺跡の範囲について若干得るところがあった。また一方地理学的な所見によると、現在の立岡部落は大きな自然堤防上に立地し、早くから安定した集落の立地条件を示していたことが知られ、その可能性が示唆されるのである。おそらくは立岡遺跡における弥生時代以降の集落の中心は、現在の立岡部落の存在する付近を想定することが最も妥当であろうと思われる。

以下検出された遺構について若干の整理を行なってまとめにかえたい。立岡遺跡の遺構は大きく別けて弥生時代の竪穴住居址と溝、平安時代の掘立柱建物址である。古墳時代の遺構は顕著でない。ただ立岡遺跡西方の立岡山古墳（第172図参照）が確実な例である。横穴式石室で金環・須恵器・土師器が検出されている。

最も時期的に古い遺構は、縄文晩期の甕形土器を埋込んだピット27である。縄文期の他の遺構は検出されておらず、そのあり方については、比較資料を欠くことより不明といわざるを得ない[1]。土器様式は縄文晩期であることは明らかであるが、実年代についての確実な資料は得ていない。立岡付近における縄文式土器を出土する遺跡は、姫路市沼高田（坂出）遺跡[2]および太子町常全遺跡[3]などがあるが、いずれも遺構に密着したものでない。

弥生時代中期以後になって竪穴住居址２軒と３本の溝が出現する。竪穴住居址Ⅱは弥生中期後半に位置づけられ、完掘していないが東西約６mの規模をもつ、隅丸方形の住居址である。柱穴は６本ある。中央部に炉をもっている。住居址西辺は張り出し状施設を備えている。竪穴住居址Ⅰは火災による廃絶が考えられ、炭火材・焼土・灰の検出があった。主柱穴も床面下は立ったまま炭火したものがあり、材質はケヤキ材であることが確められている。またムクロジュの貯蔵があったことが知られている。住居址の規模は7.4m×８mあり、方形のプランを示している。住居址内は播磨地方で類例の多いベッド状遺構が検出され、さらに一資料を追加した。ベッドはすべての辺には存在せず、住居址内の空間の機能的な面が推測され得る状況である。また鉄器使用の確実な例を提供した。

溝遺構については、１溝～３溝が弥生後期のものであるが、土器の堆積はいずれも少量であった。古墳時代の遺構は７溝のみである。ただ本調査と併行して行なわれた立岡山古墳は、古墳時代後期のもので、横穴式石室を内蔵することが知られている。

平安時代の遺構は建物址Ⅰ～Ⅴ及び４溝と、ピット17である。４溝の年代については確実で、ピット17も土器から平安時代に比定されよう。建物址Ⅰ～Ⅴは時期決定に要する明確な資料を得ていないが、これらが一連の遺構と考えられるならば、４溝及びピット17と同じ時期と考えてよいであろう。

ピット17は土師Ⅲが整然とならべられ、中央に古銭が置かれていたもので、祭祀的な性格をもったものと考えてよいであろう。掘立柱建物址は、いずれも雑舎的な建物であって、寺院地やその他大建築址を想定することはできない。建物址Ⅳは建物址Ⅰより後出することは明らかである。

建物址Ⅰは本遺跡検出の建物址のうちでは最も整った建物で、棟通りがある。建物址Ⅲはころばし根太の床と考えられる。建物址Ⅳはやや類例の少ない建物である。建物址Ⅵは長廊状の建物である。いずれの建物も寄棟造りである。(4)

時期＼遺構	遺構の種別			
	竪穴住居址	溝	掘立柱建物址	土坑
縄文				pit 27
弥生	竪穴住居址Ⅱ 竪穴住居址Ⅰ	1溝　2溝　3溝		
古墳		7溝		
奈良 平安		5溝	建物址Ⅰ～Ⅳ	pi t17

第3表　立岡遺跡時期別遺構一覧

（樫本）

註

(1) 小林行雄「摂津国神戸市篠原遺跡に就いて(㈠)」『史前学雑誌』第1巻第5号大正4年に若干似た例がある。
(2) 上田哲也他『姫路丁古墳群』昭和41年
(3) 磯崎正彦他「兵庫県太子町常全遺跡調査概要」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』第4冊、昭和46年
(4) 掘立柱建物址については、奈良県教育委員会文化財保存課岡田英男技師の教示を得た。記して謝意を表するものである。

第10章　特殊遺物の同定

第1節　川島遺跡および立岡遺跡から得た植物遺体

武庫川女子大学薬学部
教授　三　木　　茂

ここから炭になった多数のムクロジの果実、ケヤキ等の材、その他焼けていないモモおよびスモモの核が採集され、それらの検定を依頼されたので、その概要を報告する。

ムクロジ (Sapindus mukurossi Gaertn.)　(図版96 A～D)

この果実は果皮に包まれたまま炭の状態で集って多く出現している（図版96A）。それらのうちには原形のままとり出すことの出来たものもあるが、もろくて詳細な組織の調査はむつかしかった。これをムクロジの果実と検定したのは、果皮の内に円い種子があり(図版96.D）、種子の底部には直線状のヘソがあり、種皮は柵状組織からなり、果皮の表皮細胞の膜が波状でない（図版96. C）点等、この特性が現生のものと一致したからである。

ムクロジの現在および過去の状況をみると次の様である。すなわち現生のムクロジは日本だけでなく、支那、印度にも生育する大木で、類似植物は新大陸にも知られる。これはその出現の古いことを物語る。また、我国の古生物は富山県生源寺の洪積世の粘土層からナンキンハゼ等と伴い種子が、さらに東京都江古田の上部層[3]、滋賀県安土の泥炭層[3]並びに大阪鶴ケ岡からも若い果実および種子が出現した[4]。上記のことからこの木は日本に古くから生育していたものである。

この果実が集って出現したのは自然的原因か、人的関係かを考察するのに、もし出水の時果実が集められたとすると、粘土内に埋まるので、火にあっても全部が炭になることはない。従ってこの地のものは、人によって集められたものと思われる。果皮にサポニンを含むので去痰薬または洗濯に用いられる。種子の中の大きな胚には油分が多く食料にもなる。しかし、種皮が固く胚をとり出すことは容易ではない。ここのものは全部果皮に包まれ、種子だけで出現していない点、並びに量が多い点等から判じ、果皮を薬用としたとみるよりも、洗濯に利用する為に集められていたものでないかと思う。

モモ (Prunus persica Batsch)　(図版97A)

3箇のモモの核を得た。これらの核は厚くて堅い内果皮からなっている。このような内果皮は、モモの他アンズ、スモモ、ウメ等にもある。この核をモモと決定した特性は次の点からである。内果皮には背側から腹側に向って斜め上に走る深い葉脈の凹みがある。この様な凹んだ条線はウメ、アンズ、スモモなど近縁の核を作る植物にみられないので容易に決定が出来た。ここのものには腹側の両縁が充分癒着しないものもあった（図版97.Ae)。

モモの由来について：モモの核は保存し易くて、その上決定し易い特性をもつのに、現生より前、すなわち洪積世には全く本邦では出現しない。ただ現世になり人の遺物と関係のあるところからだけ出現する点から判じ、本邦のモモは大陸から人によって輸入されたものと推定する他はない。過去のものが現在大陸に生育するどれと類似するかは、民族の移動とも関係があるので、次の3種、すなわ

ちモウコモモ（Prunus davidiana）、バントウ（Prunus compressa Bean）との関係をみるのに、長さが巾より長い点から判じバントウ(図版97.D）でなく、また大きさはモウコモモ（図版97.E)状のものもあるが、先端が尖ってその両側が同じ様である。この点は背側が腹側より発達するモウコモモ（Prunns davidiana）と区別され外形と特性はモモ（Prunus persica）に近い。さらに遺体のうちには腹側の癒合が行なわれていないものもある。このようなものは香川県女木島で野生化したものから得た（図版97.C)。その他平城宮趾（図版97. B）等から得たものとも形、大きさが稍々一致する。

モモは早くから果肉を食用の目的で、原産地の中支から持ち来ったものの様である。[1] 現在のものとの間に大きな区別になる特性もないので、ここではその一型と考えた。

スモモ（Prunus salicina Lindl.）の核（図版97.F）

ただ一つの核を得た。この核をスモモと決定した特性は次の様である。核の表面は平滑で、その断面での核壁は一様に厚く、モモの様な深い葉脈の凹みがない点である。この様に面の平滑なのはアンズとも同様である（図版97.I)。しかし、円みがあって平たくなく、かつ腹側が張り出していない点で区別された。さらにウメ（図版97.H）とは面に点状の凹んだ穴のない点で区別された。この遺体の形と大きさは本邦に野生、または栽培されているスモモ（図版97.Ga)と、特性と大きさが一致したのでその一型とした。

スモモの由来：このスモモの核はモモと異なり本邦の過去の地層、特に Metasequoia 含有層および洪積世(図版97.Gb）にも広く出現するので、[5] 古くから野生し、これを植栽したものでないかと思う。多くのバラ科の果物、すなわちモモ、アンズ、ウメ等が過去に出現せず、中国から輸入されたものとみられるのに反し、スモモは本邦に古くからあった唯一の果物と推定された。

炭けた樹木について（第163図.A—B）

何れも根株状になっていない幹である。焼けて炭になりもろく、詳細の構造は不明であるが、環状の大きな導管をもつものと、それが目立たない2種があり、一つはケヤキ、他はカエデでないかと推定した。

ケヤキ（Zelkova serrata Mak.）第163図.A

この種類と決定した理由は次の様な特性によった。環孔は一層で射出髄が目立たない点で、ブナ科のように太い対出髄の目立つものから区別されケヤキと決定した。

カエデ属（？）第163図.B

他の一つは目立たない一様な小さな導管からなる。この様な特性のものは類似の種属が多い[2]。これを更に区別する特性は炭化のため見られないので、ここではかりにカエデ属のものと推定した。

これらの木は本邦の諸地方に広く生育するので出現には問題はないが、人が使用したものか否かが問題である。根株状の部分が伴わなかった点、並びに焼けたムクロジの果実と共に出現する点から、建物に使用した木材の一部と判定した。（昭和46年6月）

註

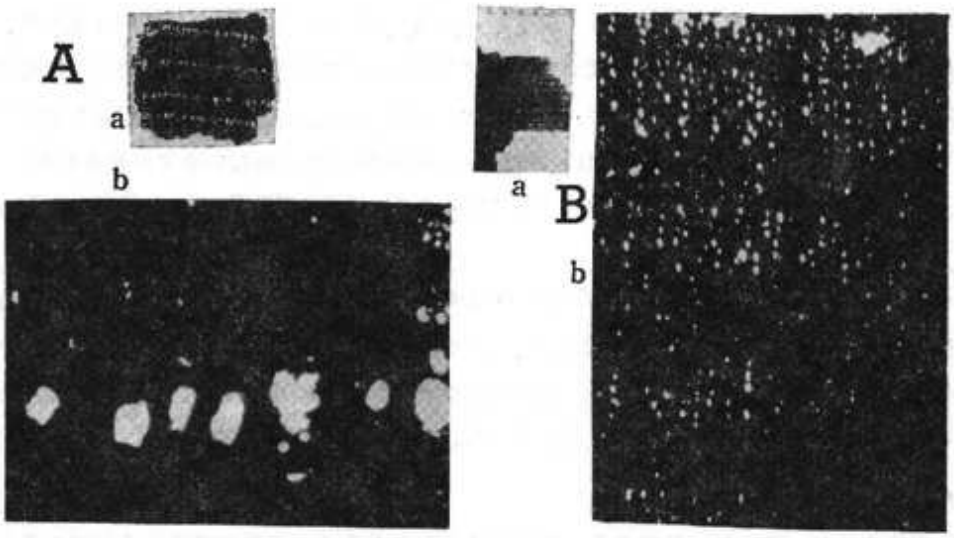
（1） 菊地 秋雄（1948）：果樹園芸学

（2） 河合鈞太郎（1901）：本邦産重要潤　葉樹木材識別法　大日本山林会

（3） 三木　茂（1938）：On the change of flora of Japan since the Upper Pliocene and the floral composition of the Present. Jap. Jour. Bot. IX No. 2

（4） 三木　茂（1948）：鮮新世以来の近畿並びに近接地域の遺体フロラについて。鉱物および地質第9集

（5） 三木　茂（1950）：鮮新世以来の本邦産遺体植物の研究　自然と文化　第1号



第163図　立岡遺跡から炭となって出現したケヤキ及びカエデ（？）の幹

A　ケヤキ（Zelkova）（Serrata Mak.）の材

Aa×2, Ab×30

B　カエデ（？）（Acer）

Ba×2, Bb×30

第2節　川島遺跡の花粉群集

神戸市立楠高校
教諭　前田保夫

花粉群集から推定した当時の樹木類

花粉および胞子類の検出は、提供された3地点（土坑10、22溝、土坑5）の泥約100gずつを処理して行なった。検出された花粉化石のうち属名の同定できたものは表1にあげた。また図版にはその1部をあげた。

表1に示したように属名の決定できたものは20属に満たず、やや材料不足ではあるが、当時、この遺跡付近に生育していた樹木は現在の自然植生（常緑広葉樹を主とした植生）に似たものであったと推定される。常緑型のカシ類やマツ、シイ～クリ属の多いことがこの推定の根拠となる。また、3地点にわたってクルミ属の花粉が検出された点も注目される。当時の原植生では、クスノキ科の樹木が生育していたと思われるが、この科の花粉は、通常の花粉分析法では全く検出されないので、材や果実、種子など他の遺体植物部門の調査結果との検討が必要である。

花粉・胞子の検出方法

試料はアセトリシス法によって処理した。試料の土約100ccをKOH10%液に24時間浸した後、沈澱槽に移し、水を加え、コロイド、有機物、泥・砂を傾斜法によってそれぞれ分離した。

有機物を混酸（HNO_3・HCl）→KOH→HF→エルドマン氏液で処理し、濃縮した後、グリセリンゼリーで封入し、倍率200倍～900倍で検鏡した。

第4表　花粉化石出現状況

属名＼試料採取地点	土坑10	9溝	土坑5
ツガ	多	普	—
ミズキ	少	—	—
ギンナン	少	—	—
キハダ	普	—	—
キハダ	少	—	—
モミジバフウ	少	—	—
ギンナン	普	少	普
キハダ	少	少	少
デンプン	少	—	—
ミリシ	少	—	—
ヤマハンノキ	多	少	—
ヤマハンノキ	少	普	—
ヤマハンノキ	多	多	—
ヤマハンノキ	少	少	—
ヤマハンノキ	少	少	—
ヤマハンノキ	少	少	—
ヤマハンノキ	多	普	普
ヤマハンノキ	少	—	—
ヤマハンノキ	少	—	—
ヤマハンノキ	多	普	普

第3節　川島遺跡出土土器付着の赤色顔料の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部
教授　薬博　安　田　博　幸
助手　　佐々木　英　子

分析用に供与された試料は下記の土器の表面の丹彩部より、はく離採取されたもの。土器基質をふくむ顔料粉末で最少約10㎎から最大約80㎎の3検体である。これらの試料にペーパークロマトグラフィーと確認試薬による呈色反応を併用する微量化学分析を実施し、丹彩の成分を確認したので報告する。

実　験　の　部

試料の外観

試料1：川島遺跡　29溝内出土土器口縁部より採取の淡褐赤色の細末　（第128図1）
試料2：川島遺跡　20溝内出土壺口縁部より採取の淡褐赤色の細末　（第94図11）
試料3：川島遺跡　20溝内出土高坏口縁部より採取の淡褐赤色の細末　（第105図188）

試料検液の作製

試料土塊10㎎～15㎎をガラス尖形管にとり、濃硝酸3滴、濃塩酸9滴を加えて加熱したのち、脱塩水少量を加えてから遠心分離器にかけて不溶のケイ砂分を除き、液を加熱濃縮してペーパークロマトグラフィー用の試料検液とする。

ペーパークロマトグラフィーと呈色試薬による赤色成分の確認

ペーパークロマトグラフィーの展開溶媒としてブタノール硝塩酸、呈色試薬にジフェニルカルバジドの1％アルコール溶液とアンモニアガスを用いる常法に従って行なった。対照として行なった水銀イオン（Hg^{2+}）、鉄イオン（Fe^{3+}）の標準試料液と比較したところ、検出されたスポットはそれぞれつぎのRf値と色調を示した。

試料　1　：　0.11（紫褐色）
試料　2　：　0.10（　〃　）
試料　3　：　0.10（　〃　）
対照 Hg^{2+}：　0.83（紫　色）
同上 Fe^{3+}：　0.15（紫褐色）

判　　定

以上の結果、試料検液には水銀イオンはまったく存在しないところから、試料三土器の丹彩に使用された顔料は水銀朱（HgS）ではなくベニガラ（酸化鉄：Fe_2O_3）であると判定される。

第11章　補　　論

第1節　檀特山遺跡確認調査報告

1. 経　　過

昭和44年10月30日　山陽新幹線の建設にともなって、送電線路の工事がなされることになり、姫路以西一岡山県境までの鉄塔建設地点が、大阪電気工事局から兵庫県教育委員会に提示された。

兵庫県教育委員会では、山陽新幹線、中国縦貫道建設地にかかる遺跡の取扱いについての諮問機関である。「山陽新幹線・中国縦貫道文化財対策審議委員会」に意見を具申した。その結果、前記審議委員である。是川長氏、大阪電気工事局用地係長中島昇氏、兵庫県教育委員会石野博信、櫃本誠一の両名が、11月28日、12月2日の両日に現地踏査を実施した。

現地踏査の結果、姫路市西庄・西蒲田、揖保郡太子町檀特山・立岡の4地区が遺跡確認調査の必要性のあることが確認された。

姫路市西庄・西蒲田地区については、昭和45年3月、確認調査の結果、遺跡の存在を確認することはできなかった。また、揖保郡太子町立岡地区については、昭和43年12月以来発掘調査を実施し、遺跡の性格および範囲が明白なため、建設地点を東へ約50mずらした。

ここでは、檀特山遺跡の確認調査の結果を報告しておきたい。

2. 檀 特 山 遺 跡

檀特山は、川島遺跡の西、大津茂川は東麓を流れており、標高165mの独立丘陵である。川島遺跡を真下に見おろし、中播平野の整然とした条里遺構を眺めることができ、その眼下には、揖保川、林田川、大津茂川流域に広がる諸遺跡を見おろすことができる。

檀特山の南麓には、弥生墳墓と思われるもの1基を含む、10基の古墳群が存在していた。また弥生中期後半の集落址と思われるものも発見されている。

第 1 地 点

山頂から約30m北の尾根上、標高140mの地点を試掘した。 2m×2mの試掘地点を設定し、調査を行なったが、土層は1図にみられる如く、いわゆる無遺物層の黄褐色土が表上下35cmのところで見られ、遺構はもちろん一片の土器すらも検出できなかった。

第 2 地 点

第1地点とは、谷を隔てた西側の標高123mの尾根上である。 一見して、付近の景観を望むことは不可能であったが、調査期間中に山火事に遭遇し、付近の下草、樹木の大半が焼失してしまったので、西及び北側に存在する諸遺跡を見ることはできる。しかし、東側並びに南側は、第1地点との比高17m、山頂との比高が32mあるため望むことはできない。

この第2地点は、尾根上からわずかに下った所で、水田面との比高は110mある。鉄塔建設の下場面が8m×8mの幅を持っているため、第1地点と同様、2m×2mのツボを四隅に設定し、調査を実施した。

ツボ1、2については、表土からわずかに20cmの深さで、第1地点で見られた黄褐色土を検出した。確認の為、東へ幅1m、長さ3mにわたってトレンチを入れて遺構の有無を確かめたが、斜面に沿って黄褐色土が延びていた。

ツ　ボ　3（第165図）

第4層下面で、わずかに淡黒褐色の有機質を含む面がみられた。この部分を拡張すると、明らかに黄褐色土を掘り込んで形成されている。径約9mの円形に近いと思われる落ち込みを検出することができた。

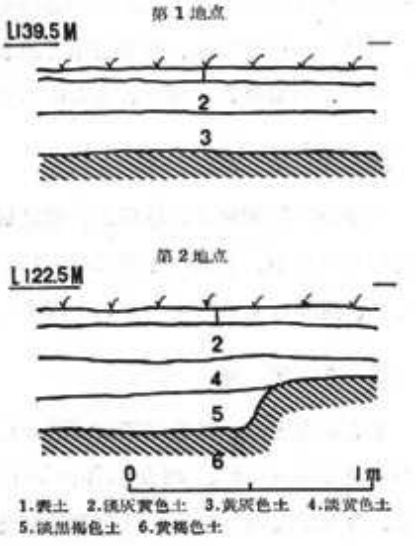
しかし、この落ち込みの大半は用地外にはみ出ていた。

このため、大阪電機工事局と接渉を重ねた結果、現在の用地を東へ2～3m振ることに決定されたため、この落ち込みが、どのような遺構に結びつくのか、未解決のまま埋め戻しを行なった。

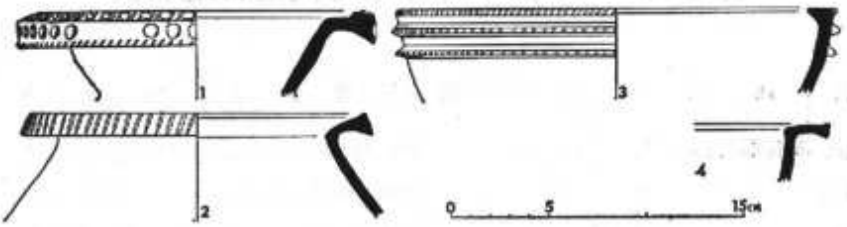
遺物は、第三層中から図示した土器が出土したが、いわゆる床面と思われる部分からは検出できなかった。

なお、サヌカイト片、石鏃1を検出した。　　（松下　勝）

第164図　槎特山遺跡の位置



第165図　第1・第2地点上層図



第166図　第２地点出土土器

第2節　中播平野弥生時代遺跡地名表

松下　勝

番号	遺跡名	所在地	立地	時期
1001	觜小学校前遺跡	揖保郡太子町　觜	低湿地	
1002	觜　遺跡	〃　〃	〃	後
1003	黒丘神社〃	〃　太田	山麓	
1004	川島〃	〃　川島	低湿地	中～平安
1005	原坂〃	〃　原坂	丘陵	
1006	北山〃	〃　北山	山麓	
1007	山田〃	〃　山田	丘陵	
1008	山田〃	〃　〃	〃	
1009	立岡〃	〃　立岡	低湿地	後・平安
1010	沖代〃	〃　沖代	〃	
1011	蓮常寺〃	〃　蓮常寺	〃	
1012	檀特山〃	〃　東南	山地	中
2001	養久〃	揖保郡揖保川町養久	山麓	後
2002	南河内〃	〃　前部	〃	〃
2003	北河内〃	〃　金剛山	台地	
2004	市場〃	〃　市場	山腹～山麓	
2005	神戸北山〃	〃　神戸北山	鞍部	
2006	〃　東〃	〃　〃	低湿地	前～後
2007	〃　北〃	〃　〃	〃	
2008	片島池〃	〃　片島	池	中・後
2009	山津屋〃	〃　山津屋	低湿地	中・後
2010	山津屋山頂〃	〃　〃	山麓	中・後
2011	栗田〃	〃　栗田	〃	
2012	野田〃	〃　野田	〃	後
2013	城山〃	〃　城山	山頂	
3001	皿池〃	竜野市神岡町大住寺	山麓	後
3002	中臣山〃	〃　揖保町中臣	尾根	中
3003	内山〃	〃　誉田町内山	〃	中・後
3004	内山山麓〃	〃　〃　〃	山麓	中・後
3005	北竜野〃	〃　竜野町北竜野	〃	中末
3006	東山山頂〃	〃　〃　片山	山頂	中末～後
3007	中井〃	〃　〃　中井	尾根	後
3008	沢田〃	〃　神岡町沢田	尾根・斜面	〃
3009	椰木神社裏山遺跡	竜野市亀岡町客谷	〃	
3010	竜野高校校庭〃	〃　竜野町日山	山麓から扇状地	
3011	寄井〃	〃　神岡町寄井	〃	
3012	果樹園山〃	〃　揖西町竹原	丘陵	
3013	泥山山頂〃	〃　〃　前地	山頂	
3014	向山尾根〃	〃　誉田町内山	尾根	
3015	舎利田〃	〃　〃　舎利田	〃	
4001	千代田〃	姫路市千代田町	低湿地	縄後・前～後
4002	橋詰〃	〃　延末字橋詰	〃	〃
4003	辻井〃	〃　辻井字藤ノ木	〃	縄中～晩
4004	小山〃	〃　延末字小山	〃	弥中・後 縄　晩前～後
4005	構〃	〃　飾磨区構	〃	〃
4006	堂田〃	〃　岡田字堂田	〃	〃
4007	大谷口〃	〃　田寺字大谷口	〃	縄、弥
4008	坂出〃	〃　網干区坂出字沼高田	〃	縄後、弥中・後
4009	石ケ坪〃	〃　亀山字石ケ坪	〃	〃
4010	大島〃	〃　的形町大島	丘陵	
4011	白鳥池〃	〃　打越		
4012	後池〃	〃　青山		
4013	地内町〃	〃　地内町	低湿地	
4014	峰相池〃	〃　石倉		
4015	棚池〃	〃　西脇字地獄谷		
4016	峰相大池〃	〃　石倉町		
4017	柳ケ瀬〃	〃　勝原区丁字柳ケ瀬	低湿地	前・後
4018	山戸〃	〃　〃　山戸	〃	〃
4019	浜田〃	〃　手柄字浜田	〃	〃
4020	黒表〃	〃　東延末字黒表	〃	〃
4021	豊沢〃	〃　豊沢字鍛冶屋村前	〃	〃
5022	市之郷〃	〃市之郷字辻ケ内宮西	〃	〃
4023	山所〃	〃　広畑区蒲田字山所	山腹	中
4024	タテノ〃	〃飾磨区加茂字タテノ	低湿地	〃～歴史
4025	甲山〃	〃　飾磨区妻鹿甲山	山腹	中
4026	勝山町〃	〃　勝原区勝山町	山腹	〃

4027	山所南遺跡	姫路市広畑区蒲田字山所		山腹	中	4061	村淵遺跡	姫路市延末字村淵		低湿地	
4028	飾西東山	〃	〃	飾西	尾根	〃	4062	谷口	〃	〃	〃 字谷口	〃	
4029	手柄山南丘	〃	〃	手柄	丘陵	中・後	4063	えびす島	〃	〃	白浜	丘陵	
4030	茶屋	〃	〃	勝原区茶屋	低湿地	〃 〃	4064	南雲	〃	〃	飾磨区構字南雲	低湿地	
4031	名古山	〃	〃	名古山	丘陵	〃	4065	土山	〃	〃	土山字上御水之子	〃	
4032	国分寺	〃	〃	御国野町国分寺	台地	中・後	4066	見野	〃	〃	四郷町見野	〃	
4033	三和	〃	〃	手柄	低湿地	〃 〃	4067	北原	〃	〃	糸引町北原	〃	
4034	高福寺	〃	〃	亀山字高福寺	〃	〃 〃	4068	南山戸	〃	〃	勝原区南山戸	〃	
4035	湯田	〃	〃	飯田字湯田	〃	〃 〃	4069	丁	〃	〃	〃 丁	〃	
4036	大町	〃	〃	中地字大町	〃	〃 〃	4070	下太田B	〃	〃	〃 下太田	〃	
4037	東々保	〃	〃	〃字東々保	〃	〃 〃	4071	糸	〃	〃	糸引町糸	〃	
4038	長越	〃	〃	飯田字長越	〃	〃 〃	4072	善慶田	〃	〃	飯田字善慶田	〃	
4039	付城山	〃	〃	付城	丘陵	〃 〃	4073	下表	〃	〃	飾磨区恵美酒字下表	〃	
4040	竹之前	〃	〃	手柄字竹之前	低湿地	〃 〃	4074	箱谷	〃	〃	糸引町兼田字箱谷	〃	
4041	下太田	〃	〃	勝原区下太田	〃	後	4075	宮山	〃	〃	白浜	山麓、谷間	
4042	法輪寺山	〃	〃	井ノ口	山麓	〃	4076	畑井山	〃	〃	太市中	尾根	
4043	手柄山北丘北東	〃	〃	手柄山	山腹	〃	4077	高貴山	〃	〃	飾西町	山頂	中
4044	手柄山北丘西	〃	〃	〃	丘陵	〃	4078	飾西	〃	〃	〃	低湿地	後
4045	鴨池	〃	〃	林田町池ノ内	斜面	〃	4079	白国梅園	〃	〃	白国	丘陵、斜面	〃
4046	カスカエ	〃	〃	飾田字カスカエ	低湿地	〃	4080	富士才	〃	〃	八代富士才	低湿地	中・後
4047	仁寿山々頂	〃	〃	糸引町北原	山頂	〃	4081	殃父山	〃	〃	下手野	丘陵	後
4048	鉄工団地内	〃	〃	御国野町御着	丘陵	弥	4082	岸ノ下	〃	〃	田寺字岸ノ下	低地、斜面	〃
4049	手柄山北丘東	〃	〃	手柄山	山頂	後	4083	山根	〃	〃	山根	丘陵、頂上	〃
4050	生矢神社裏	〃	〃	手柄	山腹	〃	4084	権現山	〃	〃	上砥堀	丘陵裾	〃
4051	歌野橋	〃	〃	飾磨区英賀	低湿地	〃	4085	下橋	〃	〃	田寺字下橋	低地	〃
4052	手柄山北丘	〃	〃	手柄山	丘陵	〃 古墳	4086	番留	〃	〃	〃 番留	〃	〃
4053	栗木	〃	〃	飾磨区今在家	低湿地	後・歴史	4087	前山	〃	〃	御立字前山	丘陵、頂上	〃
4054	小富士山	〃	〃	四郷町東阿保	尾根		4088	松尾	〃	〃	〃 松尾	低地	
4055	兼田山	〃	〃	糸引町兼田	山麓		4089	馬瀬	〃	〃	〃 馬瀬	〃	
4056	横田	〃	〃	〃 〃 字横田	尾根		4090	河野	〃	〃	〃 河野	〃	
4057	宮山山頂	〃	〃	飾磨区妻鹿	〃		4091	辻井	〃	〃	辻井	〃	
4058	飾磨高校々庭	〃	〃	〃 〃	低湿地		4092	村前	〃	〃	井ノ口字村前	〃	
4059	坂元山南麓	〃	〃	四郷町	山麓		4093	檀特山	〃	〃	勝原区下太田	丘陵	中
4060	八代深田	〃	〃	八代深田	低湿地	中・後	4094	大塚	〃	〃	飾磨区構字大塚	低地	中・後

註）この遺跡地名表は『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第1集～第5集（1968年～1970年兵庫県教育委員会）を参考にした。

4095	真福寺遺跡	姫路市飾磨区構字真福寺	地	低	中	6004	北原遺跡	赤穂郡有年町原	台地		
5001	中山〃	赤穂郡上郡町西野山字中山	山	腹	中・後	6005	野田〃	〃〃	檜原字野田	丘陵	中・後
5002	佐用谷〃	〃	佐用谷		〃	6006	三軒屋〃	〃〃	字三軒屋	〃	〃
5003	西山〃	〃	与井字西山	山	腹	〃	6007	入相〃	〃	高雄町周世字入相	低地	〃
5004	山田〃	〃	竹万字山田	台	地		7001	新宮宮内〃	揖保郡新宮町宮内字城丸	低地	縄中・弥中
5005	西野山〃	〃	西野山	丘	陵	後	7002	下野田〃	〃〃	下野田字亀山	山麓	〃
5006	六ツ岩〃	〃	釜島	〃		〃	7003	馬立〃	〃〃	馬立字北谷	〃	
6001	大橋下〃	赤穂市尾崎町川馬			中・後	7004	市野保〃	〃〃	市野保	〃	後
6002	北畠〃	〃	有年町北畠	山	麓	〃〃	7005	鹿子〃	〃〃	下笹字鹿子	山	腹	〃
6003	原校裏山〃	〃〃	原田中字奥山	山	腹	〃〃	7006	寺床池〃	〃〃	市野保	〃	〃

第3節　中播平野弥生時代文献目録

松　下　　勝

著者名	題名	文献名	発行年月
原田　正彦	「演習日記・摘要」	東京人類学雑誌 16—182	1901年5月
松本　静吾	『姫路紀要』		1912年10月
小西孝四郎	「姫路貝塚の発見」	人類学雑誌31—8	1916年8月
柴田　常恵	「姫路の貝塚」	日本考古学	1924年12月
三木　功夫	『飾磨郡誌』		1927年10月
小西孝四郎	「千代田貝塚」	飾磨郡誌	1927年10月
直良　信夫	「鍔形土製品」	人類学雑誌43—1	1928年1月
直良　陽里	「姫路市千代田町貝塚」	播磨文化資料1	1930年11月
直良　信夫	「近畿地方発見の石匙」	人類学雑誌45—12	1930年12月
浅田　芳朗	「貧しきメモランダム」	播磨文化資料 第2輯	1931年
小林　行雄	「弥生式土器の一二相」	考古学　4—1	1933年1月
浅田　芳朗	「津之宮魚吹八幡の銅鉾」	播　磨　2—4	1933年6月
浅田・玉岡	『播磨郷土研究要典』		1933年8月
島田　清	「家島の考古資料」	播　磨　2—7	1933年12月
小林　行雄	「一つの伝播変位現象」	考古学　5—1	1934年1月
浅田　芳朗	「飾西東山遺跡の研究」	播　磨　3—2	1934年4月
〃	「播磨飾西東山の弥生式遺跡」	人類学雑誌49—8	1934年8月
鎌谷木三次	「播磨市川中流に於ける弥生式遺跡Ⅰ」	考古学雑誌24—9	1934年9月
浅田　芳朗	「播磨国魚吹八幡所蔵の銅鉾」	史　観　7	1934年12月
〃	「手柄山の考古学的調査」	郷土文化社第2回例会談話	1936年3月
大貫　繁次	「千代田貝塚に関する聞書など」	郷土文化　7	1937年11月
鎌谷木三次	「播磨市川中流に於ける弥生式遺跡Ⅱ」	考古学雑誌27—11	1937年11月
今里　幾次	「姫路市近郊の先史時代遺跡」	兵庫史談　11月号	1939年11月
小倉　豊文	「手柄山の古代文化に就て」	日本古代文化学会兵庫支部第11回例会	1941年6月
今里　幾次	「播磨市之郷弥生式遺跡の研究—播磨国弥生土器の様式分類—」	古代文化　14—9	1943年9月
直良　信夫	「姫路千代田町貝塚」	近畿古代文化叢考	1943年10月
今里　幾次	『播磨国石器時代地名表』		1946年
島田　清	「古代の播磨」	創　建　2—8	1947年12月
		〃　3—1	1948年1月
		〃　3—2	1948年2月
今里　幾次	「印南郡の弥生式文化」	郷土誌　2	1948年7月
浅田　芳朗	「姫路は古くから開けていたという話」	姫路の商工業	1948年9月
島田　清	「考古学よりみたる古代印南郡」	郷土誌　5—7	1949年
村上　正名	「兵庫県・岡山県・広島県先史時代地名表」	瀬戸のあけぼの	1949年9月
土井　仙吉	「先史時代の姫路地方」	兵庫地学　2	1950年1月
尾張・下村	「千代田遺跡」	播磨郷土文化　5	1950年12月
桑原・川端	「姫路市網干魚吹八幡の銅鉾」	広嶺中学「郷土研究クラブ報告」	1951年1月
増田　重信	「八代山発見の打石斧」	播磨郷土文化　7	1951年10月
今里　幾次	「播磨に於ける黒曜石器および石材の分布」	播磨郷土文化　8	1953年2月
都留千賀子	「千代田遺跡・調査記」	郷土文化　1	1953年4月
今里　幾次	「播磨の弥生式文化」	播磨郷土文化の研究創立20周年記念号	1954年
姫路東高校郷土研究部	「姫路付近の史蹟について」	郷土研究部報	1954年3月
増田　重信	「先史時代の市川流域」	播磨郷土文化の研究	1954年8月
今里　幾次	「播磨の弥生式文化」	〃	1954年8月
山田　安彦	『古代遺跡より見たる播磨平野の景観』	日本地理学会講演要旨	1954年　秋
鎌谷木三次	「姫路千代田遺跡」	日本考古学年報3	1955年4月
今里　幾次	「先史時代の播磨」	行　報　第17号 神戸銀行調査部	1957年5月
〃	「播州の古代鉾壺について」	高砂ロータリークラブ会報20	1957年9月
和島　誠一他　座談会	「原始時代を語る—播磨を中心として—」	歴史教育　6—4	1958年4月
杉原　荘介	「姫路千代田遺跡の調査について」	日本考古学協会研究発表要旨	1958年4月
中浜　哲朗	「八代宮ノ跡遺跡（八代深田遺跡）」	姫路古代誌　2	1958年10月
藤本　亮勁	『兵庫県地理地質観光と石器古墳』		1958年11月
増田　重信	「私のノートから」	『姫路古代誌』3	1959年2月
矢内　澄	「弥生式土器」	〃　3	〃
松本　正信	「赤信号（名古山、八代深田遺跡）」	『姫路古代誌』3	1959年2月
		〃　5	〃　8月
神戸新聞社会部	「祖先のあしあと」Ⅱ	『のじぎく文庫』	1959年4月
増田　重信	「播磨高福地遺跡」	『姫路古代誌』4	1959年5月
加藤　四郎	「続々八代山」	〃　4	〃
松本　正信	「雑資料紹介」	〃　4	〃
井上・岩崎	「辻井出土の石鏃と石錐」	〃　5	1959年8月

加藤　史郎	「弥生時代の名古山」	『姫路古代誌』5	1959年8月
〃	「東光寺山に於て石器を拾う」	〃　5	〃
井淵　良昭	「辻井遺跡資料（辻井北部遺跡）」	〃　5	〃
今里　幾次	「播磨弥生式土器の流水文について」	『兵庫史学』　21	1959年9月
〃	「播磨の分銅形土製品」	『古代学研究』21・22合併号	1959年11月
姫路市教委	『姫路市名古山弥生住居址発掘調査経過報告』		1960年2月
日本考古学協会	兵庫県千代田遺跡	『日本農耕文化の生成』	1960年2月 1961年3月
今里　幾次	「播磨平松の飯蛸壺形土器」	『神戸史談』216	1960年3月
増田　重信	「私のノートから2」	『姫路古代誌』6	1960年6月
加藤　史郎	「石器時代の八代東光寺両山の概観」	〃　6	〃
松本　正信	「深田遺跡、第4地点（極田遺跡）出土土器」	〃　6	〃
浅田　芳朗 今里　幾次	『播磨横詰遺跡発掘調査略報』		1960年8月
梅原　末治	「新出土の銅鐸の鋳型片その他」	『古代学研究』25	1960年8月
井上　誠	「弥生式土器新資料」	『姫路古代誌』7	1960年12月
今里　幾次	「播磨における縄文式土器と弥生式土器の初現について」	〃　7	〃
増田　重信	「播磨黒表遺跡」	〃　7	〃
浅田　芳朗	『播磨石造遺物古銘資料』		1962年1月
武藤　誠 石野　博信	「大山神社遺跡」	『家島群島総合学術調査報告書』	1962年9月
今里　幾次	「播磨小山遺跡Ⅷ地点の弥生式土器—弥生式文化初頭の一様相—」	『古代学研究』32	1962年10月
増田　重信	『姫路市の先史遺跡』		1963年2月
東洋大学姫路高校	『姫路小山遺跡発掘調査報告書』	オリエント創刊号	1964年9月
兵庫県教育委員会	『兵庫県遺跡地名表』		1965年2月
矢内　澄	『富士才弥生式土器包蔵地調査報告』		1965年8月
加藤　史郎	『竜野市北竜野弥生遺跡』		1966年1月
田辺　昭三 佐原　真	「弥生文化の発展と地域性—近畿」	『日本の考古学』Ⅲ	1966年1月
新宮町教委	『新宮、宮内遺跡発掘調査報告』		1966年7月
県立竜野実業高等学校生徒会考古学部	『原始・古代の揖保川流域 No.3』		1966年11月
上田　哲也 河原　隆彦	『播磨の弥生式文化』		1966年

石野　博信	「弥生時代の貯蔵施設」	『関西大学考古学研究年報』1	1967年12月
兵庫県教委	『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図および地名表』		
	第1集		1968年3月
	第2集		1968年12月
	第4集		1969年3月
	第5集		1970年3月
県立竜野実業高等学校生徒会考古学部	『揖保川流域の古代文化 No.4』		1969年1月
今里　幾次	「播磨弥生式土器の動態　1・2」	『考古学研究』60 61	1969年3月 1969年6月
加藤　史郎	「弥生時代中後期の一様相—播磨揖保川水系における谷水田の開発—」	『古代学研究』55	1969年8月
村川　行弘	「弥生文化各説近畿」	『考古学講座』4	1969年10月
坪井清足 岸　俊男　編	「古代の日本5近畿」	角川書店	1970年1月
座談会	「考古学からみた兵庫県の原始・古代」	『兵庫の歴史』4	1970年11月
姫路市立飾磨高等学校郷土研究班編	『姫路市遺跡地名表』		
原田　正彦	「播磨にて黒曜石の石鏃を発見致候」	『東京人類学雑誌第150号』	
今里　幾次	「タコツボとニシツボ」	『播磨郷土文化』1	
林田郷土史編集委員会	『林田郷土史』		1955年2月
田岡　香逸	『兵庫県史料集影1～4』		1955年2月～57年3月
藤本　亮助	『兵庫県観光地めぐり』		1955年9月
山田　安彦	「播磨の古代遺跡—その立地と分布の解析—」	『立命館大学』129	1956年2月
石器時代文化研究会	『日本石器時代総合文献目録』	山岡書店	1958年4月
揖保教育研究所	『揖龍の昔と今』		1958年6月
藤本　亮助	『兵庫県地理地質と石器・古墳』		1958年11月
浅田　芳朗	「播州平野の黎明」	『京阪神史話』	1959年9月
兵庫県教育委員会	『立岡遺跡』		1969年11月
太子町教育委員会	『川島遺跡』		〃
姫路古代文化研究会	『播磨国考古学関係文献目録』		1960年10月
加藤　史郎	『竜野市竜野町片山弥生箱式石棺』		1965年2月
是川　長 松本　正信	『養久山』		1967年1月
加藤　史郎	『網干町史』		1951年1月

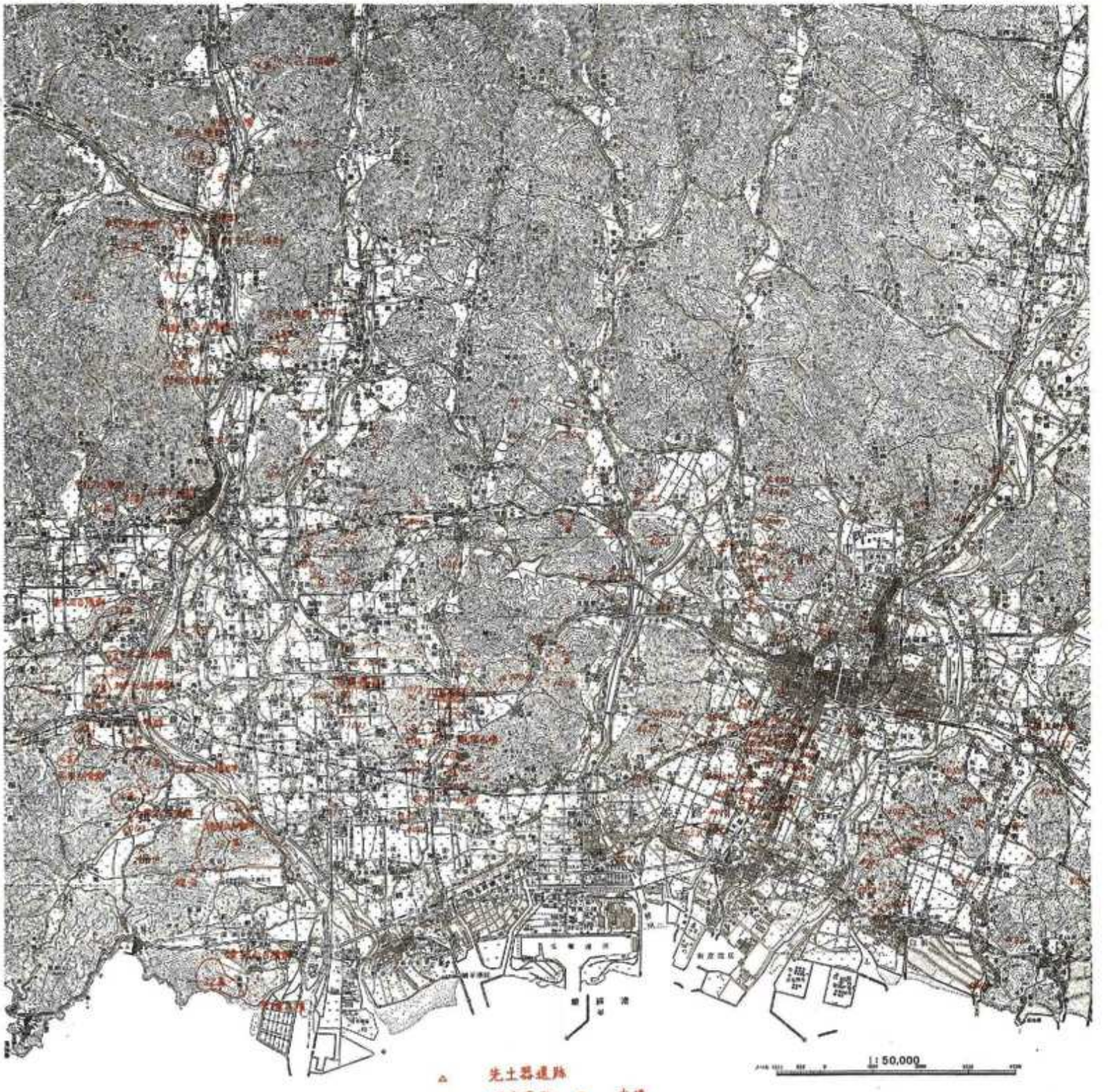
注）この文献目録は『播磨国考古学関係文献目録』（1960年10月姫路古代文化研究会）を参考にした。

発行：昭和46年3月　172

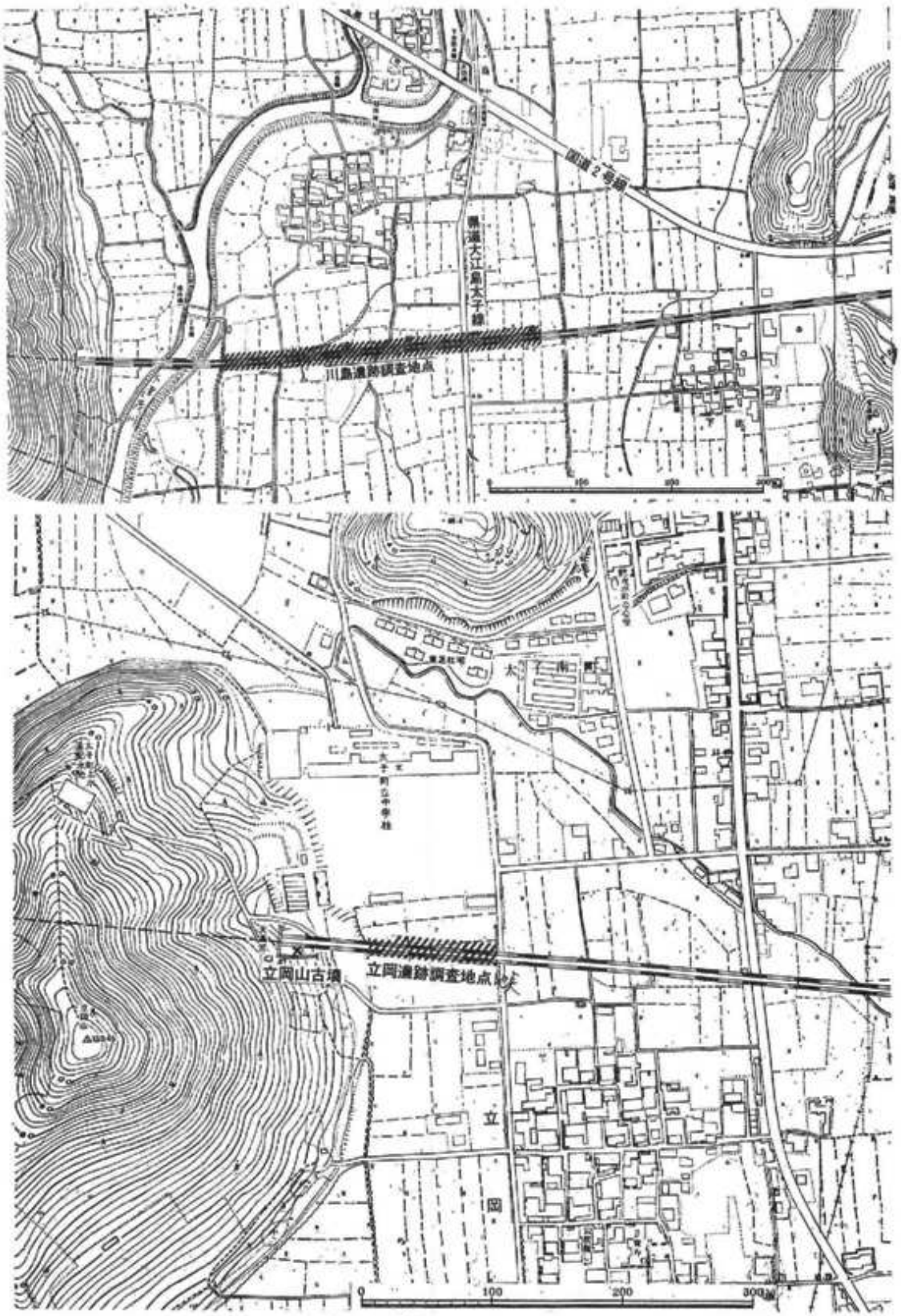
川島・立岡遺跡
（本文編）

編集：川島・立岡遺跡調査報告書刊行会
兵庫県揖保郡
発行：　太子町教育委員会

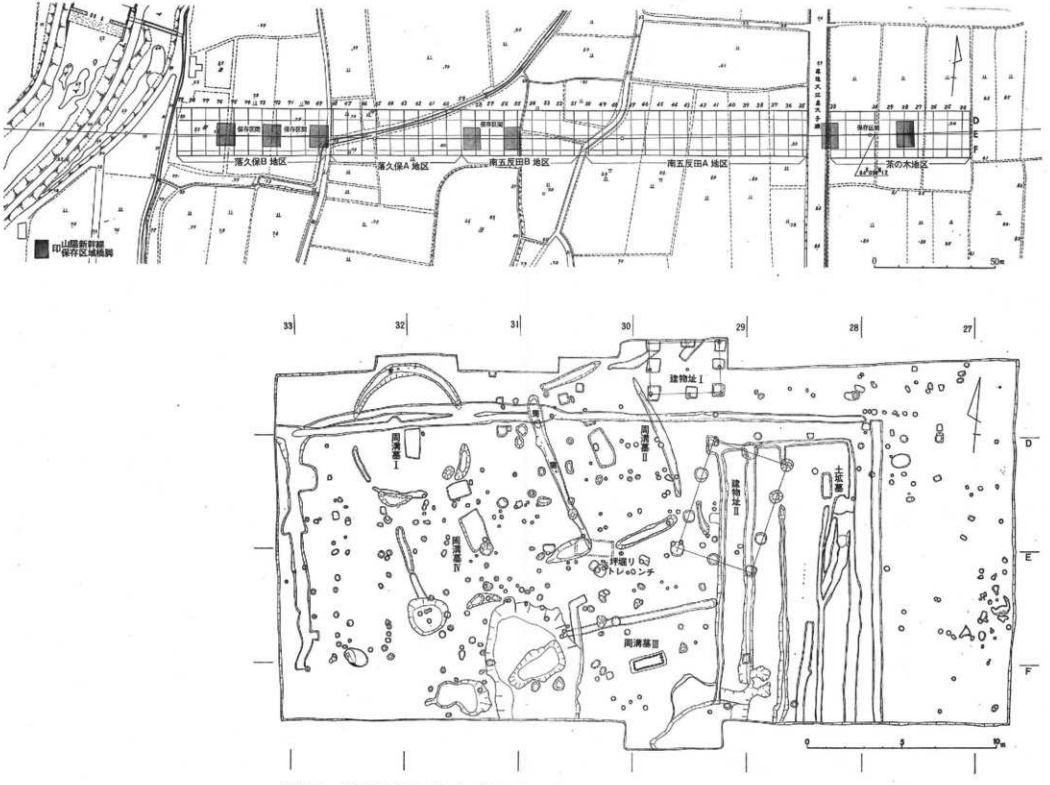
印刷・製本　精文舎



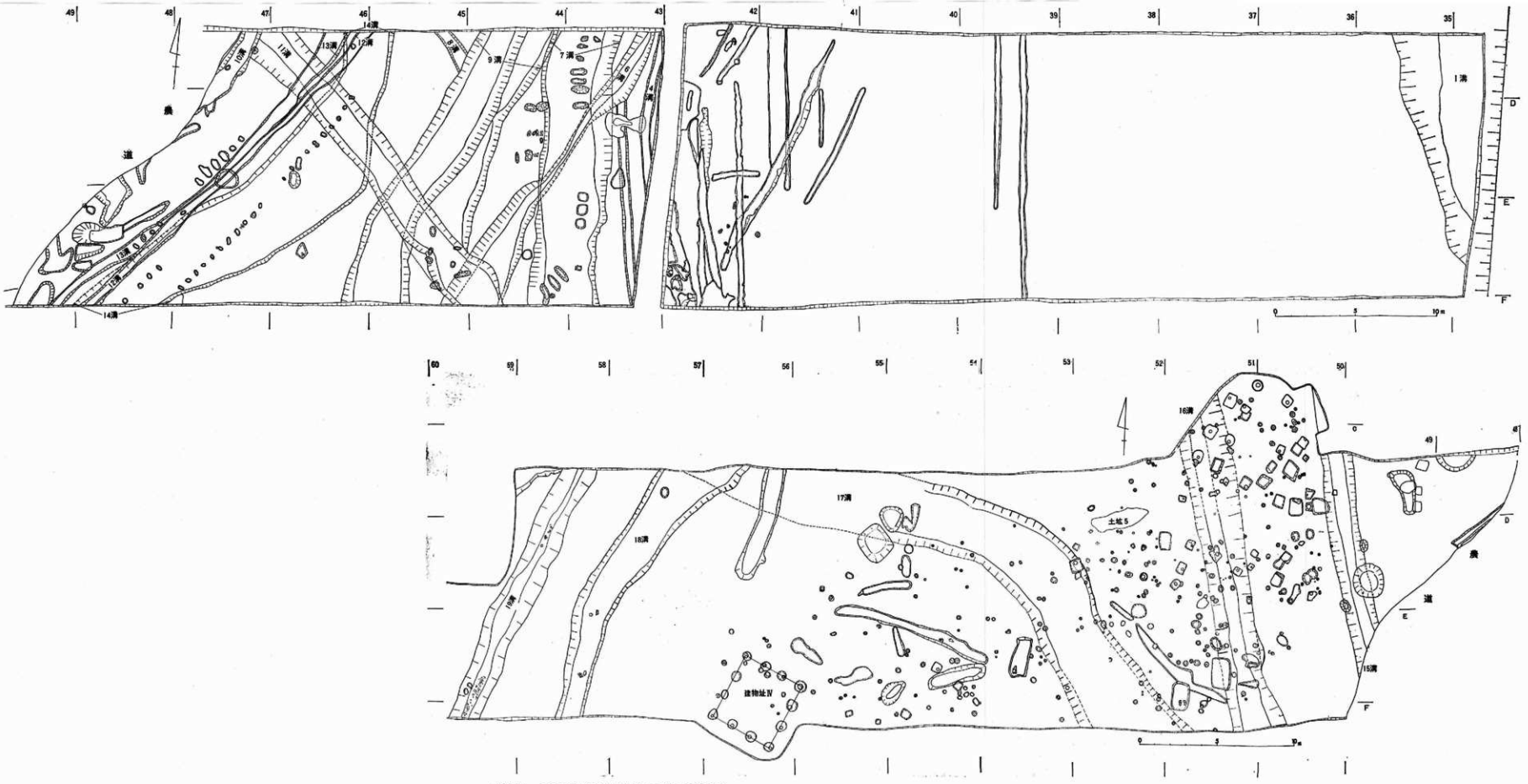
第167図　中播平野の遺跡分布



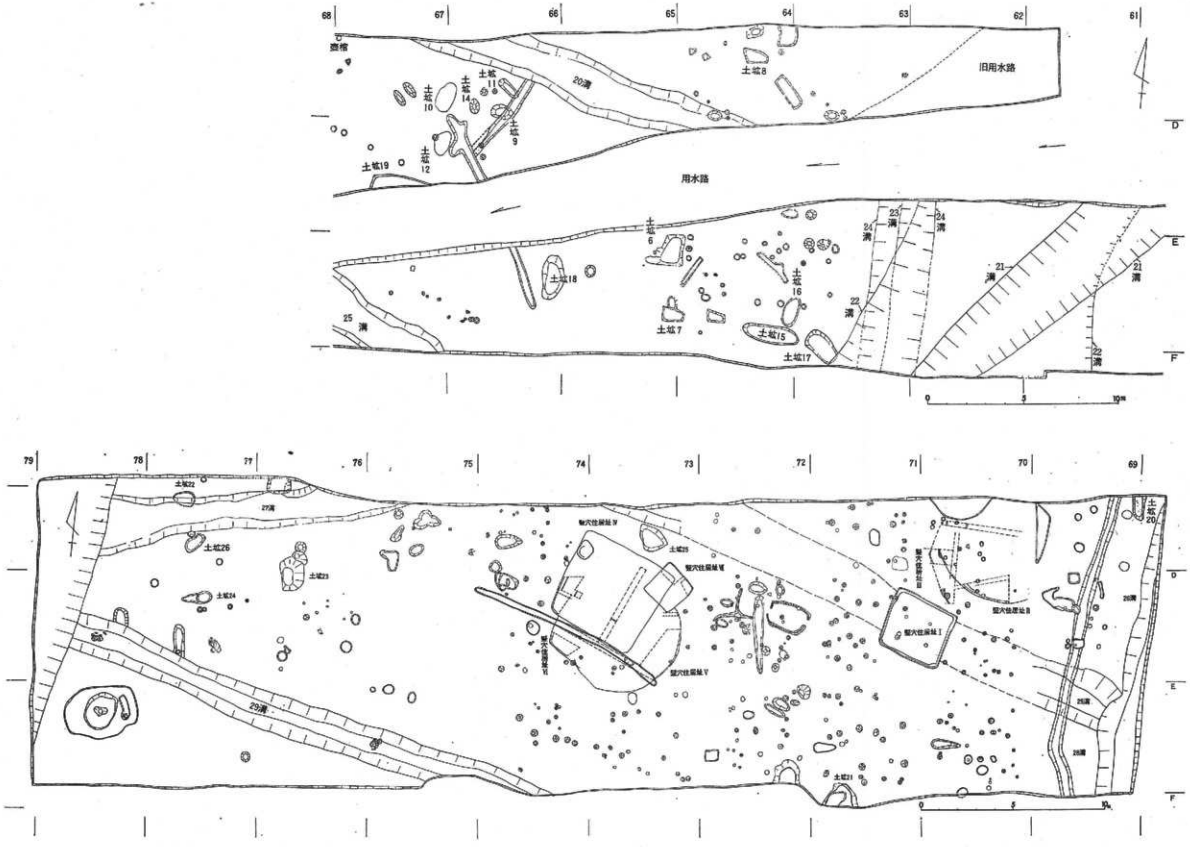
第168図　川島（上）立岡遺跡（下）遺跡の位置



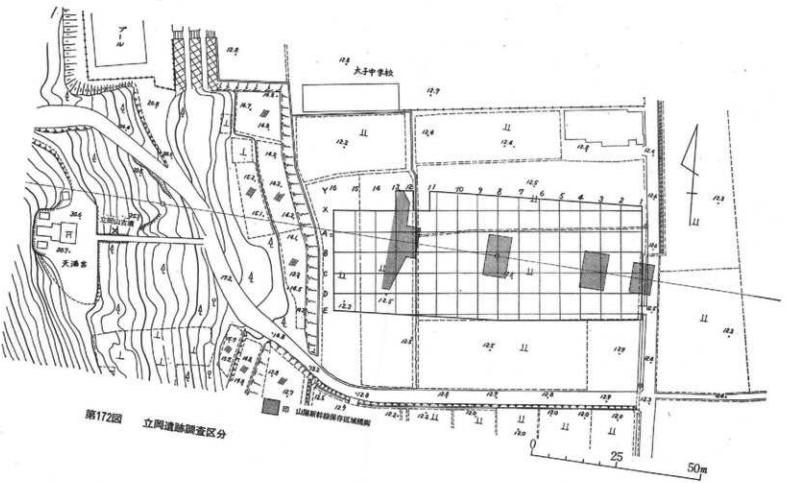
第169図　川島遺跡調査区分(上)と茶の木地区の遺構(下)



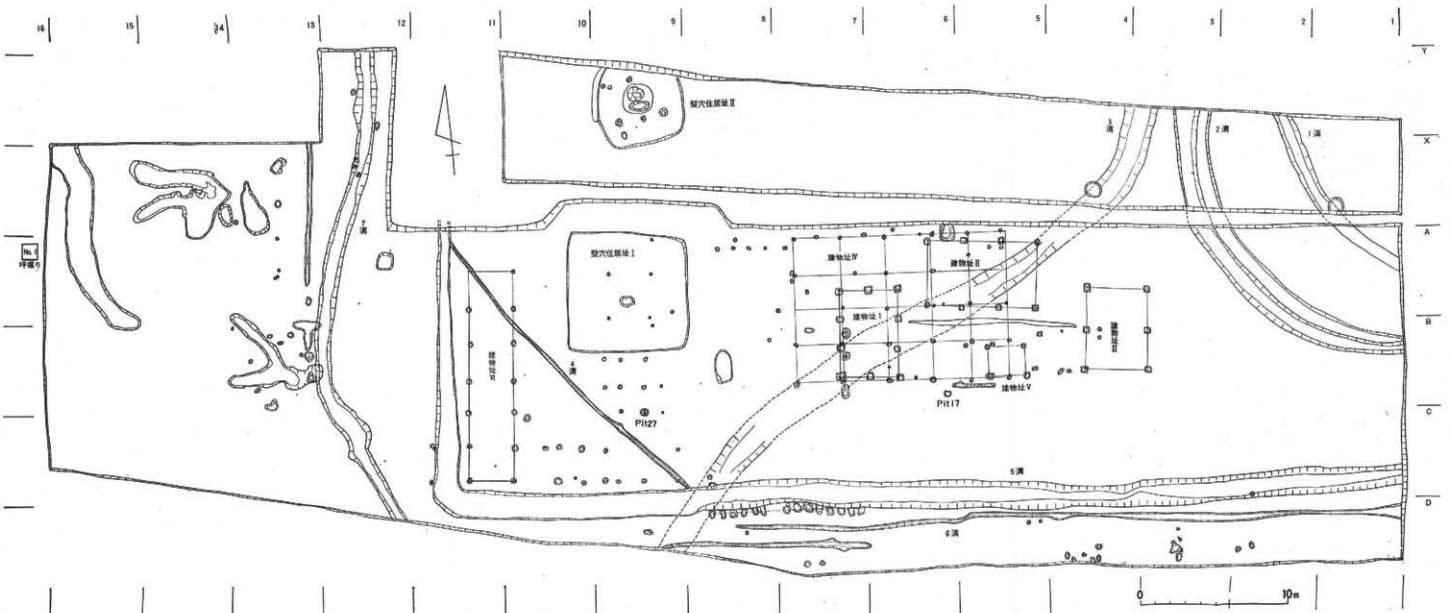
第170図　南五反田A地区(上)および同B地区の遺構(下)



第171図　落久保A地区(上)および同B地区(下)の遺構



第172図　立岡遺跡調査区分



第173図　立 岡 遺 跡 遺 構 図